成績を以て卒業するや越えて大正十一年日比谷登龍門に天下幾多の奇才と鬪つて首尾よく辯護士登用試驗に登第す。

斯くて直ちに辯護士を開業し、傍ら政界刷新に意を注ぎ、曩に政友會院外團評議員たりしが昭和三年三月同院理事に推され以て現在に及ぶ。

現に東京市小石川區高田老松町四八番地に住す。電話牛込四二二五番

山内恭治君

三菱商事株式會社機械部副長

人物測定の尺度として稍もすれば顯貴榮達の如何に據るところ甚だ多き世俗を慷慨する吾人は、茲に無冠の國士吾が山内恭治君を覩めて、其の隱れたる功勳を揭げ得るの機運に逢遭せるを欣びとなす

堂々の偉軀に卓落の氣宇溢ふるゝを見る君の過半生を繙けば、寔に數寄なる其の閲歴の裡に終始一貫邦家への献身盡忠は、蓋し克く祖統の靈を顯現せるものならん乎、宜なる哉君は熱血火の如き會津武士を家祖と爲して其の血脈を承く。

尚ほ山内家は代々會津の藩士にして松平家に仕へり、君の嚴父山内恒八氏は彼の白虎隊の義烈には當時年齒尚ほ弱幼の故を以て加へられざりしと雖も士魂烈々燃ゆるが如き典型的の漢、而して君は明治十六年九月五日を以て舊城下徒町に孤々の聲を放てり、慈母をヒデ子となして其の第二子に生れしが、弱冠にして儁秀藩校會津中學校に學び、夙に三軍叱咤の軍官に憧憬し雄志勃々たりしが、學窓に黽勉すると共に又克く練武して心身の琢磨に努む、斯くて該校を出づるや直ちに笈を負ふて東上し、士官學校或は兵學校に入らんとせるも、曩に蒙りし耳朶の外傷に累せられ不幸夙志を果す能はずして喟然たり。

時恰も日露戰勝の直後敗戰の露西亞が復仇の必然的國勢に鑑るところあり、茲に鬱然意を革めて東京外國語學校露語科に入學し、矻々研鑽して明治四十一年之れを卒へ直ちに身を軍籍に投じ、渡鮮北韓會寧に至り、朝鮮駐劄軍司令部該地諜報部の一員として活躍するところあり、偶々伊藤博文公がハルビン驛頭に暗殺せらるゝや、其の元兇安重根一味調査の密使を承けて君は是れより浦鹽に、ハルビンに去來して克く使命を全うし、爾來引き續き浦鹽に據りて軍事探報の重任に當れり。

惟ふに此の諜報の任務たる要約せば、氣魄と穎智と忍耐の極致的顯現にして然かも一糸寸毫を誤らば身魂忽ち九仞の奈落に墜つ、君は渾身耿々として祖國愛に燃え、敢然此の決死的職務に挺身して只惟れ稗補の至らざるなきかを憂へり。

斯くして東露に隱顯徘徊して最も眞相を穿ちて適確なる諸情況を探り、屢々軍事上有力なる報告を齎せしが、就中往時當局者の垂涎措かざりし浦港要塞の機密地圖を入手せしが如きは、寔に君の閲歴中燦然特筆すべき功績にして、當時君は彼の元祿の快擧たる赤穗浪士の秘謀を宛然異國に展開して、所謂一上一下虚々實々の密策と臥薪嘗胆の苦汁を萬喫しつゝ見事其の志を果し得たり。

然るに明治四十五年八月、明治大聖帝陛下が萬民の極りなき哀悼の裡に神去り給ふや畏くも平素大帝の大御心に私淑し奉りし君は意氣阻喪洵に困憊の極に達して爲すところを知らず、遂に君の心境に一轉期を劃するところとなりて挂冠野に下るに至りしが、同年三菱合資會社に入社し營業部に勤務、翌年同社長崎支店に赴任せり、尋いで歐洲大戰に會するや露國に對する米糧供給の任を帶び、君は派されて浦鹽に出張し、活眼卓才克く同業他社に抽んずるの業績を擧ぐ、然して大正六年同地支店長に推さる、曾つては軍屬の間諜として自在の出沒を試みしとの異邦の地に、任を更へて再び在住、其の山河に接する君は往時を追憶して感慨の轉々新なるものありしならん乎。

斯くて傍ら浦鹽商工會議所會頭、日露協會委員、聯合委員會委員等に選ばれ、任に在りて多大の盡瘁を致し屢々金銀牌等を授與せらる。

更にシベリア出兵に際し、露語に堪能なると共に彼の國情に精通せる君を頼りて其の誘掖扶導を俟つ我が海陸武官の來往繁く、爲めに當時の支店樓上は恰も參謀本部の如き觀を呈せしと謂ふ。

大正十一年伊太利ゼノアに於て世界財政經濟會議の催されんとするや君は三菱を代表して特派され、英國に航し倫敦に於ける是れが豫備會議に臨み然る後ち日本代表隨員として該本會議に列席せり。

次いで和蘭國海牙に開催せられたる露國財政經濟委員會議には日本側委員として出席、日本代表を補佐稗益するところ大なるものあり、歸朝後直ちに浦鹽斯德に赴き當時日露の國交未だ開かれざるに際し、國民外交に依り漁業權の暫定契約締結に貢献盡瘁するところあり。

尚ほ大正十三年には莫斯科に於ける彼の石炭石油の北樺太利權會議に出席し以て尊俎衝に當りて重任を完うするところあり、翌大正十四年歸朝に際し單身征旅の身となり大革命後獨立せし群邦各共和國を歴遊し具さに視察を爲せり。

先是大正十二年浦鹽支店長より本社機械部副長に累遷、爾來社務に精勵恪勤しつゝ以て現時に及びしなり。

尚ほ曩に　皇弟秩父宮殿下御成婚御治定相成るや、君は會津藩士の一人として昭和三年三月勢津子姫をワシントンに御出迎へ申上げ同年六月御同船隨伴して歸朝す。

君が赤誠心血を濺ぎ躬を以て君國に報ぜる概ね斯の如くして、敢て無冠なりと雖も其の隱れたる偉功の實績に至りては炳乎として在天祖神の銘記し給ふところ蓋し天爵の人爵に勝る所以乎。

君は資性極めて濶達にして清廉、茫乎たる風丰裡に言ひ難き寛懐を覺えしむ、趣味としてスポーツ、就中テニスを好くし、其の家庭にはふじ子夫人ありて其の間に一郎君、二郎君及び竹乃、恭子、利子、末子等あり、現に東京市麻布區霞町十九番地に住す。電話青山一三四七番

山本勘助君

從六位　東京市教育講習所講師
東京市立第一實科高等女學校長

人間涵養、即ち教育の重務は萬業を超越して至重至大なるを痛感すると共に、當事者の人格識見德化の如何は直ちに以て國運前途の消長を卜するに足るものと謂ふべし。

此の意味に於て現時前揭の教職に携る吾が山本勘助君は吾人の意を强うするに足る人、君は明治二十年十月二十二日を以て三重縣飯南郡宮前村に誕生し、該地に成育す、然して嚴父を山本定吉氏、慈母を里子となし其の二男たり。

夙に育英事業に志し、同縣立師範學校を卒ふるや笈を負ふて東上、直ちに東京高等師範學校に入學し、大正二年同校本科英語部を出づ、斯くて福島縣立師範學校教諭たりしが同六年文部省普通學務局に轉じ、尋いで同九年東京市視學たること五年、同十三年東京市立第一實科高等女學校長に推され現に其の職にあり。

君は二宮尊德翁の報德教に歸依し、其の教旨たる敬神崇祖、報恩感謝の思念を以て勤儉努力以て社會の貢献を期す、現下の時勢甚しく混沌たるの秋、是れを救匡し打開するは道德經濟の極致的合一を顯現する斯教を措いて他に何物もなしとの烈々たる信念に立脚し、又自他の個性を尊重して是れを發揮せしむるを以て教育の根本方針となし、而して幾多の子弟に對する君の德化の洽き洵に故なきに非ずと謂ふべし。

夫人みつ子は福岡縣の人故鈴木謙氏の女にして東京音樂學校の出身、其の間に寛一郎君、敏二郎君、恭三郎君及び里子あり、現に東京市外駒澤町上馬九一一番地に住す。電話世田ヶ谷六四〇番

山城高興君

沖縄縣多額納稅者
沖縄興業銀行監査役

南日本の文化を豊かに藏する沖縄縣下財界の巨頭我が山城高興君は沖縄縣の人荒巻高寧氏の令息にして、安政五年三月を以て生る。

夙に縣下財界に活躍して敏腕を縱横に振ひ、今や縣下有數の多額納稅者且つ千萬長者として權勢當るものなく、尙ほ前記銀行の重役として知らる。

現に沖縄縣那覇市東町二ノ十八番地に住す。

山中勇君

東京山中銀行頭取
小型自動車會社長

君は東京府の人山中隣之助氏の長男にして、明治十年七月を以て生る。

夙に本邦實業界に活躍して貢献すること甚大、曩に早川電力、東洋醸造、日佛シトロエン自動車各株式會社の重役として敏腕を振ひしことあり。

然して現時は前記の外紅葉館、明治漁業、東京輸出莫大小、富士身延鐵道、秩父鐵道、旭電氣各株式會社の重役にして日本麻絲紡績、信達館製糸各株式會社相談役たる外財團法人中央社會事業協會理事たり。

尙ほ昭和元年十二月白耳義國皇帝よりコンマンドルレオポール勳章第二世章を受領佩用を允許せらる。

夫人を利子と呼び其の間に繁君、晴雄君、國男君及び美子等あり、現に東京市麹町區中六番町四七番地に住す。電話九段五三二番

山田馬次郎君

株式會社大倉ビルディング社長
大倉商事株式會社常務取締役

我が財界の重鎭山田馬次郎君は和歌山縣士族森謹一郎氏の令弟にして、明治三年八月を以て生れ、同二十一年十一月先代正信君の養嗣子となる。

夙に鄕校にありては其の俊才を謳はれ卒業するや笈を負ふて東都に上り、切瑳琢磨の功空しからず、明治二十七年東京商科大學の前身たる東京高等商業學校を優秀の成績を以て卒業す。

斯くて身を本邦實業界に投じて君が非凡の才腕を振ひしかば着々として實績を擧げ、今や前記大倉ビルディング株式會社に取締役社長たる外大倉商事株式會社常務取締役として我が大倉財閥に重きをなし、尙ほ傍ら大島製鋼所、日本無線電信電話各株式會社の重役として令名あり。

夫人ゑい子は和歌山縣の人宮本榮三氏の長女にして、其の間に正雄君及び鶴子萬亀子あり、現に東京市赤坂區青山南町五丁目四十五番地に住す。電話青山二〇四四番

安田祿造君

東京高等工藝學校長

君は東京府の人寺本郡三氏の六男にして、明治七年十一月を以て生れ後ち安田仁平氏の養嗣子となる。

明治三十五年東京高等工業學校を優秀の成績を以て卒業するや推されて同校助教授を拜命し、明治四十三年文部省より澳國及び獨國に留學を命せられて研鑽すること三ヶ年、大正三年蘊蓄を積みて歸朝す。

斯くて同年東京美術學校教授を命ぜられ、後ち東京高等工業學校教授に轉じ、更に大正十一年東京高等工藝學校教授に任ぜられ、同十二年再び歐米各國を視察漫遊して翌年歸朝す。

然して昭和三年四月同校々長に榮補せられ今や本邦教育界に令名あり。

夫人鶴子は東京音樂學校の出身にして女流音樂家の聞え高く、君との間に政勝君及び智子、仁子等あり、現に東京府荏原郡中延一〇七三番地に住す。

矢島信夫君

勳七等
加奈陀マニュフアクチュラース生命保險會社日本支社主事

君は明治十三年八月十六日舊信州小諸城主青山因幡守宗俊の重臣同領佐久郡元八重原村の創祖鄕士贈從五位黑澤加兵衞吉利第十一代の孫黑澤嘉兵衞氏の次男に生れ、幼にして同國諏訪高島藩士矢島節爾氏の養嗣子となる。

抑々生家の家系は相馬平氏の後裔に當り、其遠祖は下總にして、天慶の亂以來世々西上野甘樂及東信濃國南佐久相木地方に砦居し來れり。

然して吉利の祖父黑澤駿河守重慶は足利氏の末世義輝の天文永錄元龜天正の戰國時代に當り山中衆と稱して武田信玄に起請し、甘樂勢を率ひて甲軍に加擔せし豪族にして川中島前後の戰役に活躍して越軍を壓せし武將、更に其薫陶に成り武門の傑才たりし、吉利は夙に理財に富み經營の技に長じ、領主青山家の郡奉行を奉じ傍ら殖産興業に志し、領内荒漠旱潟荒蕪の地たる八重原高原の開拓に從事し、其水源を遠く蓼科の幽奥に探り、自資を投じて永應二年より寛久二年の間十ヶ年の工程を經て延長二十二里に餘る三線の水路を堀鑿し、其の灌漑に依りて、舊高二千五百石余を開發し今や產米年額八千五百石を豐收し三千八百余の戶口を潤す穣々たる禾稷の地たらしめ、而して尙は此地に神社佛閣を建立開基して住民の安堵と敬神尊皇の念を養ひ、兼て敎化啓蒙の實を擧ぐる等吉利氏の事蹟甚大なり。

昭和天皇御登極に當り其舊功畏くも天聞に達し特旨を以て從五位を贈られ今や家門隆々たり。

斯くの如き豪家にして其連綿たる系統今日に及ぶ名門に血を享けし同君は資性淳厚活達にして、眞摯其職に當り社交に長じ、克く武門の面目を發揮し、明治三十三年軍隊に入るや拔擢を以て陸軍一等看護長に累進し、明治三十七八年日露戰役に從軍し戰功に依つて勳七等に敍せられ青色桐葉章を授けられ又恩給を賜つた精勤家にして、退營后鄕里諏訪にあり藥種商經營の傍ら加奈陀マニュフアクチュラース生命保險會社日本支社の代理店囑託を受けて其業務に活躍し、常に着實なる成績を擧げ來りしかば其囑望の的となり會社の推薦に依りて日本支社の主事に任じ契約事務を掌り、爾來、專心保險事業の爲めに日夜盡瘁し同社と被保險者との間に其厚き信望を以て迎へられ今や斯界に錚々の名あるのみならず本邦實業界に名あり。

夫人総子は同鄕諏訪岡谷製絲場地の豪商名譽賞高天正宗釀造元高橋巳喜之助氏の令姉にして琴瑟相和し演藝と讀書の趣味に業暇を慰むといふ。

現住東京市麴町區元園町一ノ七

安場末喜君

男爵　從三位勳三等　貴族院議員
臺東製糖株式會社々長

當家は先代保和氏より顯る、保和氏は舊熊本藩士にして、先覺横井小楠師に學び、明治二年膽澤縣大參事に任じ、爾來福島縣權令、愛知縣々令、元老院議官、參議院議官、福岡縣、愛知縣各知事、北海道長官等に歷任し、同二十九年勳功により華族に列し、男爵を授けらる。君其の後を享く。

君實は同藩士下津休也氏の五男として安政五年五月を以つて生る。

斯くて先代保和氏の養子となり明治三十二年家督を相續き襲爵仰せ付けらる。

夙に慶應義塾に學び、後製紙業研究の爲め、米國に留學すること二回、歸朝後印刷局技師に任じ、尋で東肥製紙會社技師長に聘せらる。

又臺灣總督府製紙事業取調事務を囑託せられ、清國各地に出張す。

現時臺東製糖會社々長にして、傍ら臺南開拓、岐阜電力、新竹製糖、大日本セルロイド、東亞印刷各會社の重役たり。

曩に貴族院議員に互選せられ、現に其の任にあり、尙は日獨事件の功に依り勳三等に敍せらる。

君は趣味として刀劍、書、園藝等を好み、就中刀劍は君の最も愛好する處にして古武士の如き風格を存す、君にして初めてふさはしきことなり。

君曰く「現代人にして、刀劍を愛する人の念あらば、何んの邪念心に湧かづ、又自ら卑しき行爲を成し得ず」と、けだし眞言と云はん哉

夫人をトモ子と呼び養父保和氏の長女にして名古屋女子師範學校の出身たり。

君との間に保建君(正五位)、保雄君(海軍少佐)、保定君(法學士)、保國君(經濟學士)の外工學士富永敏麿君に嫁せしツキ子、醫學博士平野義太郎君に嫁せし嘉智子あり。

現に東京市麻布區一本松町二四番地に住す。電話高輪六四六五番

山上曹源君

駒澤高等女學校長
駒澤家政女學校長

君は佐賀縣の人、明治十一年十月十二日を以て同縣藤津郡能古見村に於て生誕嚴父を故山上吉右衞門氏となし其次男に生る。

夙に學を好み鄕校に學びしが明治三十六年九月曹洞宗大學に入學し同三十九年七月優秀の成績を以て之れを卒業せり、斯くて同年九月曹洞宗海外留學生に選ばれ印度に渡航、同國甲谷他大學大學院に入りチボー學監、コサムビー敎授、パリ、ナート、デー敎授及び梵語大學長ハラプラサード、シマースリ敎授等に師事し其の指導の下に梵語印度文學宗敎及び哲學等を研鑽するところあり、同四十三年九月甲谷他大學リーダーを命せられ「佛敎思想系統論」を講せり、然して其の原稿は同大學より出版せられたり。超えて大正元年十月に到り多大の蘊蓄を得て歸朝し翌二年九月曹洞宗大學敎授に任せられ同八年三月同大學々監となり同十四年三

月昇格せる駒澤大學々監兼教授に任せらる、尋で昭和三年三月同大學々監を辞し同年開校せられたる駒澤高等女學校及び駒澤家政女學校の校長となり現に其職に在任す。

此間大正四年六月北米合衆國桑港に於けるパナマ運河開通記念世界大博覧會開催に際し、世界佛教徒大會に大日本佛教青年會を代表して出席し同會の決議に依り日置黙仙師と共にワシントンにウキルソン大統領を訪ひ、世界平和促進の運動に盡力せられんことを請願せり。

君は曩に「大智度論」「四方伽經」「彌蘭陀王問經」等を國譯して公刊せるが、現時財團法人啓明會の補助を得、五ヶ年計畫を以て彼の印度の大敍事詩「マハーバーラタ」の國譯に盡瘁しつゝあり。

君の閲歴學殖概ね斯の如し、蓋し佛教學界の權威にして得難き才器と謂ふべし

夫人をキヨ子と稱し大阪府の人故河合卯三郎氏の長女にして其の間に元君、貞君、昭子あり、現に東京市外駒澤町深澤三四二五番地に住す。

山本庄吉君

森永製茶(株)專務取締役

我が國製茶業界に錚々の聲名を馳せ前途多事多端なるを前記山本庄吉君となす

君は京都府の人大東庄吉氏の次男にして、明治十七年十二月九日を以て京都府相樂郡上板町に生誕後ち先代山本忠三郎氏の養嗣子となる。

夙に鄕校を卒ふるや我が國製茶事業界に活躍して敏腕を振ひ、曩に合資會社丸ト商會を創立して同社出資社員となり、後ち同商會を山城製茶株式會社に改稱と共に同社取締役に任じ、大正十二年關東大震火災後東京出張所を開設して着々業勢を張り、昭和二年同所を東京支店に陞格せしむと共に君は同支店長に任じ、後ち森永製茶株式會社と併合せらるゝや同社專務取締役に推され以て現在に及ぶ。

趣味多樣なる中にも「茶の湯」に通じ、茶に關する數種の著書あり、尙ほ登山、旅行等を愛好すといふ。

夫人をうの子と稱し養父忠三郎氏の長女にして其の間に一女つやの子あり、京都桃山高等女學校出身の麗人たり。現に東京市下谷區御徒町一ノ二四番地に事務所を有す。電話下谷二七〇番

山下恒雄君

明治生命保險株式會社主事

君は現籍を東京府に有し、廣島縣士族山下豐穗氏の長男にして明治七年八月十二日を以て生る。

夙に東京商業學校を經て明治四十年日本大學法科を卒業す。明治生命保險會社に精勤すること久しく、累進して各課々長を始めとして同社仙臺、福岡、各支店長を歴任、大正九年再び本社詰となり、以來契約主任、會計主任等を經て營業部主業に榮補以て現在に及ぶ。

趣味多樣なる中にも圍碁、將棋等に長すといふ、社交に厚く交詢社、生命保險協會各會員たり。

夫人房野子は廣島縣士族松村貞雄氏の二女にして其の間に愛子、敬子、樂子等あり、現に東京市外澁谷原四番地に住す電話高輪七五七二番

八卷升次君

東京電氣(株)工業部副長

君は夙に上掲の會社に恪勤し偶々「關東震災者名簿」の保存法に腐心し遂に一萬年保存の硝子製容器發明者の一人として大いに令名を喧傳せられし人、君は明治二十年十二月を以て宮城縣黑川郡吉岡町に於て生誕、故八卷左衛門氏の嫡男にして夙に鄕校に學を修め後ち同縣立第一中學校に入り之れを卒業するや直ちに笈を負ふて東上し、東京高等商業學校に入學同四十二年優秀の好績を以て同校を出ずるや逓信省に入りて官職を奉ずるも、翌四十三年東京電氣株式會社に轉じ同社工業部に勤務し今日に至れり。

此間同四十四年米國に航し大正二年歸朝せるが、同十年再び米國を經て歐洲各國を視察せることあり。

君は居常處世上の主觀念に於てバイブレーションを信ずること寔に深厚にして殊に技術者として科學を極度に發揮して行かば遂には之れに依りて解決せざるものなしと篤信す、宜なる哉前掲の發明も君のバイブレーションの具象化と謂はざる可からず。

趣味に圍碁あり、夫人を輝子と謂ひ東京府の人加藤貞一氏の令妹にして立教高等女學校の出身、其の間に隆志君、康世君、秀男君あり。現に東京市外入新井町新井宿二〇六六番地に住す。電話大森九八八番

柳澤德郷君

正五位　東京府華族　慶應義塾圖書館勤務

君は東京府華族舊越後三日市藩主子爵柳澤德忠氏の長男にして、明治二十三年四月十日を以て生る。

夙に慶應義塾大學法科を卒業するや大正八年同大學圖書館に入り勤續今日に及べり。

趣味に富み就中演劇を愛好す、尙友會々員たり。

夫人を陽子と呼び子爵南部利克氏の長女にして女子學習院の出身たり、現に東京市外中澁谷四二四番地に住す。電話青山六四〇九番

八尾新太郎君

金尾商會經營者

機械金物石炭の販賣を營む金尾商會主八尾新太郎君は新進の實業家にして年壯異彩ある人、現に傍ら東洋石油株式會社々長、合資會社太平洋工業商會代表社員等の要職に在りて商勢を內外に張りつゝあり。

君は明治二十八年十一月二十一日を以て東京に出生、故八尾新助氏の嫡男に當れり。

夙に京華中學校に學び之れを卒ゆるや慶應義塾大學經濟學部に入學、大正七年

感ずるところありて學を廢し同年創立せられたる金尾商會の經營に任じ、爾來業務の伸張に盡瘁雜れ努め以て今日に至れるが、君年齒未だ大いに春秋を藏す、將來斯界に騏足を延べて其の覇志を遂らんか、矚目すべき前途を打開するに到らん好漢幸ひにして自重加養以て吾人の期待に背かざらんことを至囑す、因に同商會支配人として令弟正家君在り、君と共に拮据して斯業に從事す。

君は撞球を好む、夫人を光子と稱し女子大學出身の佳人たり。店舗及び自宅は東京市本郷區東竹町二十三番地に在り。電話小石川六七三七番、七三九三番

山縣政尾君

電氣諸機械器具販賣業
山縣商店經營者

當家は代々吉川家の家老役を勤めたる家柄にして、故三平氏夙に鴻圖を抱いて東上、明治三十七年一月獨力以て電氣諸機械器具製造販賣業を開始して、斯界に一大飛躍を試みしかば社會の信望月に年に舉りしも、不幸にして病魔の冒すところとなりて他界す。

斯くて其の遺業を繼ぎて勇敢にも內外の店務其他を一身に引き受けて故人の靈に對へんと立ち、日本婦人の龜鑑として恥かしからざるを當主政尾未亡人として今や幾多の店員を指揮督勵して斯界の發展を計り、鐵道省、內閣印刷局、陸軍造兵廠、陸軍火工廠、東京地方專賣局等の重なる納入先を有し前途愈々多望なるものあり。

現に東京市芝區愛宕町三ノ二番地に營業所を有す。電話芝一三九一番

山口經治君

正五位勳五等
安田銀行文書課長

君は岡山縣の人山口比佐氏の令息にして、明治十四年十月を以て生る。

明治四十年東京帝國大學法科大學獨法科を卒業するや直ちに安田銀行に入りしも仝四十二年官途に轉じ地方裁判所檢事に任じ、次いで內務省に入り德島縣警察部長、山梨縣內務部長等に歷任す。

斯くて大正十三年十月再び實業界に轉じ、安田銀行に復歸、仝十四年六月安田信託株式會社東京支店支配人、同支店長、同常務取締役代理等を歷勤、同十五年八月安田銀行文書課長に擧げられ以て現在に及ぶ。

趣味に運動あり、就中、野球、劍道に達し、尙ほ撞球、圍碁等に長するが如し學士會々員たり。

夫人を澄江子と呼び其の間に義輔君、安輔君及英子あり、現に東京市牛込區市ケ谷仲町四十三番地に住す。電話牛込二二六一番

山谷德治郎君

ドクトル・メヂチーネ
日新醫學社(株)社長

君は岡山縣の人前衆議院議員故山谷虎三氏の令弟にして、慶應二年三月を以つて生る。

夙に岡山縣醫學校を經て東京帝國大學醫學部に入り、內科及病理學を專攻し、明治二十六年週刊醫學評論雜誌「醫海時報」を創刊、又岡山縣津山病院長、大阪清野病院副院長等に任ず。

斯くて明治四十年獨逸に留學しギーセン及ギョッチング大學に學びドクトル、メヂチーネの學位を受け同四十二年歸朝後三共株式會社理事たりしが、同四十四年日新醫學社を創設、月刊雜誌「醫事公論」等の刊行並に獨逸學術書、醫療器械藥品等の販賣を兼ね現に同社々長として其の經營に當る、曩に岡山縣より推されて衆議院議員に當選せしことあり。

現に東京市外千駄谷八三八番地に住す電話四谷一七一番

山本讓君

山本工業所長
目黑自動車(株)監査役

其の規模必ずしも大ならずと雖も、堅實堅固の營業的基礎の上に立脚して除ろに業界に鴻志を延べんとする山本工業所長たる君は、東京の人にして明治十三年四月一日を以て生る。小中學校を卒ゆるや中央大學政治經濟科に學び、同三十七年之れを卒業、直ちに三菱王國の人と成り同合資會社庶務課に勤務すること荏苒實に廿有余年に亘り出精恪勤して漸次同社の內外に重きを爲せり。然るに偶々獨立獨行の機運熟して昭和二年七月同社を勇退し其の翌年八月に山本工業所を創設三菱の特約店として專ら同社の製品に係る電機器具類の販賣を以て重要業務と爲し、支配人杉村修一君を以て社務を執掌せしめ斯界に進出するの端を開けり。仝所は開設日尙淺きも曾つては三菱王國に在りて多年の体驗を有し而して本邦比類なき優秀の同社製品の販賣權を占む。才腕の人杉村氏あり、蓋し陣容に遜色なしと謂ふべき乎、同所の業績は今後刮目に價すべし。

君は上揭を主宰するの傍ら尙ほ目黑自動車株式會社監査役として其の人格の敦厚と相俟つて令聞あり、因に山本工業所は東京市京橋區弓町八番地（電話京橋三六三一番）にあり、住所を同市外上大崎町桐ヶ谷二二七番地（電話高輪八〇六一番）とす。

八幡恭助君

日本拱院常任幹事

君は岩手縣水澤町の產にして明治廿二年四月一日を以て出生、先考兵藏氏の三男に當る。

當初同縣立一ノ關中學校に學び後ち神奈川第一中學校に轉じ同四十年之れを卒業するや東上して早稻田大學商科に入學大正三年同校を卒業す。

斯くて翌四年橫濱保口近藤合名會社に入社せるも後ちタバン時計會社に轉じ同社支配人として大いに才腕を揮ふところあり、同十四年同社を辭して日本拱院に入り其の常任監事に推され現に其任に在るの傍ら、英國製事務器具の輸入業を營

むを以て目的とするロネオ合資會社代表社員たり。

君は野球に趣味あり、又圍碁に堪能にして家庭にはつま子夫人との間に令嗣瑛一君あり、現に神奈川縣茅ヶ崎町小和田濱竹に住す。

山谷太郎君

日新醫學社(株)常務取締役

君は現籍を東京府に有し、岡山縣の人現日新醫學社々長として令名ある、山谷德治郎氏の長男にして、明治三十一年二月を以て生る。

夙に第六高等學校を經て大正十四年東京帝國大學工科大學を優秀の成績を以て卒業するや直ちに日清製粉株式會社技師として入社し、昭和二年日新醫學社に入り現に同社常務取締役として知らる。

趣味にスポーツあり、特に柔道の達人と評せられ二段の免狀を有すといふ、學士會々員たり。

夫人志津子は海軍少將大石正吉氏の長女にして、御茶ノ水高等女學校の出身たり。現に東京市外千駄谷町八三八番地に住す。電話四谷一七一番

矢本平之助君

衆議院議員　大地主

多年縣制に關與し公共事業に盡すところ尠らず、昭和三年普選に際し立候補を宣するや輿望を荷ふて榮冠を得たる宮城縣選出代議士我が矢本平之助君は、慶應元年三月を以て同縣桃生郡大鹽郡に於て誕生せり、先考矢本平太夫氏の嫡男に當り明治廿六年家督を相續す。

抑々當矢本家は累代該地に定住し農を營みて縣下に鳴れる名家にして君又家祖の業を承けて今日に到れるが、夙に漢學者遠藤溫師に就き和漢の學を修む。然して後ち公事に携るところあり、曾つて同縣會議員、同議長、北上川治水事業會々長等に推され、功績寔に顯著なるものあり、就中、北上川治水問題の解決を以て畢生の事業となし縣民を塗炭の疾苦より救濟せんと老來益々意氣軒昂にして治の完成を期して日夜これに奔馳挺身しつゝあり、蓋し縣民多數の嘱望推服を得つゝある所以ならん乎。

君は立憲政友會に屬し余暇あれば讀書に親しむを以て唯一の娯みと爲せり。

夫人をふて子と呼び同縣千葉恭佐氏の三女にして內助の功著しく其の間に剛君正平君の令息あり、又多數の令妹を擁して一家極めて和氣藹々たり。現住所は宮城縣桃生郡大塩村なり。

山口恒太郎君

東京通信社長　衆議院議員
實業界の重鎭

新聞通信界にありては東京通信社々長並に中央新聞社副社長等として今名高く政界にありては、政友會本部總務として重きをなし、更に實業界に活躍しては東邦電力、九州電氣軌道、銅生金鑛、九州送電、九洲土地、名古屋タクシー自動車大阪タクシー自動車各株式會社取締役、タクシー自動車株式會社々長、朝鮮煙草興業各株式會社監査役、ホワイト、タクシー株式會社々長、博多株式取引所理事長等幾多の要職にありて令名嘖々たるを我が山口恒太郎君となす。

君は福岡縣の人山口兵三郎氏の長男にして、明治六年二月十日を以て生る。

夙に東京に遊學し、學業を卒へるや國民新聞記者として健筆を振ひ、後ち福岡日々新聞主筆に轉じ傍ら政界に勢力を扶殖し福岡市會議員、參事會員等に擧げられしより着々として各界に强固なる地盤を築き上げ以て現在に及ぶ。

曾つて九州電軌鐵道、日本改良豆粕製造、日本電報通信社、博多證券交換所各株式會社取締役、博多取引所監査役、博多商業會議所會頭たりしことあり。

趣味に人材を養成するを以て唯一の樂しみとなし、社交に厚く工業倶樂部、交詢社、帝國鐵道協會、電氣協會各會員たり、天樂と號す。

夫人ツキ子は熊本縣士族甲田子之吉氏の息女にして其の間に四女あり。現に東京市麻布區市兵衛町一ノ十一番地に住す電話青山一八五一番

山越爲次郎君

山越工場(株)常務取締役

君は千葉縣の人故服部老苑三郎氏の二男に當り明治十五年三月を以て孤々の聲を擧げしが、夙に山越秀太郎氏の養子となりて姓を冒し後ち其家督を承く。

夙に笈を負ふて東上、慶應義塾大學に入學し法科を專攻、之れを出ずるや直ちに父業に携り大正十五年山越工場を株式組織に改めるや君擧げられて同社常務取締役に就任以て社務の樞機を掌握し拮据之が經營に當り現に其任に在るの傍ら、株式會社イソダメタル工場取締役を兼ぬ

君は其の人と爲り寔に醇厚にして卓落の氣宇に富み、接する者をして恰も春風駘蕩、謂ひ難き感懷を覺えしむ。

家庭にはまさ子夫人あり、養父秀太郎氏の長女にして夙に學習院女學部出身の麗人たり、其間にぬい子嬢を擁して和氣靄然たる一家を成せり。

現に東京市芝區芝公園九號地（電話芝一三九八番）に住し、山越工場は同區本芝三丁目八番地（電話高輪二九六〇番、二九六一番）

矢吹省三君

男爵從四位　貴族院議員
海軍政務次官

君は男爵矢吹秀一氏の三男にして明治十六年七月を以て生れ同四十二年襲爵仰せ付けらる。

明治四十一年東京帝國大學法科大學を卒業し横濱正金銀行に入り、後ち東京貿易、桑原鐵工、富士生命保險各會社重役に擧げられ、更に貴族院議員に互選せられ外務政務次官等を經て昭和四年三月濱口內閣の海軍政務次官に推され以つて現在に及ぶ。

現に東京市外澁谷向山三二番地に住す

山田鐵郎君

醫學士　山田病院長

本邦醫界の一大權威たる山田病院は刀圭界の耆宿たりし醫學博士山田鐵藏氏が其蘊蓄を傾倒して治療に從事し來りしが大正十四年長逝せるを以て其の令嗣たる山田鐵郎君之れが院主となり新知識と新技術を傾注して現時益々大病院としての諸施設を完備し、社會の信頼實に他の追隨を許さず獨往の境を拓くに至れり。

而して君は故山田博士の長子にして明治二十九年五月六日を以て、東京市下谷區御徒町に孤々の聲を擧ぐ慈母を政子刀自となす。

抑々當家は代々山形縣東置賜郡成田に住し米澤藩主上杉家の待醫として近郷に鳴りし名家たり、然して其七代たる故山田博士は夙に東上遂に醫學界の泰斗と仰がるゝに至る。

君は其八代を相續し幼にして穎悟、夙に祖業に志し築地尋常小學校、府立第一中學校、第七高等學校を經て九州帝國大學醫科大學に入學し大正十四年之れを卒業す。

次いで昭和二年慶應義塾大學西野内科に於て臨床的方面の研鑽を爲し、又東京帝國大學附屬病院精神科の三宅博士に師事し現に孜々として研究中なり。

君は運動一般に趣味を有し家庭には博子夫人あり、貴族院議員男爵福原俊丸氏の女にして千代田高等女學校出身の才媛たり。

現に京京市外淀橋町柏木三四九番地に住す。電話四谷一六八二番四六七二番

山口篤三郎君

三越呉服店(株)呉服係長

君は現籍を東京府に有し、京都府の人故山口仙之助氏の二男にして、明治六年九月二十三日を以て生る。

夙に學業を卒ふるや實業界に投じ、明治十六年三越呉服店の前身たる三井呉服店に入り、爾來、精勤すること久しく、我が三越呉服店の今日の盛大を見るに至りしは蓋し君の献身的努力に歸すべきもの多々、其の功勞尠少ならざるべし。

今や同社呉服部に係長として重きをなし、能く部内を統卒して、萬遺漏なからしめ同部の將來正に多望なるは一つに君の精勤の賜と謂ふべし。

夫人つね子は大阪府の人故土田米吉氏の息女、其の間に英治君、彌三郎君、健造君、喜代男君、修君及び春子あり。現に東京市外大久保百人町三二三番地に住す。

山田新之助君

芝區會議員
山田新之助商店(資)代表社員

抑々當山田家は夙に米穀商を營み都下に鳴る老舗なるが、我が山田新之助君は先代新之助氏の嫡男にして明治二十四年四月十三日を以て東京市芝區西應寺町に生誕、鎮吉と稱せるが大正二年先考逝去と共に襲名し其家業を繼承以つて今日に到れり。

是より先き君は夙に正則中學校に學を修め後ち騎兵第十五聯隊に入營し除隊後父業に就けるが大正十五年二月同店を合資組織に革め其代表社員となり傍ら合名會社共信社代表社員たり。

君は公事に盡すところ篤く現に芝區會議員たるの他日之出町會副會長、東京白米商同業組合第七部長、芝廻米問屋組合評議員、東京正米問屋組合聯合會評議員東京山手正米問屋組合聯合會幹事等の任に在りて功績尠からず。

趣味として旅行を好み、家庭には母堂まさ子刀自を載きたね子夫人あり、東京の人加藤信一氏の長女にして實踐高女出身の才媛たり、其の間に豐造君、登美子婦美子、勝造君あり。

現に東京市芝區日之出町七番地(電話高輪三八〇八番)に住し、店舗は同町八番地(電話高輪三八〇七番)なり。

柳井松祐君

戸畑鑄物(株)東京營業所々長

君は山口縣厚狹郡の人故柳井信太郎氏の二男にして、明治十六年十二月二十一日を以て生れ、鄕里に於て小學校の科程を卒ふるや下關に出で、明治三十五年下關商業學校を卒業す。

斯くて同年笈を負ふて東上慶應義塾に學び、明治四十一年理財科を優秀の成績を以て卒業、直ちに久原鑛業株式會社に入り、大正四年仝社朝鮮製練所に轉勤を命ぜられ、大正十二年同社を辞し仝年戸畑鑄物株式會社に入り大阪支店營業所長に就任す。

斯して本社營業部に轉勤昭和二年東京營業所々長に累進以て現在に及ぶ。

夫人をたつよ子と呼び赤川鐵之助氏の長女にして山口高等女學校の出身其の間に四男三女あり。

現に東京市芝區高輪北町四八番地たり

八尾珪之助君

富士本商店主任

現に上掲の任に在るの傍ら東京酒造問屋研究會々長、中央酒類問屋聯盟會理事として業界に盡すところ篤く夙に令命ある吾が八尾珪之助君は、明治十三年九月七日を以て東京市に孤々の聲を擧ぐ、嚴父を故八尾八左衞門氏と爲し其嫡男に當れり。

君は夙に實業界に志し明治二十二年弱冠にして富士本商店に入り、爾來、同店に一貫し恪勤精勵實に四十有余年に達し現時店務の一切を執掌し、多年に亘る蘊蓄に依り同店の柱石として信望内外に篤し。

家庭にはいよ子夫人あり、東京の人荒浪峯吉氏の二女にして其の間に誠一君あり。

現住所は東京市外澁谷町圓山五番地に在り。

山本利譽君

川崎第百銀行吾妻橋支店長

君は德島縣の人先考貞藏氏の令息にして、明治十九年四月六日を以て同縣撫養町に生る。

夙に鄕校を卒ふるや鴻圖を抱いて笈を東都に負ひ、研究琢磨、明治四十四年早稻田大學大學部商科を優秀の成績を以て卒業す。

斯くて直ちに川崎銀行に入り、爾來、同行大阪支店、神戸支店各支店長代理より更に大正十一年再び大阪支店長代理に任じ、後ち川崎銀行と第百銀行の大合同成りて、川崎第百銀行設立せらるゝや同行堺支店長に擧げられ、更に日本橋支店長代理に轉じ、昭和四年同行吾妻橋支店長に拔擢せられ以つて現在に及ぶ。

在學時代はスポーツを以て鳴らし特に野球の名選手として斯界に知らる。マッ子夫人は松尾福三郎氏の息女にして其間等利雄君、隆三君及びはるゑ子、きぬ子にあり。現に東京市外千駄谷原宿一九六番地に住す。

山田忍三君

正六位　勳六等　山田商會主
山田出版(株)取締役社長
白木屋吳服店(株)取締役販賣部長

君は山口縣の人浪山眞成氏の四男にして、明治十八年十二月二十日を以て生れ後ち陸軍中將山田隆一氏の養嗣子となる。

夙に東京陸軍幼年學校、同步兵學校、同士官學校等を卒業するや陸軍士官學校教官拜命、大正三年官途を辭す。

斯くて實業界に投じ、山田商會を開設してフォード自動車會社の製品の販賣に從事、更に山田出版株式會社を創立して同社取締役社長に就任、今や前記兩社を經營主宰する外白木屋吳服店取締役販賣部長として東都財界に令名あり。

曩に麴町區民の輿望を擔つて麴町區會議員に選出せられ、東京市區制に參劃して功あり、尙ほ海外デバートメントストアー視察の爲め歐米各國を歷遊せり、現時は飯田町青年團長、仝町和會委員長、東京自動車組合評議員等の公職を兼任す

夫人君子は養父隆一氏の長女にして、府立第三高等女學校の出身たり。

現に東京市麴町區中六番町五十二番地に住す。電話九段六四八九番

柳澤德忠君

子爵　從二位

當家は清和天皇の皇孫源經基五代甲斐守義光の末葉にして、出羽守柳澤吉保の男松平式部少輔時睦の後たり、後ち越後の國蒲原郡三日市に移封され、夫より五世を經て從五位不彈正少弼泰孝氏に至る

君は其の長男にして、安政元年七月を以て生れ幼名を彰太郎と稱す戊辰の役官軍に與して偉功あり、明治十七年特旨を以て華族に列し子爵を授けらる。

現に東京市外中澁谷四二七番地に住す電話靑山六四〇九番

山本粂吉君

辯護士

現時の法曹界に於ける錚々有爲の士吾が山本粂吉君は茨城縣の輩出せる人物にして、明治二十六年七月二十五日を以て同縣新治郡小幡村に於て生誕す。嚴父を瀨尾由三郎氏と爲し其の次子に當れるが夙に廢絕山本家を再興せり。

君は幼にして學を好み鄕校を出づるや茨城縣師範學校、臺灣總督府國語學校等を經て大正七年明治大學法律科に入り翌八年司法官試驗に登第せり。

斯くて直ちに辯護士となり法曹事務に携りしが、同九年十一月臺灣銀行及び林本源家の財政整理の要務を帶びて渡臺し同十三年十一月之を完了して歸京す、然して現地に辯護士を開業以て今日に至る

君は現時の業務に處し居常「必ずや爭ひ無からしめざる可からず」を咸言と爲し法律的措は一に建設に際し之を須ひ破壞的の場合に當面しての法行爲は末葉の些事に屬すとの識見を抱き、又「是なりと信せざれば斷じて爲さず」を以て處世上の要諦なりと信念す。

君は鄕黨に盡すところ尠らず、現に茨城縣下に於て會員一萬を擁する政治的結社の靑年會を指導し、近き將來に政界に進出、以て一大飛躍の機運を釀成しつゝあり。

趣味として運動を好む、夫人花子は故山本政行氏の女にして臺灣總督府高等女學校の出身たり、其の間に茂行君及び須磨子あり、現に東京市芝區愛宕町三ノ三番地に住す。電話芝一七三七番

安井誠一郎君

正六位　法學士
東京市社會局長

君は岡山縣の人安井武二氏の長男にして、明治二十四年三月十一日を以て生る

夙に第一高等學校を經て大正六年東京帝國大學法科大學獨法科を卒業するや直ちに文官高等試驗に登第、後ち職を官途に奉じ、爾來、富山縣書記官、同警察部長、兵庫縣書記官、同警察部長等に歷任す。

斯くて昭和三年二月退官せしも同年七月復職再び富山縣書記官、同警察部長に補せられ、昭和四年七月東京市社會局長に拔擢せられ以て現在に及ぶ。

夫人滋子東京府立第三高等女學校の出身、其の間に昭子、和子あり、現に東京府下松澤村五二四番地に住す。

山代泰君

正八位　陸軍三等主計
日本產業(株)會計課長

君は東京府士族にして、舊細川藩士山代安質氏の二男、熊本市に生誕す。

夙に鹿兒島縣立第一中學校を經て明治四十三年東京商科大學の前身たる東京高等商業學校を優秀の成績を以て卒業するや直ちに一年志願兵として熊本聯隊に入營、大正六年實業界に投じ、大阪に本社を有する日本產業株式會社に入社し、後ち日立鑛山株式會社に轉じ、同社京城支

店を經て本社に歸復、而して同本社が東京に移轉するや引き續き東京に移り、累進して現時同社會計課長として知らる。

趣味に俳句あり、大阪在勤中は能く青木月斗俳人に師事して斯道に專念し、常に大阪俳句雜誌「同人」に寄稿して令名を謳はれし程なりといふ、如水會々員たり

夫人ともよ子は鹿兒島縣立第一高女の出身、其の間に洋君、尙君及びはるよ子きよ子、やす子等あり、現に東京市外南品川八四〇番地に住す。電話高輪五九九一番

山脇房子女史

山脇高等女學校長

女史は舊雲州松江藩士小倉三省氏の令妹にして、慶應三年六月を以て生れ、明治二十七年嫁して山脇家に入る。

夙に松江女子師範學校を卒業し、爾來夫君玄氏を扶けて家政を處理し、後ち山脇高等女學校を興して女子教育の改善發達に貢献すること甚大、今や我國女子教育界の權威として令名斯界に嘖々たり。

現に東京市赤坂區檜町三番地に住す。電話青山五三〇七番

矢吹貞夫君

メトロ電球(株)取締役支配人

君は岡山縣の人矢吹金一郎氏の長男にして、明治十五年八月三十一日を以て同縣津山市に生誕す。

夙に鄕校を卒ふるや笈を東都に負ひ、東京工業大學の前身たる東京高等工業學校に學び、後ち實業界に投じ、信濃電氣株式會社に入社し、累進して同社長野支店長に擧げらる。

斯くて後ち獨力東京電球製作所を創立し、經營に從事せしも同所が帝國聯合電球株式會社と併合せらるゝやメトロ電球株式會社に入り、現に同社取締役支配人として令名あり、惟ふに我がメトロ電球株式會社が今日の盛況を見るに至りしは同君の奮鬪努力に俟つべきもの多々あり

趣味に旅行を愛好し、夫人彰子は津山高女出身の麗人、其の間に信夫君、孝夫君、忠夫君、誠君あり、現に東京市外千駄ヶ谷町四九六番地に住す。電話青山四八六〇番

矢田績君

東邦電力(株)監査役

君は和歌山縣の人谷井保氏の令弟にして、萬延元年八月を以て生る。

夙に實業界に投じ、現に前記の外三井銀行監査役にして且つ名古屋公衆圖書館理事長たり。

現に名古屋市東區擂木町二ノ五番地に住す。電話東一〇八一番

松岡俊三君

都新聞社副社長
衆議院議員

君は山形縣の人村川伊平君の長男にして明治十三年七月を以つて生れ後栃木縣の人松岡白俊君の養弟となり大正二年七月分れて一家を創立す。夙に鄕校を卒ふるや大志を抱いて上京し宗教大學に入りて同校を卒業し更に日本法律學校に學ぶ

曾つて衆議院議員に擧げられ功に依り勳七等に叙せられ、現に前記の諸會社にある傍ら關東化粧煉瓦株式會社取締役たり。

夫人クニ子は村山利助君の長女にして其の間に二女ありてトシ子、貞子と呼ぶ現に東京市外千駄ヶ谷原宿一七〇番地に住し電話青山二二八〇番なり。

松浦厚君

伯爵　從二位勳三等
貴族院議員

當家は嵯峨天皇の皇子左大臣源融の裔なり八世の孫久肥前國松浦郡宇部御厨檢校となりて西下し松浦氏の祖となる、十四世贈從三位答蒙古の襲來に防戰して功あり其子贈從三位定勅を奉じて北條英時を討し功を以つて肥前守に任ぜられ、足利尊氏の叛するに及び尊良親王を奉じ轉戰殊功を樹て錦の直垂を賜ひ當時公の武勇を稱して鎭西鬼八郎と稱す。

然して二十五世の祖隆信葡西兩國の商航を平戸に引きて海外貿易を創始す、其の子贈從三位鎭信征韓の役に先鋒となり殊功を建て且つ蘭英貿易を開始す。爾後世々肥前國平戸及壹岐國を領し隔代肥前守壹岐守と稱し平戸城に居城し六萬一千七百石を食み三十七世先代詮君に至る。

夙に勤王の志厚く戊辰前後專ら忠勤を抽んで平戸藩知事に任じ明治十七年伯爵を授けられ後靡香間祗候、常宮養育掛、御歌所參候、貴族院議員等に擧げられ頗る茶道に精通す。

君は其の長男にして元治元年六月を以つて生れ明治四十年襲爵仰せ付けらる。明治十七年英國に渡り劒橋大學に學び國際公法を修め獨、佛、伊各國を歷遊して明治二十六年歸朝す、襲爵以來貴族院議員に選ばれ現に其の職に在り、夙に舊藩內の殖產事業に盡し功績尠からず又漢詩を好み鷺洲と號し常に文武兩道故實の頽廢を歎じ現に索行會々長、弓馬會々長、華族乘馬會幹事となり斯界に盡瘁しつゝあり。

夫人を益子と呼び侯爵淺野長勳君の養女たり、現に東京市外巢鴨一五三五番地に住し電話小石川一八〇六番なり。

松井三治郎君

美濃電化株式會社取締役
岐阜貯蓄銀行監査役

君は岐阜縣の人松井三治郎君の長男にして慶應二年四月を以つて生る。夙に實業界に身を投じ現に前記諸職にある外板取川電氣、長良輕便鐵道、尾北電氣各株式會社の重役たり。

夫人さわ子は愛知縣の人三浦彥九郎君

の長女にして君との間に二男ありて甚三郎君、寅治郎君と稱す、現に岐阜市玉井町に住す。

松平直德君

子爵　正三位勳三等
明石銀行取締役

當家は德川家康の男秀家の五男直良君の後なりそれより七世慶憲播州赤穗城主として先代直致君に至る。君其の後を承く君實は先々代慶憲君の二男に當り明治二年七月を以つて生れ後先代直致君の養嗣子となり、明治十七年七月子爵を授與せられ同三十六年以來選ばれて貴族院議員たること數回に及び曩に日獨事件の功に依り勳三等に叙せらる。

夫人精子は子爵松平乘長君の養妹にして君との間に三男ありて穎次郎君、敬次郎君、禮次郎君と呼ぶ。現時東京市外目黑町上目黑五四〇番地に住し電話青山一一一一番なり。

松前定五郎君

森松商會合資會社長
松前工務店代表者

帝都復興途上にある土木建築界の重鎮として其聲名東西に嘖々たる、我が松前工務店の經營者松前定五郎君は秋田縣の人松前久太郎君の長男にして、明治八年八月六日を以つて秋田縣は北秋田郡に孤々の聲を擧ぐ。夙に大志を抱き鄕校を卒ふるや年齒僅かに十七歳にして單身上京し、直ちに東都實業界に身を投じ幾多の經驗を積み技術の實際に精通するや、敢然起つて獨力土木建築一般請負業を開設して同業界に活躍するに至る。

爾來風雨幾春秋君が渾身の努力と滿全の商策とを傾注して奮鬪是れ努めしかば漸時同業界の信任と社會の信望と賞讃とを博し業勢年と共に加はり、殊に最近事業の大擴張を期して高莊なる鐵筋コンクリート建の事務所を新築し、今や東都斯界の第一人者と目せられ其の請負ふところは凡て東都一流建築物のみにして長こくも赤坂御所の建築煉瓦工事を初めとして丸の内三菱諸會社、警視廳、大藏省專賣局廳舍、日本銀行北分館、横濱正金銀行東京支店、帝國劇場、内務省印刷局其他諸會社銀行商店諸名家等の各煉瓦工事を一手に引き請けて、何れも君が優秀の技術と誠實なる奮鬪とに依りて完璧を期し、今や復興の東都に於ける君の前途や益々多望且つ多端なりと言ふべく、君宜しく自重自愛以つて將來の大成を期して可なり。

夫人ナカ子は東京府の人宮嶋鐵太郎君の長女にして淑德の譽れ高く、其の間に勝太郎君、竹次郎君、久四郎君及びサク子等ありて家庭團欒たり。現に東京市神田區金澤町二番地に住し電話下谷六五四三番なり。

松浦積君

横濱取引所常務理事

君は島根縣の人松浦登三君の三男にして明治六年十二月二十七日を以つて生る

明治三十五年安田銀行の前身たる第三銀行に入り漸次累進して同行横濱支店次長大阪支店次長等を經て大正八年十二月横濱取引所支配人に轉じ、大正十一年十二月其の常務理事に昇任し、同十二年十二月再選せられて現在に至る。日本聖公會々員にして登山に趣味深しといふ。

夫人里與子は渡邊與十郎君の長女にして君との間に長男崇君、長女琴子、二女百合子等あり、現に横濱市本牧町字原一一五三番地に住し電話一八一〇番なり。

萬田策郎君

正七位　勳六等
實業家

君は大分縣の人萬田富作君の四男にして明治十年十月五日を以つて生る。明治三十三年東京高等商船學校を卒業するや直ちに實業界に身を投じ、日本郵船株式會社に入社して同社所有船の各船長として海上生活を送ること十余年、後三菱倉庫株式會社に轉じ同社神戸支店船舶部主任、神戸支店副長、門司倉庫支配人等を歷任す。

然して大正九年共同運輸株式會社專務取締役に擧げられ傍ら國際運送株式會社自適として園碁、觀劇、讀書等の趣味等に費やすといふ。

夫人文香子は大分縣の人岩尾公英君の長女にして門司高等女學校を卒業し君との間に二男二女あり、現に東京府下大井町五五三八番地に住し電話大森一四八番たり。

萬年九平君

服部鑄造株式會社取締役

君は兵庫縣士族三木儀三郎君の四男にして明治十二年三月を以つて生れ、同十七年先代九平君の養嗣子となる。現に關西方面に於ける金物問屋として聲名ある外尙ほ服部鑄造株式會社監査役にして且つ大阪府多額納稅者として知らる。

夫人をタイ子と呼び大阪府の人乾又吉君の二女にして其の間に滿壽雄君、利雄君、忠夫君、壽榮雄君、正雄君及び津多子、まさ榮子等あり、現に大阪市東區博勞町四ノ四五番地に住し電話船場一一〇番たり。

眞崎甚三郎君

正五位勳三等功四級　陸軍中將
陸軍士官學校長

君は佐賀縣の人先代要七君の長男にして明治九年十一月を以つて生る。夙に軍人たらんとの大志を抱き明治三十年陸軍士官學校を卒業し、同三十一年陸軍歩兵少尉に任じ、爾來累進して昭和二年三月陸軍中將に陞進す。此間陸軍省軍務局課員、歩兵第四十二聯隊大隊長、久留米俘虜收容所長、教育總監部第二課長、陸軍省軍事課長、近衛歩兵第一聯隊長、歩兵第一旅團長、陸軍士官學校本科長、陸軍士官學校幹事兼教授部長等を歷補し、大正十五年三月陸軍士官學校長に任ぜられ今日に至る。

夫人信子代子は佐賀縣士族中島仁之助君の長女にして其の間に秀樹君、芳男君幸男君及び正代子、美代子等あり、現に東京市四谷區東信濃町一六番地に住し電話四谷二八〇九番なり。

升田定次君

升田商會代表社員
東亞無煙燃料株式會社監査役

君は栃木縣の人升田要吉君の三男にして明治十一年四月を以つて生る。夙に實業界に身を投じ、鹿沼屋と稱し薪炭問屋を營み斯業界に於ける有數なるものにて尚ほ升田商會代表社員にして且つ東亞無煙燃料株式會社監査役として知らる。

夫人はる子は東京府の人原伊太郎君の長女にして君との間に好司君、堅司君、敬司君、俊司君及びナヲ子、靜子、喜久子、貞子、ヒサ子等あり。現に東京市芝區高輪南町二六番地に住し電話高輪九九八番なり。

升作平君

村田銀行取締役

君は宮城縣の人大沼新之助君の二男にして嘉永五年二月を以つて生れ、後先代升作平君の養嗣子となる。夙に實業界に身を投じ祖父の遺業を繼ぎ傍ら村田銀行取締役にして地方財界に重きをなす。

夫人ひさ子は養父作平君の長女にして君との間に敏之助君、禎五郎君、鐵藏君貞作君及びとく子、なか子等あり、現に宮城縣柴田郡村田に住す。

前田利定君

子爵從三位勳二等
貴族院議員

當家は菅公の裔にして中興の祖前田利家の五男利孝君の後なり、利孝德川に仕へて功あり七日市藩主に封ぜられ九世を經て利昭君に至り明治十七年華族に列し子爵を授けらる。

君は即ち利昭君の長男にして明治七年十二月十日を以つて生れ明治二十九年一月襲爵仰せ付けらる。夙に學習院に學び同院を經て明治三十五年東京帝國大學法科大學を卒業するや直ちに官界に投じ司法官試補に任ぜらる。先是明治二十六年十二月一年志願兵として近衛歩兵第二聯隊に入營し同二十八年八月陸軍歩兵少尉に任じ彼の日露の役には第四聯隊副官として出征し功により中尉に陞進せり。

然して明治三十七年選ばれて貴族院議員となり、爾來當選すること數回に及び研究會の牛耳を握り加藤友三郎内閣成るや遞信大臣として臺閣に列し、更に清浦内閣の成立を見るや其の農商務大臣たりしも大正十三年六月官を辭し現に貴族院議員たる外安田銀行監査役たり、趣味として文學、音樂、旅行等あり。

夫人清子は伯爵酒井忠正君の叔母君にして華族女學校を卒業し其の間に利民君利儀君、島子等あり。現に東京府下西大久保町四二一番地に住し電話四谷六番なり。

升本喜龍君

大日本製糸興業株式會社取締役
牛込中央銀行取締役

君は東京府の人升本喜兵衛君の令弟にして明治十八年三月を以つて生れ後ち祖父喜樂の養嗣子となる。夙に東京帝國大學法科大學に學び後ち實業界に身を投じ現に前記の諸職にある外日本酒類問屋株式會社監査役として知らる。

夫人てい子は東京府の人三谷貞次郎君の令姉にして君との間に喜德郎君及び富貴子、萬津子等あり。現に東京市牛込區北山吹町四二番地に住し電話牛込二一二番たり。

松村義一君

正五位勳三等
貴族院議員

君は山口縣の人松村冷藏君の長男にして、明治十六年九月七日を以つて山口縣都濃郡下松町に生る。夙に山口高等學校を經て東京帝國大學に進み、明治四十二年同法科大學英法科を卒業し翌年文官高等試驗に應ずるや、首席を以つて登第す

然して職を官途に奉じ、爾來、神奈川縣屬、佐賀縣事務官、同縣理事官、鳥取縣理事官、石川、廣島各縣警察部長、警察講習所教授兼内務參事官、和歌山、山形各縣内務部長、大分縣知事等を歷任し大正十四年九月内務省警保局長兼社會局參與に任ぜられ、傍ら都市計劃中央委員たりしが昭和二年四月退官と共に貴族院議員に勅選せられ以つて現在に及ぶ。

夫人好子は子爵勘解由小路資承君の二女にして學習院女學部を卒業す、因に二男資淳君は子爵勘解由小路家の養嗣子となる。東京府豐多摩郡中野町桃園三三二二番地に現住し電話中野四〇三番たり。

政岡德兵衛君

政岡土地合名會社代表社員
政岡倉庫株式會社常務取締役

君は大阪府の人山岸駒三郎君の三男にして明治十六年六月を以つて生れ先代德兵衛君の養嗣子となる。現に前記の諸職にある傍ら淡路鐵道株式會社取締役にして且つ大阪府多額納稅者たり。

夫人嘉代子は兵庫縣の人政岡嘉三郎君の長女にして君との間に恒雄君あり、現に大阪市西區土佐堀通三ノ一六番地に住し電話土佐堀五五番なり。

眞木平一郎君

男爵　正四位

當家は先代眞木長義君より家名を揚ぐ長義君は舊佐賀藩士にして戊辰の役に軍艦電流號の艦長となり、爾來累進して海軍中將に陞り明治二十年特に華族に列し男爵を授けられ同二十二年宮中顧問官に任じ伏見、山階各宮別當仰せ付けられ正二位勳一等に叙せらる。

君は其長男にして明治二年六月を以つて生れ明治十九年明治學院高等科を卒業するや渡米してボストン府マサチユセツツ、インスタチチユート、オブ、テクノロジーに入り專ら電氣工學を修め、エスピ

ーの學位を得て歸朝するや、本邦最初の電氣鐵道たる京都電氣鐵道株式會社技師に擧げられ爾來豐洲鐵道、東京電車鐵道京城市内電氣鐵道各株式會社の主任技師を歴補し、現に米人コールブラン氏と協同にて鑛山を經營し又朝鮮鑛山株式會社の理事たり。

夫人知惠子は侯爵大隈信常君の養妹にして其間に一男一女あり、長男を長俊君と呼び長女靜子は法學士清水長輝君に嫁す、現に東京市芝區白金三光町四八八番地に住し電話高輪三四七八番なり。

松井文太郎君

福井織物株式會社長

君は福井縣の人松井文吉君の長男にして明治元年八月を以つて生る。夙に福井縣師範學校を卒業するや直ちに實業界に志し現に前記の要職にある外大東貿易、白山水力、松井撚糸染工各株式會社重役として知られ、曾つて市會議員、縣會議員、商業會議所議員等に擧げられ、又大正六年には多數縣民の推すところとなり衆議院議員に當選し現に福井縣商業會議所副會頭として名あり。

夫人つね子は福井縣の人森甚助君の二女にして君との間に三男ありて穣君、喬君、敦君等なり福井市寶永町に住す。

松本忠雄君

正五位　東京市助役
衆議院議員

我が國憲政の巨人として永く立憲政友史上に光彩を放つ故内閣總理大臣伯爵加藤高明君の親任を恭うし、其の秘書官として令名高かりし新進政治家松本忠雄君は長野縣の人松本八重作君の長男にして明治二十年七月二日を以つて信州山間上水内郡に孤々の聲を擧ぐ。

夙に鄕校を卒ふるや直ちに東亞同文書院に入學し明治四十二年優秀の成績を以つて同院を卒業するや、やまと新聞の政治記者として君が健筆を縱横に揮ひしが間もなく故加藤首相の寵愛を受けて一足飛びに同秘書となり爾來政界の人として活躍するに至る。

然して大正十三年の總選擧に鄕里信州の山奥より出陣の旗幟を翻へし、馬を陣頭に進むるや、彼の政友會の大立物小坂順造君を一蹴して見事當選の榮を擔ひ、加藤内閣の成立を見るや同秘書官として令名を馳せ、若槻内閣の出現と共に之を辭し大正十五年七月東京市助役に推擧せられて今日に及ぶ。

今や中央政界の少壯派として日比谷原頭に活躍するのみならず、一方東京市制に參與して君が優れたる才幹を發揮するに至る、其の得意や思ふべく宜しく自重以つて將來の大成を期して可ならん哉、現に東京市麹町區下六番町一六番地に住し電話四谷三三〇九番たり。

松尾小三郎君

神戸商事株式會社監査役

君は大分縣の人松尾維尾君の令弟にして明治六年四月を以つて生る。明治三十四年東京商船學校を卒業し、爾來關東都督府海務局長、日本郵船株式會社船長、南滿洲鐵道株式會社々員、南滿洲汽船株式會社重役、日本海事組合常務理事、海國公論主幹等を經て現に前記の要職にある傍ら八重山産業株式會社取締役にして多年の功に依り正七位勳六等に叙せらる

夫人なつ子は竹崎止敬君の二女にして其の間に一女あり千代子と稱す。現に兵庫縣武庫郡御影京町に住し電話御影四一四番なり。

松江春次君

南洋興發株式會社專務取締役
臺灣石材株式會社取締役

君は福島縣士族松江久平君の二男にして明治九年一月十日を以つて同縣若松市千石町に生る。夙に鄕里の今津中學校を卒ふるや笈を負ふて上京し東京高等工業學校に學び、優秀の成績を以つて同校を卒業し更に米國に遊びルイジアナ州立大學に學び、明治三十六年マスター、オブサイエンスの學位を得て卒業し尙ほ實地の研鑽を積みて明治四十年歸朝す。

然して聘に應じて大日本製糖株式會社に入り同社大阪工場長に就任し、君が多年の蘊蓄を傾注し本邦に於ける角砂糖の製造を創始して外國品の輸入防止に務めたりしも、明治四十三年斗六製糖株式會社の設立に際し君推されて同社專務取締役に就任し後同社監査役たりしが、大正四年辭して新高製糖株式會社專務取締役に就任し同社の發展に盡瘁すること九ケ年令名頗る擧る。

大正十一年同社を辭して南洋興發株式會社を創立し、其の專務取締役として縱横の才腕を振ひ今や南洋方面に於ける事業界の一異彩として知らる。君は尙ほ臺灣石材、臺灣炭業、日本原毛各株式會社の重役たり、先是明治三十六年農商務省實業練習生に擧げられ歐米に留學すること四ケ年、君又讀書に趣味を有し閑日を見てはこれに耽るを常となす、又以つて其の人と爲りを知るべきなり。

夫人ふみ子は千葉縣士族手島精一君の二女にして東京府立第二高等女學校を卒業し君との間に一郎君、宏君、永治君及びとき子、ゆり子等あり、現に東京市本鄕區富士前町一一一番地に住し電話小石川一〇一八番なり。

桝谷音三松君

下關瓦斯株式會社長
下關倉庫株式會社專務取締役

君は山口縣士族福原彦七君の三男にして故侯爵井上馨君の甥君に當り、明治五年八月を以つて生れ同十九年先代平三郎君の養嗣子となる。夙に下關商業學校を卒業するや直ちに實業界に入り、現に下關瓦斯、下關倉庫、櫻山土地建物各株式會社々長たる外長洲鐵道、山陽電氣軌道唐津製氷、日東製氷、中國製氷各株式會社の重役にして又下關商業會議所會頭に擧げられ地方財界の巨頭として知らる。

曩に下關商業會議所特別議員、同市會議員、山口縣會議員等に推され尙ほ山口

縣多額納稅者にして現に直接國稅三千四百三十余圓を納むといふ。

夫人をはな子と呼び君との間に一男三女ありて育三君、サダ子、好子、壽子と呼ぶ、現に下關市關後地町一九〇七番地に住す。

益田信世君

小原紡織株式會社監査役
小原電氣株式會社監査役

君は男爵益田孝君の長男にして明治十八年八月を以つて生る。夙に外國に航しハーバート大學に學び多少の學識を積みて目出度く歸朝し三井物産株式會社に入社したりしも後辭して前記の諸職及び豐田式織機、市村座各株式會社の重役として各會社の配當によりて生を悠々たり。

夫人久美子は男爵細川興增君の長女にして君との間に多嘉子あり、現に神奈川縣小田原町四ノ六七〇番地に住す。

摩壽意善太郎君

辯護士　特許辯理士

君は福井縣の人摩壽意萬助君の二男にして明治二十一年五月二十一日を以つて生る。夙に鄕校を卒ふるや笈を負ふて東上し中央大學に入りて法律學を學び更に英人ジョン、ガスビー氏に就き英法を專攻し、且つ東京外國語學校に入りて英佛語を修め二十歳にして既に裁判所書記試驗に合格し、後辯護士特許辯理士試驗に登第し、後辯護士芹澤孝太郎氏に師事すること十有五年、此の間海外發展指導會南米研究會等の講師たりしことあり。

然して大正九年以來英國辯護士ジョンガスビー氏を援けて其の法律事務主任となり、大正十年獨力法律事務所を開設して廣く海外諸國辯理士の依囑による外國特許事務に從事し、大正十二年前記ジョン、ガスビー氏の廢業するに際し其の後を繼承して東京及横濱に事務所を設け、外國商館の依囑になる民事商事其他一般法律特許事務を初めとして內地在住の諸外國會社を顧客となし、殊に彼の代表的英國會社サミュール商會及び米國會社フレザー會社等に信任厚く、今や我が法曹界に於ける君の聲價は遠く海外まで響き渡り其の前途益々多望なるものあり。

現に日本辯護士協會評議員、日本辯理士協會評議員及び辯護士會常議員たる外東京辯護士會員、大正辯護士會幹事、國際辯護士會員たり。曾つて少年時代に孝子として表彰せられ、畏くも小松宮殿下御眞筆の軸一卷を賜ふ、趣味としては川柳、俳句、謠曲、園藝等何れも堪能なるが如し。

夫人艶子は廣島縣の人山田豐君の令妹にして君との間に善郎君、鐵郎君等あり現に東京市麻布區櫻田町二八番地に住す

的場覺藏君

茨城採炭株式會社常務取締役

君は東京府の人的場三造君の二男にして明治元年二月を以つて生る。曩に明治七年現印刷局が紙幣寮と稱する頃同寮に奉職し、傍ら伊太利人エトアルトキョソネ氏より整版術の敎習を受け同四十年職を辭して實業界に入り爾來北海道興業、茨城無煙炭販賣各株式會社取締役、東京瓦斯コークス株式會社常務取締役たり。圍碁、盆栽、謠曲等趣味廣く且つ日本棋院會員たり。

夫人を隆子と呼び東京府士族山本豊君の令姉たり現に東京府豊多摩郡澁谷町上澁谷一一〇番地に住し電話青山二一八八番なり。

丸山五郎君

埼玉縣醫師會理事
衆議院議員

君は埼玉縣士族横田半十郎君の二男にして明治五年五月十日を以つて生れ後先代正吉君の養嗣子となる。明治二十六年慈惠院醫學專門學校を卒業するや直ちに東京病院に勤務せしが、明治二十九年獨力以つて開業し至誠至純社會の爲め盡瘁せしかば漸次信用を博し、今や當地方刀圭界有數なる名醫として斯界に重きをなし、現に埼玉縣醫師會理事、南埼玉郡醫師會長等の要職にあり。

然して大正十三年の總選擧に際し憲政會より公認候補者として逐鹿戰場に馬を乘り出し、奮戰大いに努めしかば遂に當選の榮冠を克ち得たり、君の得意や思ふ可く而も其の博學にして懸河の如き雄辯は相俟つて必ずや中央政壇に一輪の名花と謳はるゝ蓋し遠からざるべし、君宜しく自重以つて公私共に其の將來の大成を期して可なりである。

夫人菊子は埼玉縣士族寶生金五郎君の二女にして君との間に正君、正次君、敏夫君、武雄君、正惠君及び千代子等あり現に埼玉縣南埼玉郡岩槻二一九一番地に住し電話岩槻五番なり。

町田咲吉君

正四位勳三等　農學博士
東京帝國大學農學部長

君は鹿兒島縣士族町田實則君の長男にして明治二年十二月を以つて生る。明治二十五年東京帝國大學農科大學を卒業するや農事試驗場技師、韓國統監府勸業模範試驗場技師、同統監府技師等に歷任し曩に水產製造學研究の爲め獨米に留學せり。現に東京帝國大學農學部敎授を兼ねて同學部々長の要職にあり、大正三年農學博士の學位を授けらる。

夫人シゲ子は東京府士族橋口兼清君の令姉にして君との間に二男一女ありて實君、泰君、花子と呼ぶ。現に東京市外中野町字打越二〇八三番地に住す。

松山陽太郎君

醫學博士　正七位　松山病院長
東京慈惠院醫科大學敎授兼理事

帝都の西南芝區三田街頭に堂々たる病院を有し患者踵を接するの盛況を呈せる松山病院は松山陽太郎君を院長となす。君は今や實踐醫學家將又學究家を以つて我が刀圭界一方の雄者として名聲嘖々たるものあり。

君は東京の人先代松山陳庵君の長男にして明治六年四月を以つて生る。明治二十八年東京慈惠院醫學專門學校を卒業するや直ちに內務省醫籍に登錄、同二十九年獨逸に留學し研鑽琢磨優秀の成績を以つてストラスブルヒ大學を卒業しドクトル、オブ、メヂチーネの學位を授與せられ更に斯界の權威者に就いて實地に研究を積みて歸朝し直ちに松山病院を開設して現在に至る。

然して明治三十七年東京慈惠院醫學專門學校教授兼囑託を拜命し後醫術開業試驗委員仰せ付けられ明治四十四年特旨を以つて正七位に叙せらる。尙ほ大正七年東京慈惠院醫學專門學校理事となり、更に同十一年同校教授に任せられ大正十二年六月醫學博士の學位を授與せらる。

趣味極めて多種多樣にして繪畫、音樂圍碁等は其の最もなるものなり。夫人をハツ子と呼び熊本縣の人辻太君の令姉たり、現に東京市芝區三田三丁目一〇番地に住し電話高輪二〇三六番なり。

松井萬緣君

加島銀行監査役

君は群馬縣の人松井貫一君の長男にして明治十三年四月を以つて生る。夙に鄕校を卒ふるや笈を負ふて上京し、明治三十八年東京帝國大學法科大學を卒業するや直ちに實業界に身を投じ、曾つて第一銀行廣島支店支配人たりしが現時は前記の要職にある外弘益殖產株式會社常務取締役にして且つ大同生命保險、大阪汽船信託、日本化學製麻各株式會社取締役たり。

夫人タツ子は大阪府の人廣岡惠三君の養妹にして其の間に一男三女ありて長男健次郎君、長女萬壽美子、二女富美子、三女和子等なり。現に大阪市東成郡天王寺村六一四三番地に住す。

松浦鎭次郎君

正四位勳二等
文部次官

君は愛媛縣士族松浦素君の二男にして明治五年一月を以つて生る。夙に鄕校を卒ふるや青雲の志を抱き笈を負ふて東上し、研鑽琢磨、明治三十一年東京帝國大學法科大學政治科を卒業して直ちに文官高等試驗に應ぜしかば首尾よく登第し、而して職を官界に奉じて東京府參事官兼文部大臣秘書官、文部書記官、文部參事官、文部省專門學務局長等を歷任し現に文部次官として令名嘖々たり。

夫人しま子は群馬縣の人山崎春雄君の令妹にして君との間に一男ありて晋君と稱す、現に東京市小石川區茗荷谷四九番地に住し電話小石川三一〇〇番たり。

增田義一君

衆議院議員
實業之日本社長

君は新潟縣の人增田清四郎君の二男にして明治二年十月を以つて生る。夙に鄕校を卒ふるや大志を抱いて東上し、明治二十六年早稻田大學の前身たる東京專門學校を卒業し後高田新聞、改進黨日報、讀賣新聞等各社記者たりしが後獨力實業之日本社を開設し、奮鬪大いに努めしかば遂に今日の大を見るに至れり。

曾つて歐米を漫遊し又衆議院議員に當選すること二回現に實業之日本社々長たる外日清生命保險、日清印刷、秀英舍、東京地下鐵道、馬來護謨公司、大陽製帆金澤紡績、ボルネオ護謨、富國徵兵保險各株式會社の重役にして大正十三年十月國有財產調查會委員を仰せ付けられ今や出版界、實業界、政治界各方面に於て君が令名嘖々たるものあり。

夫人浪江子は東京府士族岩橋鎭雄君の令妹にして君との間に長男義彥君、二男清三君、三男英男君等あり、現に東京市小石川區原町一二五番地に住し電話小石川六九番なり。

松本重威君

從三位勳一等　錦鶴間祇候
日本興業銀行副總裁

君は福島縣の人松本重威君の長男にして明治六年八月十二日を以つて生る。明治三十一年東京帝國大學法科大學を卒業し直ちに文官高等試驗に應ずるや首席を以つて登第し、而して職を官界に奉じて司稅官に任ぜられ次いで歐洲各國を歷遊して歸朝し爾來司稅官兼大藏書記官、大藏書記官兼專賣局部長、大藏省主稅局長等に歷任し後官を辭して野に下り、日本興業銀行副總裁の要職に就任して現在に及ぶ。

夫人とよ子は福島縣の人大越光隆君の令妹にして君との間にとし子あり、現に東京市小石川區怨籠町二一七番地に住し電話小石川五四一〇番なり。

松永安左衞門君

東邦電力株式會社副社長
田代川水電株式會社長
東京電力株式會社副社長

我が財界の巨頭松永安左衞門君は長崎縣の人松永安左衞門君の長男にして、明治八年十二月一日を以つて生る。明治三十一年慶應義塾高等科を卒業するや直ちに實業界に身を投じ、精勵大いに努め曾つて天草無煙炭礦株式會社々長を初めとして九州電燈鐵道株式會社常務取締役及び九州電化工業、大正電球、關門汽船、唐津築港、日本油脂工業、北海炭業、九州電氣製鋼、諏訪炭礦各株式會社取締役東邦瓦斯、八幡鑛滓商會、九州鐵道各株式會社監查役、九州化學工業合資會社無限責任社員等其他幾多事業會社に關係して各重役たりしことあり。

尙ほ曩に福岡市より推されて衆議院議員に當選し中央政界に活躍して令名を馳せ、又博多商業會議所會頭として地方財界に貢獻すること甚大、今や前記諸會社の社長若しくは副社長として活躍するのみならず、壹岐電燈、西部合同瓦斯各株式會社々長にして且つ岐阜電力、新潟瓦斯、九州耐火煉瓦、日本瓦斯、大同電力濃飛電力、福松商會各株式會社の重役にして我が財界に令名嘖々たり。

趣味又廣く就中書畫、骨董を愛好し乘

馬に長ずといふ。

夫人かづ子は大分縣の人竹岡吉太郎君の令妹にして大分縣立高等女學校の卒業たり、現に東京府下下落合三六七番地に住し電話牛込四五三番なり。

松井兵三郎君

從四位勳二等功一級
陸軍中將　第十六師團長

君は京都府の人松井鑰三郎君の長男にして明治七年六月を以つて生る。夙に軍籍に身を投じ明治三十年陸軍歩兵少尉に任ぜられ、累進して現に陸軍中將たり。

然して此の間參謀本部々員、教育總監部參謀、陸軍戸山學校教官、陸軍大學校教官兼陸軍砲工學校教官、歩兵第四十二聯隊長、第十四師團參謀長、歩兵第一旅團長、陸軍省軍務局航空課長、憲兵司令官等を歴任し、大正六年歐洲に出張を命ぜられ、昭和二年三月第十六師團長に補せられ現在に及べり。

夫人靜子は茨城縣の人平澤又一郎君の長女たり。

松本繁吉君

東京開成館常務取締役

君は栃木縣の出身にして明治十六年一月三日を以つて同縣は足利市に生る。夙に學業を卒ふるや直ちに實業界に身を投じ、出版界に名を成さんと志し爾來奮鬪大いに努め、今や中等教科書及び同參考書等の發行を以つて、全國各學校に普ぬく知れ亘る、株式會社東京開成館常務取締役として能く内外の社務を執掌し、斯界に於ける君の令名や蓋し嘖々たるものあり。

夫人を虎壽子と稱し君との間に春野子ゆきの子等あり、現に東京市小石川區小日向臺町一ノ二八番地に住す。

益田太郎君

臺灣製糖株式會社常務取締役

從五位益田太郎君は三井家の元老として當代實業界の巨頭と目さるゝ男爵益田孝君の長男にして、明治八年九月を以つて生る。夙に慶應義塾に學びしも後渡歐して劍橋なるウエスレーヤン高等中學、白國アントワープ商業大學に學び外遊九ケ年にして歸朝し製糖、肥料、火災保險等の諸事業會社に入りて天稟の才腦と蘊蓄せる識見とを傾注して之が經營に當れり。

現時は前記會社の社長たるのみならず大日本人造肥料、千代田火災保險、帝國劇場、益田農事、日本煉瓦製造、森永製菓各株式會社の重役として令名高し、又劇作に長じ太郎冠者の名斯界に高し。

夫人貞子は子爵板倉勝憲君の叔母君にして其の間に孝信君、義信君、智信君、貞信君及び信子、智惠子等あり、現に東京府荏原郡北品川宿三一二番地に住し電話高輪二五一番なり。

丸瀬寅雄君

從四位勳四等
東洋葉煙草株式會社取締役社長

君は青森縣士族丸瀬正果君の長男にして明治十年三月を以つて生る。明治三十七年東京帝國大學法科大學を卒業するや同年文官高等試驗に合格し、爾來煙草專賣局屬、同事務官、同參事、同監査課長等を歴任し昇進して其の總務課長となり且つ臨時議院建築局理事たりしが大正十三年十月之を辭し、現に東洋葉煙草株式會社々長の要職にあり、謠曲に趣味を有すといふ。

夫人よし子は青森縣士族山中千之助君の令妹にして弘前高等女學校を卒業し、君との間に長男雄一郎君、長女和子、二女淑子、三女文子等あり、現に東京市牛込區若宮町三二番地に住し電話牛込四八〇一番なり。

武君

東京製糖株式會社取締役
臺灣製腦株式會社取締役

君は舊長岡藩士槇小太郎君の長男にして文久元年七月を以つて生る。夙に長岡中學校を卒ふるや青雲の志を抱いて上京し、慶應義塾に入りて研鑽を積み優秀の成績を以つて同塾を卒業するや直ちに操觚界に志し、聘に應じて奥羽日々新聞社に入りて君が健筆を縱横に振展して地方開發に盡瘁すること甚大なりき。

然して後筆を捨てゝ實業界に走り、推されて東京米穀取引所理事の要職に就任し更に三井銀行に轉じ、明治四十一年聘せられて神奈川銀行に入り、同行常務取締役に就任して愈々君が天稟の才腕を振ひ、爾來各種銀行會社に關係して我が財界に貢献すること尠少ならず、現に前記の要職にありて令名高し。

夫人ちとせ子は宮城縣士族横山東光君の令妹にして君との間に智雄君、有恒君武彦君、弘君、文郎君及びみさを子、英子、京子等あり、因に長男智雄君は英國牛津大學の卒業にして現に慶應大學教授として知らる。現に東京市本郷區眞砂町三四番地に住し電話小石川一七四三番なり。

増田侃君

辯護士　特許辯理士
大日本炭礦株式會社監査役

君は佐賀縣の人増田高賴君の令弟にして明治十五年十月十七日を以つて生る。明治四十年東京帝國大學法科大學獨法科を卒業するや直ちに實業界に身を投じ、曾つて磐城鑛業、磯原炭礦、東京貿易各株式會社の重役たりしことあり。

現に前記會社監査役たる外大島炭礦株式會社の重役として知られ且つ傍ら法律事務所を開設して一般訴訟事務に從事して今日に及べり。東京市芝區二本榎町に現住し電話高輪二八〇三番なり。

益田秩吉君

益田合名會社長

我が書畫、骨董界の重鎭益田秩吉君は本名を竹次郎と稱し、東京府の人益田和平君の二男にして明治三年一月十四日を以つて生る。夙に實業界に身を投じ嚴父を援けて斯界に活躍し、斯業に對する天稟豐かなる君が鑑識力は早くも同業者は勿論一般社會に信望を博し、今や帝都同業界に於ける第一人者と目せられ、而して曩に書畫、骨董を目的とする益田合名會社の設立を見るや、君推されて同社代表社員に擧げられ現に其の要職にありて前途益々多望なるものあり。

夫人淑子は東京府の人喜多見保造君の二女にして淑德の聞え高く、其の間に一男ありて禎三君と呼ぶ、現に東京市神田區今川小路一ノ五番地に住し電話四谷三七六七番なり。

松浦勇君

山川電氣株式會社長
從七位勳六等功五級

君は福島縣松浦勇彌君の長男にして明治十三年九月を以つて生る。夙に實業界に志し現に前記の職にある外黑谷川水力電氣株式會社々長にして且つ山口酒造株式會社取締役たり、尙ほ同縣多額納稅者として直稅二千九百余圓を納む。

夫人こう子は福島縣の人佐川正弘君の令姉にして君との間に彌太郎君、政次郎君、年三郎君、勇四郎君及びみな子、とよ子、ふき子、しき子、ふみ子、てる子やす子等あり。福島縣石川郡山白石に現住す。

松方正熊君

帝國製糖株式會社長

君は侯爵松方正義君の八男にして明治十四年十二月を以つて生る。夙に東京帝國大學農科大學林學科を卒業し、後米國に留學す。現時北海道帝國製糖、帝國製糖各株式會社々長たる外尙ほ朝鮮紡績株式會社監査役、大村灣眞珠、東洋製糖、士乃護謨、臺灣電氣各株式會社取締役たり。

夫人ミヨ子は群馬縣の人新井領一郎君の長女にして其の間に眞君及び仲子、春子、種子等あり、現に東京市麻布區西町二二番地に住し電話高輪五五三五番なり

松崎半三郎君

森永製品販賣株式會社長
森永製菓株式會社專務取締役

東洋の製菓王として斯界に其の覇を唱ふる森永製菓株式會社の專務取締役松崎半三郎君は、埼玉縣の人にして明治七年を以つて生る。夙に立敎大學を卒業するや南洋及印度貿易に從事し、次いで横濱の外國貿易商會に在勤中偶々森永太一郎君と意志相通じ爾來親交を結び遂に相提携して事業を遂行するに至り、明治四十三年其の事業を株式組織に變更するや推されて同社專務取締役に就任し今日に及ぶ。

其の間屢々歐米各國を巡遊視察して具さに製造販賣に關する研究を積みて歸朝し今や森永製菓株式會社の名實東洋一を以つて稱せられ、遠く支那、印度、南洋比律賓方面に支店及び工場を新設し歐米品の驅逐、日本商品の販路擴張等に全力を傾注し同社が世界市場に於て歐米の夫と覇を競ふに至りしは一つに君の力與つて大なるものあり。

君は現に前記の要職にある外森永相互保證、南洋貿易信用、南洋商會、小島印刷各株式會社の重役にして且つ社團法人南洋貿易同盟會常務理事、同大日本製乳協會理事長等の要職にありて令名遠く海外に迄謳はるるに至れり。現に東京市麻布區本村町二五番地に住し電話高輪七四六六番なり。

松田源治君

正五位勳三等　拓務大臣

君は大分縣の人松田錄兵衞君の二男にして明治八年十月を以つて生る。夙に日本大學を卒業するや直ちに文官高等試驗並に判檢事試驗に應じて首尾よく登第し司法官試補を命ぜられ後官を辭して、辯護士を開業せり。

然して大分縣郡部より選ばれて衆議院議員たること前後六回に及び前衆議院議長にして政友本黨に屬し同總務たり。又曩に內務省勅任參事官に擧げられしことあり。

夫人ひさ子は靜岡縣の人高瀨くに子の養子にして君との間に長男誠一君、二男忠雄君、三男正雄君及び榮子等あり。現に東京市麴町區五番町に住し電話四谷二三一一番なり。

益谷太助君

宇出津銀行頭取

君は石川縣の人益谷平作君の長男にして明治十年五月を以つて生る。早くより實業界に身を投じ現に宇出津銀行頭取たる外能州電氣株式會社取締役にして且つ石川縣多額納稅者たり。

夫人をてる子と呼び石川縣の人久田宗次郎君の二女たり、現に石川縣鳳至郡宇出津に住す。

松尾吉士君

横濱正金銀行常任監査役

君は長崎縣士族伊藤七郎君の二男にして萬延元年五月二十一日を以つて生れ先代サウ子の養子となる。夙に慶應義塾に學び後三菱商業學校に轉じ同十二年同校を卒業するや直ちに横濱正金銀行に入りて本店詰となりしが、同十八年紐育支店詰に轉じ同二十四年世界各支店檢査役として頭取と共に巡視す。其後廿七年孟買支店長に昇進し再び各國の經濟事情調査の爲め世界漫遊の途に上れり。

明治卅八年以來大阪支店長、東京支店長、本店檢査課長、常任監査役等を歷任して現在に至り、傍ら日本酸素株式會社監査役にして我が財界の巨星を以つて令名高し。

夫人アキ子は神奈川縣の人望月平吉君の令妹にして君との間に一男一女ありて長男一士君、長女初子と呼ぶ、現に東京市赤坂區青山南町六ノ七九番地に住し電話青山四七七番なり。

槇　哲君

東京製糖株式會社長
東北砂鐵株式會社長

君は舊長岡藩士槇小太郎君の二男にして實業家槇武君の令弟に當り、慶應二年十一月を以つて生る。明治二十三年慶應義塾大學を卒業するや直ちに實業界に身を投じ、爾來活躍大いに努め今や前記諸會社の社長たるのみならず塩水港製糖、花蓮港木材各株式會社々長たる外臺灣製腦、臺灣倉庫、酒井商會、南昌洋行、南滿洲製糖、打狗整地各株式會社重役にして、令兄武君と共に我が財界の重鎮として令名高し。

夫人りう子は新潟縣の人關齋君の長女にして現に東京市牛込區市ヶ谷山伏町一九番地に住し電話牛込五六二六番たり。

增田善兵衛君

東洋紡績株式會社監査役
阿波紡績株式會社監査役

君は滋賀縣の人增田善兵衛君の長男にして明治二年六月を以つて生れ前名善之助を改稱す。現に呉服商を營むを以つて當地に知られ、且つ傍ら前記會社の重役にして滋賀縣多額納稅者として直稅七千七百五十余圓を納め、當地方有數の資產家たり。

夫人ひで子は滋賀縣の人西村重郎兵衛君の義姉にして其の間に純治郎君、達治郎君及びりさ子、いと子、たね子等あり京都市下京區佛光寺通りに現住し電話六六番なり。

前田一樓君

福壽火災保險會社取締役
兼同社東京支店長

君は滋賀縣の人前田友贄君の長男にして明治九年十一月廿七日を以つて生る。夙に鄕校を卒ふるや青雲の志を抱いて東上し直ちに實業界に身を投じ、曩に日本火災保險株式會社庶務課長たりしが明治四十三年三月福壽火災保險株式會社創立せらるゝや入りて同社庶務部長に就任し同社の發展に盡瘁せしかば大正十三年一月遂に擧げられて同社取締役となり今や君が敏腕は我が保險界に謳はれ前途益々多望なるものあり。閑あれば則ち謠曲、圍碁等の趣味に沈溺するを常となす。

夫人溫子は滋賀縣士族小泉須二郎君の長女にして滋賀縣立高等女學校を卒業し君との間に長男一雄君、二男重男君、三男弘三君、長女靜江子、二女秀子、三女千代子等あり、現に東京府豐多摩郡西大久保五一五番地に住し電話四谷一六二四番なり。

松井喜三郎君

新潟高等學校教授

君は東京府の人松井半造君の長男にして明治三年十月を以つて生る。夙に身を軍籍に置き海軍兵學校普通學教官、海軍機關學校教官等に歷任し正四位勳三等高等官三等に叙せられ現に新潟高等學校教授にして曾つて歐米に出張せしことあり

夫人總子は陸軍少將柴田正孝君の長女にして君との間に三男一女ありて孝次君清三君、正四郎君及び春野子と呼ぶ、現に新潟市新潟高等學校官舍に住す。

松下勝次郎君

實業家
木材問屋(遠勝)經營者

復興建築界に貢献して令名高き我が遠勝經營者松下勝次郎君は靜岡縣の人松下嘉藏君の二男にして、明治二十三年四月七日を以つて同縣磐田郡掛塚町に生る。夙に鄕校を卒ふるや大志を抱いて東上し身を實業界に投じ、遠洋材木店に勤め勤續實に十有八年、常に献身的努力を提げて忠勤精勵せしかば、君の信望内外に厚く特に深川區木場の材木問屋方面より君の將來を囑望すること甚大なりき。

偶々大正七年獨立の機運熟するや愈々敢然として起つて木材商を經營せしかば日頃君を知る有力なる深川木材問屋の數軒は無證にて商品を提供したりしかば、君も其の好意を多とし晝夜兼行不斷の奮鬪努力を惜まざりしかば業績漸次擧り、今や帝都同業界の白眉を以つて目さるゝに至る。

君や志操堅實にして頗る義俠に富み、業務の傍ら能く青年團及び町會の爲めに盡力すること甚大にして、奉秋尙ほ豐かなる君の前途や蓋し多望なりと謂ふべし

夫人貞子は東京府士族下村藏太郎君の長女にして其の間に義勝君、信子、靜子等あり。現に東京市芝區新堀河岸十九番地に住し電話高輪四〇一五番なり。

松村昇君

株式會社明治護謨製造所副社長

君は東京府士族松村純一君の令弟にして明治十四五月を以つて生る。明治四十一年東京帝國大學法科大學政治科を卒業し、爾來東大法科助教授、同

松岡均平君

男爵　從四位勳四等
法學博士　貴族院議員

當家は先代康毅君より家名を擧ぐ、康毅君は多年法官として令名あり後貴族院議員、農商務大臣、樞密顧問官に歷任し大正六年特旨を以つて華族に列し男爵を授けらる。君は康毅君の長男にして明治九年十一月二十八日を以つて生れ大正十二年襲爵仰せ付けらる。

明治三十三年東京帝國大學法科大學政治科を卒業し、爾來東大法科助教授、同

教授、經濟調査委員、國際勞働會議政府委員、都市計劃調査局委員、經濟財政調査會委員、印度支那協會理事、東洋協會大學監等に歴任し、大正三年瑞西萬國平和會議に出席せし外に歐洲各國を漫遊すること數回に及ぶ。大正十年三菱合資會社參與に任ぜられ現に其の職にある外貴族院議員、東洋協會大學理事たり。

夫人をユカ子と呼び君との間に一男二女ありて康光君、純子、清子等と呼ぶ。現に東京市麻布區材木町二四番地に住し電話青山六三五五番なり。

松井敏之君

男爵　正四位

熊本縣多額納稅者

當家は清和天皇の皇子貞純親王の後胤にして正五位下右馬允源重行の後裔たり重行治承四年平氏追討に功ありて源頼朝より山城の地二千餘町歩を賜ひしかば、即ち居を同國綴喜郡松井村に卜して其の地に居住し、爾來同地名を冠して姓となす。是より十數世を經て天保三年更に八代城に移り祿八千石を食みて以來熊本藩國老職を承け從五位盈元君に至る。

君は即ち盈元君の長男にして慶應元年九月を以つて生れ明治二十五年特旨を以つて華族に列し、男爵を授けられ現に正四位の位階を有し又熊本縣多額納稅者として知らる。

夫人ヤヨ子は熊本縣の人三淵永次郎君の二女たり現に熊本市八代郡松高村に住す。

増田次郎君

大同電力株式會社副社長

君は靜岡縣の人増田儀右衛門君の二男にして明治元年二月を以つて生る。現に大同電力株式會社副社長にして且つ神岡水力、桃源殖産各株式會社の重役たり、曾つて衆議院議員たりしことあり。

夫人をこゑ子と呼び靜岡縣の人飯田清吉君の長女たり、現に東京市外下澁谷四三六番地に住す。

前田利功君

男爵　正五位

中央生命保險株式會社長

當家は前田利家の裔にして前田齊泰の第十二子利武君に至り別に一家を創立し明治十七年男爵を授けらる。君は從三位前田利聲君の二男にして伯爵前田利男君の叔父君に當り、明治二十一年七月を以つて生れ、同二十三年四月先代利武君の養嗣子となり襲爵仰せ付けられ前名芳明を改む。

曩に早稲田大學政治經濟科に學び學業を卒ふるや、直ちに實業界に身を投じ親戚にして前に中央生命保險株式會社々長たりし前田利定子の跡を享けて同社々長に就任し、現に其任にありて我が保險界に令名あり。

夫人艶子は三井元之助君の令孃にしてフレンド女學校を卒業し君との間に長男利貴君、二男利榮君、三男幸市郎君、四男平治郎君、五男幸三郎君等あり、現時東京市小石川區同心町三四番地に住し電話小石川六六四番なり。

松井永正雄君

男爵　從四位勳五等

陸軍歩兵中將

當家は先代正敏君より其の家名を擧ぐ正敏君は舊熊本藩士にして夙に伏見敎導團を出づるや直ちに軍籍に身を投じ、明治三十六年陸軍歩兵少尉に任じ累進して遂に陸軍中將に進み特に國家に貢献せるの廉を以つて華族に列し男爵を授けられ彼の日清日露の兩役に參加して功二級金鵄勳章を賜ふ。

君は即ち正敏君の長男にして明治十四年十月を以つて生れ、明治四十五年襲爵仰せ付けらる。夫人をのぶ子と稱し四戸梅太郎君の長女たり、現に東京市外中野町大塚一七八五番地に住す。

松井元興君

理學博士

京都帝國大學理學部長

君は福岡縣の人廣羽元佐君の二男にして明治六年十二月を以つて生れ先代佃君の養嗣子となる。明治三十一年東京帝國大學理科大學化學科を卒業し、明治四十四年分析學研究の爲め獨英兩國に留學し造詣を深くして歸朝す。

爾來長崎縣尋常中學校玖島館敎授、東京高等師範學校敎授、愛知縣立第一中學校敎諭、第六高等學校敎授、京都帝國大學工科大學助敎授、同理科大學敎授等に歴任し從四位勳三等に叙せられ現に京都帝國大學敎授兼ね理科部長たり。

夫人秀代子は岡山縣の人小野禎一郎君の長女にして君との間に二男ありて博君清君と稱す、現に京都市上京區堺ノ段毘沙門町に住す。

松本留吉君

藤倉電線株式會社取締役社長

當家は群馬縣邑樂郡赤生田村の豪農にして君は栃木縣の人藤倉熊吉君の五男たり。明治元年十一月廿八日を以つて生れ明治廿五年十一月良藏君の養嗣子となる

明治四十年十月電氣事業の最も有望なるに鑑み米國に遊び斯業の視察研鑽を終へて直ちに令兄喜八君等と相謀り藤倉電線株式會社を興し之が專務取締役となり尋いで藤倉電線護謨株式會社並に三浦電氣株式會社を創立して之が社長となり、現に同事業に全力を傾注して斯業の發展に努め我が國斯業界に貢献すること蓋し甚大なりと謂ふべし。

夫人エイ子は養父浪藏君の長女にして其の間に四男一女ありて新太君、重男君榮君、慶次君及び美代子と呼ぶ、現に東京市四谷區傳馬町一ノ四七番地に住し電話牛込四五二〇番なり。

松田四郎君

東京山中銀行專務取締役

君は東京府士族松田爲政君の長男にして明治二年七月を以つて生る。夙に東京帝國大學法科大學を卒ふるや身を官界に投じ農商務省に入りて、遊泳すること正に十年、後感するところありて官界を辭して實業界に入り現に前記の要職にある傍ら小型自動車、東京輸出莫大小、明治漁業、横濱製鋼、東京人造肥料各株式會社の重役として知らる。

夫人たゑ子は故貴族院議員古澤滋君の三女にして君との間に小一郎君、須磨子等あり、現に東京市麻布區櫻田町七一番地に住し電話青山六〇三番なり。

松方幸次郎君

正五位勳二等　川崎造船所社長
神戸瓦斯、九州信託各株式會社長

君は大勳位公爵松方正義君の三男にして公爵松方巖君、松方正作君等の令弟に當り同正雄君、同五郎君、同乙彦君、同正熊君、同義輔君等の令兄にして、慶應元年十二月を以つて生る。夙に帝國大學オクスフォード大學、巴里大學、エール大學等に學び歸朝後老公の内閣總理大臣たりし際秘書官に任じ又曩に衆議院議員たりしことあり。

現に川崎造船所の社長として名あり彼の日獨戰役の功に依り正五位勳二等に叙せらる。現時前掲各會社の社長たるのみならず國際汽船、旭石油、日本毛織等各株式會社の重役にして尚ほ推されて神戸商業會議所特別議員たり、君性豪快にして社交に厚く我が實業界の巨星と目さる。

夫人好子は子爵九鬼隆輝君の令妹にして其の間に正彦君、義彦君、幸輔君、勝彦君及び花子、種子等あり、現に神戸市山本通リ四ノ一一〇番地に住し電話長三ノ宮六九九番なり。

松坂政治郎君

湯浅七左衛門商店常務取締役

君は千葉縣の人松坂市平君の次男にして明治九年八月を以つて生る。明治二十一年八月湯浅七左衛門商店に入り爾來鐵工部主任、金物部主任、仕入部主任等を經て大正七年七月同商店が株式組織に變更せらるゝや君擧げられて其の常務取締役兼金物部々長となり今日に及べり。謠曲に趣味深しといふ。

夫人をトク子と呼び千葉縣の人藤代房吉君の令妹にして其の間に武太郎君、金治君、孝三君、泰男君及び長女アサ子、二女榮子等あり。現に東京市本郷區向岡彌生町三番地に住し電話小石川五〇二九番なり。

松方正雄君

福徳生命保險株式會社長
大福海上火災保險株式會社長

君は故公爵松方正義君の四男にして公爵松方巖君、松方正作君、同幸次郎君の令弟にして同五郎君、同乙彦君、同正熊君、同義輔君等の令兄たり。明治元年五月を以つて生れ從兄松方勇助君の家督を相續す。幼にして米國に渡りペンシルヴァニヤ大學を卒業して後實業視察の爲め英國に遊び歸朝後浪速銀行常務取締役に擧げられ次いで頭取に就任す。大正九年同銀行の十五銀行と合併せらるゝや君其の取締役となる。

現時は前記各會社の社長として專ら兩社の經營に從ひ傍ら十五銀行、國際汽船豐川鐵道、國際信託、川崎造船所、大阪瓦斯、堺瓦斯等各株式會社の重役たり。君は資性溫厚にして禮節を重んじ情義厚き紳士として我が實業界に令名を馳す。現に兵庫縣川邊郡小濱村に住す。

又木周夫君

新高製糖株式會社取締役

君は又木次太郎君の二男にして明治廿七年一月十六日を以つて生る。大正八年東京帝國大學法科大學を卒業するや住友合資會社に入り、累進して參事に就任せしが後同社を辭して新高製糖株式會社取締役に擧げられ以つて現在に至る、日本倶樂部、工業倶樂部各會員たり。

夫人龜子は高島小金次君の長女にして山脇高等女學校を卒業し、君との間に長女規伊子あり、現に東京市麹町區永田町一ノ七番地に住し電話青山二九八九番なり。

馬越恭平君

從五位勳四等　實業家
貴族院議員

君は岡山縣の人醫師馬越元泉君の二男にして弘化元年十月を以つて生る。安政六年大阪に出でて鴻池家に奉公せしが明治五年大志を抱いて江戸に出で小旅舍を開き偶々三井家の重役益田氏の知るところとなり同六年七月其の聘に應じて三井物産の前身たる先收會社に入社せり。

然して同社が三井物産と改稱せられし後も引續き勤務し横濱支店長、元締役常務理事を經て三井呉服店理事、三井地所部專務理事等に歷任し、後同社を辭して日本麥酒會社に入り社業の隆盛に盡瘁し同業會社の併合により大日本麥酒株式會社の設立を見るや同社々長に就任し現に其の要職にある傍ら朝鮮銀行、東邦火災保險、三井信託、富國徴兵保險、極東煉乳、關東水電各株式會社の重役たり。

先是明治卅一年衆議院議員に當選し、同卅九年彼の日露戰役の功により勳四等旭日小綬章を授けられ、大正十四年十月從五位に叙せられ、尚ほ歐米支各國を漫遊すること數回に及び我が實業界の巨星を以つて目せらる。而して大正六年貴族院議員に勅選せられ、現に其の榮職に在り、現に東京市麻布區北日ケ窪町四六番地に住し電話青山四九〇六番たり。

松本順吉君

土佐吉野川水電株式會社取締役
住友電線製造株式會社取締役

君は石川縣の人松本清七君の三男にして明治六年一月十八日を以つて生る。明治三十一年東京帝國大學法科大學を卒業するや、直ちに實業界に投じ住友鑛業所

副支配人たりしが現時は前記の外住友製鋼所取締役たり。

夫人正木子は石川縣の人小幡秋進君の養子にして君との間に精一君、他喜子等あり。現に兵庫縣御影郡御影柳に住す。

牧田環君

工學博士
三井鑛山株式會社常務取締役

君は大阪府士族牧田虎之丞君の二男にして明治四年七月廿四日を以つて生る。明治廿八年東京帝國大學工科大學採鑛冶金科を卒業するや直ちに外國に航し、留まりて研鑽すること久しく大いに造詣を深くして歸朝す。

現に前記會社の常務取締役たる外基隆炭礦取締役兼會長、電氣化學工業、松島炭礦、北辰會、山東鑛業、日本製銅所各株式會社取締役及び釜山鑛山、神岡水電臺灣炭礦、太平洋炭礦各株式會社の重役にして且つ印度支那協會、帝國發明協會各理事として知らる。

大正四年工學博士の學位を受け又曩に佛國政府よりレジョンドノール勳章、佛領印度支那總督よりドラゴンドランナン勳章を授與せらる、圍碁、圍藝等に趣味を有すといふ。

夫人芽枝子は實業家圍琢磨君の長女にして華族女學校を卒業し、君との間に一女ありて玉枝子と呼ぶ。現に東京市麻布區北日ケ窪町四三番地に住し電話青山五五三二番なり。

松木幹一郎君

從四位勳三等
東京市政調査會理事長

當家は豫州の豪族河野通有の後裔にして代々松木の郷庄子山に居城し松木姓を稱す。然して松木三河守に至り長曾我部の爲め敗られて陣歿し、其の末子宗兵衛脱れて周桑郡楠河村に土著し舊幕當時鄕士として同地方の大庄屋たりき。

君は松木操平君の長男にして明治五年二月二日を以つて生る。明治二十九年東京帝國大學法科大學を卒業するや直ちに官界に入り、遞信事務官、同書記官、一等郵便局長、遞信省參事官、帝國鐵道廳參事官、鐵道院理事、東京市參與、同電氣局長、復興院副總裁等を歷任し又野に下りては山下合名會社總理事、同汽船會社副社長、浦賀船渠株式會社取締役等を歷補し現に前記の職にあり。

夫人靜枝子は山口縣士族谷村猪助君の長女にして萩高等女學校を卒業し、其の間に五男三女あり、現に東京市外下澁谷六四番地に住し電話青山三九七〇番たり

前田珍男子君

醫學博士
前田眼科病院長

君は愛媛縣士族前田武崇君の長男にして明治三年四月を以つて生る。明治二十三年第一高等中學校醫學部を卒業し、更に獨逸ギーセン大學其他墺瑞英白各國の大學に學びて歸朝し、明治三十九年醫學博士の學位を受け現に前田眼科病院長として我が刀圭界に令名あり。

夫人スミ子は愛知縣士族西川宇吉郎君の長女にして君との間に太郎君、贊郎君司郎君、護郎君及び修子、淑子あり、現に東京市神田區駿河臺袋町一四番地に住し電話大手五七〇五番たり。

松山常次郎君

正八位　衆議院議員
黄海社長

君は和歌山縣の人松山常治君の長男にして明治十七年三月二十二日を以つて生る。夙に鄕校を卒ふるや笈を負ふて東上し、切磋琢磨、明治四十一年東京帝國大學工科大學を卒業し更に米國に學び土木工學を研究し、大いに造詣を深くして歸朝するや東京府土木課に勤務せしが間もなく辭して渡鮮し、川佐農場、大正水利組合技師長に就任せしも後辭して獨力黄海社を起して水利開墾事業に從事して現在に至る。

然して大正九年多數縣民の推すところとなり、即ち鄕里和歌山縣第三區より飛び出して馬を陣頭に進め、勇進敢戰大いに敵陣を打ち破り見事當選の榮譽を克ち得たり、爾來衆議院議員として中央政壇に起つや婦人問題と朝鮮統治問題とを提げて君が熱あり眞面目なる論鋒を浴せかけて全院を湧かし、今や我が政界の一異彩たるを失はざるべし。

夫人於靜子は和歌山縣の人野口巳之助君の二女にして君との間に望君、信君、愛君等あり、現に東京市外千駄谷町八三五番地に住し電話四谷九一九番なり。

松田登三郎君

大倉土木株式會社常務取締役

君は香川縣の人松田藤太郎君の令弟にして慶應三年八月廿四日を以つて生る。夙に攻玉社に學び明治廿二年工手學校建築科を卒業するや直ちに實業界に志し、大倉組に入りて勤續すること實に卅有七年現に大倉組の分身たる大倉土木株式會社常務取締役たる傍ら小舘木材、大平建築各株式會社の重役として知らる。

夫人よね子は東京府の人砂崎庄次郎君の長女にして君との間に長男定信君、四男豐君、長女富美子、二女美和子等あり現に東京市赤坂區臺町二七番地に住し電話青山三七八一番なり。

前田利爲君

侯爵從三位勳四等
貴族院議員

當家は右大臣菅原道眞の裔大納言利家の後なり、嫡子中納言利長德川家康に從ひ加越能百二萬七千石を領し、數世を經て從三位慶寧君に至る。慶寧君は維新の際奥羽征討の役に功あり子利嗣其の後を享け明治十七年侯爵を授けられ從二位に陞り勳二等に叙せらる。君は其の後を繼ぎ舊上州七日市藩主從四位前田利昭君の五男にして子爵前田利定の令弟に當り、明治十八年六月五日を以つて生れ先代利嗣君の養嗣子となり同卅三年襲爵仰せ付けらる。

夙に陸軍に志し陸軍士官學校、陸軍大

學校に學び同卅八年陸軍歩兵少尉に任ぜられ累進して大正十四年陸軍歩兵中佐に任ぜらる。大正二年獨逸に留學し翌三年世界戰亂の勃發するや英國に轉じ英國出征軍に從軍し大正五年歸朝せしが同九年二月漾子夫人(滯歐中歿す)を同伴して再び歐洲に渡り遍ねく戰後の歐洲を視察す曩に富山縣細民救助奬學資金を寄附し紺綬褒章を賜はる現に陸軍大學教官たり。

夫人を菊子と呼び伯爵酒井忠正君の令妹にして女子學習院の卒業なり。現に東京府豐多摩郡大久保町東大久保三一七番地に住し電話四谷一〇八五番なり。

町田傳七君

伊勢崎銀行取締役

當家の始祖は群馬縣勢多郡下川淵村字三公田村に住せしが、先々代傳右衛門君の時に至り伊勢崎町に移り荒物醬油の販賣に從事せり、君は先代傳七郎君の長男にして文久二年二月を以つて生る。當時同家は荒物商を本業とし兼業として小規模の醬油釀造業を營みしが、君家業を繼ぐに及び味噌醬油釀造を專業とし、爾來三十有餘年刻苦奮勵大いに努めしかば遂に今日の隆昌を見るに至り、現に家業の外前記銀行及び群馬精麥株式會社の重役にして、且つ群馬縣多額納稅者として直接國稅貳千五百余圓を納むといふ。

夫人たつ子は群馬縣の人横山歌吉君の二女にして君との間に二男一女ありて濱次君、庚一郎君及び一二三子等と呼ぶ、現に群馬縣佐波郡伊勢崎町に住す。

丸茂平兵衛君

甲府電力株式會社取締役

君は山梨縣の人丸茂平兵衛君の長男にして明治十四年七月を以つて生る。夙に地方財界に活躍し現に前記山田商事、東邦製帽各株式會社重役にして且つ山梨縣多額納稅者として一千四百四十余圓を納め當地方財界に重きをなす。

夫人美都子は山梨縣の人大木喬命君の三女にして君との間に孚造君、政美君、謹三君、達三君、昭君、宏君及び富子等あり、現に甲府市柳町三〇番地に住す。

町田忠治君

正四位勳二等　衆議院議員
報知新聞社長　農林大臣

君は秋田縣の人舊佐竹藩士町田長秀君の令弟にして文久三年三月を以つて生る夙に鄕里の中學を卒業するや縣貲生として大學豫備門に入りしが病の爲め中途にして退學するの已むなきに至る、其後再び大學選科に入り專ら政治經濟を研究し業成るや明治二十三年犬養毅君、尾崎行雄君等の朝野新聞に筆を執るに及んで君亦入りて其の記者となり、更に民報、報知等に健筆を揮つて名聲漸く擧り、後大隈侯の信任を得て歐洲に留學し歸朝後獨力を以つて東洋經濟新報を創刊せり。

數年の後社務を天野爲之君に託して日本銀行に入り總裁岩崎男の秘書役と爲り更に同行大阪支店に轉勤して君が敏腕を縱横に振ひしが幾許もなく山口銀行に轉じ、同行總務の要職に就くや從來の營業方針を刷新して行運の發展に努め遂に同行をして今日の盛況を見るに到らしめ、尙ほ共同火災海上保險、東洋木材防腐、猪苗代水力電氣各株式會社の重役に擧げられ、又大阪銀行集會所委員長となりて關西實業界の爲めに貢獻すること甚大なりき。

其後政界に志し立憲同志會の成立に及び之に加盟して奮鬪大いに努め、第十回の總選擧には鄕里秋田縣民多數の要望と大隈侯の推薦とによりて逐鹿場裡に出馬して遂に當選の榮冠を擔ひ、大正三年第二次大隈内閣成るや君農商務省勅任參政官として河野農相を補佐し、其の蘊蓄を傾けて參劃する處大なり、後功を以つて勳四等に叙せらる。

其の後共同火災保險株式會社々長となり、更に箕浦勝人君の報知新聞社長を辭するや君其の後を承けて同社々長の要職に就任し以つて今日に至る、尙ほ大正十五年若槻内閣成立するや商工政務次官に就任し其の聲名嘖々たり、夫人香子との間に長男義夫君あり。

松平康莊君

侯爵　從三位勳二等
貴族院議員

當家は德川家康の二男中納言秀康の後裔なり秀康越前北庄六十八萬石に封ぜらる其子忠直に至り福井と改稱す、之より改易轉封數回の後世々福井三十二萬石を領して從一位勳一等慶永に至り勤王の功あり嗣子茂昭伯爵を授けられ尋いで慶永の功に依り特に侯爵に陞叙す。

君は茂昭君の二男にして慶應三年二月を以つて生れ明治二十三年襲爵せり、明治十七年獨英に留學して農學を修め歸朝後松平試農場を起し園藝の研究に努め、同二十五年以來貴族院議員たり。

夫人節子は子爵松平康春君の叔母君にして華族女學校を卒業し其の間に康昌君康邦君、康信君、康龜君、康忠君及び銀子等あり、現に東京市外大崎町字上大崎四四四番地に住し電話高輪一三七七番なり。

松村光三君

大日本人造肥料會社監査役
古河合名會社調査課長

君は栃木縣の人松村光三君の長男にして明治十五年十二月二十四日を以つて生る。夙に東京商科大學の前身たる東京高等商業學校を卒業し進んで同校專攻科に學び、斯學の研鑽を積み同科を卒業するや直ちに實業界に身を投じ、古河合名會社に入りて恪勤すること多年累進して現に同社調査課長兼ね古河鑛業株式會社調査課長として同社の爲め盡瘁すること甚大、尙ほ傍ら大日本人造肥料、旭電化各株式會社監査役として知らる。

曾つて歐米を歷遊すること數次にして彼の地の經濟界を具さに視察見學して歸朝し、今や我が國實業界に貢献する蓋し尠少ならず、常に閑日を利用しては讀書に耽溺して斯學の蘊奧を極むといふ、社

交廣く如水會、日本工業倶樂部等の各會員たり。

夫人しげ子は栃木縣の人大村專助君の長女にして宇都宮高等女學校を卒業し君との間に芳枝子、秀子、光子、和子等あり、現に東京市赤坂區青山南町五ノ三三番地に住し電話青山一九三五番たり。

松田三德君

衆議院議員

從五位在鄕陸軍三等主計松田三德君は香川縣士族小島清君の令弟にして明治十九年六月を以つて生れ先代寛吾君の養嗣子となる。夙に慶應義塾大學法律科を卒業して後一年志願兵となり陸軍三等主計に任ぜらる、曩に小作制度調査會委員、臺灣總督府秘書官等を歷任せり。

現に國有財産調査會委員の職にあり。尙ほ香川縣より推されて衆議院議員たること二回現に其の地位にありて憲政會に屬し令名嘖々たり。

夫人喜代子は香川縣の人加藤勘學君の長女にして其の間に長男幹雄君、二男健君、三男德雄君、長女敏子等あり、現に東京市麻布區一本松町二七番地に住し電話高輪四八七二番なり。

松平慶民君

子爵　正四位勳五等

當家は松平侯爵家の分家にして君は從一位勳一等松平廣永君の令息に當り、明治十五年三月を以つて生る、又廣永君は越前福井五十二萬五千石を食み春嶽と號せり、慶應年間德川慶喜將軍に勸めて大政を奉還せしめ王事に盡瘁せり、君は嚴父の勳功により授爵の榮に與り明治三十九年子爵を授けらる。

夙に英國牛津大學を卒業せり、豫備陸軍砲兵少尉にして大正十三年十二月勳五等に叙せられ、曩に侍從兼式部官、東宮職御用掛等を歷任し現に宮內事務官、式部官、宗親課長等の榮職にあり。

夫人幸子は侯爵井上勝之助君の養女にして男爵新田忠純君の四女たり。現に東京市麻布區富士見町八番地に住し電話高輪五四三一番なり。

益田太三郎君

實業家
大阪府多額納稅者

君は大阪府の人益田太三郎君の二男にして明治十五年九月を以つて生る。夙に實業界に活躍し、製粉事業を興し現に關西製粉界に重きをなし、且つ大阪府多額納稅者として直稅六千九百六十余圓を納め關西實業界に令名あり。

現に大阪市薩摩堀西ノ町十一番地に住し電話新町七二八番たり。

松良善淵君

宮城商樂銀行取締役

君は舊仙臺藩士松良盤植君の長男にして明治十六年五月を以つて生る。夙に實業界に身を投じ現に前記の外仙臺商業會議所議員にして且つ宮城縣多額納稅者として直稅三千六十余圓を納むといふ。

夫人をミツ子と稱し宮城縣の人武田吉平君の九女たり、現に仙臺市東四番町十八番地に住す。

町田豐千代君

實業家

本邦實業界の重鎭として令名高き我が町田豐千代君は東京府士族町田實輔君の長男にして慶應三年十月を以つて生る。明治二十三年東京高等商業學校を卒業するや函館商業學校教頭に任じ、同二十五年辭して山林事業其他各種の事業を經營し、同三十年故西村勝三君の經營せる櫻組に入りて其の支配人となり皮革事業に從事すること數年、同組が株式會社となるや其の常務取締役となる。而して彼の日露戰役に際し軍需品供給に方り、後大倉組及賀田組の製革事業を合併して日本皮革會社と改稱するや君は其の取締役に擧げらる。

曩に日本製靴會社取締役に就任し後天鹽炭礦會社の經營に與かり、明治四十三年故日比谷平左衞門君の推擧に依り日本製絲會社の專務取締役として同社の整理に從事し、同四十四年千住毛織物會社の整理を引受け尋いで澁澤子の推薦にて浦賀船渠會社の社長として專ら造船事業に從ひ、而して大正八年造船事業調査の爲め歐米を漫遊し同十年二月病を以つて職を辭し、其後一時明治紡織會社取締役社長に任じ其の間東京鋲鎖製造、東京製鐵日本鋼管、シャフト各會社の製鋼事業に關係し又東北電化會社の取締役たりし事ありしが現時は東京煉瓦、日本皮革、菅川商會、東京電球各株式會社の重役として君が敏腕を振ひ今や我が實業界に其の令名嘖々たり。

夫人くに子は大阪府士族加藤延治君の二女にして東京女子高等師範學校の出身たり。現に東京市麻布區新龍土町一一番地に住し電話青山五一五三番なり。

松田福一郎君

神奈川電氣株式會社長

君は三重縣士族松田齊三郎君の長男にして明治八年三月を以つて生る。夙に東京高等師範學校を卒業し後實業界に身を投じ、曾つて芝浦製作所社員、神奈川電氣株式會社支配人たりしが一族を以つて株主となす神奈川電氣株式會社を創立し現に同社々長たる外日本冶金株式會社取締役たり。

夫人美代子は陸軍中將林太一郎君の長女にして君との間に一男ありて世七郎君と稱す、現に東京市芝區仲門前町二ノ一番地に住し電話高輪六四一三番たり。

松尾喜七君

京都商事株式會社取締役

君は京都府の人松尾喜七君の二男にして明治十九年五月を以つて生れ後前名喜一郎を改めて襲名す。現に京都商事株式會社の取締役たる外京三運輸株式會社監査役たり。

尚ほ京都府多額納税者にして現時直接國税二千九百七十餘圓を納む、現に京都市下京區五條富小路西入に住し電話下八二二番たり。

松浦孫兵衛君

板橋郵便局長
中央土地株式會社監査役
板橋自動車株式會社取締役

君は東京府の人松村孫平衛君の長男にして明治元年四月九日を以つて生る。夙に町制郡制に參與して貢献すること甚大明治三十八年以來十九年の久しく板橋町會議員として地方啓發に盡瘁し、其の間板橋町長に當選すること前後二回、能く其の職責を完ふして郡民の尊敬の的となり、大正四年九月多數郡民の輿望を擔つて北豊島郡會議員に當選し、郡制廢止に至るまで其の重任にありき。

先是大正十年三月板橋郵便局長に就任し現に其の任にある傍ら尚ほ町會議員にして且つ前記會社の重役として令名あり趣味として謠曲、繪画、和歌等ありて何れも素人の域を脱せりといふ。

夫人せい子は埼玉縣の人細井啓太郎君の長女にして君との間に萬三郎君、松四郎君、直枝子等あり、現に東京府北豊島郡下板橋六四九番地に住し電話板橋四〇番たり。

前田米藏君

辯護士　衆議院議員

君は和歌山縣の人前田正一君の令兄にして明治十五年二月を以つて生る。明治卅五年中央大學の前身たる東京法學院を卒業し、更に東京外國語學校佛語科、獨逸協會學校獨逸語高等科等に學び後判檢事登用試驗に應じて首席を以つて合格し直ちに辯護士を開業す。

大正六年以來衆議院議員に當選すること數回に及び、現に其の職に在りて政友會に屬し傍ら京成電氣軌道、中央新聞、港鐵道、田代川水力電氣、東京電力各株式會社の重役として知らる。旅行に趣味を有すといふ。

夫人幾子は東京府士族橋本得君の令妹にして其の間に長男雅彦君、二男嘉明君及び長女嘉代子等あり、現に東京市麻布區三河臺町二八番地に住し電話高輪五四五四番なり。

松林桂月君

畫家

君は本名を篤と呼び山口縣の人伊藤篤一君の二男にして、明治九年八月十八日を以つて山口縣萩に生れ後松林高風君の養子となる。明治二十七年上京して野口幽谷師の門に入り南宗畫を學び、研鑽琢磨、大いに努めしかば其の技や遂に衆を拔きて世人の賞讃を博するに至る。

明治四十一年以降文部省美術展覽會に出品して毎回入選し三等賞及褒狀を受けその作になる「春溪」及「老圃秋容」等は著名なるものにして後文展の推薦により審査員に擧げられしが大正十三年之を辭す。君は又漢文學の蘊奥を極め詩文を能くし兼ねて俳句に巧妙にして又相撲を好むこと切なりといふ。

夫人かう子は養父高風君の二女にして夫君と相並んで本邦閨秀画家の名あり。現に東京府荏原郡駒澤村字深澤一二〇番地に住す。

間淵榮一郎君

濱松銀行取締役
濱松證券株式會社取締役

君は靜岡縣の人澤木倉次郎君の三男にして明治十三年八月を以つて生れ後間淵重太郎君の養嗣子となる。夙に實業界に投じ現に前記の外濱松商業銀行、日本樂器製造、濱松鐵道、西遠酒造研究所、天龍護謨工業各株式會社の取締役にして且つ濱松委托、遠州電氣鐵道各株式會社監査役たり。

尚ほ靜岡縣多額納税者にして直税一千百六十餘圓を納む、夫人をとよ子と呼び君との間に一男一女あり、現に靜岡縣濱松市肴町一八番地に住す。

松本眞平君

正八位　陸軍二等主計
松本米穀製粉株式會社長

君は埼玉縣の人松本平藏君の長男にして明治十一年五月十二日を以つて同縣大里郡熊谷町に生る。明治三十三年東京高等商業學校を卒業するや大倉商業學校教諭に任じ後一年志願兵として入營、同三十九年製粉事業を開始し大正三年株式組織に改め同九年更に三百萬圓に增資して事業の擴張發展を圖り、同十二年千代田製粉株式會社と合併して松本米穀製粉株式會社と改稱し君其の社長に推され、現に斯界の覇者を以つて目せらる。

尚ほ埼玉縣第三區より推されて衆議院議員たるの外武州銀行、武州貯蓄銀行、武藏製粉、武州製氷各株式會社の重役として知られ、埼玉縣共濟會理事、營業税審査會委員にして且つ埼玉縣多額納税者として現時直接國税千六百二十餘圓を納むといふ。

曩に熊谷銀行頭取たる外所得税調査委員、相續税審査委員、埼玉縣大里郡在鄉軍人分會長たりしことあり。夫人ゆき子は宮城縣の人笠木謙君の令妹にして日本女子大學校の卒業たり。現に東京市小石川區小日向水道町八七番地に住し電話小石川五一七番なり。

松方五郎君

常盤商會社長
東海生命保險相互會社長

君は故公爵松方正義君の五男にして公爵松方巖君、松方正雄君、同幸次郎君、等の令弟に當り同乙彦君、同正熊君、同義輔君等の令兄にして明治四年四月を以つて生る。明治二十九年東京帝國大學法科大學英法科を優秀の成績にて卒業し、同三十年英國へ留學して三十四年歸朝し後數月にして再び米國を經て英國に渡航し西比利亞を經て歸朝す。

爾來川崎造船所に入り倉庫課長兼庶務課長たりしが同四十二年同所を辭し現時は幾多の事業會社に關係し前記會社の社

長たるのみならず尙ほ東京瓦斯電氣工業東洋海上保險、東京地下鐵道、東洋製糖宇治川電氣各株式會社の重役として我が財界に令名高し。

夫人カメ子は大阪府の人澁川千之助君の養妹にして君との間に正廣君、正信君及び德子、清子等あり、現に東京市芝區西久保櫻川町一二番地に住し電話青山六八一九番なり。

眞崎誠君

正五位勳五等
群馬縣師範學校長

君は佐賀縣の人眞崎利平君の長男にして明治七年八月を以つて生る。明治三十一年東京帝國大學文科大學を卒業するや更に歴史地理學研究並に歐米の教育制度視察の爲め、佛英獨露其他諸外國を歴遊し歸朝後三重縣師範學校長を經て現在に至る。

夫人サキ子は氣賀鷹四郎君の三女にして君との間に忠君及び眞佐子、眞喜子等あり、現に前橋市清王寺町一二五番地に住す。

前島彌君

男爵　正五位
日章火災海上再保險會社會長

當家は先代前島密君より其の家名を擧ぐ、密君は舊高田藩士上野助右衞門君の二男にして明治二年以來民部、大藏各省出仕、租稅權正、驛遞權正、驛遞頭、內務少輔、同大輔、勸業局長、元老院議官東京專門學校長、遞信次官等に歴任し尙ほ北越鐵道、東洋汽船、石狩石炭各株式會社の重役、日本海員掖濟會理事長、貴族院議員等となり、明治二十五年萬國聯合郵便加盟二十五年祝典に際し往年の功を以つて男爵を授けらる。

君は其の長男にして明治六年三月を以つて東京に生る。幼にして學に厚く夙に米國に渡りニュージャーシー州モルシタウン中學を經てプリンストン大學に進み明治二十七年同大學を優秀の成績を以つ

て卒業し翌二十八年歸朝するや直ちに身を實業界に投じ日本郵船、浦賀船渠各株式會社に關係して其の快腕を發揮すること十有四年に及び明治四十一年以來日清印刷株式會社、日清生命保險株式會社取締役として社務に鞅掌す。

尙ほ日章火災海上再保險株式會社、帝國化學工業株式會社代表、朝鮮瓦斯電氣スマラ鐵工各株式會社取締役、日華窯業株式會社監査役として令名高し。趣味廣く就中書畫、骨董、音樂等は其の最もなるものなりといふ。現に東京市牛込區余丁町一〇五番地に住し電話四谷三三五〇番なり。

眞殿理吉君

神戸共同商事株式會社常務取締役

君は兵庫縣の人眞殿茂一君の長男にして明治四年六月を以つて生る。夙に實業界に投じ現に神戸共同商事株式會社常務取締役たり。

夫人とく子は兵庫縣の人永木勝藏君の令姉にして、君との間に三男二女あり、現に神戸市平野五宮町七十番地に住し電話元二八七〇番なり。

松村純一君

正四位勳二等功四級
豫備海軍中將

君は佐賀縣士族海軍大尉松村義樓君の長男にして明治四年七月を以つて生る。夙に海軍に志し明治二十四年海軍兵學校を卒業するや海軍少尉に任ぜられ、日清北清、日露の各役に出征して功あり後佛國及英國駐在造船造兵監督官、佛國大使館附武官、侍從武官、軍令部參謀等を歴任し爾來累進して大正十年海軍中將に進み同十二年豫備役仰せ付けらる。

然して此間生駒艦長、霧島艦長、吳鎭守府參謀長、臨時潛水艦航空機調査委員長、輕巡洋艦戰隊司令官、第一潛水戰隊司令官等を歴補し日露の役には日進砲術長として戰功を立て功四級金鵄勳章を賜ふ。

夫人みね子は佐賀縣の人士山行務君の長女にして君との間に雅央君、齋央君、常盤子、千賀子等あり、東京市赤坂區靈南坂町一九番地に現住し電話青山三二五四番なり。

松方義輔君

國際信託株式會社常務取締役

君は故公爵松方正義君の九男にして公爵松方巖君、松方正作君、同幸次郎君、同五郎君、同乙彦君、同正雄君、同正熊君等の令弟に當り、明治十六年五月を以つて生る。明治三十七年學習院高等科を卒業し、更に帝國大學法科大學に學び後米國に留學し且つ英米の銀行に實務を練習し歸朝するや日本銀行に入りて同行名古屋支店調査役、同行金澤支店長たりし事あり。

現時は前記會社の常務取締役たる外大福海上火災保險、三光紡績、濃飛電氣、福德生命保險等各株式會社の重役として知らる。夫人を辰子と呼び子爵井上勝純君の令妹たり、現に東京市赤坂區榎坂町二番地に住し電話高輪三二三三番なり。

松代安太郎君

大三土地株式會社取締役
大阪府多額納稅者

君は大阪府の人松代常七君の長男にして明治十七年十一月を以つて生る。明治四十一年早稻田大學商科を卒業するや、直ちに關西實業界に活躍して大いに君が敏腕を振ひ、現に大三土地株式會社取締役にして且つ大阪府多額納稅者として直稅五千四百二十余圓を納むといふ。

夫人みね子は兵庫縣の人伊藤英一君の長女にして君との間に二男一女ありて仁一郎君、格三君及び恭子と稱す、現に大阪市北區堂島濱通り一ノ六七番地に住し電話七九三番たり。

益田貫一君

東京市赤坂區長

君は東京府士族益田敬節君の長男にして、明治九年十月二十三日を以つて生る。夙に岡山醫學專門學校の前身たる岡山藥學校を卒ふるや、直ちに笈を負ふて東上し、齋生學舍、國民英學會及び法律學校等に學び造詣を積むや職を官途に奉ず。

斯くて、明治三十一年九月東京市本郷區書記を拜命し、爾來、庶務掛長及び衞生掛長を經て大正元年十一月東京市事務員を命ぜられ、翌年七月芝區書記に任じ庶務掛長を命ぜられ、同八年牛込區書記庶務掛長に轉勤せり。

然して、大正十一年十月淺草區書記拜命、翌年七月同區主事より遂に大正十四年四月拔擢せられて東京市小石川區長に擧げられ、更に翌年十二月赤坂區長に轉じ以つて現在に及ぶ。

夫人幹子は京都府士族原田隆君の長女にして、我が國女流教育家の名も高く、君との間に一男一女ありて誠君及び道子と呼ぶ、現に東京府豐多摩郡杉並町阿佐ケ谷八〇一番地に住す。

前田米藏君

辯護士　衆議院議員　法制局長官

君は和歌山縣の人前田正一君の令兄にして、明治十五年二月を以つて生る。夙に東京法學院、東京外國語學校佛語科及び獨逸協會學校獨逸語高等科を卒業するや、直ちに辯護士登用試驗に登第す。

斯くて辯護士事務所を開設して一般法律事務を取扱ひ、且つ事業會社に關係して京成電氣軌道、中央新聞、港鐵道、田代川水力電氣、東京電力各株式會社の重役として知らる。

然して又政界に活躍して令名を馳せ、大正六年以來衆議院議員に當選すること二回、現に政友會に重きをなし、昭和二年四月田中內閣の出現と共に法制局長官に任ぜらる。

夫人幾子は東京府士族橋本得君の令妹にして君との間に雅彥君、嘉明君及び嘉代子等あり、現に東京市麻布區三河臺町二十八番地に住し電話青山五四五四番たり。

松井清足君

正六位勳五等　株式會社大林組東京支店長

君は愛知縣の人松井親覺君の長男にして、明治十年十一月十三日を以つて生る。夙に俊才の稱あり鄉校を卒ふるや笈を負ふて東上し、切磋琢磨、明治三十六年優秀の成績を以つて東京帝國大學工科大學建築科を卒業す。

斯くて職を官途に奉じ、横濱市役所建築課に入りて君が蘊蓄を傾注し、其の間幾多の建築を監督して何れも完璧を期し斯界に名聲を馳せしも、明治三十八年官を辭して當時斯界の泰斗として令名ありし工學博士辰野葛西兩君の經營する建築事務所に入り、兩君を援けて其の俊腕を振ひ、後ち感ずるところありて再び官界に入り海軍省技師に任ぜられ、臨時海軍建築部委員仰せ付けられ專ら軍事建築に携はり、國家に貢獻する所尠少ならず、功により正六位勳五等に叙せらる。

然して、大正八年獨立の機運熟するや工學博士片岡安氏と相謀り、建築事務所を開設し、益々君の奇才を發揮して事業に專念せしかば業運逐日盛大に赴き、忽ちにして斯界に雄を競ふに至りしも、大正十三年聘に應じて大林組に入社し、爾來、同社の發展に盡瘁すること甚大、累進して同社東京支店長に擧げられ以つて現在に及ぶ。

夫人久子は佐賀縣の人吉原政道君の二女にして君との間に汲夫君、高士君、親夫君及び長女キヌ子等あり、現に東京府下平塚村小山五〇八番地に住し電話高輪四三〇七番たり。

松本喜一君

正六位　帝國圖書館長

君は埼玉縣の人にして、明治四年八月十二日を以つて生る。明治卅九年東京帝國大學文科大學哲學科を卒業し後ち教育界に投じ、群馬縣立師範學校教諭、茨城縣立女子師範學校長、茨城縣立水戸師範學校長、東京高等師範學校教授等を歷任し以つて現在に及ぶ。

夫人をこう子と呼び其の間に一男一女あり、現に東京府北豐島郡西巢鴨池袋町三家二三三八番地に住し電話小石川二〇一七番なり。

前田一君

富士製鋼株式會社監査役　前田商事株式會社取締役

君は舊幕臣原田寬信君の長男にして、明治五年二月を以つて生れ、後ち先代右君の養嗣子となる。夙に東京帝國大學法科大學に學び、後ち實業界に投ず。

然して安田銀行に入りて外國關係翻譯係を擔任し、明治三十年安田商事株式會社書記に轉じ而して同社が新に製釘事業を創むるや、其の支配人に擧げられ大正八年累進して同社取締役に就任し現に其の外富士製鋼株式會社監査役たり。

夫人節子は千葉縣の人關口一郎君の令妹にして君との間に俊太郎君、寬二君及び淑子等あり、現に東京府荏原郡大井町瀧王子四五五〇番地に住し電話高輪一七五六番たり。

正木直彥君

從三位勳二等　東京美術學校長

君は大阪府の人正木林作君の二男にして、文久二年を以つて生る。明治二十五年東京帝國大學法科大學法律科を卒業す

爾來、奈良縣尋常中學校長、文部大臣祕書官、文部省視學官、第一高等學校教授等を歷任し、現に東京美術學校長たる外營繕管財局顧問たり、曩に歐米各國に差遣せられしことあり。

夫人イク子との間に三男二女あり。現に東京市牛込區矢來町四番地に住し電話牛込九五三番たり。

益田孝君

男爵　正五位勳三等
益田農事株式會社長

君は舊佐渡奉行屬役益田孝義氏の長男にして、弘化四年十一月を以て生る。

曩に騎兵頭、造幣權頭、先修會社副社長等を歷任、而して三井物產株式會社創立に參劃し、同社設立と同時に社長に推され、後ち三井合名會社の設立と共に專務理事に就任し、更に商法講習所を設立しては商業學の普及を計り貿易商業に貢献すること甚大なり。

斯くて大正七年邦家の爲め功勞顯著なるを以て特旨を以て華族に列し男爵を授けらる、現に華胄界に重きをなすのみならず、益田農事株式會社長、三井合名會社相談役、東北振興會副會頭たり。

夫人ゑい子は東京府士族富永敏麿氏の叔母君に當る、現に東京府荏原郡品川町北品川宿三一二番地に住す。電話高輪三三五番

松村菊勇君

正四位勳二等功五級　在郷海軍中將
東京石川島造船所(株)常務取締役

君は佐賀縣士族海軍少佐松村安積氏の二男、豫備海軍中將松村龍雄氏の令弟にして、明治七年十月廿三日を以て生る。

明治二十九年海軍兵學校を卒業し同卅一年海軍少尉に任官、累進して海軍中將に陞進す。

其の間英米に出張を命ぜられ、明治三十六年常備艦隊參謀に補し翌年第一艦隊參謀として日本海々戰に戰功を立て功五級金鵄勳章を賜はり、明治四十年海軍大學校を卒業し翌年佛國に駐在拜命同四十四年春日副長尋いで海軍大學校教官に補し、大正三年第一艦隊參謀、南遣支隊參謀として日獨戰役に參加、爾來、佛國大使館附兼造船造兵監督官、筑摩、笠置、常盤、比叡各艦長、第五艦隊司令官、鎭海育本部第一部長、海軍々令部出仕等を歷任要港部司令官、海軍々令部出仕等を歷任し大正十五年二月豫備役仰せ付けられ以て現在に及ぶ。

夫人政久子は佐賀縣士族有田義資氏の五女たり、現に東京市外戸塚町上戸塚九五一番地に住す。電話牛込一五〇番

丸山健治君

有隣生命保險(株)庶務課長

君は長野縣の人先考清助氏の二男にして、明治十九年七月二日を以て生る。

大正四年東京帝國大學法科大學を卒業するや直ちに實業界に投じ、神國生命保險株式會社に入社し、同社が有隣生命保險株式會社に併合成るや同社に轉じ、爾來、同社書記、庶務課長心得等を歷勤し現に同社庶務課長兼秘書役たり。

趣味多樣にして、就中、能樂に長じ且つ梅若觀世流謠曲の達人とか承はる、劍道は學生時代より最も好んで止まざる運動の唯一のものなりといふ。

夫人つる子は長野縣の人小林孝一氏の令姉にして其の間に晋太郎君、巖君及び和子、道子等あり、現に東京市本郷區駒込動坂町三六一番地に住す。電話小石川一二一八番

松永天章君

日本畫家

當家は代々岐阜縣不波郡垂井村に住し土地の名望家を以て知らる。

君は故喜八氏の二男として松永家に生る。幼少より書畫を好み、七八才にして既に天童の噂村隣に聞へ十三才にして名古屋に師を求め南宗派小田杏齋師の門下に入り、次いで四條派川村光文師に從ひ約十年間書畫に身命を吐露し主として古畫圓山四條派を專心研究、漢學は故加藤知雄師に就き又書法は福岡敬堂師に就き是又雪霜を重ねたり。

斯くて明治三十二年名古屋陸軍幼年學校に聘せられ地理、地文學、歷史地圖等の標本畫に五年間從事し、後ち名古屋枕務署囑託となり名古屋市全圖を一ヶ年半に亘つて編纂し、現時保有せられつゝある地圖は君の手に依るものなり、然して明治卅八年志を東都に向けて發足、川端玉章師の門下を叩き、師の薫陶を受くること多年愈々君の名聲は斯界に擧れり。

尋いで明治三十九年頃より審美書院に入り古畫模寫に從ひ、浮世繪、光琳畫集元信畫集、東洋美術大觀等に模寫せし數枚挙にいとまなし。

明治四十五年宮內省東叡珠光編輯に際し吾國古今の寶物を藏せる正倉院の御物を拜觀する二度の光榮を得且つ、美術協會、展覽會等より受けし賞狀前後十七回に及べり。

斯くて大正十三年三月二十一日久邇宮家より御招きに預り熱海御殿に於て久邇宮殿下全妃殿下、信子女王殿下の御前にて御前揮毫の光榮を浴し、尙ほ昭和三年十月畏こくも　天皇陛下御大典に際し兩陛下御記念の爲め皇太后樣御付女官より御献上すべき宮城御用ひ御立の揮毫を御下命の光榮に浴する等實に一身一家の名譽此上なしと謂ふべし。

斯る榮譽に接するも是皆君の過去に於ける努力と人格のしからしむる所にして偶然にはあらざるべし。

其の最も得意とするところは鯉並に花鳥にして眞に君の心の表徵たり、夫人八重子は宮城縣の人奥村玄周氏の二女にして其の間に通枝子、治子、智惠子あり、現に東京府下澁谷町惠比壽通り一ノ一四番地に住す。電話高輪七七五三番

松木才二君

三井銀行(株)大阪支店次長

君は東京府の人松木重淵氏の二男にして明治二十年四月二十八日を以て生る。

明治四十二年山口高等商業學校を卒業するや三井銀行に入り、爾來、同行神戸日本橋、横濱各支店預金係長を歷任、大正十五年六月歐米各國を巡遊視察して昭和三年四月朝歸す。

然して昭和三年五月同行大阪支店次長に擧げられ以て現在に及ぶ。

夫人君子は鹿兒兒縣の人伊地知季秀氏の令妹にして其の間に重孝君、重雄君及び靜枝子あり、大阪市住吉天王寺二二五

八番地に現住す。電話天王寺一五九五番

增山外三郎君

正六位勳六等
辯護士　辯理士

君は前田藩士增山宗之氏の三男にして明治十四年九月十五日を以て富山市山王町に生る。

明治三十七年早稻田大學法科を卒業するや直ちに官途に投じ、司法官試補となり、仝卅九年十一月判事に任じ、爾來、金澤、若松、福島、山形、浦和各地方裁判所判事を歷補し大正五年東京地方裁判所に轉ず。

斯くて大正八年四月官途を辭し辯護士事務所を開設して一般法律事務に從事せしかば、社會の信望頓に擧り、今や東都法曹界に重きをなし、十二銀行其の他各種商事會社に法律顧問たり。

夫人富士子は長野縣士族林鉀藏氏の長女にして浦和高女の出身たり、現に東京市麴町區富士見町六ノ二番地に住す。電話九段六二八番　事務所を東京市日本橋區川瀨石町五番地に有す。電話日本橋一〇七一番

松長規一郎君

正五位勳五等　三菱造船(株)參事
三菱造船(株)技術課長

君は富山縣の人松長清脩氏の長男にして、明治五年八月七日を以て生る。

夙に第一高等學校を經て、明治卅一年東京帝國大學工科大學を卒業するや直ちに官途に投ず。

爾來、遞信技師兼海事局技師、鐵道院技師兼遞信技師等を歷任し大正五年一月三菱造船株式會社に入社し、同社造船部に精勤、累進して現時同社參事にして且つ技術課長たり。

曩に明治三十九年二月船舶用タービンの研究並に鐵道院連絡船工事監督等の使命を帶びて歐米各國を巡遊し翌四十年八月歸朝す、尙ほ大正三年より同六年まで支那、英領香港等を視察見學して歸朝す趣味に寫眞藝術あり、社交に厚く學士會、造船協會、米國造船協會、機械學會各會員並に加越能鄕友會員たり。

夫人きよ子は富山縣の人堀二作氏の二に女して富山縣立高等女學校の出身、其の間に繁次君、淸君、弘君、秀夫君及び花子、經子、繰子、靜子、秋子等あり。

現に東京市本鄕區向ヶ岡彌生町二番地に住す。電話小石川二三一五番

松村大進君

朝鮮殖產銀行東京出張所長代理

君は宮城縣の人松村文治氏の三男にして、明治二十七年七月二十六日を以て同縣志田郡下伊場野村に生誕す。

夙に縣立古川中學校、仙臺第二高等學校等を經て大正十年京都帝國大學法科大學英法科を卒業す。

斯くて直ちに實業界に投じ朝鮮殖產銀行本店に入り、爾來、同行釜山、仝州各支店を歷勤、昭和三年東京出張所に轉勤同所主任代理として現在に及ぶ。

趣味にスポーツあり、大學時代はボートの選手として鳴らせし程なりといふ。

夫人愛子は宮城縣の人桂馬碩三郎氏の息女、宮城縣立高等女學校の出身たり。

現に東京市外瀧野川町西ヶ原七十七番地に住す。

松井貴太郎君

工學士　建築士
橫河工務所理事

君は大阪府の人松井熊藏氏の令息にして、明治十六年一月十五日を以て生る。

明治卅九年東京帝國大學工科大學建築科を優秀の成績を以て卒業するや、橫河工務所に入り、爾來、同所にありて建築設計並に監督の業務に從事し、累進して大正七年同所理事に就任す。

然して大正二年建築界視察研究の目的を以て歐米を漫遊し、昭和三年同じく米國に航して斯界の視察見學をして歸朝す

其の間君の設計により完璧を期せし大建築は枚擧に遑あらざれども其の主なるものには東京銀行集會所、仝工業倶樂部三井二號並に三號館、三井信託ビルディング及び大阪三越呉服店、三井銀行支店三井ビルディング等にして、何れも其の優秀の技術を以て斯界に賞讃を博せり。

趣味に藝術あり、社交に厚く大阪清交社會員たり。

夫人梅子は兵庫縣士族永野榮太郎氏の息女にして跡見高等女學校の出身、其の間に貴美子、洋子あり、現に兵庫縣武庫郡芦屋一二〇番地に住す。

松代松之助君

日本電氣(株)取締役兼販賣部長
守屋商會(株)監査役

君は京都府士族松代永秀氏の長男にして、慶應三年九月二十四日を以て生る。

夙に東京電信學校を卒業するや直ちに遞信省に職を奉じ、同省通信技師として敏腕を振ひ、後ち海軍無線電信調査委員工手學校教諭、遞信官吏養成所教官等を歷任す。

斯くて官途を辭して實業界に投じ、現に前記の外東京放送局理事、東京電氣業組合副頭取にして、曾つて海軍無線電信機を創製して令名を謳はれしことあり。

趣味多樣なる中にも謠曲、茶道、武藝讀書等を愛好すといふ、以て其の人と爲りを知るべし、社交に厚く電氣倶樂部、鐵道協會、大阪倶樂部、中央電氣倶樂部工友會、電氣協會、電氣學會各會員たり

夫人チヤウ子は神奈川縣の人上原眞助氏の長女にして、其の間に靑一郎君、穆二君、四郎君及び千代子、綾子等あり、東京市外下澁谷一一一四番地に現住す。電話靑山四五四七番

馬渡俊雄君

從四位勳四等　元愛知縣知事
東京電燈(株)橫濱支店長

君は東京府華族男爵加藤弘之氏の三男にして、明治九年十月十四日を以て生れ同十八年東京府士族馬渡俊猷氏の養嗣子となる。

明治三十九年東京帝國大學法科大學政治科を優秀の成績を以て卒業す、先是同三十八年在學中已に文官高等試驗に合格せる程の俊才たり。

明治四十年職を官途に奉じ、滋賀、大阪、山口各府縣事務官より福岡、神奈川各縣警察部長、和歌山、新潟各縣内務部長等を經て大正十年福岡縣知事に拔擢、次いで愛知縣知事に轉じ、同十二年東京市助役に推され、同十三年九月退官す。

斯くて身を實業界に投じ、現に東京電燈株式會社横濱支店長として知らる、趣味に旅行あり、俳句を能くし、社交に厚く、日本橋倶樂部會員たり。

夫人弘子は靜岡縣の人内田正氏の五女にして、東京女子高等師範學校附屬高女の出身、其の間に美子、滋子等あり、現に東京市外淀橋町角筈七二五番地に住す電話四谷六一四番

松戸左中君

松戸裁縫女學校長

滔々として聞ゆる物質文明の叫びよ、世の賢人凡夫の別なく徒らに物質文明に陶醉し、日本古有の武士道地を拂つて正に香だになく、只それ顯職、顯名、高位高官のみが國家の功勞者にして、世の裏面に活躍して常に國家を憂ひ、國民を思ひ、而して其の前途の爲め終始一貫挺身する國士あるを何んと見る。

惟ふに若年より一途に其の天禀の向ふがまゝに本邦裁縫界に其の献身的努力を提げ、常に斯界の改善發達は勿論遠く遡つて古の諸方式を其のまゝに悠久に傳へんと苦心研鑽日も尙ほ足らざるに似たる眞に本邦裁縫教育界の恩人且つは國家の功勞者として吾等は前記校長松戸左中君あるを忘るべからず。

君は千葉縣の出身、明治三年八月十五日を以て生れ、六才にして慈父を喪ひし後は專ら慈母の膝下に愛育せられしも、固より婦女子の力にては其の教養十分ならず、漸やく小學校を卒えるや家計の都合により上京、斯くて越後屋（現三越吳服店）の直屬仕立屋たりし落合幸之助氏の經營する絹織屋に奉公するの身となり後ち三越吳服店に入りて精勤、明治三十一年の交外國人の注文に對して從來曲尺鯨尺等にては米突法に換算するに二重の手數を要し、其の煩はしき切なるものあり しかば君は卒先して米突尺度の使用を三越に於て實行せり、是れ實に本邦にて米突法使用の嚆矢と謂ふべきなり。

然して大正十二年常盤松高等女學校の講師に任じ、明治四十二年三越直轄の裁縫部開設せらるゝや同部に入り、累進して同部長に推され、大正二年辭して神田に和服裁縫傳習所を創立、傍ら實科裁縫講習錄を發刊、仝七年本郷區に日本裁縫女學校を開校せらるゝと同時に同校專任教師となり、時の文部大臣中橋德五郎氏より教員免許狀を賜はり、其の後府下王子十條に松戸裁縫女學校を設立、今や松戸裁縫女學校の聲名と共に我が松戸左中

氏の令名天下に錚々たり。

曩に畏こくも宮内省調度寮の御用命を忝うし畏こくも　大正天皇皇太子當時より常に御衣を謹製せる外各宮家、諸名家に出仕せしは君が三越在勤中のことにして其の永き奮闘的過去の歴史を飾る最もなるものと謂ふべし。

現に前記校長兼校主たる外東京和服裁縫業組合顧問たり、現に東京府下王子町下十條七一五番地に住す。

松山爲章君

加奈陀マニュファクチュラース保險會社主事

君は鹿兒島縣士族明治二年四月十四日を以て同縣に生る。

夙に陸軍幼年學校並に陸軍士官學校を卒業し、明治二十七年スタンダード石油株式會社に入社し同社神戸支店に精勤せしも後ち同社を辭して海外に航し、支那安東縣に於て明治組を組織して陸軍御用商として敏腕を振ひぬ。

斯くて滯留久しく、同縣下に於ける陸軍御用商人として聲名を馳せ、明治四十三年歸朝するや加奈陀マニュ生命保險會社に入社、爾來、同社主事として斯界に活躍以て現在に及ぶ。

夫人をトキ子と呼び其の間に五男五女あり、現に東京市外長崎町荒井一八四二番地に住す。

牧野與吉君

辯護士　辨理士

東都法曹界の重鎭として聲名錚々たるを我が牧野與吉君となす、君は山形縣の人先考忠七氏の二男にして、明治二十一年四月十九日を以て同縣東村山郡大郷村に生る。

夙に郷校を卒ふるや山形縣廳警察部保安課に職を奉じ、後ち縣下各警察署を歴勤せしも青雲の志を抱き笈を負ふて上京し、内務省警察講習所に入りて研鑽、更に日本大學法科に學び同十一年同科を優秀の成績を以て卒業するや直ちに辯護士登用試驗に登第す。

斯くて獨力以て辯護士事務所を開設、爾來、君の博大なる識見と熱誠とを以て一般法律事務に從事せしかば社會の信望頓に擧り、今や東都法曹界に重きをなし前途愈々多望なるものあり。

讀書に趣味を有し、又鄕黨の輩を誘掖指導するに懇切、現に在京山形縣人會の牛耳を握つて令名あり。

夫人るい子は山形縣の人二宮善兵衛氏の令妹にして山形縣立裁縫同等女學校の出身、其の間に肇君及び茂子あり、現に東京市牛込區甲良町二〇番地に住す。電話牛込三四二六番

松下保次郎君

松下工場主
日本エッチビー特許羽版會社取締役

君は東京府の人松下房次郎氏の二男にして、明治二十四年十月六日を以て生る

夙に早稲田大學に學び、大正三年優秀の成績を以て同學機械科を卒業するや直

ちに東都財界に投じ、獨力松下工場を創設經營して、專ら計量器並に諸機械器具の製作に盡瘁し、陸海軍各省御用として信用を博するに至る。

然して大正八年株式會社朝日商會を創立し、本社を東京市神田區錦町に、工場を東京市外下澁谷に置き、君自らは同社專務取締役として經營の衝に當りしも大正十一年辭して再び個人經營の下に前記下澁谷工場の敷地約壹千坪の中其の大半を分割し以て諸建築用金具の製造販賣を開始し斯業界に貢献する處尠少なりき。

然るに近來本邦ラヂオ界の發達は長足の進歩を示し、爲めに從來盛況を極めたる蓄音器界に一時的暗影を投げ且つ一般財界の不況に直面せるに拘らず、將來我が蓄音器界の有望なるに着目したる君は大正十三年從來の事業を放擲して奮然斯業界の爲め起ち一結果今日に於てはラヂオの普及に伴ひ、反動的に益々斯界の發達を誘起するに至り、今や君の慧眼と不斷の研鑽に加ふるに其の着實なる資性とは愈々一般の信望を集め前途益々多望なるものあり。

夫人をしげ子と呼び東京府の人元衆議院議員三輪信次郎氏の長女にして君との間に保定君あり、現に東京市外北品川四四番地に住す。電話高輪五七一八番

松平康昌君

從四位　法學士

世の所謂長袖者流と其の趣を異にし、極めて平民的にして、專攻たる政治學には該博なる學識あるも敢て衒はず、資性極めて謙讓にして溫雅なる吾が松平康昌君は當代華胄界の擧出せる逸足の士にして貴族院議員侯爵松平康莊氏の嫡男として、明治廿六年十一月を以て生る。

幼少既に穎悟、小中學を卒りて、更に東京帝國大學法科大學に入學し大正八年好成績を以て同大學政治科を卒業す。

尋いで一年志願兵として近衛歩兵第三聯隊に入營、除隊後日本大學及び明治大學各講師となりて教壇に政治學を講じて子弟薫育の任に當り、後ち日本大學を去り大正十三年夫妻相携へて歐洲各國に航し、當初英國に駐りてロンドン大學に入學、以て政治學を專攻すること二ケ年の後ち、佛蘭西に轉じ斯學の研鑽に沒頭するありて昭和三年十一月米國を經由して歸朝せり。

君は趣味として運動あり、就中庭球を好む、又淡水小魚の研究を爲しつゝありて曩に外遊歸朝の途次、米國に於て是等小魚の異種を求め現に自邸内に之れを飼育せり。

家庭には溫淑の聞え高き綾子令夫人あり、貴族院議長公爵德川家達氏の愛孃にして學習院女學部出身の麗人、其の間に康愛君を擁し情愛極めて濃かなる一家を成す、現時東京市芝區白金三光町二五一番地に住す。電話高輪二七六七番

松本福松君

いわしや松本器械店(資)代表社員
守國製作所(株)取締役會長

本邦藥種醫療器械商として、いわしや總本店松本市左衛門氏と共に合名斯界に冠たるを我が松本福松君となす。

君は東京府の出身、明治元年二月十八日を以て生る。

夙に本邦醫療器械商界に活躍して聲名を馳せ、現時前記の外王子倉庫株式會社長並に松本製作所(資)代表社員にして且つ、いわしや松本藥品部(名)代表たり。

曩に東京醫療器械同業組合長として斯界の發展に盡瘁すること甚大、現に同組合評議員にして且つ日本橋區本町三丁目町會委員たり。

夫人をみつ子と稱し其の間に篤太郎君善次郎君、正三郎君、武四郎君及びやゑ子、ふみ子、よね子等あり、現に東京市日本橋區本町三丁目十二番地に住す。電話日本橋二四九二番　二四九三番　二四九四番

松村逸雄君

東京電氣株式會社勤務

君は明治十七年三月六日を以て熊本縣玉名郡腹赤村に於て孤々の聲を擧ぐ、故松村時次氏の次子に當り、夙に鄕校に學び鹿本中學校を出で第五高等學校を卒ふるや東京帝國大學法科大學に入學、同四十五年同大學政治科を卒業す。

斯くて直ちに歸省して家業に從事せるも後ち東上して、大正六年東京電氣株式會社に入社す、大正十二年同社總務部に轉じ現に其の社務を管掌し、入社以來業務に忠なる一日の如く信倚醇勵大いに努め盡瘁多大なるものあり。

君は溫容寛に玉の如き好紳士にして其の處世並に業務上に對し、漸を追ふて進むの主義を奉戴し、奇矯、急進、過激を排斥す、趣味頗る廣汎にして諸藝を好むが如し。

家庭にはミネ子夫人あり、同鄕の人故中村喜萬太氏の息女にして其の間に令嗣時喜君、長女妙子、次女久美子の一男二女を撫育して極めて平和なる一家を形成す、現に東府市外大久保百人町三三九番地に居をトす。

松永和一郎君

東京市牛込區長

君は栃木縣の人松永榮次郎氏の長男にして、明治六年六月を以て生る。

明治三十一年中央大學法科を卒業するや地方政界に活躍すること多年、曩に政友本黨栃木縣支部長、同縣會議員及議長同參事會員、兩毛印刷株式會社取締役等を歷任す。

斯くて大正十五年縣民多數の輿望を擔つて宇都宮市長に推され、昭和四年二月十八日辭し、同年に三月扳擢せられて東京市牛込區長に榮轉以て現在に及ぶ。

夫人ヨネ子は栃木縣の人島田分造氏の叔母君に當り、其の間に榮一君、芳子等あり、現に東京市小石川區雜司ヶ谷町一一〇番地に住す。電話牛込五八七七番

松平齊光君

男爵　正五位

法政、日本、農科各大學講師

當家は作州津山藩主松平確堂氏の四男齊氏の立つるところなり、齊氏は明治二十一年分れて一家を創立し、後ち嚴父確堂氏の勳功により特旨を以て華族に列し男爵を授けらる。夙に東京帝國大學理科大學を卒業し、更に大學院に入りて之を卒へし華胄界の逸足たりき。

君は其の長男にして、子爵松平康春氏の從弟に當り、明治三十年二月を以て生れ、同三十六年家督を相續し襲爵仰せ付けらる。

夙に學才群を拔き、大正十年東京帝國大學法科大學法學部政治科を優秀の成績を以て卒業するや同大學副手を拜命、現時は前記各大學講師として政治學を講じ其の新進の學說並に實際とは常に滿堂の學徒の血を湧かし、今や新進の學者であり且つ華胄界の花形として令名あり。

趣味多樣にして就中、スポーツを好み庭球に長じ、殊に甲種運轉手の資格を有し自動車の運轉に妙にして又洋畫を能くするが如し、學士會、華族會館各會員たり。

夫人直子は侯爵德川圀順氏の叔母君に當り、女子學習院の出身にして才媛、其の間に光子、英子、華子あり、現に東京市外戸塚源兵衛一九一番地に住す。電話牛込二七七五番

松井康昭君

正五位　子爵

當家は源義家の後裔にして、從三位康英氏に至り川越八萬四千石を領し、先代康義氏は明治十七年子爵を授けらる。

當主松井康昭君は其の嫡男にして、明治三十年十二月を以て生誕、母堂を正子刀自となす。

君は幼にして學を好み、夙に學習院に入り大正七年同校高等科を卒ゆるや東京帝國大學經濟學部に入り、後ち文學部に轉じて心理學、社會學を專攻するところありて同十三年之を卒業せり、斯くて後ち尙ほ國体、思想等の諸問題に關して研鑽を爲し、次いで陸軍士官學校に於て其の薀蓄を披瀝し、就中、同校在學の中華民國留學生に對し恒に親日的講話を試み現に之が盡瘁を怠らず。

君は趣味洵に豐かなるも特に和洋音樂を好み又淸元に堪能なり、社交に廣く永樂、同氣各倶樂部會員たり。

夫人を璋子と呼び伯爵伊達興宗氏の令姉にして其の間に康輝君、康博君あり、現に東京市小石川區丸山町十八番地に住す。電話大塚九二二番

松崎了四郎君

秋田電氣株式會社長

院內電氣株式會社長

君は福島縣の人松崎丑松氏の五男にして、明治二十二年一月八日を以て生る。

大正二年第三高等學校を卒業するや直ちに日立銅山事務所に入り翌年河原田水力電氣株式會社技師長兼支配人に轉ず。

斯くて大正八年には秋田電氣株式會社を創立して同社々長に任じ、更に越えて仝十四年十一月院內電氣株式會社を興して同じく同社々長に任じ、現に同社に社長として敏腕を振ふ外松崎合資會社代表社員にして且つ刈和野電氣株式會社々長秋田信託、東北電氣各株式會社重役として地方財界に重きをなす。

君は地方自治制に參劃し功勞尠からず秋田市會議員、同參事會員たる外松山自彊信用購買組合幹事たり。

夫人エイ子は秋田縣の人滑川惣太郎氏の令妹、其の間に英郎君、光伸君、行身君及び歌子等あり、現に秋田市茶町扇ノ丁三十一番地に住す。電話四九四番

松井春生君

從五位勳五等　資源局書記官

兼法制局參事官　總務課長兼企劃課長

君は事務を處理するに所謂裁斷流るゝが如く、其の明哲にして鋭敏なる頭腦は日本に於ける事務官中追隨を許さゞるものありとの定評巷間に專らにして官民亦齊しく之を認むるところ、以て君の顯才を窺知するに足る、新進有爲の士吾が松井春生君は三重縣志摩郡波切村に生る、時惟れ明治二十四年五月にして嚴父を故松井文四氏、母堂をさぶ子刀自と爲し其の嫡男に當れり。

君の鬼才は幼にして鄕黨に鳴り疾くも其の前途を刮目されしが、小中學高等學校の敎育課程を經て儁秀益々頭角を抽んで東京帝國大學法科大學政治科に入學し大正五年優秀の成績を以て之を卒へ又同年文官高等試驗に登第するありて官途に就き、當初內務省地方局及び東京府に入り、大正七年千葉縣理事官兼視學官に任ぜらる。

斯くて大正九年法制局事務官に轉じ次いで昭和二年に至り資源局書記官兼法制局參事官となる、然して同年歐米各國に出張を命ぜられ資源對策に關し具さに視察研鑽をなし翌二年歸朝、現時總務課長兼企劃課長の任にありて卓才を發揮しつゝ令聲大いに嘖々たるものあり。

君は好んで三十六文字に其の雅懷を遣り、觀劇に趣味あり、又余暇あれば文藝に關する讀書をなす。

夫人花子は實業家波多野承五郎氏の息女にして双葉高等女學校の出身たり、現に東京市麻布區笄町一七六番地に住す。電話青山一三七四番

松瀨勇雄君

工學士　日本ウエスチングハウス

電氣株式會社營業部長

本邦電氣機械輸入販賣業界に活躍して新進の聞えあるを前記會社營業部長松瀨勇雄氏となす。

君は佐賀縣士族松瀨孫一郎氏の長男にして、明治十四年一月を以て生る。

夙に第一高等學校を經て明治三十九年東京帝國大學工科大學電氣科を優秀の成績を以て卒業するや直ちに高田商會電氣部技師に聘せられ、大正十五年六月日本ウエスチングハウス電氣株式會社營業部

長に榮轉し今や同社の內外に重きをなす

趣味に讀書、散歩あり、社交に厚く電氣倶樂部會員たり、曩に電氣に關する著書を刊行せしことあり。

夫人をすみ子と呼び其の間に一男三女あり、現に東京市小石川區原町十番地に住す。電話小石川二〇六三番

增岡章太郎君

辯護士

今や東都法曹界に活躍して、能く法理に精通し、辯論又火を吐くが如き明快決裁の士に我が增岡章太郎君あり。

君は埼玉縣の產みし異彩にして、生家は代々土地の里正を勤めて鄕黨に尊稱せられし舊家にして、增岡兼吉氏を慈父となし、其の長男として明治二十六年六月二十八日を以て生誕す。

夙に慶應義塾商業學校を經て大正七年日本大學法科を卒業するや宮內省に職を奉じ、宮內屬となり、傍ら法律の研究を怠たらず、斯くて大正九年十二月辯護士登用試驗に應じて首尾よく登第す。

然して直ちに辯護士事務所を開設して民事及び商事を得意として其の超凡の才腕を縱橫に振ひしかば、社會の信望頓に擧り、今や東都法曹界の新進を以て聞えて正に來らん機に一大飛躍に据えるところ君の前途は正しく洋々たるものありと謂べし。

趣味に釣魚、圍碁あり、何れも堪能なるが如し。

夫人文子との間に章政君、紳次郎君あり、現に東京市四谷區坂町四十四番地に住す。電話四谷二八〇六番

前田青莎君

國際信託(株)取締役會長

君は東京府士族前田獻吉氏の長男にして、慶應元年七月を以て生る。

夙に獨國に留學し伯林大學に法律學を專攻、歸朝後主獵官、東宮侍從、農商務大臣秘書官等を經て實業界に投じ、現に前記の外帝國倉庫運輸社長、泰昌銀行、東海生命各株式會社の重役たり。

現に東京市外目黑町下目黑一一一番地に住す。

松尾光君

小田原急行鐵道(株)調度課長

君は東京府の人德川廣光氏の四男にして、明治二十五年二月二十三日を以て生れ、後ち先代松尾忠次郎氏の養子となる

夙に曉星中學校を經て慶大に入り、大正五年同校理財科を優秀の成績を以て卒業す。

斯くて直ちに實業界に投じ、日本郵船株式會社に入り、爾來、同社小樽、上海各支店並に本社等に歷勤し、大正十五年九月小田原急行電氣鐵道株式會社に轉じ昭和二年三月同社調度課長に昇進以て現在に及ぶ。

趣味にスポーツあり、特に庭球、水泳に堪能なるが如し、慶應倶樂部會員たり

夫人文子は鬼怒川電氣株式會社專務取締役にして辯護士たる利光學一氏の息女にして跡見高等女學校の出身、其の間に純行君、眞行君及び輝子あり、現に東京市外千駄ケ谷町千番地に住す。電話四谷四三六番

增田義一君

衆議院議員

實業之日本社々長

日本のマーデンと謳はれ夙に令名ある君は新潟縣の人、增田清四郎氏の次子にして、明治二年十月を以て同縣中頸城郡板倉村に生誕せり。

夙に小學校訓導たりしも後ち高田新聞社に聘せられ同社記者となる、次いで之を退きて東上、早稻田大學前身東京專門學校に入學し優秀の成績を以て、同校を卒業し、更に研究科に入りて財政學を專攻せり。

斯くて同二十八年讀賣新聞社に入社し同社經濟財政部主任として活躍せるが同三十三年實業之日本社を創設して其の社長の重任に就き拮据之が經營に努め遂に今日の盛大を招來するに至れり。

曩に歐米各國に航し又鄕黨より推されて衆議院議員に當選し、立憲民政黨に屬し現に其の職にあるの傍ら幾多の公職に擧げられ盡瘁寔に多大なるものあり。

君は又上揭の外日淸生命保險、日淸印刷、秀英舍、東京地下鐵道、馬來護謨公司、太陽製帽各株式會社取締役將又富國徵兵保險相互會社監査役等實業界各方面に關與するところ廣汎なり。

君は余暇あれば讀書に親しみ又旅行を好む、夫人浪江子との間に義彥君、淸三君、英男君、八郎君等あり、現に東京市小石川區原町一二五番地に住す。電話小石川六九番

增田正雄君

ホオセメント(株)社長

三菱興業(株)專務取締役

新興大日本の財界第一線に活躍して敏腕當る者なく、新進實業家の聞え錄々たるを我が增田正雄君となす。

君は東京府の出身にして白澤家の出、明治二十三年十月十三日を以て生誕、後ち增田家に入りて其の家督を相續す。

夙に學業を卒ふるや直ちに東都實業界に投じ、大飛躍を試み明快にして果斷なる君の俊腕は、企劃する如何なる事業も一として成功せざるはなく、今や前揭諸職にある外日露實業、橫須賀酸水素各株式會社專務取締役にして且つ日本電解製鐵所(株)取締役たる外橫濱蠶糸工業所專務理事等の要職にありて我が財界に令名あり。

春秋尙ほ壯かにして而も其の溫厚にして篤實、社交に通ずる君の前途や蓋し多望なりと謂はざるべからず。

夫人をたま子と稱し其の間に一男三女

あり、現に東京市赤坂區青山南町六ノ二六番地に住す。電話青山三八三一番

又木周夫君

日本自動車(株)取締役

君は鹿兒島縣の人故又木次太郎氏の次男にして、明治二十七年一月十六日を以て大阪市に於て孤々の聲を擧ぐ。

先考次太郎氏は夙に實業に携り大阪に出でゝ燐寸製造業を營めるが、君は其の撫育の下に該地に成育し十六才當時東上東京高等師範學校附屬中學校、第一高等學校等を經て東京帝國大學法科大學に入學し獨法科を專攻して大正八年之を出づ

斯くて同年直ちに住友合資會社に入りしも後ち同社を辭して新高製糖株式會社に轉じ同社取締役に推さる、次いで昭和二年七月之を退き又木事務所を開設するところあり、然して翌三年四月日本自動車株式會社取締役に擧げられ、現に其の任にありて拮据社業の伸展に盡瘁しつゝあり。

此の間製糖事業視察の目的を以て南洋南米、支那及び北米の各地に航せること

あり。

君は居常所謂產業立國の趣旨に依り夙に「國產品の確立」に意を須ひて隱約の間之に盡すところ寔に多大なるものあり現に日本自動車株式會社は純國產品たる自動自轉車「ニューエラー」號を製出し輸入品の防遏をなしつゝありて逐次之を一般自動車工業に及ぼさんと企畫す、同社の樞機に參ずる君の如上の意圖は漸を追て達成せられつゝあるものと謂ふべし

君は趣味として登山を好む、詢交社、日本倶樂部等の各會員たり、夫人龜子は高島小金次氏の長女にして山脇高等女學校の出身たり、其の間に康臣君、敏隆君及び規伊子、千惠子等あり、現に東京市麴町區永田町二ノ二十五番地に住す。電話銀座二七二〇番

町田唯介君

松竹キネマ(株)常務取締役

君は山梨縣の出身にして、明治二十年二月十日を以て同縣山梨郡松里村に於て生誕し、父を佐左衛門氏となし其の六男に當る。

夙に學を好み小中學校を卒ふるや早稻田大學商科に入學し同四十四年三月之を退き後ち實業界の人となれるが、大正元年ルナパーク株式會社に入社し累進して同社會計課長となれり、次いで同七年同社取締役支配人に推され同十一年常務取締役に擧げらる。

然して翌十二年松竹キネマ株式會社に轉じ同社經理部長たりしが同十五年常務取締役の重任に就き拮据社務を統宰し以て現時に至りしなり、尙ほ傍ら日本運輸倉庫取締役、上毛紡績、東京製飴、明治座、新富座各監査役を兼ぬ。

現に東京市外瀧野川町上中里二十番地に住す。電話王子一一〇四番

增山金次郎君

增山自動車ホキール製作所長
陸軍自動車學校御用店

君は東京府の人增山傳次氏の二男にして、明治二十一年二月を以て芝區新堀町に生る。

抑々嚴父傳次氏は夙に馬車製造業に從事して斯界に令名を馳せし人物にして、君も亦嚴父を援けて斯業に從事せしも同業の時代の進運に伴はざるに慨して斷然之を廢止せり。

斯くて明治四十二年本邦自動車界に貢献せんとの大志を抱き、即ちホキール製作所を創設し、爾來、熱誠以て斯業の改善發達に從事せしかば信望忽ちにして擧り業勢月に年に加はり、今や東都斯業界に重きをなすに至れり。

尙ほ傍らタイヤーの販賣に全力を注ぎタイヤー、NCタイヤー等優秀なる製品を市場に送り信用を博しつゝあり。

君又公共事業に盡瘁すること甚大、大正十二年芝區新堀町々會議員となり現時其の任にあり。

夫人をくに子と呼び其の間によね子、信枝子あり、現に東京市芝區新堀町三三番地に住す、電話高輪五九三〇番

松浦寅三郎君

從三位勳二等
女子學習院長

君は伯爵松浦家の一門にして、佐賀縣の人松浦縮藏氏の三男に當り、慶應二年八月四日を以て生る。

明治廿八年東京帝國大學法科大學英法科を卒業するや直ちに本邦教育界に投じ爾來、愛知縣立中學校長、莊內中學校長山口高等學校教授同教頭、同高等商業學校教授兼生徒監、第五高等學校長、神宮皇學館長等を歷任す。

然して大正八年皇子傅育官長を拜命し仝十二年八月女子學習院長を兼任し、仝十四年皇子傅育官長を辭し、現に女子學習院長として令名あり。

趣味として詩を作り、恭齋の雅號を以て知らる。

夫人イチ子は長崎縣士族相知修一氏の二女たり、現に東京市芝區高輪御料地內官舍に住す。

益田太郎君

法學士
辯護士　辨理士

君は熊本縣の人先代益田陽一氏の三男にして、明治十七年二月一日を以て生る

夙に鄕校を卒ふるや笈を負ふて東上し明治四十五年東京帝國大學法科大學獨法科を優秀の成績を以て卒業するや同年直ちに文官高等試驗に應じて見事登第の榮譽を擔へり。

斯くて大正三年より東都法曹界に投じ初め關直彥法律事務所に入りて實務を見習ふこと年余、後ち獨立して法律事務所を開設し、君が奇才と熱誠とを提げて一般事務に當りしかば忽ちにして社會の信用を博し、今や帝都法曹界に於ける權威

として斯界に令名あり。

然して各種會社に法律顧問として其の蘊蓄を傾け現に日榮商事、ツウリング自動車各株式會社及び天賞堂、横山鑛業部各合名會社に顧問たる外産業組合中央金庫、信和金庫其の他幾多の法人又は個人に法律顧問として常に信頼を受けつゝあるは蓋し君の穎才博學に基因するは勿な論りと雖も又其の人格の然らしむる所と謂はざるべからず。

趣味に圍碁、撞球、將棋、讀書等あり余暇あれば即ち斯道に專念たるが如し。

夫人ミユ子は熊本縣の人三津家傳之氏の長女にして其の間に一男三女ありて昭一君、タミ子、博子、京子と呼ぶ、現に事務所を芝區琴平町二番地に有し電話芝一七二八番にして、東京府下世田ヶ谷若林六一三番地に現住し、電話世田ヶ谷六五三番たり。

馬淵鋭太郎君

從三位勲二等　錦鷄閣祇候
財團法人濟生會理事長

君は岐阜縣士族馬淵致正氏の長男にして、慶應三年一月を以て生る。

明治二十六年東京帝國大學法科大學を卒業するや直ちに官途に投じ、爾來、兵庫、奈良、京都各府縣參事官、栃木、山口、長崎各縣書記官、山形、山口、三重廣島、京都各府縣知事及び京都市長等を歴任、後ち錦鷄閣祇候仰せ付けられ以て現在に及ぶ。

夫人よし子は東京府士族森信義氏の三女にして其の間に行道君、美意子、鶴江子、香澄子等あり、現に東京市外澁谷町宇田川一九番地に住す、電話青山二一八八番

松邑孫吉君

東京辭書出版(株)常務取締役
三松堂書店經營者

今や本邦出版界にありて錚々の名あるを我が松邑孫吉君となす。

君は愛知縣士族草場金藏氏の二男にして、明治六年十二月を以て生れ、後ち實業家松邑孫吉氏の養嗣子となり同三十四年家督を相續し先代を襲名す。

夙に本邦出版界に活躍し、明治二十一年博文館に入り孜々として勤めしも、同二十八年先代孫吉氏の遺業たる書肆三松堂書店を繼承して其の經營の衝に當り一意專心同店の發展に盡瘁せしかば年を追ふて隆々たる盛況を見るに至れり。

然して現時は東都出版界の白眉を以て目せられ其の出版販賣に係る書籍及び雜誌の數多く何れも讀書界に聲名あり。

君は其の經營に任ずる外東京辭書出版株式會社常務取締役にして且つ日本ノート學用品株式會社の重役として知らる。

尚ほ傍ら出版協會評議員、東京書籍商組合評議員、東京書籍商共立會幹事たり趣味に旅行讀書あり、夫人をたけ子と呼び養父孫吉氏の二女たり、京橋區南鍛冶町一番地に住す。電話京橋三五二五番

前川一郎君

學海指針社長

君は福島縣の人前川常藏氏の長男にして、安政五年十二月十九日を以て同縣白河町に生誕す。

夙に阿部藩の儒者大平滿治氏に師事して經史詩文等を修め、後ち栃木縣師範學校に入り、同校を卒業するや同縣下教育界に投じて育英事業に盡瘁すること十有余年、其の間文部省並に栃木縣廳より受賞さるゝこと數回、君が縣下教育界に貢献すること甚大なりき。

斯くて明治二十年上京、學海指針社を創立して、小學校の教科書數十種を編纂出版せしかば、何れも全國各小學校に採用せられ、更に理化學器械及標本等の教育材料を製作販賣し、陳列場を開設する等本邦教育界に貢献すること尠少ならず

常に教育の振展に心を碎き、殊に地理學の研究並に地形の模型を製作することに專念たり。

現に東京市神田區昌平河岸四號地に住す。電話下谷三六一〇番

松平忠諒君

子爵　正五位

當家は德川家康六代の祖松平和泉守信光の七男元芳の後たり、世々三州深溝の城主として深溝の松平と稱せり。

五代の孫主殿頭家忠關ヶ原の役に伏見城に於て烈死し、其の子主殿頭忠利三州吉田三萬石に封せられ、其の子大炊頭忠房に至り、肥前國島原六萬五千石に轉封夫より十一世を經て先代忠和氏に至る。

忠和氏實は水戸權中納言齊昭の第十六子にして、當家を繼ぎ更照宮々司、判事宮内省御用掛等に任じ、明治十七年子爵を授けらる。

君は其の令孫にして忠威氏の長男に當り明治三十六年一月を以て生れ大正六年祖父の後を繼ぎ襲爵仰せ付けらる。

夙に學習院を卒業し、音樂に趣味深く特にヴイオリンの達人として聞え、寫眞藝術に造詣深しといふ。

夫人千代子は男爵千家尊統氏の令妹たり、現に東京市外千駄ヶ谷町穩田一七三番地に住す。電話青山三二番

松本市左衛門君

いわしや總本店主

君は東京府の人先代松本市左衛門氏の長男にして、明治二十二年三月を以て生れ大正十一年家督を相續すると共に前名榮一を改めて襲名す。

大正元年富山藥學專門學校を卒業するや直ちに祖父の業たる藥種醫療器械商いわしや總本店を繼承して斯界に活躍以て現在に及ぶ。

夫人かの子は東京府の人岡本彌兵衛氏の令妹たり、現に東京府の人岡本彌兵衛氏の令妹たり、現に東京市日本橋區本町三ノ十八番地に住す。電話日本橋六五七番六五八番

藤井善助君

大津電氣軌道株式會社長
湖南鐵道株式會社長

勳四等滋賀縣多額納稅者藤井善助君は滋賀縣の人藤井周次君の長男にして明治六年三月を以つて生る。夙に京都市立商業學校を卒へて更に菁々塾に學び、曩に朝鮮支那歐米各地を巡遊視察する所あり又曾つて村長に推され財團法人憲章社郡立商業學校等を設立し教育界に貢献すること甚大、曩に滋賀縣郡部より推されて衆議院議員に當選すること三回に及び、大正三四年事件の功に依り勳四等に叙せられ瑞寶章を賜はる。

現に前記各會社の社長たる外日新電機東洋紡機、日本絹織、日本共立生命保險三菱製革各株式會社の社長にして尙ほ近江商業銀行、中之島製紙、日本メリヤス日本ビロード、島津製作所、日本格魯謨西村商事、江南、近江各倉庫土地、京都電燈、京都信託、日本麻絲、大湖汽船、帝國紡織機製造、藤井保全各株式會社の重役として我が財界に令名あり。

夫人しづ子は滋賀縣の人珠玖清左衛門君の長女にして君との間に一女ありて惠美子と呼ぶ。現に滋賀縣神崎村北五個莊町に住す。

布施慶助君

正五位勳三等功四級
後備陸軍中將

君は山梨縣の人布施長兵衛君の二男にして慶應元年四月を以つて生る。明治二十二年陸軍士官學校に入り、同校を卒業するや直ちに陸軍輜重兵中尉に任ぜられ明治二十八年陸軍大學に學び同校を卒業す。爾來累進して陸軍中將に陞り其の間第二師團馬廠長、大阪兵器支廠々員、輜重兵監、陸軍技術審査部々員等を歷任せり。

夫人をちよ子と稱し君との間に一男ありて一巳君と稱し慶應義塾大學理財科の出身たり、現に東京市外中澁谷四〇二番地に住し電話青山二五〇三番なり。

野口長次郎君

玉川水道株式會社常務取締役

新進實業家として令名嘖々たる我が野口長次郎君は東京府の人野口春次郎君の長男にして、明治十六年三月二十一日を以つて東京市下谷區に生る。明治四十年大倉商業學校を優秀の成績を以つて卒業するや直ちに身を實業界に投じ、株式會社廻郵組を創立して其の取締役社長の要職にありしが後之を辭し、玉川水道株式會社に入りて君が敏腕を縱横に振ひ同社發展に盡瘁すること甚大、累進して大正十四年六月取締役兼支配人となり更に推されて同社常務取締役の要職に擧げられ現在に及ぶ。

君に趣味あり、謠曲は其の最も得意とするところ殆んど素人の域を脫する程なりといふ。夫人テル子は東京府の人仁神多以君の三女たり、現に東京市四谷區新宿町二ノ六〇番地に住し電話四谷一二四三番なり。

福永文之助君

警醒社々長

當家は代々和歌山縣海草郡朝日村の舊家として知られ、舊幕時代には庄屋を勤めたる家柄なりき。君は先代猪左衛門君の三男にして文久元年十一月を以つて生る。夙に青雲の志を抱き奮然起ちて笈を負ふて神戸に出で、直ちに七一雜報社事務員となり明治十七年更に大阪に移り、同二十一年東京に出でて當時出版界に令名ありし警醒社を讓り受け、獨力以つて開業し專ら基督敎に關する書籍出版販賣をなすに至る。

爾來同社經營の衝に當り奮鬪大いに努めしかば社運漸次擧り社會の信用益々厚く、今や銀座街頭に大書籍店舗を有し內外のあらゆる書籍雜誌の販賣並に圖書出版を營み、其の令名斯界に嘖々たるものあり。現に東京市京橋區尾張町二ノ一五番地に住し電話銀座一五八七番なり。

降旗元太郎君

從四位勳三等
衆議院議員

君は長野縣の人降旗孝吉郎君の長男にして元治元年五月を以つて生る。夙に鄕校を卒ふるや更に東京專門學校に學び、曾つて長野縣會議員、同參事會員に選ばれ又所得稅調査委員、蚕種業組合長に擧げられしことあり。

尙ほ曩に東筑農事改良會信濃蚕業傳習會を興して大いに農蚕業を奬勵することは甚大、又數種の新聞を發刊し現に信濃日報社長として地方操觚界に令名高く、且つ長野縣郡部より推されて衆議院議員に當選すること前後十一回に及び憲政會に屬す、尙ほ陸軍政務次官に任ぜらる。

夫人いま子は長野縣の人山崎直五郎君の二女にして君との間に長男祐彌君、二男金彌君、三男英彌君及び長女安子等あり。

野田正一君

株式會社碌々商店社長

君は東京府の人野田彦三君の長男にして明治八年九月を以つて生る。夙に實業界に志し明治三十六年碌々商店を創立し諸機械販賣業を始め本店を東京に支店出張所を大阪、札幌、小倉及横須賀等に置きて活躍せしかば業運頓に擧り斯界の信用愈々厚く、大正十三年選ばれて東京金物機械商同業組合長となる。

君は時代の進運と事業の發展擴張とに鑑み同店を株式組織に改革し、大正六年愈々陣容を整へて株式會社碌々商店と改稱し、自ら其の社長として奮鬪大いに努め以つて今日に及ぶ。趣味として謠曲、圍碁及旅行等あり。

夫人ひろ子は東京府士族山田定一君の令妹にして君との間に長男精一君、二男順次君、三男勝三君、四男俊彦君、五男福五郎君、長女まち子等あり、現に東京市京橋區新肴町三番地に住し電話銀座五五七三番六二一三番等なり。

野村禮讓君

正六位勳五等功七級
學習院名譽敎授

君は岐阜縣士族野村鶴壽君の二男にして明治十一年九月五日を以つて岐阜縣安八郡南平野村に生る。明治四十二年東京帝國大學文科大學東洋史科を優秀の成績を以つて卒業するや、直ちに宮內省に入り宮內事務官となり久邇宮附を仰せ付られしが大正十四年七月學習院名譽敎授に任ぜられ今日に及ぶ。曩に一年志願兵として入營し、たま〳〵日露兩國の開戰となるや君從軍して快戰大いに功を立て勳五等功七級を賜ふ。

夫人國子は岐阜縣の人楠正圓君の二女にして君との間に長男東洋君、二男正之君、長女道子、二女康子等あり、現に東京市麻布區廣尾町五九番地に住し電話青山六一四八番なり。

古谷三四郎君

實業家

君は東京府の人古谷幾次郎君の二男にして明治十五年十二月廿日を以つて生る嚴父幾次郎君は夙に我國建築物の歐風に倣ふもの多きを見、即ち洋式建築に必要なるペンキ塗工の技を研究し其請負業を開始せり。君は其の薫陶を受け夙に洋式建築に關する幾多の學識を究め、且つペンキ塗工の實際に精通し今や斯界の第一人者と目せらるゝに至る。

然して常に外遊研究の念を抱きし折柄明治四十四年日英博覽會が倫敦に開催せらるゝや之を好機となし英國に航し、親しく斯業を視察研究すること一年有半にして歸朝し、獨立開業するに至り精勵よく事に從ひしかば幾何もなく斯界に名聲を博し、社會の信用と賞讃を一身に擔ひ今や復興途上にある君の前途蓋し多望なりと謂ふべし。

夫人しま子は籾山平吉君の二女にして君との間に長男貞吉君、二男吉次郎君、三男八郎君及び住子、政子、シゲ子、祿江子、照子等あり。現に東京市神田區錦町二ノ三番地に住し電話神田六一九番たり。

福原八郎君

鐘淵紡績株式會社取締役

君は靜岡縣の人本木伊作君の長男にして明治七年十一月を以つて生れ後先代信藏君の養子となる。明治三十二年東京商科大學の前身たる東京高等商業學校を卒業するや直ちに實業界に走り現に鐘淵紡績株式會社取締役たり。

夫人しづ子は養父信藏君の長女にして君との間に一男六女あり、現に本宅を神戸市西須磨中稻荷に有す。

二神駿吉君

臺灣肥料株式會社長
大日本人造肥料會社專務取締役
日本硫肥株式會社常務取締役

君は愛媛縣の鄕士二神深藏君の二男に

して明治元年六月を以つて生る。明治二十四年中央大學の前身たる東京法學院を卒業するや直ちに實業界に志し四國通運株式會社に入社し、後東京モスリン紡績株式會社に轉じ同三十四年更に三井物產會社に入社し東京、九州、大阪各支店に勤務し大正三年名古屋支店長に進み爾來本社石炭掛長、門司支店長等に歷任す。

然して大正十年同社を辭して大日本人造肥料株式會社專務取締役に就任し現に其傍ら前記各會社の社長及常務取締役にして尙ほ日本硫黃、神島人造肥料、合同肥料、關西硫酸販賣、大日本特許肥料、東京硫肥、硫酸販賣各株式會社の重役として知らる、趣味多樣にして就中俳句、謠曲等に長ずといふ。

夫人くに子は大阪府の人林喜八君の三女にして其の間に春太郎君、武君、二郎君、靜子等あり。現に東京市牛込區矢來町八番地に住し電話牛込四三六三番なり

野村嘉六君

正五位勳三等　衆議院議員
商工省參與官

君は富山縣の人野村政次郎君の令弟にして明治六年八月を以つて生る。夙に中央大學の前身たる東京法學院を卒業するや官界に入りて判事となり、名聲を馳せしが後幾何もなく之を辭して辯護士を開業せり。

曩に富山縣會議員及富山辯護士會長に推されしことあり、又衆議院議員に當選すること前後五回に及び現に其の職に有りて憲政會に屬し商工省參與官として知らる。

夫人愛子は富山縣の人前田則邦君の四女にして其の間に敬六君あり、現に東京市赤坂區新坂町六四番地に住し電話青山五七九〇番なり。

野間清治君

大日本雄辯會長
東京工業株式會社長

君は群馬縣士族野間好雄君の長男にして明治十二年一月十七日を以つて群馬縣桐生町に生る。明治三十三年鄕里の師範學校を卒業し暫く小學校に敎鞭を執りしが、明治三十五年東京帝國大學文科大學敎員養成所に入り卒業後沖繩縣立第二中學校敎諭に赴任し、更に同縣視學に就任したりしも間もなく之を辭して東京に上り、同四十二年大日本雄辯會を興して雜誌「雄辯」を發刊し、爾來着々驥足を伸ばし同四十四年更に講談社を開設して雜誌「講談倶樂部」を創刊し異常なる人氣を集め我國雜誌界の發行部數に新記錄を劃するに至る。

更に大正三年「少年倶樂部」大正五年「面白倶樂部」を續刊し同九年に至りて「現代」及「婦人倶樂部」の二大雜誌を讀書界に送り、同十四年時流に應じて雜誌「キング」を發行して全國的賞讃の的となり殆んど斯界を驚倒せしめたり。今や大日本雄辯會、講談社の令名と共に本邦七大雜誌として廣く人口に膾炙せらるゝに至りしは一つに君が熱誠と奮鬪の結果と云ふべきにして、君は同社を主宰する傍ら各種の事業に關與し、現に東京工業、日本製紙、中外印刷各株式會社の重役として知らる。

尙ほ東京府多額納稅者にして現時直接國稅實に三萬五千九百餘圓を納むといふ書畫、骨董、刀劍等を愛好し、圍碁に趣味を有すといふ。夫人サヱ子は德島縣の人服部定吉君の長女にして君との間に長男恒男君あり。現に東京市小石川區音羽町三ノ十九番地に住し電話牛込一一二三番なり。

藤島範平君

横濱船渠株式會社長

工學博士藤島範平君は三重縣士族山內俊德君の二男にして明治四年八月を以つて生れ後藤島萬次郎君の養嗣子となる。明治二十七年東京帝國大學工科大學造船科を卒業するや直ちに日本郵船株式會社に入社し後保船課長に進み更に參事となり船舶調査主任を經て大正七年取締役に擧げられ、工務部長を兼ぬるに至りしも同十二年辭して横濱船渠株式會社々長の要職に就任し以つて現在に至る。先是大正八年工學博士の學位を授與せらる。

現に東京市牛込區東五軒町三四番地に住し電話牛込三六五〇番なり。

深井功君

長野縣信用組合聯合會長
中央金庫常任評議員
衆議院議員

世界に名高きベスビヤスの噴火口はいざ知らず我が淺間の山の噴煙のその如く吹き出よ熱血、信州男子の意氣はこれ…とや淺間山麓の一寒村より猛然起つたる政界の雄者深井功君は家も名高き土地の豪農にして夙に鄕校を卒ふるや靑雲の志を抱いて上京し研鑽大いに努め目出度く早稻田大學を卒業せり。

然して早大卒業後は鄕にありて幾多靑年の指導者として其の學識と德望とは信州靑年の尊敬の的となり、大正十三年多數縣民の輿望を擔つて鹿を野に追ひ、憲政會前代議士山邊常重君、政友會前代議士工藤善助君等の强敵を打ち破つて見事當選の榮冠を獲得し、今や中央政壇の重鎭として令名高し。

現に政界に活躍するのみならず地方財界に重きをなし、前記の諸職にありて地方產業發展に盡瘁すること蓋し甚大なりとす。又曾つて縣會議員として地方自治に參與せらる。君や明治七年の產にして春秋尙ほ豐かなり、其の前途又多望なりと謂ふべし、現に長野縣小縣郡和村に住す。

藤田平太郎君

男爵　貴族院議員
合名會社藤田組頭取
藤田銀行頭取

當家は先代傳三郎君より顯はる、傳三郎君は長洲萩の人明治六年藤田組を興し實業界に貢献する處尠からず。同四十四年特に華族に列し男爵を授けらる。君は其の長男にして久原房之助君の從弟に當り明治二年十月を以つて生れ同四十五年家督を相續して襲爵仰せ付けらる。

夙に慶應義塾に學び後英國に留學し造詣を深くして歸朝し曾つて大阪商船、日本火災保險、北濱銀行、日韓瓦斯各銀行會社の重役たりしことありしが現時は藤田組社長、藤田銀行頭取として我が財界に重きをなし又貴族院議員たり。

夫人トミ子は伯爵芳川寛治君の令姉たり。現に邸宅を東京市小石川區關口臺町四一番地に有し電話牛込二〇九番二一〇番なり。

野村雪江君

畫家

新興大日本の產みし我が藝術畫壇の重鎭として名聲今や東西に嘖々たるものに野村雪江君あり本名を初喜と呼ぶ。君は熊本縣の人宮原平君の長男にして明治八年十月十五日、天下の名勝九洲耶馬溪の絕景を直脊して、そうした山水明眉悠然たる大自然の恩惠を潤澤に受けたる熊本市櫻井町に孤々の聲を擧ぐ。幼にして繪畫を愛好し早くも藝術的才幹を發揮し、神童とまで呼ばるゝに至る。

君は鄕里の中學を卒へるや直ちに近藤熊仙師の門に入りて日本畫を學び、後青雲の志を抱いて京都に來り研鑽することヽ年、明治三十三年東上して四季派の泰斗村瀨玉田翁に師事して能く其の衣鉢を得たりしかば、翁深く望を君に囑するに至る、明治三十五年翁の媒介に依りて野村文擧君の養嗣子となり、同君の長女きみ子の入夫となる。

君の畫風は主として意氣潑溂たる英氣を養ふに十分なる山水動物にして君が絕えざる研鑽はいよ〳〵技工の練達を見、益々衆に拔きんずるに至る。たま〳〵明治三十六年第五回內國勸業博覽會開催せらるゝや君是に應じて「猛虎」と題して出品したりしかば大いに世人の賞讃を博し褒狀を受領し、同年日本美術協會に「秋草」を出品しては三等賞牌を受領し更に明治三十七年、八年の二回に亘り同會出品の「秋叢」及び「花鳥」は何れも三等賞牌を受領すると同時に畏くも宮內省の御買上の榮を賜り、更に同三十九年、四十年には「柳陰野馬」「逸馬」等を出品して同じく三等賞牌を受領し、尙ほ明治四十一年には文部省美術展に「牧場の朝」「霧」を同年東京勸業博覽會に「群馬」を同四十二年日本美術協會に「箕面」を出品して何れも三等賞牌を受け爾來文展に出品したる「春秋山水」「群牛」「家兎」は共に入選の榮譽を克ち得たり。

而も君の天才的藝術品は畏くも皇后職に迄其の御用命を辱ふし、御產殿用御屛風に西季耕作、蓬來山水等を揮毫し、更に特筆すべきは大正七年　昭憲皇太后御大葬儀繪卷物御謄寫を拜命せる恩師村瀨翁逝去に依り直ちに同君をして引續き其の御下命ありしかば君は全力を傾倒して前後三ヶ年に亘り大正十年漸くその全卷たる四卷と附緣三卷との大揮毫の大任を全うし最も光榮に浴するに至る。

爾來今日迄民間諸名家は勿論、屢々帝室の御用命を辱ふせりといふ。君の揮毫は何れも神韻飛動の傑作揃にして今や令名愈々顯著なるものあり。眞に我が畫壇の誇りと云はざるべからず、夫人きみ子は虎の門高等女學校及英學塾の出身にして淑德の譽れ高し。現に東京府新井町入新井宿一四六七番地に住す。

藤瀨政次郎君

東洋綿花株式會社長

君は長崎縣の人藤田善太郎君の長男にして慶應三年一月を以つて生る。夙に長崎中學校及長崎外國語學校を卒業し更に明治十八年商法講習所を卒業するや三井物產會社に入社し、兵庫、大阪、香港、新嘉坡、倫敦等各支店に在勤續いして同社上海支店長及び常務取締役たりしことあり、現に前記會社の社長たる外芝浦製作所、日本電氣、東亞興業、三井物產各株式會社の重役たり。趣味として狩獵、撞球、徒步旅行、登山等あり。

夫人ひで子は靜岡縣士族富永發叔君の四女にして君との間に新一郎君、英二郎君、清君、五郎君、六郎君等あり、現に東京市芝區白金今里町一二一番地に住し電話高輪一五三八番なり。

藤田包助君

衆議院議員
日本興業株式會社專務取締役

君は山口縣士族中尾周之君の四男にして明治二年四月を以つて生れ、先代トワ子の養嗣子となる。夙に明治大學を卒業するや官界に入りて警視廳警部たりしことありしも後官を辭して實業界に身を投じ現時は日本興業株式會社專務取締役たり。大正十三年の總選擧に際し鄕里山口縣郡部より推されて衆議院議員に當選し現に政友會に屬し同幹事として知らる。現に山口縣阿武郡萩町に住す。

藤村義郎君

男爵　從四位勳四等
貴族院議員

君は熊本縣の人なり、嚴父紫郎君は明治維新以來監察司兵部少丞、大阪府參事山梨、愛媛各縣知事に歷任し、貴族院議員に勅選され明治二十九年六月功に依り華族に列し男爵を授けらる。君は其の長男にして明治三年十二月を以つて生れ、夙に英佛二國に留學し、英國ケンブリッヂ大學より「バチエラー、オブ、アーツ」の學位を受け又歐米及支那に渡航して國情を視察し、歸朝するや熊本九州學院及濟

々囊教授を囑託せり。

然して三井物産株式會社倫敦支店長心得、本社人事課長兼調査課長、上海支店長、同社取締役、大正日日新聞社長等に歴任し、大正五年上海共同租界參事會員同日本居留民團行政委員會議長等に擧げられ、同七年貴族院議員に互選せられ又前遞信大臣たり。現に東京府中野町中野上ノ原九三一番地に住す。

野崎新太郎君

從四位勳四等　辯護士

君は埼玉縣の人先代吉太郎君の長男にして、明治五年二月を以つて生る。明治三十一年東京帝國大學法科大學英法科を卒業するや直ちに判檢事として東京區地方裁判所に勤め、在職數年にして後轉じて稅務界に入り東京、熊本、丸龜、札幌仙臺等の各稅務監督局に稅務監督官として在勤せしが、大正十二年官を辭して辯護士となり現在に至る。

夫人なつ子は東京府士族近藤太郎君の令妹にして君との間に忠良君、正眞君、謙三君、惇三君、長女富子等あり。現に東京市下谷區三崎町一八番地に住し電話淺草一七八三番なり。

福澤駒吉君

東海曹達株式會社長
矢作水力株式會社副社長
東邦電力株式會社常務取締役

君は財界の巨頭福澤桃介君の令息にして明治二十四年一月五日を以つて生る。大正二年慶應義塾を優秀の成績を以つて卒業するや直ちに身を實業界に投じ鳥谷製作所、一宮電氣、九洲電氣製鋼、早川電力、早川興業各株式會社の重役等を歴任せり。

現時は前記諸會社の重職にある外白山水力、岐阜電力、東海電柱製造、福澤農場、千代田組各株式會社の重役を兼ね父君を援けて今や我が實業界に其の兩翼を振展し新進實業家として前途愈々多望なるものあり。運動を好み柔道は二段とか又自動車の運轉にたくみにして甲種運轉士の免狀を有すといふ。

夫人を八重子と呼び淑德の譽れ高し現に東京府豐多摩郡澁谷町下澁谷四三六番地に住し電話青山六三六六番なり。

藤井卯之助君

棚倉電氣株式會社取締役

君は茨城縣の人佐藤幸三君の令弟にして慶應三年三月を以つて生れ明治二十二年十二月先代建次郎君の養嗣子となる。現に棚倉電氣株式會社取締役にして又福島縣多額納稅者として直接國稅壹千七百六拾餘圓を納むといふ。

夫人マサ子は先代建次郎君の長女にして君との間に二郎君、近四郎君及びミキ子、マキ子、セイ子、チウ子等あり。因に二女ミキ子は福島縣の人松本直次郎君に、四女マキ子は同縣の人菊地順一郎君に何れも嫁す。現に福島縣東日河村石井町に住す。

福澤桃介君

勳四等　大同電力株式會社長
木曾川電力株式會社長
豐國セメント株式會社長

本邦財界の巨星と目せらるゝ勳四等福澤桃介君は埼玉縣の人岩崎紀一君の二男にして明治元年六月十五日を以つて生れ先代福澤諭吉君の養嗣子となる。夙に慶應義塾に學び同校を卒業するや直ちに渡米してボケヘシー商業學校に入り後ペンシルバニア鐵道株式會社に入りて斯界の研鑽を積み明治二十二年歸朝す。

然して爾來北海道炭鑛鐵道株式會社、灘波鐵道株式會社等其の他幾多の事業會社を創立して其の重役となり、現に前記諸會社の社長たる外日本瓦斯、新潟瓦斯北恵那電氣鐵道各株式會社の社長を初めとして內外紡績、濃飛電氣、水窪川水力電氣、東海電柱製造、東邦電力、矢作水力、白山水力、東邦蓄積、帝國劇場、東京電力、今治瓦斯製氷、名古屋棧橋倉庫川上絹布、大同肥料、九州鐵道、鈴政式織機等各株式會社に關與して各重役として令名高し。

夫人をフサ子と呼び東京府の人故福澤諭吉君の長女にして君との間に長男駒吉君、二男辰之君等あり、現に東京府豐多摩郡澁谷町下澁谷四三六番地に住し電話青山六三六六番なり。

藤村義苗君

萬歲生命保險會社長

君は靜岡縣の人藤村知一郎君の長男にして元治元年十月を以つて生る、明治二十三年高等商業學校を卒業するや直ちに實業界に入り、曾つて日本鐵道株式會社幹事補、日本麥酒株式會社支配人、櫻組取締役兼支配人たりしが現に前記會社の社長たる外、品川白煉瓦、赤井軌道、森永製菓、朝日護謨各株式會社の取締役にして尙ほ北滿製粉株式會社監査役たり。

夫人とめ子は長野縣の人稻津秀之助君の令妹にして其の間に新太郎君、諸次郎君、造酒三郎君、慶四郎君、五郎君、祿郎君、七郎君及びマキ子、サチ子、ユキ子等あり、現に東京市外澁谷町下澁谷九〇六番地に住し電話高輪五五三八番なり

福原俊丸君

男爵　正四位勳三等
貴族院議員

當家は代々山口藩に仕へて祿一萬二千石を食み、祖父越後(元淵)藩政を輔けて勤王の論を唱へ正四位を贈られ其の子芳山君を經て君に至る。君は芳山君の長男にして明治九年を以つて生れ同三十三年祖父の勳功に依り華族に列し男爵を授けらる明治三十四年東京帝國大學工科大學機械工學科を卒業するや京都帝國大學講師、東京砲兵工廠員、大藏省臨時建築部技師等を歴任せり。

曾つて歐米に差遣せられ又貴族院議員たる事三回に及び尙ほ堺セルロイド株式會社取締役、戸畑製鐵、大正日日新聞各株式會社監査役たりしも現時は衆議院營繕管財局顧問たる外小田原セメント、大

西鐵工所各株式會社の重役たり。君は熱烈なる佛教徒にして佛教研究に多大の趣味を有し斯界に其名高し。

夫人ツル子は兒玉如忠君の養妹にして東京女學館を卒業し其の間に俊一郎君、博子、香代子等あり、現に東京市四谷區内藤町一ノにノ九番地に住し電話四谷二四〇一番なり。

深見太郎右衛門 君

岡崎銀行常務取締役

君は愛知縣の人深見太郎右衛門君の長男にして明治二十四年一月を以つて生る大正五年神戸高等商業學校を卒業するや直ちに身を實業界に投じ、現に岡崎銀行常務取締役、岡崎貯蓄銀行取締役等の要職にありて内外の社務を鞅掌す。

夫人キク江子は愛知縣の人糟谷平右衛門君の令姉にして其の間に貞子、治子等あり、現に愛知縣碧海郡矢作に住す。

福島行信君

日之出生命保險株式會社長
福島合名會社長

君は兵庫縣士族福島良助君の長男にして明治七年六月三日を以つて生る。幼にして才智衆に秀で能く時代の推移變遷を識るに敏なる君は斷然腰刀を捨てゝ牙籌の人となり、即ち鄕校を卒ふるや東上して慶應義塾に入り後第三高等中學校に轉じ、學績同級を抽んで同二十九年英京倫敦に航し商法及經濟學を學び尙ほ留まりて商業實務を練習し明治三十二年獨逸より墺、佛、伊各國を歷訪し親しく商業上の視察を遂げ歸朝するや福島合名會社を興し外國品の輸入及諸官廳の用達を營みて斯界に令名を馳す。

曾つては大倉喜八郎君と共に内外用達會社を興し後田川採炭株式會社を創立して同社々長たりしが現に福島合名會社代表社員たる外日之出生命保險、松平商店各株式會社の重役として聞え又曩に柳澤伯と共に有樂座を創立して現代劇を鼓吹せるを以つて知らる。

夫人シン子は靜岡縣の人清野勇君の長女にして其の間に長男信之助君、二男式君及び長女喜代子等あり、現に東京市麻布區材木町九番地に住し電話青山五三〇八番なり。

深川伍一君

鹿兒島商船株式會社監査役

君は鹿兒島縣の人深川助九郎君の長男にして明治十九年十月を以つて生る、曾つて大川運輸株式會社監査役、薩南養魚合資會社代表社員たりしが現に地所株式會社取締役、大川鐵道、鹿兒島商船各株式會社監査役たり。

夫人エイ子は佐賀縣の人西山十兵衛君の長女にして養子カヨ子は兵庫縣の人桑野龍一君の令妹たり、現に佐賀市赤松町に住す。

福島儉三君

福島同族株式會社長

君は東京府士族元大審院判事加藤祖一君の三男にして明治二十三年十月十四日を以つて生れ大正二年先代松子の入夫となる。大正二年東京高等商業學校を卒業し同七年米井商店に入りて其の外國部輸出部に勤務し、同九年合名會社東京茂木支店鐵道係主任に轉じ同十一年同社を辭す。

現時は福島同族株式會社取締役たる外相武電力、ABC製菓各株式會社の重役たり、又鐵道用品商として令名あり。如水會、帝國鐵道協會及電氣倶樂部等の各會員にして撞球、狩獵等を愛好すといふ。

夫人を松子と呼び養父浪藏君の二女にして東京府立第二高等女學校の卒業なり現に東京市麻布區笄町一八二番地に住し電話青山二九六二番たり。

野村龍太郎君

工學博士
東京地下鐵道株式會社長

君は岐阜縣の人野村煥君の長男にして安政六年一月を以つて生る、夙に東京帝國大學理學部土木工學科を卒業し、爾來鐵道院技師、同技監、同副總裁、帝國鐵道協會副會長、南滿洲鐵道株式會社々長等を歷任し、現に前記の重職にありてその藴奥を究めし學理を傾倒して我國嚆矢の地下鐵道の布設に從事するに至る。勳功に依り正三位勳二等に叙せられ錦鷄間祗侯たり。

夫人龜久衛子は東京府の人山田元儀君の長女にして其の間に駿吉君、隆雄君、美惠子等あり、現に東京市赤坂區新坂町三十五番地に住す。

福井菊三郎君

勳三等　實業家
三井家之重鎭

君は東京府の人中村萬吉君の五男にして慶應二年三月を以つて生れ先代むめ子の養子となる。明治十六年東京高等商業學校を卒業するや三井物産株式會社に入り爾來累進して新嘉坡支店支配人、本店營業部長、大阪、紐育各支店長、本社常務取締役等を經て大正七年三井合名會社理事に擧げられ現に三井家の重鎭として知られ三井銀行、三井物産、三井鑛業、東神倉庫各株式會社の重役たり。

曩に日獨講和全權大使隨行員を仰せ付けられて渡歐し其の功により勳三等旭日中綬章を賜はる、尙ほ遼東汽船、東洋棉花、三井信託各株式會社の重役たり。

夫人なつ子は江原素六君の長女にして沼津英和女學校を卒業し君との間に孝一君、巖君、素夫君、米夫君、及び菊子、壽々子、千代子、美代子等あり。現に東京市赤坂區青山南町一一六番地に住し電話青山一六七六番なり。

深川喜次郎君

九州土地建物株式會社長
九州地所株式會社專務取締役

君は佐賀縣士族深川文十君の二男にして明治五年五月を以つて生る。同家は代々酒造業を以つて家業となし藩の用達を命ぜられ、明治四年祖父嘉一郎君の代に至り航海業を開始し造船事業を起して深川家の基礎を建て、而して先代文十君遺志を繼ぎて汽船推進機の改善を企て遂に文十式螺旋推進機を發明し特許を得てまもなく海軍省の採用する所となる。

君夙に中學を卒へるや父祖の業を襲ひ傍ら更に土地經營の業に從事し、九洲土地建物株式會社を興して同社々長に推され其他各種事業に關係す。現に前記會社の社長たる外深川商店株式會社常務取締役、ラサ島燐礦、深川造船所、豐國セメント、深川汽船、亞細亞興業、大和海上保險各株式會社取締役、對州陶器原料會社代表社員として令名あり。

夫人エキ子は佐賀縣士族伊丹彌太郎君の長女にして君との間に二男三女ありて朔郎君、悅郎君及びツマ子、ヤウ子、フミ子等と呼び現に佐賀縣道祖元四八番地に住す。

野々村金五郎君

銀行家

君は大分縣士族野々村正忠君の三男にして明治二年五月を以つて生る。明治廿八年故井上侯爵の秘書として渡鮮し同國學務顧問官となり辭任後大阪藤田組に入り後日本興業銀行に轉じ更に南滿洲鐵道株式會社に入りて其理事に擧げられ現に開發社々長たる外川崎銀行、麹町銀行等の重役として知られ東京銀行集會所監事たり。

夫人をじゆん子と呼び東京府の人秋月新太郎君の二女たり。現に東京府下豐多摩郡落合村上落合四七二番地に住し電話牛込六九五番なり。

福岡秀猪君

子爵　從三位勳三等

當家は先代孝悌君より顯はる孝悌君は土佐藩士にして維新の際王政復古の議を唱へ、後藤象二郎君等と將軍慶喜に面し大政奉還を勸告して大いに輿論を卷き起し尙ほ御誓文五ヶ條を起草する等其の功績尠からず後文部大輔、司法大輔、元老院議官、文部卿參事院議長、宮中顧問官樞密顧問官等に歷任し其功に依り明治十七年子爵を授けらる。

君は其の二男にして明治四年九月を以つて生れ大正八年襲爵仰せ付けらる、明治二十年米國に遊びエール大學を卒業して同二十五年歸朝し翌二十六年再び歐洲に留學し白耳義ブラッセル大學を卒業して歸朝す。英佛語に通曉し國際法、行政法、經濟學は其の最も得意とする處にして明治三十三年東京外國語學校敎授に任ぜられ學習院敎授を兼ねたるも後宮內省御用掛仰せ付けられ又憲兵練習所敎授たりしことあり。

趣味多樣なる中にも園藝、旅行を最も好み、就中犬を愛すること天下獨歩にして愛犬家の令名廣く天下に知れ亘る。又社交に厚く華族會館、日米協會、日佛協會、英國協會等の各會員たり。現に東京市小石川區金富町五九番地に住し電話小石川九一六番なり。

深井英五君

從五位勳四等　日本銀行理事

君は群馬縣士族深井景員君の令弟にして明治四年十一月を以つて高崎市に生る明治二十四年京都同志社大學を卒業して實業界に入り日本銀行に勤務すること多年、累進して現職に及ぶ、大正八年巴里講和會議に本邦全權委員隨員として渡佛し、大正十年十一月華府軍備制限會議、ジェノア國際經濟會議等に列席せり。

夫人はる子は前代議士小坂順造君の令妹にして君との間に一女ありて結子と呼ぶ、現に東京市赤坂區氷川町五一番地に住し電話青山五三二三番なり。

藤平兼吉君

株式會社宇都宮廻漕店取締役支配人
東海砂利株式會社取締役

君は新潟縣の人渡邊權三郎君の三男にして明治十八年九月一日を以つて生れ、後千葉縣の人藤平榮藏君の養嗣子となる夙に新潟縣立川原田中學校を卒へるや大志を抱き笈を負ふて上京し、私立大學に入りて研鑽を積み業成るや實業界に身を投じ、株式會社宇都宮廻漕店に入りて敏腕を縱橫に振ひ大いに同社發展に盡瘁せしかば漸次昇進して樞要の地位に就き、現に同社取締役支配人として內外に重きをなすのみならず、尙ほ傍ら東海砂利株式會社取締役にして、且つ中村運送合資會社出資社員として我が財界に令名高し君や天資穎明、溫厚篤實にして人に接する溫情を以つてし、社員を遇する又懇切而も一度事業に當るや終始一貫よく其の職責を完うする蓋し君の今日ある故なきにあらざるべく、春秋尙ほ豐かなる君の將來や又多望なりと謂ふべきなり。

夫人春子は養父藤平榮藏君の長女にして櫻田高等女學校を卒業し、君との間に一女ありて壽美子と呼ぶ。現に東京市芝區露月町九番地に住し電話銀座四五五二番なり。

野呂駿三君

濃飛農工銀行取締役

君は岐阜縣の人菅井九三君の三男にして慶應元年六月を以つて生れ後先代萬次郎君の養子となり前名五郎三を改稱す。曾つては東美銀行頭取として知られ又衆議院議員に當選すること二回に及び、現に前記銀行取締役たる外木曾興業、中央製絲各株式會社監査役たり。

夫人きん子との間に一男三女あり、因に長女きぬ子は岐阜縣の人山田正吉君に二女つね子は同縣の人間四郎君に嫁す。現に岐阜縣可兒郡御嵩町に住し電話一番なり。

古田錞治郎君

實業家

古田家は代々舊丹後國田邊藩主牧野家の家臣を勤めし名家たり、君は先代新作君の長男にして明治元年八月を以つて生る。夙に横濱税關に奉職せしが同二十七年仁壽生命保險會社創立に參劃し、後上海に渡り日支貿易を開設して大いに彼我貿易の發展に盡瘁するところありき。

明治三十六年大阪生命保險株式會社の聘に應じて同社に入りて其の支配人となり更に明治四十二年東洋生命保險株式會社に迎へられて同社營業部長の職に就き同社の經營發展に其の蘊蓄を傾倒せしかば社運愈々擧り、當時の我が保險界に令名を謳はれたり。

夫人はな子は京都府士族桑原盛衛君の二女にして其の間に五男五女ありて檀君脩二君、統三君、溫君、弘君及び久子、清子、通子、郷子、東洋子等あり。現に東京市外淀橋町柏木九一八番地に住し電話四谷五九三番なり。

古澤文作君

滿洲ペイント株式會社長

君は栃木縣の人古澤貞治郎君の長男にして明治十四年四月を以つて生る、曾つて大連市會議員、大連商業會議所常議員大連製造所主任等に就任せしが、現に滿洲ペイント株式會社及滿洲石鹸株式會社代表社員にして且つ中大利粉、日清豆粉製造各株式會社取締役、大連取引所信託滿洲倉庫建物各株式會社監査役たり。

夫人滿江子は東京府の人澤鑑之丞君の三女にして君との間に二女あり、長女貞子、二女淑子といふ。現に栃木縣上都賀郡西方町に住す。

古屋德兵衛君

松屋吳服店取締役社長

東都有數の大店舗として其聲名噴々たる松屋吳服店は故古屋長吉君が維新前横濱に縮屋業を開きたるに始まり、先代德兵衛君に至りて鶴屋吳服店を營み其の名漸やく著はれ、偶々明治二十二年神田今川橋なる松屋吳服店を買收し店名を其儘踏襲して京濱兩地に陣容を張り專ら吳服商を營みしが明治三十三年百貨店に變更して現在に及べり。

君は先代德兵衛君の二男にして明治十一年三月十九日を以つて生れ、同四十四年七月家督を相續し前名藤八を改め先代沒後家業を繼承し、大正八年三月一族及功勞店員を以つて資本金百萬圓拂込濟の株式組織となし一層事業の擴張發展を期し、今や帝都五大吳服店の一に列し大正十三年資本金を五百萬圓に增資し大正十四年五月一日を以つて銀座通りの大ビルヂングに於て開業するに至る。

抑々當店の基礎が現在の如き大を爲すに至りたるは實に横濱鶴屋經營時代以來現時に至るまで、時運に惠まれたるもの多きに依るべきも店主代々の努力奮鬪と一方顧客に對する親切勤勉と、適材を適所に置きたる經營法の宜しきを得たるに基くものと謂はざるべからず。

古橋久三君

日本硫肥株式會社取締役

君は東京府の人古橋新君の長男にして慶應三年三月を以つて生る。夙に身を實業界に投じ大日本麥酒株式會社に入社して其の販賣係主任となり、後大日本人造肥料株式會社に轉じて其販賣主任を經て同社横濱工場長に進み、大正九年同社を辭して日本硫肥株式會社に入りて同社專務取締役たりしが現時は取締役の職に在り龍門社會員にして旅行、音樂等を愛好すといふ。

夫人てる子は北海道の人青山正三郎君の養女にして君との間に長男麟太郎君、長女ひで子、二女聰子等あり。現に東京市四谷區坂町一一番地に住し電話四谷三四五五番なり。

舟津敬太郎君

中外興業株式會社取締役社長

我が實業界の重鎮舟津敬太郎君は兵庫縣士族舟津永成君の長男にして明治四年十月十六日を以つて生る。夙に郷校を出づるや青雲の志を抱いて東上し直ちに中央大學の前身たる東京法學院に入りて研鑽琢磨斯學の蘊蓄を究め、明治二十六年優秀の成績を以つて同校を卒業し身を實業界に投ず。

然して日本銀行に入社し同三十九年同行を辭し翌四十年獨力輸出入業を營み大いに其の敏腕を振ひしが、同四十四年神戸ホットラメルス會社に聘せられて其の輸出部主任となり、更に大正四年久原鑛業株式會社に轉じ同七年同社東京支店長となり、同十年十月同社を辭して中外興業株式會社の創立に盡瘁し、其の設立を見るや推されて其の取締役社長となり現在に及ぶ。

夫人はな子との間に長男恒夫君、二男逵夫君、三男健夫君、四男幸彦君、五男鐵哉君、長女和子、二女道子等あり。現に東京市麻布區龍土町六九番地に住す。

降矢芳郎君

九州帝國大學教授
工學博士

君は長野縣の人增田國三郎君の二男にして明治三年四月を以つて生れ先代敬吾君の養子となる。明治三十一年東京帝國大學工科大學電氣科を卒業し、曾つて松本、諏訪、上田等の電燈會社技師長たりしことあり又京都帝國大學理工科大學講師、仙臺高等工業學校教授、九洲帝國大學理工科大學教授等に歷任し功により從四位勳三等高等官一等に叙せらる。

夫人とく江子は養父敬吾君の長女にして其の間に一男一女ありて英吾君、あき子と呼ぶ。現に福岡市荒戸町三番地に住す。

福島眞澄君

福島工務所長
品川町會議員

時是れ大正十二年九月一日、突如として關東地方を襲ひし前古未曾有の大震火

災は瞬く間に帝都の大半を烏有に歸し去り、焦土と化したる修羅の巷を見て慨然即ち多年の蘊蓄を傾注して我が帝都の復興に貢献するはこの季にあり……と猛然起つたるは誰れあらふ、我が福島工務所經營者福島眞澄君其の人なり。

君は明治十八年一月二十九日を以つて東京市麹町區一番町に孤々の聲を擧げ、夙に學を卒ふるや早くも本邦建築界に雄飛せんと志し獨力以つて福島工務所を開設して斯界に活躍すること多年、偶々彼の大震火災に遭遇するや君は帝都復興建築界に盡瘁すること甚大にして、現に福島式鐵筋コンクリート用特許假枠設計及び貸與、建築設計製圖々案、建物鑑定、官廳出願手續、一般土地建物評價及其調査等を初めとして一般土木建築請負業を營み業盛益々擧り、斯界の信望月に年に加はり前途多事多望なるものあり。

君亦深く公共事業に心を碎き曩に多數町民の輿望を擔つて品川町會議員に推されて町政に參與し、現に其の任に有りて今や町内有力家として目さるゝに至る。

夫人をゑい子と呼び内助の聞え高く其の間に祺純君、正光君及び秀子、宏子、久子、廸子等あり、現に東京市外南品川宿三ッ木九一九番地に住し電話高輪四四五九番なり。

能見愛太郎君

九州炭礦汽船株式會社長

君は兵庫縣の人能美三郎兵衛君の二男にして明治三年九月五日を以つて生る。明治二十七年東京帝國大學工科大學採鑛冶金科を卒業するや直ちに三菱合資會社に入り、新入炭坑長、臨時北海道調査課長、炭坑部理事兼技術課長等を經て大正七年五月同社が三菱鑛業株式會社となるに及び其の常務取締役に擧げられ同八年工學博士の學位を受く。

曩に美唱鐵道株式會社取締役たりしが現に九洲炭礦汽船株式會社々長の重職にあり學士會、日日倶樂部、工業倶樂部等各會員たり。圍碁、乘馬、讀書、旅行、登山等頗る多方面に趣味を有すといふ。

夫人キク子は河内山忠治君の長女にして君との間に新一郎君、福二郎君、武三郎君及びトヨ子、ナホ子、キタ子、タマ子等あり。現に東京市赤坂區青山北町七ノ二番地に住し電話青山一六二一番なり

野田啓太郎君

三等商會專務取締役

君は三重縣の人野田耕平君の長男にして慶應二年六月を以つて生る。明治二十一年東京商船學校を卒業するや直ちに日本郵船會社に入り、海上に生活を營む事多年遂に船長たりしが感ずる所ありて斷然海の生活を辭して實業界に入り、製造業を思ひ立ち自ら野田測器調正所なるものを興してその代表社員となれり。

君此處に於て計器に對する興味少なからず湧き現に大阪府布谷計器株式會社及三幸商會の各專務取締役たり。現に神戸市下山手通八ノ一九〇番地に住し電話本局一七三二番なり。

船尾榮太郎君

實業家

君は和歌山縣の人船尾大助君の長男にして明治五年十月一日を以つて和歌山市に生る。夙に慶應大學を卒業するや直ちに身を實業界に投じ三井銀行に入り次いで同物産株式會社に轉じ、更に大日本製糖株式會社に入りしが幾何もなく同社を辭し、明治四十年三井合名會社に入りて同社植林係長となり、後ち三井信託株式會社副社長として令名を馳せ、尙ほ此間三井慈善病院事務長、同理事たりし事あり、文學を愛好すといふ。

夫人芳枝子は東京府の人寛孫左衛門君の二女にして和歌山高等女學校を卒業し其の間に桂一君、謙四郎君、泰君及び靜子、春子、愛子、信子、榮子、八重子等あり、現に東京府北豊島郡日暮里町一〇三五番地に住し電話淺草五八二七番なり

藤平謹一郎君

宇都宮瓦斯株式會社長

君は栃木縣の人藤平縫之丞君の長男にして文久二年十一月を以つて生る、曾つて下野倉庫株式會社、下野起業、宇都宮起業、下野新聞各株式會社の取締役たりしが、現時は前記會社の社長たる外下野印刷株式會社取締役にして尙ほ栃木縣農工銀行、下野銀行、西澤金山各株式會社の監査役たり。

夫人タメ子は栃木縣の人伊佐野利市君の長女にして其の間に三男六女ありて眞君、武君及びコウ子、マサ子、ヒサ子、キョ子といふ。現に栃木縣芳賀郡市羽村に住す。

野村健君

大日本製糖株式會社理事
兼同社東京工場長

君は東京府士族野村裕君の長男にして明治十年九月二十三日を以つて生る。夙に中等教育を修むるや直ちに東京高等工業學校に入學し、明治三十三年優秀の成績を以つて同校機械科を卒業し、身を實業界に投じて大日本製糖株式會社に入社し同社技師として君が蘊蓄を傾注し、明治四十二年同社臺灣工場工務課長に擧げられ兼ねて副理事に就任し同社發展に盡瘁すること甚大、現に本社理事にして且つ東京工場長として益々君の敏腕を振ひ前途多望なるものあり。

趣味として謠曲あり、其の技又衆に長ずるとか而して月の夕べ、雪のあした折節にかなづる其の吟聲や蓋し奇々にして妙々、餘韻淨々として泣くが如く訴ふるが如し……とや、夫れ技術家にして斯くも優しき溫情の所有者たる又異數なりと謂ふべく以つて其の人と爲りを知るべきなり。

夫人のぶ子は東京府の人宇高義達君の令姉にして君との間に秀行君、判子等あり、現に東京市牛込區市ヶ谷藥王寺前八

三番地に住し電話牛込三一一五番なり。

舟越楫四郎君

三菱内燃機株式會社取締役會長

正四位勳一等功四級予備海軍中將舟越楫四郎君は兵庫縣士族舟越恭君の四男にして明治三年八月を以つて生る。明治二十三年海軍兵學校を卒業して海軍少尉に任じ、大正八年海軍中將に累進す。其の間海軍教育本部々員、第二艦隊副官、海軍省人事局々員、磐手、生駒、榛名各艦長、英國大使官附武官、練習艦隊司令官横須賀海軍工廠長等に歴補す。

大正十一年官を辭して野に下り現に三菱内燃機株式會社取締役會長の榮職に在り。夫人さわ子は神奈川縣の人澤田寅七君の令姉にして君との間に二男二女あり英一君、正邦君、達子、屋壽子等なり、現に東京市芝區白金臺町一ノ七番地に住し電話高輪一五三二番なり。

野中寅助君

羽生銀行頭取

君は埼玉縣の人野中平助君の令弟にして慶應三年三月を以つて生る。現時は前記銀行頭取として今日の基礎を作り又一方埼玉縣製紙株式會社の取締役及び荒谷製絲、北武鐵道各株式會社の監査役として地方財界に名あり。

夫人うち子は埼玉縣の人原照胤君の二女にして其の間に一男あり徹也君といふ現に埼玉縣北埼玉郡大越村に住す。

船田中君

辯護士　特許請理士

地下工業株式會社專務取締役

財團法人下野中學校理事

君は栃木縣の人船田兵吾君の長男にして明治二十八年四月二十四日を以つて生る。幼にして穎悟學識に秀で夙に鄕里宇都宮中學を卒ふるや笈を負ふて上京し研鑽大いに努め、大正七年優秀の成績を以つて東京帝國大學法科大學を卒業し、直ちに身を官界に投じ爾來内務屬、大阪府屬、福島、愛知各縣理事官、内閣拓殖局書記官等を歴任して内閣に入り加藤(友)山本、清浦、加藤(高)等歴代内閣書記官として令名を謳はれしが大正十三年十二月官界を辭して野に下る。

然して大正十四年三月辯護士を開業し翌年地下工業株式會社の創立に參劃して其の設立を見るや君推されて同社專務取締役に就任し、今や東都法曹界及び財界に活躍して其の蘊蓄を傾注し前途愈々多望なるものあり。

君や年齒未だ春秋に富めり、帝國の現狀それ多事にして且つ多端、君の力に俟つべきもの蓋し多からん、宜しく自重自愛以つて將來の大成を期して可なりである。劍道、乘馬等の運動を好み又青年謠曲家の名あり。夫人澄子は我が政界の巨星元田肇君の五女にして三輪田高等女學校の卒業たり、現に本邸を栃木縣宇都宮

市に有し、別宅を東京市赤坂區青山南町五ノ三三番地に有し電話青山一六九九番なり。

舟津貞三君

辛酉銀行專務取締役

君は北海道の人金泉辨次郎君の長男にして明治十五年十月十三日を以つて生る明治四十年慶應大學理財科を卒業し、更に同四十四年二月渡英してバース銀行に入りて實務を見習ひ傍ら金融經濟學を研究し在英二ケ年にして大正二年二月歸朝す。

然して第百銀行に入り同四年九月同行を辭して秩父電線製造所專務取締役となり、同五年四月豐山銀行に轉じ共頭取となりたる外日本鐵工所及共愛信託各株式會社の重役たりしことありしが現時は辛酉銀行、日米生糸各株式會社の重役として知らる。

夫人こう子は北海道の人舟津啓太郎君の長女にして小樽高等女學校を卒業し共の間に一男ありて貞彌君と呼ぶ。現に東京府豐多摩郡淀橋町柏木三七七番地に住し電話四谷一七五〇番なり。

古河久太夫君

若狭銀行頭取

君は福井縣の人柴田榮治君の三男にして安政四年五月を以つて生れ後先代久三君の養子となる、夙に實業界に活躍し現に前記銀行の頭取たる外株式會社小濱銀行の監査役たり。

夫人キサ子は同縣の人古河勘三郎君の養子にして其の間に一男二女を擧げ、長男を文一君と云ひ長女をすゞ子、二女を廣子と稱す。現に福井縣遠敷郡西津村に住す。

登坂秀興君

東京モスリン紡織會社常務取締役

君は山形縣士族登坂右膳君の長男にして明治四年六月七日を以つて山形縣小松町に生る。明治二十七年東京高等工業學校染色科を卒業して後ち絹洋傘の製造を開始せしかば果然異常なる歡迎を博し、事業確固たる基礎を作るに及びて絹織物業視察の爲め佛國里昂に渡航し、在佛二ケ年にして歸朝し、政府の補助に依りて創設されたる米澤織物工場の技師長として就任し後ち桐生織物會社に轉じて支配人技師長に就任す。

然して後同社が京都綿ネル株式會社と合併して日本製布株式會社となるや幾何もなく退社し東京モスリン紡織會社に入りて技師長となり、現に同社常務取締役にして且つ藏前工業會工改會、米澤有爲會各社團法人監事として知らる。

夫人シヅ子は熊本縣士族門岡速雄君の令姉にして東京女子高等師範附屬高等女學校の卒業なり。現に東京市麻布區霞町一番地に住し電話青山五〇九番なり。

二木謙三君

醫學博士　正五位
東京帝國大學教授

方今駒込病院長、傳染病研究所技師、內務省防疫官、東京帝國大學教授として令名高き正五位醫學博士二木謙三君は秋田縣士族樋口順三君の二男にして明治六年二月十日を以つて生る。夙に東京帝國大學醫科大學を卒業して直ちに帝國大學醫科大學の講師となり同助教授を經て現に同大學教授の任にあり尙ほ職を駒込病院に奉じ副院長を經て院長に擧げられたり。

明治四十二年醫學博士の學位を授けられ二木式腹式呼吸法の研究を完成せしを以つて世に知らる。夫人イヨ子は秋田縣の人遠山彌三郎君の長女たり。現に東京市本郷區元富士町三番地に住し電話小石川七三〇六番なり。

野村德七君

大阪野村銀行取締役
大阪株式取引所員

君は大阪府の人野村淨功君の長男にして明治十一年八月を以つて生れ、前名信之助を改稱す。大阪府多額納稅者にして大阪株式取引所仲買人の筆頭たり。又前記銀行の重役にして福島紡績、大阪運河泉尾土地各株式會社取締役、日華紡績株式會社監査役たり。

夫人きく子は大阪府の人山田治兵衛君の令妹にして君との間に二男ありて義太郎君、節雄君と呼ぶ。現に大阪市東區備後町二ノ二番地に住し電話本局二六四番なり。

能美輝一君

極東通商株式會社專務取締役
鶴見土地住宅株式會社取締役
合資會社能美商會代表社員
能美商會主

君は山口縣の素封家且つ名望家たる能美甚作君の長男にして、明治二十年を以つて下關市西の端町に生る。鄕校を卒ふるや東上し明治四十三年早稻田大學商科を卒業し、直ちに實業界に志し大阪堀田商會に入り輸入部支配人に擧げられ、更に神戸カーン商會の總支配人として輸出入一般の知識と經驗とを得て、大正五年獨力能美商會を設立し一般輸出入業を開始し奮鬪大いに努めて內外の信望を蒐め開業僅かに四ヶ年にして取引年額壹千萬圓を突破するに至れり。

偶々大正九年彼の歐洲大戰亂の餘波を享けて一般財界の大恐慌を來し爲めに倒產するもの無數、君亦打擊を蒙ること尠からざりしと雖も堅實なる營業方針に加ふるに機を見るに敏なる君は、漸次大勢を挽回するを得其の後諸事業皆順調の地歩を進りて今日に及べり、尙ほ君は前記極東通商株式會社を設立して自ら專務取締役として內外の社務を輓掌する外一面土地經營事業に趣味を有し、其の所有土地四萬坪に達し最近鶴見土地住宅株式會社取締役に就任し今や事業方面にも其の快腕を振ひつゝあり。

君は常に獨立自營主義を以つて任じ其の實家たる實に地方有數の資產家たるにも拘らず曾つて、一指だも之に染めたることなく終始一貫せんとする志氣や又敬すべく、春秋尙ほ多き君の俊腕必ずや將來あらん。夫人を睦子と稱し東京府士族金澤勝元君の二女にして其の間に三男二女あり、現に東京市麻布區本村町一四六番地に住す。

野村治三郎君

野村銀行頭取
衆議院議員

吃音と都々逸の名人而して、東北屈指の素封家にして且つ政治的才量に富める野村治三郎君は、青森縣の人野村吉次郎君の長男にして明治十年十月を以つて生る。君は舊南部領の舊家で畜產事業に極めて熱心にして、私財を投じて競馬場を經營し且つ當地方に於ける有數の實業家として知られ、現に前記銀行頭取たる外上北銀行頭取及び青森農工銀行、五戶銀行、野邊地電氣各株式會社の重役たり。

曩に縣民多數の輿望を擔つて青森縣第六區より立候補して目出度く當選し、爾來衆議院議員たること四回現に其の要職にありて政友本黨內に於ける重鎭として中央政界に令名嘖々たり。

現に青森縣上北郡野邊地町に住す。

福原鐐二郎君

從三位勳二等　學習院長
帝國美術院長
貴族院議員

君は三重縣士族福原錢太郎君の令弟にして明治元年六月を以つて生る。明治二十五年東京帝國大學法科大學英法科を卒業するや直ちに遞信省試補となり、尋いで內務省に轉じ爾來內務省參事官、奈良縣參事官兼帝室奈良博物館理事、奈良、鳥取各縣警察部長、文部省參事官兼視學官、文部省書記官、專門學務局長兼宮內省御用掛、九洲帝國大學工科大學長、傳染病研究所長、各事務取扱、文部次官、東京帝國大學總長、帝國美術院美術展覽會審査委員長等に歷任せり。

明治卅三年獨佛に留學し大正三四年事件の功に依り旭日重光章を賜り同五年貴族院議員に勅選せられ現在に及ぶ。

夫人たま子は東京府の人岡本谷五郎君の長女にして君との間に長男吉野君、二男三洲雄君、三男滿洲雄君、四男幸雄君長女富子等あり。現に東京市牛込區北町五番地に住し電話牛込五六四番たり。

野上菊太郎君

野上工業所長

君は大分縣の人野上翠造君の二男にして明治八年九月を以つて生る。明治三十六年東京帝國大學工科大學電氣科を卒業し、爾來宇都宮電燈株式會社技師長、住友別子鑛業所電氣係長、大阪才賀電氣商會技術部長等に歷任す。

大正三年電氣事業視察の爲め歐米を巡

遊し大正四年歸朝するや自ら野上工業所を創立し專ら水力電氣機械器具の販賣、電氣土木建築設計請負等に從事して今日に及べり。現に大阪市東區北濱町三ノ四七番地に住し電話本二〇〇九番三一四〇番七〇九番なり。

二荒芳德君

伯爵　正四位勳六等
貴族院議員

君は侯爵伊達宗陳君の令弟にして明治十九年十月二十六日を以つて生る。夙に學習院高等科を經て大正二年七月東京帝國大學法科大學政治科を卒業し、同十一年文官高等試驗に合格し直ちに官界に入り爾來愛知縣屬、靜岡縣理事官等を歷補し、後歐米各國に出張し歸朝するや大正九年三月宮內書記官兼宮內省參事官に任ぜられ同十年二月皇太子殿下海外御巡遊に供奉被仰付、同十三年十二月宮內書記官兼宮內省參事官を免ぜられ同十四年七月貴族院議員に當選せり。

夫人擴子は北白川宮能久親王姫にして學習院女學部の御出身たり。現に其の住宅を東京市四谷區霞ヶ丘町一二番地に有し電話青山二一〇番なり。

古武彌四郎君

從五位　醫學博士
大阪醫科大學教授

君は岡山縣の人古武津治君の二男にして明治十二年七月を以つて生る。明治三十五年大阪府立醫學校を卒業し、同四十二年學術視察の爲め獨逸に留學し、歸朝後は大阪府立醫學校、京都帝國大學等の助教授、大阪府立高等醫學校、同府立醫學校各教諭等に歷任したりしも現時は府立大阪醫科大學教授たり、勳功により從五位に叙さる。夫人八重子は大阪府の人古武彌吉君の養妹にして其の間に三男二女ありて彌八君、彌六君、彌正君及び春子、常子等なり、現に兵庫縣川邊郡長尾村に住す。

福澤一太郎君

慶應義塾社頭　交詢社理事
時事新報社長

君は故福澤諭吉君の長男にして文久三年十月を以つて生る。嚴父諭吉君は文久年間歐米各國を漫遊し慶應年間には慶應義塾を創立し學徒の教育に從事す。爾來其の薰陶を受けたる者數千の多きに及び現時我が實業界に覇を爲す者の多くは其子弟たり。曩に文學博士の學位を授與せられんとせしも辭して受けず又授爵の恩命ありしも固辭して受けざりきといふ。

君は此偉人の家庭に人となり後歐洲に遊學し歸朝後は時事新報社、慶應義塾、交詢社等關係して今日に至れり。

夫人糸子は東京府の人大澤三之助君の令妹にして君との間に長男八十吉君、二女八重子等あり、現時東京市芝區三田町二ノ二番地に住し電話高輪一〇〇〇番なり。

野村德君

東洋木材防腐會社專務取締役

君は鹿兒島縣の人野村傳左衞門君の三男にして明治三年十一月を以つて生る。明治二十八年東京帝國大學法科大學英法科を卒業し、同三十四年郵便事業研究の爲め瑞西國に留學を命ぜられ、歸朝後は專ら郵便關係部內に勤め、宇都宮、熊本廣島各郵便局長、遞信書記官、東京中央郵便局長等に歷任せしが後官を辭して實業界に入り前記會社の重役たる外阪神土地信託株式會社專務取締役、阪神電氣鐵道株式會社監査役たり。

夫人とと子は北海道の人鎌田政明君の令妹にして君との間に長男勝君、二男巖君、三男勇君等あり。現に兵庫縣武庫郡西宮町に住す。

二上兵治君

正四位勳二等　法學博士
貴族院議員

君は富山縣の人二上兵太郎君の長男にして明治十一年二月二十五日を以つて高岡市繩手中町に生る。夙に第四高等學校を經て東京帝國大學法科大學に學び明治三十七年同校を卒業するや直ちに官界に入りて遞信省に奉職し、通信屬となり同年十一月文官高等試驗に應じて首尾よく登第し、翌年五月通信事務官に進み東京郵便局小包郵便課長、郵便課長等を經て同年十二月遞信省通信局勤務を命ぜられ翌年一月通信局外信課長となり翌年七月遞信參事官兼通信書記官に任ぜらる。

明治四十一年二月葡萄牙國里斯本に於て萬國電信會議開催せらるゝや君選ばれて本邦委員として參列し同時に歐米各國に差遣せられ同四十二年二月歸朝し、翌年九月遞信大臣官房書記課長、同四十四年六月樞密院書記官に補せられ樞密院議長秘書官を兼ね後高等捕獲審檢所事務官行政裁判所評定官等を歷任し大正五年十月樞密院書記官長に勅任せられ、大正九年法學博士の學位を授與せらる、尙ほ傍ら中央、法政、早稻田各大學に於て民法の講座を擔任し又高等試驗委員を仰せ付けられしこと數回に及べりといふ。

東京市外下澁谷一一〇五番地に住す。

古井由之君

十七銀行常務取締役

君は岐阜縣の人古井莊之助君の長男にして慶應元年二月を以つて生る、曾つて岐阜縣會議員、同參事會員等に擧げらるゝ而して衆議院議員に擧げらるゝ事三回功に依り勳四等に叙せらる。

現に十七銀行常務取締役たる外株式會社大垣共立銀行、同大垣貯蓄銀行等の取締役として知らる。

夫人りち子は岐阜縣の人堀田九郎三君の四女にして君との間に二男あり。現に福岡市地行西町二〇番地に住す。

古河虎之助君

男爵　從四位勳三等
古河銀行頭取
古河合名會社長

我が國鑛山王大實業家として其の令名一世に高かりし、故古河市兵衛君の令息虎之助君は明治二十年一月を以つて生る。明治三十六年慶應義塾大學普通部を卒ふるや直ちに渡米し紐育コロンビヤ大學に入りて採鑛冶金地質鑛山行政學等を修めて同四十年卒業し、更に歐洲各國を漫遊して歸朝す。

嚴父市兵衛君は多年鑛山業に從事し其所有鑛山實に廿有餘ヶ所の多きに及び、君之を繼承して鋭意業務の發展に力を致し今や同家の經營になる前記の外古河商事、古河鑛業各株式會社を總裁し、本邦實業界の重鎮として內外に名聲嘖々たり。明治四十四年勳三等に叙せられ大正四年特旨を以つて華族に列せられ男爵を授けらる。

夫人不二子は侯爵西郷從德君の令妹にして學習院女學部の出身たり。現に東京府北豐島郡瀧之川町西ヶ原に住し電話小石川七九九番なり。

野村治三郎君

野村銀行頭取
上北銀行頭取

君は青森縣の人野村吉次郎君の長男にして明治十年十月を以つて生れ、後前名常太郎を改む。大正四年以來衆議院議員たること三回にして、現に其の職にあり又縣下有數の素封家として知られ牧畜業に興味を有し目下競馬場を起しその奬勵に奔走しつゝあり。

現に前記各銀行頭取たる外青森縣農工銀行、同五戸銀行、野邊地電氣各株式會社取締役たり。現に青森縣上北郡野邊地町に住す。

野村益三君

子爵　貴族院議員

當家は舊山口藩士先代野村靖君より家名を揚ぐ、靖君は明治九年宮內權大丞に任じ、爾來遞信次官、內務大臣、遞信大臣、樞密顧問官等に歷任し明治二十年華族に列し子爵を授けらる。君は其の長男にして明治八年三月を以つて生る。

夙に東京帝國大學農科大學農學撰科を出でて更に獨逸に留學すること多年、歸朝するや和歌山縣立粉川中學校教諭に任ぜられ、爾來愛知縣立第五中學校、神奈川縣立第四中學校等の教諭に歷任す。

現に教科書調査會委員にして又帝國シャンパン株式會社取締役、日出生命保險株式會社監査役たり。貴族院議員に當選すること前後二回功に依り持に正四位勳四等に叙さる。

夫人壽美子は鹿兒島縣の人毛利市兵衛君の長女にして其の間に親共君、親雄君親正君及び寛子、代枝子等あり。現に東京市赤坂區氷川町四九番地に住す。

藤崎三郎助君

壞水港製糖拓殖會社常務取締役

君は宮城縣の人藤崎三郎助君の長男にして明治元年五月を以つて生る、曾つて實業視察の爲め渡歐せしことあり、現に株式會社藤崎呉服店の代表社員を初めとして前記の要職にある外打狗整地、櫻護謨、山東運輸、日本酸素、東京動產火災保險各株式會社取締役にして尙ほ仙南電氣工業、仙臺平機業、日本絹紡績、南滿鑛業、打狗土地各株式會社監査役たり。

夫人まつゑ子は宮城縣の人內ヶ崎文之助君の長女にして其の間に二女ありて長女をみを子、二女を英子と稱す。現に東京市四谷區鹽町一ノ二九番地に住す。

藤沼庄平君

從五位勳四等
前警保局長

君は栃木縣の人若田部友造君の二男にして明治十六年二月十七日を以つて生れ後藤沼友次郎君の養子となる。明治四十二年東京帝國大學法科大學を優秀の成績を以つて卒業し、同年文官高等試驗に應ずるや異常の成績を以つて登第し直ちに身を官界に投ず。

爾來北海道事務官補、岡山縣都窪郡長奈良、鹿兒島、京都、大阪各府縣警察部長、茨城縣知事等に歷補し淸浦內閣の成立を見るや君推されて警保局長に任ぜられしが大正十三年六月同內閣倒壞の悲運に遭遇するや君も運命を共にして官を辭し、間もなく歐米各國を視察漫遊の途に上り彼の地の文物を視察して歸朝す。

夫人靜子は山口縣の人松田協輔君の長女にして愛知縣立高等女學校の卒業なり其の間に二男あり長男莊一郎君、二男靜二君と呼ぶ、現に東京府豐多摩郡千駄ヶ谷四一七番地に住し電話青山四六九五番なり。

藤浪鑑君

正四位勳三等　醫學博士
京都帝國大學教授

君は愛知縣士族藤浪萬得君の長男にして明治三年十一月を以つて生る、明治二十八年帝國大學醫科大學を卒業するや直ちに大學院に入り、曾つて病理學研究の爲め獨逸に留學せしことあり。現に京都帝國大學醫科大學教授たり。

夫人むめ子との間に長男修一君、二男得二君、長女和子、二女好子等あり。現に京都市上京區吉田町神樂岡六番地に住す。

藤山雷太君

正六位勳四等　貴族院議員
大日本製糖株式會社長

君は佐賀縣士族藤山覺佐衞門君の三男にして實業家伊吹震君の實父たり。明治十三年長崎師範學校を卒業し後ち慶應義塾大學に入りて福澤翁の薫陶を受け、歸鄉後選ばれて縣會議員となり更に議長に

擧げられしが後實業界に入り三井銀行に勤務す、偶々故中上川彦次郎君の拔擢する處となり芝浦製作所長となり、尋いで王子製紙及東東市街鐵道各株式會社專務取締役となり、明治四十二年大日本製糖會社破綻の後を享けて君其の社長となり經營宜しきを得て事蹟大いに擧げ其手腕內外に推賞せらるゝに至る。

現時は同社々長たる外三十四銀行、東京會館、東京印刷、國華徵兵保險、帝國商業銀行、帝國劇場、東洋製鐵、三井信託、日華生命保險、日本火災保險各株式會社の重役として我が實業界の重鎭たり曩に東京商業會議所會頭たりしことあり又貴族院議員に勅選せらる。

夫人みね子は東京府士族江川常之助君の二女にして神戸高等女學校を卒業し其の間に愛一郎君、勝彦君、元彦君、照彦君、洋吉君、美譽子、櫻子等あり。

現に東京市芝區白金今里町一四番地に住し電話高輪一五四五番なり。

藤山常一君

工學博士
電氣化學工業會社專務取締役

君は兵庫縣士族藤山種廣君の長男にして明治四年一月廿日を以つて生る。夙に東京帝國大學工科大學電氣科を卒業し引き續きカーバイトの研究に沒頭して明治卅三年遂に其製造法に成功し仙臺に日本最初のカーバイト製造工場を設置す。同四十一年渡歐して石炭窒素の製造法を研究し特許權を得て歸朝し、後日本窒素肥料株式會社を創立して其取締役となり、更に同四十五年北海道に炭化石灰窒素製造試驗工場を設けて其の研究に從事し、大正四年電氣化學工業株式會社を創立して同社專務取締役に就任せり。

現に前記の外大淀川水力電氣株式會社代表社員、關東水力電氣株式會社會長等にして、大正十年工學博士の學位を授けられ日本工業倶樂部、電氣協會、電氣學會、學士會等各會員たり。夫人清子は東京府の人福井信君の二女にして君との間に一男ありて伸君と呼ぶ、現に東京市牛込區中町二三番地に住し電話牛込三一八九番なり。

深尾隆太郎君

大阪商船株式會社副社長

勳六等實業家深尾隆太郎君は東京府士族深尾需君の長男にして明治十年一月を以つて生る。明治三十二年東京高等商業學校を卒業するや直ちに實業界に投じ曾つて大阪商船株式會社横濱支店長、朝鮮郵船、カフエーバウリスタ、南米殖民各株式會社の重役及び大阪商船株式會社專務取締役兼東京支店長、日清汽船、海外興業各株式會社の取締役たりしことあり曩に日露事件の功に依り勳六等に叙せらる。夫人をハツノ子と呼び其の間に長男重光君、二男重正君、長女富子、二女滿子、三女淑子等あり。現に大阪市南區天王寺町烏ケ辻一九番地に住す。

野津鎭之助君

侯爵　從三位勳四等
貴族院議員

當家は先代野津道貫君より家名を揚ぐ道貫君は維新の際國事に盡し功あり、明治五年陸軍大佐に任じ西南の役に際會して戰功あり、同十七年特旨を以つて華族に列し子爵を授けらる。明治廿八年日清の戰役に出征中陸軍大將に陞進し凱旋するや伯爵に陞爵し、同卅九年元帥府に列し日露の役には第四軍司令官として出征し偉勳を顯し功二級金鵄勳章を授けられ侯爵に陞爵す。

君は其の三男にして明治十六年七月を以つて生れ同四十年家督を相續して襲爵仰せ付けらる。夙に軍籍に身を投じ現に在鄕砲兵少佐にして貴族院議員たり。

夫人ひろ子は東京府士族末廣直方君の四女にして君との間に高光君、美智子、眞佐子、佐惠子等あり。現に其住宅を東京府下豐多摩郡澁谷町上澁谷六三番地に住し電話青山三二六四番なり。

藤田德次郎君

藤田鑛業株式會社長

君は我が財界の巨星男爵藤田平太郎君の令弟に當り同彦三郎君の令兒にして久原房之助君の從弟君たり明治十三年十一月を以つて生れ、夙に第三高等學校に入り後明治四十一年米國に留學しニユーヨーク大學校を卒業す。

歸朝後令兒の事業を援け現に前記の要職にある外合名會社藤田組副社長、小阪鐵道、宇治川土地各株式會社取締役、大阪合同紡績、藤田銀行各株式會社監査役たり。

夫人治子は京都府の人三井源右衞門君の令妹にして其の間に一男あり光一君と呼ぶ。現に京都市上京區木屋町二條上ルに住し電話長上一七八一番なり。

野間五造君

早稻田大學政治經濟科講師

君は舊岡山縣藩士野間隼太君の長男にして明治元年三月十日を以つて生る。夙に東都に遊學し明治二十二年早稻田大學法科を卒業するや聘に應じて東京日日新聞社に入り、同二十五年支那、印度を歷遊し、同二十六年臺灣日日新聞社の社長として大いに殖民政策を論及せり。

斯くて明治十四年岡山縣郡部より推されて衆議院議員に當選し一時日比谷原頭に彼が卓越せる論陣を張りて大いに活躍せしも感ずる所ありてか政界を去りて再び支那及米國に漫遊し、同四十一年歸朝し現時早稻田大學講師として我が學界に盡瘁するところ多し。

交詢社及永樂倶樂部等の各會員にして清元、新內、乘馬等に堪能なるが如し。夫人房子は岡山縣の人佐藤庫太君の二女にして君との間に由子あり。現に東京市牛込區市ケ谷仲町三八番地に住し電話牛込九九九番なり。

藤原喜代藏君

大和木材株式會社相談役

勳七等實業家藤原喜代藏君は鳥取縣の

人藤原市三郎君の長男にして明治十六年四月一日を以つて生る。明治四十年專門學校入學檢定試驗に合格し同四十二年十月文部省中等教員檢定試驗に合格す。同四十三年一月文部省より教育行政研究の爲め滿二ヶ年英獨佛に留學を命ぜられ、曾つて讀賣新聞政治部記者たりし事あり現に前掲會社の重役として君が才腕を鳴らし、又撞球、圍碁に趣味を有すといふ

夫人益子は大塚貞之丞君の三女にして麻布第三高等女學校及び東京女子英學塾の卒業なり。現に東京市本郷區向ヶ丘彌生町一番地に住し電話小石川二六四三番なり。

藤井宏基君

不動貯金銀行日本橋支店長

君は埼玉縣の人藤井薫造君の三男にして明治六年十月十五日を以つて生る。夙に東京專門學校法律科及日本法律學校を卒業し同三十三年の頃故關和知氏等と共に千葉市に於て新房總新聞を發行し續いて同三十五六年の交横濱貿易新聞を發行せし事あり、同卅七年米國に航し南加大學に入りて政治經濟學を修め其の傍ら桑港に於て桑港新聞を發刊す。

大正四年歸朝するや直ちにニコ〳〵社に入り其の編輯長となり同年千葉縣より憲政會公認として衆議院議員に立候補して目出度當選の榮譽を擔ひ、ニコ〳〵社を去りて不動貯金銀行に入り同行横濱支店副支配人となり同本店秘書課長を經て同行日本橋支店長となり現在に至る。趣味として書畫、漢詩、圍碁等あり。

夫人とみ子は兵庫縣の人中川元兵衛君の長女にして双葉高等女學校を卒業し君との間に周而君、釣而君及び眞理子、漢子等あり、現に東京府荏原郡入新井町不入斗八三〇番地に住し電話大森六二三番なり。

藤原銀次郎君

王子製紙株式會社長

君は長野縣の人藤原福榮君の令弟にして明治二年六月を以つて生る。夙に鄕校を卒ふるや青雲の志を抱いて東上し直ちに慶應義塾に入り、明治二十四年同校を卒業するや松江日報を創刊して獨力是れが經營に衝り、後三井銀行に入り次いで三井物產株式會社に轉じ同社上海漢門各支店を經て臺灣支店長、同社木材部長等を歷任す。

現に王子製紙株式會社々長たる外苫小牧輕便鐵道、電氣化學工業、日本加工製紙、關東水電、大淀川水力電氣、共同パルプ、和賀水力電氣、北海工業、赤尾商會、共同洋紙各株式會社の重役にして將棋に趣味を有すといふ。

夫人をロク子と呼び淑德の譽れ高し、現に東京市麻布區新網町二ノ一六番地に住し電話青山六三五七番なり。

布施現之助君

正五位勳四等　醫學博士

東北帝國大學教授

君は北海道の人布施市太郎君の四男にして明治二十八年五月陸軍工兵少尉に任官し、工兵第四大隊附を命ぜられ、爾來、累進して大正十三年二月陸軍工兵中將に陞進す。其の間築城部本部々員、工兵第四大隊附、野戰鐵道提理部々員、砲工學校教官、築城部本部々員、工兵第十五大隊長、砲工學校教官、築城部本部々員、陸軍省兵器局器材課長、砲工學校教官、陸軍技術本部第二部長、陸軍運輸部長等を歷任し、大正十四年五月築城部本部長に任ぜられ以つて現在に及ぶ。

其の特筆すべきは明治三十七八年日露の役勃發するや、君又出征して滿洲の野に轉戰し、功に依り金鵄勳章を賜はりしとなり。夫人を滿津子と稱し君との間に四男二女あり、東京市牛込區原町一ノ七三番地に住し電話牛込二九九〇番たり

古川長四郎君

直江津米穀取引所理事

直江津商業會議所會頭

君は新潟縣の人古川寅吉君の長男にして、安政六年九月を以つて生る。曩に佐渡汽船、高田瓦斯、直江津魚問屋、直江津解各株式會社取締役たりしが、現時は前記の重職にある外直江津商業銀行取締役として地方財界に謳はる。

夫人スミ子は同縣の人山田吉三郎君の三女にして其の間に三男二女ありて、寅治君、定治君、安三郎君及び園子、延子等あり、現に新潟縣中頸城郡直江津町に住す。

古川義天君

從四位勳五等

竹田宮附宮內事務官

君は兵庫縣の人古川惣吉君の二男にして、明治八年十二月二十九日を以つて同縣三原郡榎列村に生る。夙に郁文館中學を經て第四高等學校に進み、同校を卒ふるや東京帝國大學文學部哲學科に學び、研鑽琢磨、明治三十五年優秀の成績を以つて卒業す。

斯くて教育界に投じ、陸軍中央幼年學

校講師に任じ、更に明治四十年十二月仙臺醫學專門學校教授を拜命し、後ち東北帝國大學々生監を經て福島縣立安積中學校長に擧げられ、君が本邦教育界に盡瘁すること甚大、大正九年八月宮內省に榮轉して宮內事務官に任じ、竹田宮附仰せ付けられ以つて現在に及ぶ。

夫人しか子は兵庫縣の人喜多萬介君の長女にして、君との間に一女ありて美惠子と呼ぶ、現に東京府荏原郡大崎町上大崎四七八番地に住し電話高輪三五〇八番たり。

野田俊作君

衆議院議員

我が國立憲政友史上特筆すべき憲政の巨人野田卯太郎君は逝けり、君は明治大正昭和を通じての我が政界の花と謳はれ衆議院議員、政友會副總裁、商工大臣、逓信大臣等の顯職を初めとして中央新聞社長、東洋拓殖株式會社副總裁、滿洲製麻株式會社取締役等を歷任して、帝國の財政界に貢獻するところ甚大なりしが、怨むべし天の配劑、我が巨人野田大塊翁遂に昭和二年二月二十三日病を得て無爲庵を枕に悠々として逝けり。

君は即ち故正三位勳一等野田卯太郎君の長男にして、明治二十一年五月を以つて福岡縣三池郡岩田村に生る。夙に第七高等學校を經て東京帝國大學法科大學經濟科に學び、大正二年優秀の成績を以つて同科を卒業するや直ちに實業界に投じ南滿洲鐵道株式會社に入社して同驛長に就任し、次いで社命を帶びて外遊し歸朝後東京支店庶務課長に任ず。

然して後ち同社を辭して政界に志し、大正十三年の總選擧に際し千葉縣郡部より推されて馬を陣頭に進め、强敵を見事打ち破り遂に當選の榮譽を擔ひ、現に政友會に屬し院の內外に重きをなす、若き政治家二世野田君の得意や思ふべく、而して嚴父の純血を豐かに汲みて生ひ立ちたるこそ目出度けれ。

君は尙ほ幾多事業會社に關係して其の敏腕を振ひしことあり、夫人靜子は男爵古市公威君の二女たり、現に東京市麻布區材木町二九番地に住し電話青山八九番たり。

藤田茂一郎君

藤田活版製造所主
明品會藤田商店主

君は東京府の人藤田喜十郎君の長男にして、明治十五年十一月六日を以つて生る。夙に學業を卒ふるや實業界に身を投じ、文化の發展に伴ひて圖書出版及び新聞通信雜誌界の異常なる發展を見たる我が國の現狀に鑑み、機を見るに慧眼なる君は即ち斯界に直接關係深き活版製造業の有望なるに着眼し、早くも斯業を開設して奮鬪大いに努めしかば業運漸次加はり、斯界の信望月に年に加はり、今や東都業界の白眉を以つて目さるゝに至り前途益々多望なるものあり。

曩に軍籍にありし關係上常に在鄕軍人として各種公共事業に力を致し、君が帝國在鄕軍人會神田區分會員として同會の爲め盡瘁すること甚大、其の信望絕大にして令名又噴々たり。

夫人ヨシ子は東京府の人大川紀尾藏君の長女たり、現に東京市神田區東紅梅町二番地に住し電話神田四六一番なり。

藤田謙一君

日本活動寫眞株式會社長
藤田合名會社代表社員

君は青森縣の人明石永吉君の二男にして、明治六年一月を以つて生れ、先代正三郎君の養嗣子となる。夙に明治法律學校を卒業するや大藏省に勤務し、後ち辭して實業界に投ず。

然して岩谷商店支配人となり、更に朝鮮印刷株式會社々長、臺灣鹽業株式會社專務取締役たりしが現に前記の外富士水電、箱根土地、東京毛織各株式會社の社長として知られ且つ旭石油、東洋遊園地信越電力各株式會社の重役として我が財界に重きをなす。

尙ほ青森縣多額納稅者にして、現に直稅七千六百八十余圓を納む、曩に推されて東京商業會議所議員となり、大正十五年七月同商業會議所會頭に就任し以つて現在に及ぶ。

夫人をトク子と呼び和歌山縣の人徂徠善藏君の女にして跡見女學校を卒業し、其の間に六男二女あり、現に東京市外平塚下蛇窪五七五番地に住し電話高輪五五番なり。

福岡喜久治君

東亞メリヤス會社常務取締役

君は大阪府の人中村勘藏君の四男にして、明治十四年八月を以つて生れ、後ち福岡光次郎君の養嗣子となる。現に東亞メリヤス會社常務取締役たり。

夫人こふさ子は兵庫縣の人光齋淸太郎君の令妹にして君との間に喜一郎君及び美智子あり。

福田繼治郎君

北方銀行頭取
濃飛農工銀行取締役

君は岐阜縣の人福田繼次郎君の長男にして、明治四年六月を以つて生る。夙に實業界に投じ、曩に大垣銀行、濃飛農工銀行各株式會社の重役たりしが、現時は北方銀行頭取たる外濃飛農工銀行取締役として知らる。

夫人りやう子は岐阜縣の人矢橋敬吉君の令妹にして君との間に良吉君、良男君一郎君、達良君等あり、現に岐阜縣本巢眞桑に住す。

古田慶三君

北海道炭礦汽船會社常任監査役

君は奮信州高遠藩士古川重威君の長男にして、慶應三年五月を以つて生る。夙に鄕校を卒ふるや笈を負ふて上京し、明治二十四年東京商科大學の前身たる東京高等商業學校を卒業するや直ちに實業界に投ぜり。

斯くて三井鑛山株式會社に入りて同社商務部長たりしが、大正七年辭して甚隆炭礦株式會社を創立して同社常務取締役に就任し、傍ら石狩石炭株式會社の重役として活躍大いに努め、兩社の發展に盡瘁すること甚大なりき。

然して後ち北海道炭礦汽船株式會社に入りて常務取締役に就任し、能く内外の社務を鞅掌し、現に同社常任監査役として我が財界に令名あり。

夫人しげ子は東京府の人佐渡啓一君の二女にして君との間に義一君、忠夫君、德郎君及び新子、君子等あり、現に東京市外入新井町新井宿二一八九番地に住し電話大森一四八番たり。

藤田　讓君

明治生命保險會社專務取締役

君は岡山縣の人藤田眞兵衛君の三男にして、元治元年十二月を以つて同縣後月郡井原町に孤々の聲を擧ぐ。夙に慶應義塾大學を卒業するや直ちに米國に航し、桑港大平洋商業學校に學び滯留五ヶ年にして歸朝す。

然して、直ちに明治生命保險株式會社に入社し累進して名古屋支店長に就任し爾來恪勤精勵、同社の發展に盡瘁すること甚大、現に同社專務取締役として知られる。尙ほ曾つて米國ドーマン商館に勤務せし事あり。現に東京府北豐島郡西巢鴨町宮仲一九二一番地に住し電話小石川九八二番たり。

野口彌三君

第一銀行常務取締役

君は長崎縣士族野口久四郎君の長男にして、明治二年二月を以つて生る。明治三十年七月東京帝國大學法科大學を卒業するや、直ちに第一銀行に入り後釜山支店、仁川支店等の各支配人を經て本店營業部副支配人兼調査課長に轉じ、同勤務中銀行調査の爲め英國に留學しロイヅバンクに入りて見學し、在留一ヶ年にして歸朝す。斯くて神戸支店支配人に擧げられ大正二年三月大阪支店支配人に進み、同九年一月同社常務取締役兼大阪支店支配人に就任し以つて現在に及ぶ。

夫人信子は男爵辻太郎君の令妹たり、現に兵庫縣武庫郡住吉町に住し電話御影二五二番なり。

福田敬藏君

鹿沼商業銀行常務取締役

君は栃木縣の人福田勇七君の長男にして、慶應三年十二月を以つて生る。夙に地方實業界に活躍し現に鹿沼商業銀行常務取締役たり。夫人をヨシ子と稱す、現に栃木縣上都賀郡鹿沼に住す。

福島禎藏君

東洋醸造會社常務取締役

君は宮城縣の人福島與惣五郎君の二男にして、明治二十三年八月を以つて生る現に東洋醸造株式會社常務取締役たり。夫人を鏡子と稱す。現に宮城縣仙臺市新傳馬町二十番地に住す。

福本常太郎君

竹中工務店東京支店支配人

今や、東西土木建築界に錚々の名聲を博し、殊に關東大震火災後に於ける帝都復興土木建築界に活躍して貢献すること甚大なるを合名會社竹中工務店東京支店となす。

然して、同社東京支店支配人福本常太郎君又斯界の重鎭を以つて目せられ、今や同社内外の社務を鞅掌して其の敏腕を縱横に振ひ、同社發展に盡瘁すること甚大、社會の信望絶大なり。

君は東京府士族福本權太郎君の長男にして、明治十五年十月十九日を以つて生る。夙に實業界に身を投じて奮鬪大いに努め、後ち合名會社竹中工務店に入りて恪勤精勵せしかば、遂に同社東京支店支配人の要職に就き以つて現在に及ぶ。

夫人マキ子は三重縣の人佐治爲善君の長女にして君との間に眞一君及び千鶴子滿子、清子、和子、登貴子等あり、現に東京府荏原郡入新井町新井宿山王二六二番地に住し電話高輪二八七六番たり。

福田俊夫君

勳五等　實業家

株式會社東出鐵工所社長

君は舊姫路藩士福田門彌君の二男にして、安政元年十二月を以つて生る。夙に神戸にありて英文學を學び、後ち上海に航して更に斯學の研鑽を積みて歸朝す。

斯くて職を工部省に奉ぜしも、後ち辭して共同運輸株式會社に入社し、明治十七年同社より英國に出張を命ぜられ、たまゝ同社が三菱に合併して日本郵船會社創立せらるゝや、引き續き同社に勤務すること二十有餘年の久しきに及びぬ。

然して、後ち辭して獨力東出鐵工所を創立し、大正七年之を株式會社となし、現に同社々長たり。夫人をみき子と稱し君との間に一女あり、現に兵庫縣武庫郡本山に住し電話御影三四二番たり。

藤田政輔君

東京藤田合名會社長

不二塗料株式會社長

正八位理學士藤田政輔君は山口縣の人鮎川義介君の令弟にして、明治二十二年二月二十四日を以つて生れ、後ち藤田文子の養嗣子となる。大正四年京都帝國大學理科大學化學科を卒業するや藤田研究所を設立す。

曩に鴻池銀行取締役、日本汽船株式會社監査役たりしが現時は東京藤田合名會社々長及び不二塗料株式會社々長たる外中央火災傷害保險株式會社重役たり。

夫人八重子は先々代小太郎君の長女にして、女子學習院を卒業し君との間に廣太郎君及び芳子、禎子、式子、充子等あり、現に東京市赤坂區丹後町七七番地に住し電話青山五一〇八番なり。

野木三吉君

東京府瀧野川町收入役

君は東京府の出身、明治十五年如月北豐島郡上練馬村の豪農故上原傳左衛門氏の三男に生る。

幼少の頃より群童を拔きて穎才の聞え高く、父兄も君の將來を思ひ高等の學府に送つて學修せしめんとせしも、在學中途にして長兄の逝去より更に嚴父の長逝更に次兄の重患等打ち續く不幸に遭遇せしかば、多數使用人を指揮監督するの止むなきに至り、高等小學校を卒業するや素志を擲つに至れり。

斯くて明治三十二年瀧野川町の素封家野木家に迎へられて其の養嗣子となる、養父故隆歡翁は同町屈指の名望家にして名譽助役、町長等として久しき間町制に盡瘁せるの士たりき。

然して君は其の當時の家業植木商を引き繼ぎて二千餘坪の樹木園を栽培　長くも閑院宮家、小松宮家其の他皇族華族富豪等よりの御用命を拜せしも時代の進運に連れ人口稠密し同栽培に困難なるに鑑み、之を廢して白米商を開始して斯業に從事すること十有三年、後ち感するところありて之を廢し、爾來、專ら町制に盡瘁し、大正六年九月町收入役に推され滿期の都度重任して茲に三期今や名收入役として令名高く、尙ほ板橋稅務署所得調査委員たること三期に及べり。

君は頭腦明晰、數理の學に秀で、其の町制に參劃し、收入役として重責に寸毫の違算なく、常に計數的立場より萬事を處理する世人の能く知るところなり。

趣味に書畫あり、俳句は古瓢と號して凡俗の人、弓術は尙弓の號を以て名高く更に好翠と號して盆栽に妙なりといふ。

夫人を登美子と呼び其の間に三男一女あり、現に東京府下瀧野川町田端三四六番地に住す。電話小石川三一九三番

野崎廣助君

東京市深川區長

君は福島縣士族野崎淳三氏の長男にして、明治十一年四月二十二日を以て生る

明治三十三年法政大學の前身たる和佛法律學校を卒業し、明治四十年東京市京橋區役所に入りて精勤、偶々大正元年病氣の爲め職を辭し、全快と共に大正四年五月東京市深川區役所に入りて精勵久しく、大正十二年二月同庶務掛長に陞進、昭和三年一月職制變更により庶務課長となり、昭和四年一月拔擢せられて同區長に任じ以て現在に及ぶ。

趣味に繪畫あり、社交に厚く、同區民の信望絕大なり。

現に東京市深川區常盤町一ノ九番地に住す。電話本所一七番

野村清臣君

法學士

日本興業銀行參事秘書役

君は京都府士族野村孝清氏の長男にして、明治二十七年三月十五日を以て京都市外上加茂村に生る。

夙に第三高等學校を經て東京帝國大學法科大學政治科に學び、大正六年優秀の成績を以て同科を卒業するや直ちに實業界に投ず。

斯くて日本興業銀行に入り同行爲替係割引係、鑑定部、預金部主任等を歷勤、大正十二年同行參事に擧げられ、同十四年九月總裁秘書役として才腕を振ひ、今や同行の內外に重きをなし新進實業家として前途を囑望せらる。

趣味に運動あり、社交に厚く現に學士會々員、銀行倶樂部會員たり。

夫人を國子と呼び兵庫縣の人堀江金太郎氏の令妹にして神戸第一高等女學校の出身、其の間に暢清君及び尙子あり、現に東京市小石川區小日向水道町九〇番地に住す。電話小石川三七四一番

古田俊之助君

住友伸銅所(株)常務取締役

君は京都府の人井上數馬氏の二男にして、明治十九年十月十五日を以て生れ仝三十二年古田家に養子となり其の家督を相續す。

明治四十三年東京帝國大學工科大學採鑛冶金科を卒業するや直ちに住友財閥に入り、同伸銅所支配人たりしが昭和三年推されて常務取締役に就任今や關西財界に令名あり。

趣味に運動、旅行あり、社交に厚く大阪倶樂部、精工會各會員たり。

夫人政子は古田敬德氏の長男にして其の間に芳德君、武德君、敬三君あり、現に兵庫縣武庫郡本山村中野三五九番地に住す。電話芦屋一四五番

野村大五郎君

辯護士　辨理士

君は石川縣士族先考由友氏の二男にして、明治三年六月三十日を以て生る。

夙に鄕校を卒ふるや靑雲の志を抱き笈を負ふて東上、研鑽琢磨の結果明治二十六年明治大學法科を優秀の成績を以て卒業するや辯護士登用試驗に登第す。

斯くて直ちに東都法曹界に投じ、獨力辯護士事務所を開設して一般法律事務に從事せしかば、其の明快なる決斷振りは忽ちにして社會の信望を博し、今や東都法曹界に聲名高し。

趣味に讀書あり、又旅行を愛好すといふ、東京辯護士會々員たり。

夫人シマ子は千葉縣の人高橋五郎氏の長女にして其の間に英夫君、孝文君、和友君、武美君及び靜江、久代、郁子等あり、現に東京市神田區美土代町四ノ五番地に住す。電話神田二五七五番

野口修三君

東京貯藏銀行營業部長代理調査課長

君は東京府の人野口貞一氏の二男にして、明治十五年十月廿六日を以て生る。

明治三十八年京都帝國大學法科大學を卒業するや東京地方裁判所に職を奉じ、明治四十四年實業界に投じ、東京貯藏銀行に入り、爾來、同行大阪支店長、同本店秘書役等を歷任、現に同行營業部長代理兼調査課長として知らる。

夫人春香子は東京府の人石山小三郎氏の長女にして御茶ノ水高等女學校の出身其の間に義一君、惠以子、正子等あり、現に東京市外巣鴨町一三〇三番地に住す

藤　正　純君

鐘淵紡績(株)取締役

君は大分縣の人藤銀兵衛氏の三男にして、明治元年五月廿九日を以て同縣宇佐郡に生誕す。

夙に鄉校を卒ふるや青雲の志を抱いて東上し、明治廿五年慶應義塾大學を優秀の成績を以て卒業す。

斯くて實業界に投じ、明治二十八年の交本邦財界の巨頭武藤、和田兩氏と共に三井銀行に入り同行神戸支店に勤務、累進して仝四十年には同行取締役に擧げられ、大正八年常務取締役に就任して同行發展に貢献すること甚大なり。

斯くて後ち鐘淵紡績株式會社取締役に推され現に其の任にありて本邦財界に令名あり。

趣味に圍碁あり、社交に厚く交詢社、神港倶樂部各會員たり。

夫人遊亀江子は兵庫縣の人水澤郁太郎氏の令妹、其の間に純三君、孝君、博君及び花子、貞子、節子、輝子等あり、現に東京市本郷區弓町一ノ六番地に住す。電話小石川二三五九番

古　田　眞　道君

勳八等　重林寺住職
眞言宗豐山派宗務所庶務部長

君は靜岡縣の人鹽坂眞三郎氏の五男にして、明治十年三月二日を以て同縣沼津に生誕す。

幼にして佛門に歸依し、明治三十年三月豐山中學校を卒業し、後ち文珠院、能滿寺等の住職を經て明治四十一年九月重林寺住職に擧げられ、大正十三年宗會議員に推され、仝十四年九月豐山派宗務所庶務部長に任じ今や同宗門派の最高幹部として令名あり。

其の勳等あるは彼の明治三十七八年日露の役勃發するや征途に就き遠く滿洲の野に轉戰して偉勳を立てたるものなり。

夫人を滿壽子と稱し其の間に善雄君、邦雄君、信雄君及び不二子あり、現に東京市外池袋町三八七番地に住す。電話大塚二五〇五番

藤井林右衛門君

不二家洋菓子店經營者

君は愛知縣の人岩田林七氏の四男にして、明治十八年十一月十六日を以て生れ後ち藤井善彌氏の養嗣子となる。

夙に鄉校を卒ふるや東都に上り、明治三十四年大村屋食料品店に入りて精勤、同四十四年獨力以て不二屋洋菓子店を創立斯界に活躍して常に優秀なる製品を社會に送りしかば信用頓に擧り、而して大正十一年事業の大擴張を期して横濱市伊勢崎町に支店を開設、今や京濱斯業界の白眉を以て目せらるゝは蓋し君の至誠奮闘の賜と謂ふべし。

夫人きみ子は岐阜縣の人大谷家の出にして其の間に善一郎君、誠司君、慶三君、總四郎君、五郎君、和郎君及びすみ子、美惠子等あり、現に横濱市鶴見區東寺尾町に住す。電話鶴見六一九番　本店電話銀座二〇三八番五三二七番

福　田　五　郎君

正五位勳四等　衆議院議員
遞信參與官

君は佐賀縣士族福田又藏氏の二男にして、明治十年九月を以て生る。

明治三十八年京都帝國大學法科を卒業するや職を官途に奉じ、爾來、司法官試補、福岡地方裁判所判事、小倉區裁判所判事、熊本區裁判所檢事、同地方裁判所檢事、仙臺區裁判所檢事、神戸區裁判所兼地方裁判所檢事等を歷任、在職十四年にして官途を辭して實業界に投ず。

斯くて志を海運界に立てゝ斯界に活躍せしかば業運頓に擧り、今や本邦海運界に令名あるのみならず、餘力を提げて政界に乘り出し、大正十三年の總選擧に鄉里長崎縣より出馬し、彼の帝國議會の名物男であり、且つ又學界の奇人として知らるゝ副島義一博士を向ふに廻して一騎打をなし、快戰大いに力めし結果遂に猛者義一博士を組み伏せて當選の軍扇を穫得、一躍縣下に雷名を馳す。

然して昭和三年二月日本政黨史上特筆大書すべき普選第一回の總選擧に際し、再び旗幟を鮮へして出陣するや又もや大多數の得票を以て當選、今や立憲民政黨幹事たり、且つ昭和四年六月濱口內閣成るや遞信參與官に任じ以て現在に及ぶ。

夫人鐵子は佐賀縣の人古賀與一氏の二女、佐賀縣成美高女の出身たり、現に神戸市山本通リ四ノ九九番地に住す。電話葺合二九七八番　營業所同市榮町四丁目電話三宮二三二一番二七五六番

藤ノ木清太郎君

勳八等
大信自動車商會主

君は新潟縣の出身にして、明治十六年十一月二十七日を以て生る。

明治三十八年日露の役には遠く滿洲の征途に就き轉戰功あり、功に依り勳八等瑞寶章を賜はる。

大正六年大信自動車商會を興して斯界に活躍せしかば業勢頓に加はり、今や四ケ所のガレーヂと二十數臺の自動車を擁して堂々の陣容を張り東都斯界に聲名あり。

昭和二年以來東京自動車組合評議員に當選、現に其の外同町の爲め盡瘁すること甚大なり、旅行を愛好す。

現に東京市日本橋區濱町一ノ三番地に營業所を有す。電話浪花三〇一四番六八一五番

福田喜一郎君

旅館關根屋經營者
谷川温泉(株)取締役

遠來の客を迎へて懇切叮嚀、部屋の結構又衛生的に且つ優雅にして、位置は帝都の中樞、關根屋旅館の眞價は正に都下

中堅の旅館たる名に背かず、店主福田喜一郎君は群馬縣の人故喜三郎氏の長男にして、明治八年三月二十二日を以て生る

夙に上京開成中學校に學びしも不幸や嚴父の逝去に會し、年少にして其の家督を相續す、時は明治二十七年の交なりき斯くて父業たる關根屋旅館を繼承、益々業勢を張り、時代の進運に伴つて諸設備に改善を加へ、傭人又主人の旨を体して顧客に接し、一度此處に足を投せんか十年昵近の感を抱かしむる程なり。

今や東都斯界に重きをなし、東北關西其の他各方面の貴顯紳士並に淑女は皆當館に投宿するの盛況たり。

君は又公共事業に心を致し、現に昌平會相談役、其の他町自治の爲めに盡瘁すること甚大なり。

現に經營の傍ら谷川溫泉取締役たり、釣魚に趣味を有するが如し。

現に東京市神田區淡路町二ノ一番地に住す。電話神田一八〇〇番一八〇一番一六八六番

野村慶二君

中井新右衛門商店支配人

君は東京府の出身にして、明治八年九月十日を以て生誕す。

夙に實業界に投じ、現時東都名代の酒問屋中井新右衛門商店支配人として敏腕を振ひ、曾つては酒問屋組合副頭取として斯界の發展に貢献すること甚大なり。

酒に關する鑑識力に富み、曩に農林省並に商工省其の他公共團体主催の博覽會品評會等の審査委員等を勤めしこと一再ならず。

夫人ぬい子は東京府の人村田善吉郎氏の長女にして其の間に誠君、泰君、禎君及び叡子、愛子、喜以子、慶子等あり、現に東京市京橋區北新堀町二ノ五番地に住す。電話京橋一五〇五番

野村元五郎君

野村經行頭取
大東物産株式會社取締役

關西財界に活躍して錚々の名あるを我が野村元五郎君となす。

君は大阪府の人野村淨助氏の四男にして、明治二十年十月十八日を以て生れ、大正四年三月分家して一家を創立す。

明治四十一年大阪高等商業學校を優秀の成績を以て卒業するや直ちに關西實業界に投じ、其の天稟の才幹を發揮して敏腕を縱横に振ひしかば着々として關西實業界に重きをなし、現に前記諸職にある外南洋護謨拓殖、野村商店、福島紡績各株式會社の重役として令名あり。

夫人夏子は大阪府の人加賀正太郎氏の令妹にして其の間に博君及び喜美子、昌子、周子等あり、現に兵庫縣武庫郡住吉村觀音林一八七五番地に住す。電話御影三〇五番

野原今朝平君

全國蓄音器聯合會々長
本邦蓄音器界の恩人　野原商店主

其の昔、エヂソン氏が蓄音器を發明してより茲に五十年、吾等は今其の進歩の跡を顧みて轉々感慨に堪えざるものあり

今や多年の腐心研究を以て本邦斯界の改善發達の爲め獻身的努力を稟まざる我が野原今朝平君の功績又大なりと謂はざるべからず。

君は靜岡縣の輩出せる逸材にして、明治十四年四月一日を以て生る、夙に本邦蓄音器商界に其の天稟の才を遺憾なく發揮して活躍せる人材にして、其の經營主宰する野原商店より發賣する「ベストン」蓄音器は正に其の優秀品を以て斯界に令名高く、君が多年研究によつて發明せられたる機構「モーター、サンドボックス、アトム」等を完備し、而も品質の優良と價格の低廉とにより全日本蓄界に進出するは蓋し君の多年の研究と齎さざりし努力の結晶と謂ふべきには非ざる哉

吾等は今野原商店の發展と同店經營者たる同君の人と爲りとを列記するの機會に逢着せしことを多とするものあり、現時は前記諸職にある外東京蓄音器商組合會長、具足町會幹事として知らる。

現に其の店舗を東京市京橋區具足町八番地に有す。電話京橋二七四七番六九二一番

藤岡茂太郎君

内外ビルディング(株)支配人

君は現籍を東京府に有し、香川縣の人故藤岡辰藏氏の長男として、明治二十年五月十五日を以て同縣木田郡其の名も高き古戰場屋島に生誕す。

夙に縣立農林學校を卒ふるや、香川縣技手、農林學校教師等を歴任せしも、固より大志ある君は村夫子を以て終始するに忍びず、即ち笈を負ふて東上、研鑽琢磨の結果專修大學經濟科を卒業す。

斯くて學成るや東都實業界に投じ、北川合資會社に入りて敏腕を振ひしも、大正十一年內外ビルディング株式會社設立せらるゝや同社に轉じ、現に同社支配人として知らる。

趣味に琴古流尺八あり、其の道の達人として評せらる。

夫人を達世子と呼び高松市高松高等女學校の出身たり、東京市外中野町中野三八七九番地に現住す。電話中野九〇〇番

藤瀨新一郎君

理學士
理化學研究所研究員

君は故藤瀨政次郎氏の長男にして、明治三十二年七月を以て生る。

嚴父は長崎縣の出身にして、夙に長崎中學、長崎外國語學校を卒業し、更に商法講習所を卒業するや直ちに本邦實業界に投じ、三井物産株式會社神戸、大阪、香港、新嘉坡、倫敦各支店に勤務、尋いで同社上海支店次長、同支店長等を經て同社常務取締役たりしが病を得て職を辭せしも依然として同社系統たる東京綿花

株式會社々長並に芝浦製作所、日華蚕糸、日本電氣、東亞興業、三井物產各株式會社取締役として本邦實業界の重鎭として令名ありしも、不幸昭和二年一月八日他界す。

君は實に同氏の後繼者たり、大正十二年東京帝國大學理學部を卒業するや更に同大學院に入りて研鑽すること三ケ年、大正十五年理化學研究所に入り、眞島研究室に在りて研究に專念、今や新進理學者として前途多望なり。

夫人孝子は伯爵林博太郎氏の長女にして女子學習院の出身、其の間に政友君あり、現に東京市芝區白金今里町五九四一番地に住す。電話高輪一五三八番

藤岡玄德君

從七位勳八等
鐵道工業株式合資會社會計課長
多摩川砂利(株)監査役

君は福島縣田村郡巖江村の產、明治十年六月を以て生る、夙に鄉校を卒ふるや鐵道建設事務所に職を奉ず。

爾來、九州、盛岡各建設事務所を歷任し、其の間精勤十有七年、昭和元年實業界に轉じ、鐵道工業株式合資會社に入社し、現時同社會計課長として知らるゝのみならず、多摩川砂利株式會社監査役として令名あり。

趣味に旅行、謠曲等あり、夫人わか子との間に二男一女あり、因に長女千代子は鐵道省官吏宮崎岩代氏に嫁す、現に東京市外六鄉町雜色二九七番地に住す。

野口雅雄君

國際通運(株)參事

今や國際通運會社內に重きをなし、日夜精勵以て同社の發展に盡瘁して能く其の職責を完うする傍ら尙ほ余暇を日本史學の研究に專念し、日本文化の向上發展に留意し、種々の新聞雜誌に寄稿する等公私能く務むる君は斯界稀に見る逸材と謂はざるべからず。

君は千葉縣士族野口靜氏の長男にして明治五年十一月八日を以て生る。

明治二十七年中央大學の前身たる東京法學院を卒業し、仝三十一年國際通運の前身たる內國通運株式會社に入社し、爾來、同社事故係、庶務課長、文書課長等を歷任、昭和二年同社が併合して國際通運株式會社と成るや同庶務課に就任、更に昭和三年四月仝社參事に擧げられ以て現在に及ぶ。

夫人ふさ子は明治の初年フランスに渡航したる先覺者鹿兒島縣士族山口彥治氏の息女にして其の間に靜雄君あり、現に東京市小石川區林町九二番地に住す。電話小石川四八五三番

古屋儀近君

東京電燈(株)調度課長

君は山梨縣の人故古屋儀正氏の長男にして明治十六年十二月十日を以て生る

明治四十三年東京帝國大學法科大學を卒業し、大正元年東京電燈株式會社に入社し、爾來、同社調定係長、經理課調度係長等を歷任し、現に同社調度課長として知らる。

趣味に旅行あり、電氣倶樂部會員たり

夫人みのり子は山梨縣の人秋山源一氏の三女にして甲府高等女學校の出身、其の間に儀久君、儀二君、儀三郎君、儀也君、儀之君及びみか子あり、現に東京市外稗貢村稗文谷一四四四番地に住す。

藤田義保君

大阪合同(株)常務取締役
關社東京支店長

君は茨城縣の產にして、明治十九年十月を以て同縣笠間町に於て生誕す、嚴父を故藤田義德氏とし其の嫡男に當る。

夙に鄉校を卒へ後ち横濱市に移り横濱商業學校に入學し明治三十九年優秀の成績を以て卒業するや、夙志たる實業界の人と爲り同年直ちに貿易商アーレンス商會に入り、染料部に勤務、孜々實務を鞅掌せり。

斯くて大正六年獨立の機運に會し、同商會を辭するや直ちに知友織田信治氏と提携し織田商店を創設し、染料工業藥品の輸出入販賣業を開始せり、然して同十年藤安合資會社を創立せるが同十四年に至り大阪合同株式會社と合併し、君は擧げられて同社常務取締役に就任、同社東京支店長を兼ね社務の樞機に當り以て今日に至れり。

君に處世上の所懷を叩けば曰く「自他を害せずとの一言に盡く」蓋し君の人と爲りを卜するに足ると共に社務を宰する當事者の好箇の咸言たらん乎

夫人君子は兵庫縣の人故濱田利吉氏の三女にして女子大學家政科の出身たり、其の間に淑子、昭子、和子等あり、現に東京市外大崎町下大崎十一番地に住す。電話高輪六五二番

藤井眞信君

正五位勳四等　大藏省主計局長
醸造試驗所長

君は德島縣の人藤井廉三氏の令弟にして、明治十八年一月を以て生る、明治四十二年東京帝國大學法科大學を卒業するや文官高等試驗に登第す。

爾來、專賣局書記、大藏屬、稅務監督官を經て歐米各國に出張、歸朝後稅務監督局事務官、大藏書記官、主稅局經理課長、大藏省參事官兼大藏大臣秘書官、主稅局國稅課長兼營繕局理事、東京稅務監督局長等を歷任以て現在に及ぶ。

東京市四谷區大采町十八番地に住す。

福喜多靖之助君

パチエラー・オヴ・アーツ
玉子製紙(株)調度課長

君は三重縣士族福喜多平馱兵衛氏の次子として、明治七年三月十六日を以て孤々の聲を擧ぐ。

夙に學を好み明治三十一年京都同志社高等普通科を出ずるや後ち米國に留學、スタンホード大學に入學、孜々學窓に勉め同三十七年之を卒業、パチエラー、オヴ、アーツの學位を享けて歸朝せり。

斯くて同三十九年米國大使館囑託たり

しが大正元年王子製紙株式會社に入社し當初は重役秘書たり、爾來、鋭意社業に恪勤、同七年同社調度課長に就任以て今日に至れるが、此の間同社より派されて歐米各國を視察せること三回に及ぶ。

君は人物極めて醇厚にして典型的の好紳士たり、蓋し嘖々の令聞ある所以乎、英文學に趣味あり、夫人をスエ子と云ひ大阪の人小島喜三郎氏の二女にして横濱共立高等女學校及び神戸女學院の出身たり、其の間に久君、學君、茂君、勇君及びよね子等あり、東京市麻布區本村町四十八番地に現住す。電話高輪六〇二八番

福井源次郎君

三共株式會社常務取締役
興東貿易(株)取締役

當家は遠く其の祖を滋賀縣日野町に發し、先代源次郎氏に至りて横濱に移り、更に東京に轉居せり。

君は先代源次郎氏の長男にして、明治七年九月を以て生る、夙に外遊すること前後二回に及び、現に三共株式會社常務取締役たる外興東貿易取締として知らるる

夫人トヨ子は東京府の人三共社長、其の他幾多會社に重役として財界に令名ある鹽田又策氏の令妹にして跡見高女の出身、其の間に透若及び榮子、澄子、美子等あり、現に東京市外中野町一〇三六番地に住す。電話中野一二六番

野尻清彦君

創作家

即ち「大佛次郎」のペンネームに伝りてヨリ天下の大衆に親愛なる君は、毎著巨作を公にして獨自の光彩を放ち今や新興日本文壇の一方に君臨し、其の嘖々の聲名は波浪を越えて遠く海外にまで普きに至る、蓋し現代日本の誇るべき存在なりと謂はざるべからず。

君は明治三十年十月を以て横濱市に生を享く、野尻政助氏の三男にして、幼時既に學才衆に抽んず所謂栴檀は双葉にして特異の放香あり、夙に東京府立第一中學校に學び、之を卒ゆるや、第一高等學校を經て東京帝國大學に入學、政治科を專攻研鑽して大正十一年同大學を卒業す

然して直ちに外務省條約局に入り官界の人となれるも、資性文筆の業に適ひ茲に鑑るところあり、翻然志向を轉じ即ち野に下りて、爾來、著述に挺身し、當初海外文藝の紹介に努めたるも後ち創作に專心し作品世に出ずるに及んで其の獨特の才華ある靈筆は俄然江湖の讀者を魅了し遂に今日の地歩を獲得するに至れり。

所謂洛陽の紙價を高めたる名著尠からざるも就中「鞍馬天狗」「赤穂浪士」「どろつき船」等巷間に喧炙し又現に國民新聞紙上に連載の「からす組」及び東京日々新聞連載「由井正雪」等嘖々の好評に滿つ。

君は趣味として美術を愛好す、夫人西子は東京府の人原田德藏氏の長女にして堀越裁縫女學校の出身たり、現に神奈川縣鎌倉町材木座一一四番地に住す。電話鎌倉八六八番

古田宗二郎君

三共株式會社常務取締役
日新醫學社(株)取締役

君は三重縣の人古田杏祐氏の二男にして、明治六年六月を以て生れ、後ち先代宗平氏の養子となり同二十二年家督を相續す。

明治二十六年岡山醫學專門學校藥學科を卒業するや本邦製藥工業に盡瘁すること甚大、現に前記會社の要職にある外東京石鹸製造、柏木檢溫製作所各株式會社重役として令名あり。

現に東京市下谷區上野櫻木町四〇番地に住す。電話下谷一九五〇番

二見甚郷君

正六位勳四等
衆議院議員

君は宮崎縣の人二見甚藏氏の長男にして、明治二十一年十月を以て生る。

大正四年東京帝國大學法科大學政治科を卒業するや直ちに外務省に入り、公使館三等書記官より同二等書記官に陞進、倫敦總領事館、和蘭公使館、墺太利公使館等に歴勤、大正十三年官途を辭す。

斯くて昭和三年大日本憲政史上特筆すべき普選第一回の總選擧に際し、馬を陣頭に進めしかば鄕黨大多數の推すところとなり遂に當選の榮譽を擔ひ今や中央政界に知らる。

曩に佛國巴里に開催せられたる講和會議全權委員隨員仰せ付けられしことあり

夫人ウメ子は宮崎縣の人中原清氏の息女、其の間に英子、芳子あり、現に宮崎縣淀川町に住す。

野並亀治君

正五位勳四等　專賣局製造部長

君は高知縣の人野並數吉氏の長男にして、明治九年十月を以て生る。明治三十五年東京帝國大學工科大學機械科を卒業せり。

曩に臨時煙草製造準備局技師、煙草專賣局技師、大藏技師等に歴任、現時專賣局技師兼大藏技師にして專賣局製造部長たり、曾つて英獨露米各國へ差遣せらる

現に東京市本郷區駒込西片町一〇番地に住す。電話小石川三五〇三番

野崎信一郎君

從六位勳六等
南武鐵道(株)技師長

君は東京府に現籍を有し、明治五年二月十一日を以て三重縣に生る。

夙に笈を負ふて東上し、私立大學に學業を修め後ち遞信省に入り、明治二十七八年日清戰役勃發するや遠く征途に就き軍功により勳六等白色桐葉章を賜はる。

然して戰終熄して歸國後北海道廳、房總鐵道等に歴勤、後ち房總鐵道會社の國有に歸するや東京鐵道局技師に任じ昭和二年南武鐵道株式會社技師に擧げられ現に同社技師長として令名あり、曩に鐵道省在勤中攻玉社工業學校講師たりしことあり。

趣味に謠曲あり、社交に厚く帝國鐵道

協會々員たり、夫人かつみ子との間に進君あり、帝大出身の新進にして現に日清製粉會社在勤中なり、東京市外洗足町田園都市西臺南三番地に現住す。電話荏原六〇〇番

野上啓治君

理財學士（慶大）　東京電氣（株）廣告課長

君は東京府に現籍を有し、明治十六年三月六日を以て埼玉縣川越市に生る。

夙に埼玉縣立中學校を經て大正七年慶應大學理財科を優秀の成績を以て卒業するや直ちに東都實業界に投じ、東京電氣株式會社に入社し、爾來、同社販賣部第四課長、小賣課長等を經て廣告課長に進み以て現在に及ぶ。

曩に大正十二年社命を帶びて渡米し、主として小賣及び廣告に關する視察研究をなすこと半歲に亘り、斯くて歸途全米を巡遊して歸朝せり。

今や同社廣告課長として敏腕を振ふ、傍ら常に勞資協調に立脚せる社會改造を叫んで止まざる新進の士たり。

趣味に圍碁、撞球、俳句あり、何れも素人の域を脱せるが如し。現に東京市芝區二本榎町一ノ一七番地に住す。

藤井靖夫君

北海道水力電氣（株）東京出張所長

君は熊本縣の人藤井永胤氏の四男にして、明治十八年二月十三日を以て生る。

明治四十四年東京帝國大學法科大學英法科を卒業するや九州電氣軌道株式會社に入社し、後ち日支合辨公司に轉じ、更に九州製鋼株式會社に入り、同社庶務課長秘書役たりしが大正十二年大阪市電氣局主事に任じ、翌年東京市商工課長に轉ず。

斯くて大正十五年王子製紙株式會社に轉勤し、後ち北海水力電氣株式會社設立せらるゝや同社東京出張所長に擧げられ以て現在に及ぶ。

趣味に野球、撞球あり、夫人光子との間に四女を擧ぐ、東京市外西大久保三十四番地に住す。電話四谷三四七五番

藤田好三郎君

實業家

當家は凡そ二百年前より兵庫縣大久保村に定住せる舊家たり。

君は藤田長左衛門氏の三男にして、明治十四年三月を以て生る、夙に東京帝國大學法科大學を卒業するや實業界に投じ現時は極東山林興業、大榮商會各株式會社々長にして且つ樺太汽船、服部製作所大川田中事務所各株式會社常務取締役たる外樺太工業、上毛電力、上毛製紙各株式會社專務取締役並に大日本人造肥料、共同パルプ、沿海州木材、日本ペイント東京製鋼、南太平洋興業、朝鮮採炭、中央製紙、靜岡電氣鐵道、樺太製紙原料、富士川電力各株式會社取締役其の他幾多事業會社に重役として本邦財界に令名や高し。

現に東京市外中野町中野桃園三三〇〇番地に住す。電話中野一一九番

鴻池善右衛門君

男爵　正四位勳三等

鴻池銀行社長

君は當家第十二代の當主にして先代喜右衛門君の長男たり慶應元年五月を以つて生れ明治十七年一月家督を相續して襲名す、由來當家は屈指の素封家として知られ先代喜右衛門君も亦善右衛門と稱して幕末大小候伯の用金調達の衝に當り、功を以つて商法頭取を仰付られ帶刀を許され、又維新の際には會計官出納司判事心得を以つて明治天皇御東幸供奉仰付られ維新後後藤伯と蓬萊社を組織して其の頭取たりし事あり。

君は先代の薫陶を受けて克く家產を守り第十三國立銀行の頭取となり、同三十三年合名會社鴻池銀行を組織して其社長として內外の業務を擔當し又大阪倉庫株式會社々長に推さる、同三十九年日露事件の功に依り勳四等に叙し旭日小綬章を賜り、同四十四年八月特旨を以つて華族に列し男爵を授けらる。彼の大正三四年事件の功に依り勳三等に陞叙し瑞寶章を賜ふ。

夫人ミチ子は男爵三井高精君の令姉にして君との間に長男萬藏君、二男福雄君三男幸武君、四男幸久君、五男幸清君等あり、現に大阪市東區今橋町三ノ五五番地に住し電話長本局一五番、二一五番なり。

江角泰助君

松江銀行取締役

君は島根縣の人江角常市君の長男にして明治七年十月を以つて生れ、先代柳四郎君の養嗣子となり其の家督を相續す。

夙に慶應義塾を卒業するや直ちに實業界に入り、現に島根縣多額納稅者にして前記の重職にあり更に簸川銀行取締役たり夫人斐子は同縣の人田部長左衛門君の養妹にして其の間に六男二女を擧ぐ、長男泰朝君、二男正一君、三男忠朝君、四男武朝君、五男良朝君、六男敬朝君、長女寬子、二女敏子等なり。現に島根縣簸川郡久木村に住す。

小室翠雲君

畫家

東洋畫壇の重鎭として令名高き小室翠雲君は本名を貞次郎と呼び、群馬縣の人小室牧三郎君の長男にして明治七年八月を以つて生る。君幼にして繪畫を愛好し十六歲にして田崎草雲師の門に入りて研究すること八年其の傍ら山下雪窓師、田中謙三師等に就いて經史詩文を學ぶ。明治三十一年東都に出でて研鑽を重ね最も山水花鳥に長ず。畏しこくも　大正天皇未だ東宮に在すの日御前揮毫を辱うし、又　昭憲皇太后　の御前に於て揮毫の榮を擔ふこと數次其の作品にして宮內省御用品たりしこと枚擧に遑あらず。

明治四十二年文部省美術展覽會に出品せし以來每回優等賞を受け名聲愈々斯界に聞ゆるに至る。日本美術協會、日本畫會、東京南畫會、東京勸業博覽會等の審査委員たること數回、現時帝國美術院會

員、日本美術協會委員、日本書會幹事等の要職にあり。君が美術界に身を投じてより實に三十有餘年今や南畫界の明星として謳はれ更に老後の大事業として其餘生を大日本の文化に捧げ以つて不朽の事業を遺さんと計畫し崇文院を創立す。

君は畫家として當代一流の標厱たるのみならず又漢學の造詣深きこと實に專門家も遠く追隨を許さざる程にて從つて今日迄に蒐集し來る古書珍籍は實に一萬五千有餘卷に達し之を擧げて崇文院に納め更に八方に人を派して古書の蒐集に奔走し崇文叢書刊行の大事業に盡力するところ甚大なり。

本叢書中收むるところは我が國傳來の舊書及先哲の著書にして「經史子の註釋」「詩文集」「考證」「隨筆」「字書」「目錄」等の如き類にして、全部の完成は十ケ年の豫定にて二ケ年毎に一卷を出版し一輯六十册以上とし五輯を以つて完成すといふ。而して是に要する資金五十餘萬圓は自ら負擔する爲め所藏品の賣却をなせし程なりといふ。

又俳諧漢詩を能くし茶道に通じ山河自然の美を探り以つて詩想を養ふ。別號を環堵書屋主人萬株松舍古夢盧靜觀窟南承露閣と稱す。現に東京市麴町區中六番町四〇番地に住し電話四谷四九四六番なり

小林恒一郎君

筑波鐵道株式會社專務取締役
筑波山鋼索鐵道會社專務取締役

君は茨城縣の人小林久三郎君の長男にして明治十五年三月を以つて生る。夙に早稻田大學の前身たる東京專門學校に學び少壯にして筑波町長に擧げられて大いに地方自治の爲に君が卓越せる敏腕を振ひしが後實業界に入り曩に筑波電氣會社取締役たりしことあり。現時は筑波鐵道及筑波山鋼索鐵道各株式會社を經營して其の專務取締役に擧げられ鋭意鄕土筑波山の發展に盡瘁する傍ら眞壁花崗石株式會社の重役たり、君德望家を以つて知られ又茨城縣多額納稅者にして現時其の直接國稅九百二十余圓を納め同地方財界の重鎭を以つて目さる。

夫人孝子は茨城縣の人大川新助君の長女にして其の間に長男恒夫君あり。現に茨城縣筑波郡筑波町に住す。

後藤新平君

子爵　從二位勳一等
大臣禮遇　貴族院議員

君は岩手縣の人後藤十右衛門君の長男にして安政四年六月を以つて生る夙に醫學を修得せんとの志を抱き福島縣須賀川病院附屬醫學校に學ぶ、偶々彼の西南の役起るや大阪陸軍臨時病院備醫となり同十六年內務省衞生局奏任御用掛となり、尋いで技師に轉じ同二十三年獨逸に留學を命ぜられミュンヘン大學よりドクトルオブ、メヂチーネの學位を受けて歸朝するや衞生局長に任ぜられ翌年彼の有名なる相馬事件に連座して休職となりしも是れ却つて君が俠名を天下に知らる。日淸戰役に際しては臨時陸軍檢疫部事務官長を命ぜられ兒玉大將の知遇を得て同三十一年臺灣總督府民政長官に拔擢せらる。

明治三十九年功績顯著なるにより特に華族に列し男爵を授けらる。同年南滿洲鐵道株式會社總裁となり關東都督府臺灣總督府各顧問を兼ね同四十一年桂第二次內閣の成立を見るや君は其の遞信大臣に親任せられ鐵道院總裁、拓殖局副總裁を兼任するに至る。大正元年再び遞信大臣兼鐵道院總裁となり翌二年官を辭し特に大臣禮遇を賜はる。同五年寺內內閣成るや再び臺閣に列して其の內務大臣に親任せられ、同七年外務大臣に轉じ外交調査委員會幹事長に推され後辭して野に下り大正九年東京市長に擧げられ同十一年子爵に陞爵せらる。

大正十二年山本內閣の成立を見るや三度臺閣に列して再度內務大臣に親任し、偶々彼の未曾有の關東大震火災に遭遇せしかば君よく其の職責を完ふして災害地域の復舊復興事業に盡瘁して着々として能く實績を擧げしが虎の門事件に依りて內閣總辭職するや君等しく辭して野に下り、爾來南船北馬毫も寧日なく特に日露國交の爲め盡瘁すること甚大にして、且つ大正十五年の交「政治の倫理化」を高調して天下民衆に訴へ大いに君が爲政家たるの面目を發揚して令名あり。

君や齡已に老年に達すると雖も而も尙ほ其の意氣や壯國家を惟ふの情切なり、今や國家多事多端なるの秋に當り、其の憂國の至誠至情又以つて慶すべきにあらざるか否哉。現に東京市麻布區櫻田町五〇番地に住し電話靑山五一三二番、六五二〇番なり。

兒玉一造君

東洋棉花株式會社專務取締役

君は滋賀縣士族先代貞次郎君の長男にして明治十四年三月を以つて生る。夙に滋賀縣立商業學校を卒ふるや實業界に雄を爭はんと欲して奮鬪大いに努め現に東洋棉花株式會社の專務取締役たる外三井物產、豐田紡績、菊井紡績、豐田式織機各株式會社の重役にして我が西京財界の重鎭として知らる。

夫人米子は男爵園田武彥君の令姉にして淑德の聞え高く、現に大阪市天王子區北河堀町に住し電話南四三六一番なり。

近衞文麿君

公爵　正四位
貴族院議員

當家は藤原鎌足十七世の孫關白忠通の長男基實の後なり、其曾孫兼經に至り近衞と稱す、それより世々藤原氏の嫡流五攝家の筆頭として先代篤麿君に至り明治十七年公爵を授けらる。篤麿君は夙に獨逸に留學し歸朝後は學習院長、貴族院議長等の重職に任じ又帝國敎育會長、東亞同文會長等として朝野の重望を負へり。

君は篤麿君の長男にして明治二十四年十月を以つて生れ、同二十七年襲爵仰せ付らる。大正六年京都帝國大學法科大學政治科を優秀の成績を以つて卒業し後貴族院議員に任じ更に內務省囑託となり、明治七年十二月講和會議開會に際し西園

寺公に隨行を命ぜられ尋いで各國を巡遊視察して大正八年歸朝し臨時教育行政調査會委員、財團法人日本青年會理事長たりしことありしも現に宗秩寮審議官の任あり、傍ら貴族院研究會常務委員たりゴルフに趣味を有すといふ。

夫人千代子は子爵毛利高範君の二女にして女子學習院の卒業たり。現に其の邸宅を東京府豐多摩郡落合村下落合四三七番地に有し電話牛込二二八番なり。

後藤武夫君

帝國興信所長

君は福岡縣の人後藤增藏君の長男にして明治三年八月を以つて生る。夙に大志を抱き笈を負ふて東上し東京英語學校、英吉利法律學校等に學び更に關西法律學校を卒へて直ちに操觚界に身を投じ福岡日々新聞記者となり、次いで帝國興信所を起して社長となる。尚ほ日本魂社々長「努力と改題」にして東京市會議員たり。

夫人タマ子は福岡縣の人青柳武平君の長女にして君との間に四男一女ありて長男勇夫君、二男智夫君、三男健夫君、四男富夫君及び長女達子等と呼ぶ、現に東京市京橋區木挽町一ノ一番地に住し電話京橋八八五番なり。

郷誠之助君

男爵　從四位勳三等
貴族院議員

當家は大江廣元の後にして其の裔嗣成に至り農となり美野國黑野村に住す、其より六世を經て先代正二位勳一等純造君に至る、純造君夙に史書劍槍を學び笈を負ふて江戸に出で幕府の旗下に仕へ後內國各地を巡遊して足跡至らざるなし。明治元年會計局組頭となり尋いで會計出納司知事に進み同二年大藏小丞に昇任せられ、爾來大國權大丞戸籍權頭大藏大丞大藏大書記官、國債局長大藏少輔主稅局長等に歷任し、同十九年大藏次官に任じ二十四年貴族院議員に勅選せられ同三十二年錦鷄間祗候仰せ付けられ明治三十三年勳功に依り男爵を授けらる。

君は純造君の二男にして慶應元年一月八日を以つて生れ明治四十三年襲爵す。明治十七年獨逸に留學し經濟學を專攻し二十三年卒業してドクトル、オブ、フイロソフイーの學位を受け廿四年白耳義ブラッセルを巡遊して歸朝後二十八年實業界に入る。現に東京商業會議所特別議員にして東洋製鐵、入山採炭各株式會社の社長たる外尚ほ內國通運、東洋製麻紡績、帝國商業銀行各株式會社の重役たり、曩に東京株式取引所理事長たり又明治四十四年以來貴族院議員に當選する事二回現に其の任にあり、尚ほ東京府多額納稅者にして現時直接國稅五千四百七十余圓を納む。現に邸宅を東京市麴町區上二番町二八番地に有し電話四谷二三九一番なり

小山松壽君

名古屋新聞社長
農林政務次官

勳三等小山松壽君は長野縣の人小山與右衞門君の長男にして明治九年一月を以つて生る。明治二十八年早稻田大學の前身たる東京專門學校法律科を卒業するや操觚界に身を投じ君が天才的の健筆を以つて斯界に令名を馳す。彼の大隈侯及び先輩諸氏に認められ後政界に勇躍し衆議院議員に當選する事四回に及び現に憲政會に屬し、大正十四年八月農林政務次官に任ぜらる、尚ほ名古屋新聞社長として令名斯界に高し。

夫人幸子は岡山縣士族森一兵君の令妹にして君との間に二女ありて長女を千鶴子、二女百合子と呼ぶ。現に名古屋市東富士塚町二ノ八番地に住し電話東六八番なり。

小林洋之助君

仁壽生命保險株式會社
東京支店長

曾つては本邦教育界に盡瘁し幾多學徒に崇敬の的となり、期するありて一度教職を擲ち獨力研鑽以つて文部省醫師檢定試驗に應ずるや、首席を以つて登第せる異才我が小林洋之助君は長野縣の人小林角之助君の長男にして明治十五年十二月三日を以つて生る。

夙に青雲の志を抱いて東上し立教中學に學び同校を卒業するや一時教職に就き大正四年文部省醫師檢定試驗に合格し、翌年聘せられて萬歲生命保險株式會社に入りて同社小樽支店診察醫となり、更に大正六年仁壽生命保險株式會社の懇請するに委せて同本社診察醫兼外交監督團主任及外勤部長等を歷補して大正十一年同社東京支店長の要職に就任し、今や內外の社務を鞅掌して同社の發展に盡瘁するに至る。

君は資性淵達にして世事に精通し部下職員を率いる又懇切にして其の前途や蓋し多望多端なり、然して一日の閑を多樣の趣味に費し殊に古錢の蒐集、銃獵、魚釣等は其の最もなるものなりといふ。

夫人鈴子は東京府の人國友三津三君の令妹にして山脇高等女學校を卒業せる淑德の譽れ高き夫人たり、現に東京府荏原郡馬込村三五一二番地に住す。

小出範治郎君

四武鐵道株式會社取締役支配人

君は宮城縣の人小出市郎治君の二男にして明治元年三月十五日を以つて生る。夙に鄕校を卒ふるや大志を抱いて上京し中央大學に入り研鑽以つて同校を卒業後鐵道省に入り、秋田、兩國各運輸事務所長に歷任せしが後官界を辭し前記西武鐵道株式會社取締役支配人として君が天稟の敏腕を縱橫に振ひ、我が實業界に重きをなすに至る。趣味として謠曲あり頗る勘能なるが如し。

夫人かつ子は東京府士族伏見景政君の令妹にして貞淑の聞へ高く其の間に長男城雄君、二男復平君、三男融一君、四男泰通君、長女發子、二女花枝子等あり。

現に東京市本郷區森川町一番地に住し電話小石川四五六一番なり。

江島廉太郎君

東京モータース商會(株)專務取締役

時運の然らしむるところに依り本邦自動車輸入販賣業界は遂年異常の進展を來し、今や斯業に携る者の激增從つて又著しきものあり、此中に在りて嶄然頭角を抽じ業界の激烈なる競爭場埋に馳騁して頓に業績を擧げつゝあるの士、吾が江島廉太郎君の手腕は寔に異彩を放つものと謂ふべし。

君は福島縣の產、明治十三年三月一日を以て同縣粕屋郡箱崎町に生を享く、故江島茂逸氏の嫡男に當り弱冠既に凡庸と異なるあり、夙に鄉黨に學を修め後ち東上、海上中學校を經て早稻田大學に入り明治三十五年同校法科を卒業せり。

斯くて直ちに官途に就き仁川稅關に奉職せるも後ち感ずるところありて之れを辭し、神戸百崎製紙工場に入り其の支配人たりしが、大正元年獨立して滿蒙貿易業を開始せり、然して同五年大阪長瀨商店の聘に應じ同店に轉じ以て支那貿易業務に携りて大いに才腕を振ふところあり越へて同十年島自動車及び帝國自動車の兩社合併成りて新に日新自動車株式會社の創設せらるゝや、君入りて同社支配人に就任、而して其經營上の樞機に參じて社業に盡瘁多大なるものありしが、同十五年九月同社を辭すると共に其の東京支店を獨立せしめ日本商會と爲し後ち日米合資會社と改稱、更に東京モータース商會と改め爾來拮据出精之れが經營に任じ昭和三年十一月株式組織に革め同社專務取締役に就任、以て現時に到れるが、由來同社は外國一流會社の優秀なる自動車の輸入を爲して之が販賣を營み今や斯業界に君臨し堂々の商戰を展開しつゝあり

君の家庭には房子夫人あり、大阪の人吉村家の出にして福岡縣立高等女學校を卒へし麗人、嗣子廉君を撫育して一家の營み洵に清福たり。事務所は東京市赤坂區溜池町三番地（電話青山三七一番六六番）

古在由直君

正四位　勳二等

君は京都府の人柳下仙藏氏の長男にして元治元年十二月を以て生れ、先代卯之助氏の養嗣子となる。明治十九年駒場農學を卒ふるや身を敎育界に投じ、東京農學校敎授、農科大學助敎授、東京帝國大學農科大學敎授、農事試驗場技師兼東京帝國大學敎授、帝大總長等を歷任す。現に東京市小石川區淺龍町一九七番地に住し電話大塚一二〇四番なり。

小池厚之助君

小池銀行頭取

當家は先代國三氏より家名を擧げし家柄にして、國三氏は甲府市の舊家淺川友八氏の五男にして後池田家に入りて其の家督を相續す。君や年齒漸やく十三歲にして若尾逸平商店に入り、後ち大志を抱いて東上し東京株式取引所仲買人となり

曾つて東京商業會議所代表として渡米せし事あり、次いで東京株式取引所理事、東京商業會議所議員、帝國經濟會議員等に推され又小池銀行を設立して其頭取たりし外若尾銀行、東京瓦斯株式會社々長東京モスリン、東京イーシー工業、武藏電氣鐵道、九洲炭礦汽船、樺太鐵道、富士製紙、帝國ホテル各株式會社の重役に擧げられ實業界の重鎭たりき。

君は即ち國三君の二男にして明治卅二年二月を以つて生れ大正十四年三月家督を相續す。先是大正十二年東京帝國大學法科大學政治科を優秀の成績を以つて卒業するや、直ちに英國に航しオックスフオード大學に學び大いに研鑽を積みて歸朝し、今や父君の遺業を繼ぎて前掲銀行の頭取たる外富士製紙株式會社監査役として紳士的新進實業家の令名高し。現に東京市牛込區市ヶ谷仲之町五番地に住し電話牛込七九三番たり。

江口熊一君

名古屋商品館長
大十九ビルヂング館長

神道權大敎正宣敎師江口熊一君は愛知縣の人江口久五郎君の令弟にして明治三年四月を以つて生る。夙に藥種商を營み明治三十一年名古屋市に出でて煙草卸商を營み、現時は雜貨商に轉じ江口屋と稱して知られ傍ら名古屋商品館、大十九ビルヂング館を經營して各館長たり、尙ほ精神修養を目的とする眞正會及可志和會を組織し其の會長に推され尙ほ名古屋建築木工株式會社取締役たり。

又神道鼓吹の爲めに盡瘁して權大敎正に補せられ現に宣敎師として令名あり、雅號を泰丘と稱し實業界に於て壹三、神道界に於ては祐正、藝術界に於ては竹本館長の別名を有する新人たり。

夫人さき子は愛知縣の人籾山林平君の令妹にして現に名古屋市東駿河町一ノ二五番地に住し電話東九四五番なり。

江澤金五郎君

天賞堂合名會社長

今や世界的聲名を博しつゝある我が天賞堂の經營者江澤金五郎君は先代金五郎君の長男にして、明治九年六月を以つて生れ同二十九年九月家督を相續し前名增次郎を改めて襲名す。夙に慶應義塾を卒業するや直ちに米國に航し紐育大學に學びて同校を卒業し、校長の推薦に依りスタンダード時計會社に入り重用せられ尋いで歐洲大陸を見學して歸朝す。

然して嚴父の遺業を繼ぎて時計、寶玉美術工藝品、蓄音機等の輸入並に同附屬品、貴金屬、美術應用裝身具、室內裝飾品、飲食用器等の製造販賣に努力し內地には最新式の大工場と支店とを有する上に歐米支那各地にも支店又は出張店を設け、屢々海外に航して彼地の實況を視察研究し銳意事業の振興發展に力を致し、又曩に米國コロンビヤ會社と特約して蓄音機の輸入を圖り同社技師を招きては東

洋の新曲譜を作製して其の販路を各國に廣め、博覽會共進會等に自家製造品を出品しては名譽ある賞牌を受けし事數十回天賞堂の名聲内外に高し。

夫人久子は千葉縣多額納税者として知らるゝ吉田甚左衛門君の令妹にして君との間に清太郎君、公平君、靜子、梅子、長子、久子、道子等あり、因に長女靜子は法學士信原義夫君に、二女梅子は商學士鈴木醇一君に夫々嫁す。現に東京市芝區高輪南町五三番地に住し電話高輪三四四番なり。

古賀善兵衛君

佐賀信託株式會社長

君は佐賀縣の人古賀善兵衛君の長男にして明治十四年四月を以つて生れ前名善太郎を改めて襲名す。現時は佐賀信託株式會社々長を初めとして株式會社古賀銀行、同佐賀縣農工銀行、同肥前貯蓄銀行、同佐賀貯蓄銀行、肥前漁業株式會社各取締役、佐賀セメント株式會社監査役として地方財界に令名あり。夫人ミキ子は佐賀縣の人大島重藏君の五女にして君との間に三男ありて長男善一郎君、二男善次郎君、三男善三郎君と呼び、猶ほ令妹琴子は同縣の人草場義夫君に嫁す。現に佐賀市蓮池町に住す。

小林武彦君

大日本麥酒株式會社庶務課長

君は千葉縣士族永田善以君の二男にして明治三年十月を以つて生れ同十八年先代吉郎右衛門君の養嗣子となり同二十三年家督を相續す。君早くより學識衆に秀で鄕校を卒ふるや青雲の志を抱いて上京し、中央大學に入りて法律學及び經濟學を專攻し明治二十四年優秀の成績を以つて同校を卒業するや直ちに實業界に身を投じ、着々として其の地歩を占め現に大日本麥酒株式會社庶務課長として才腕を揮ひ前途益々多望なるものあり。

夫人恒子は東京府の人逸見順二君の令姉にして其の間に正君、力君、茂君、誠君、勇君、弘君、雪子、信子等あり、現に東京市麻布區霞町二二番地に住し電話青山三三六一番なり。

小西幸助君

松丸太專門業、材木問屋小西幸助商店主

帝都財界の新人にして覇氣あり、學識あり、而も果斷なるを我が小西商店經營者小西幸助君となす。君は東京府の人小西卯之助君の長男にして明治二十七年八月二十八日を以つて東京市本所區柳島に生る。幼にして顯悟才幹衆に秀で夙に東京府立第三中學校を卒業して更に研鑽を積み、後實業界に身を投じサラリーマンとしての体驗を嘗めること約一ヶ年に及びたり。

然れども幸か不幸か當時健康を害して職を退きしも君の理想は愈々燃えて烈火の如く、意氣益々擧り遂に奮然起つて獨力材木問屋を開始し專ら基礎材松丸太を取扱ひ至誠奮闘大いに努めしかば業績漸次擧り、社會の信用益々加はり其の年商高年と共に激增し今や押しも押されもせぬ少壯實業家としての君の名聲や東都同業界及び一般財界はおろか、木曾の山中樵の衆までも彼の清き流れの木曾川を傳ふてそれ嘖々たるものあり。

今や帝都は復興の途上にありて復興土木建築界は又君の力に俟つべきもの多からん、宜しく自重自愛以つて其の將來の大成を期して可なりである。

尙ほ君は事業に精勵する傍ら幾多公共事業に盡力し、現に千住材木問屋組合員たる外町自治會員として貢献すること甚大、狩獵と音樂は君の趣味の最もなるものにして其の一は幽邃淡雅なる大自然により自ら膽量を養ひ、而して他は即ちやさしき人生のメロヂーに觸れて豐かなる情緒を養はんとするにやあらん、以つて君の人と爲りを知るべきなり。

夫人をツル子と稱し千葉縣の人一鍬田中治君の二女にして淑德の譽れ高し、現に東京府下南千住町千住中組二番地に住し電話淺草四九〇九番、三一三九番なり

小平三郎君

小池銀行常務取締役

我が財界の重鎭小平三郎君は長野縣の人小平喜三郎君の令弟にして明治十一年十二月を以つて生る。夙に鄕校を卒ふるや青雲の志を抱いて東上し、明治二十五年明治大學を卒業するや直ちに小池合資會社に入り同社調査部及信託部を主宰し傍ら同江之島電氣鐵道株式會社監査役を兼ね大正六年四月小池合資會社の解散と共に小池銀行に入りて其の取締役に就任し、奮闘大いに努め現に同行常務取締役にして且つ大洋火災保險株式會社監査役を兼ね今や内外多事多端にして其の前途や蓋し多望なりと謂ふべし。曾つて日本化學紙料、登帆炭鑛各株式會社の重役たりしことあり。趣味として謠曲あり。

夫人とし子は長野縣の人長井村太君の令妹にして成女高等女學校を卒業せる貞淑の夫人たり。現に東京市牛込區市ヶ谷八幡町四番地に住し電話牛込四六五一番なり。

近伊左衛門君

植田銀行株式會社取締役

君は秋田縣の人近伊左衛門君の長男にして明治二十五年八月を以つて生れ大正十一年十一月家督を相續すると共に前名可久を改む。現時株式會社植田銀行の重役として知られ尙ほ秋田縣多額納税者にして直接國税二千五百五十余圓を納む。秋田縣平鹿郡植田町に現住す。

小林富藏君

小林組頭取　土木建築請負業

君は新潟縣の人小林音藏君の長男にして明治四年十二月二十七日を以つて同縣は西蒲原郡卷町に生る。夙に鄕校を卒ふるや大志を抱き帝都財界に雄飛せんと決心し、明治三十七年敢然起つて上京し當時我が建築界の覇者を以つて目せられし戸田組に入り、君が蘊蓄を傾注して專心

業努に精勵し、同組の爲め盡瘁すること甚大なりしが固とより大望ある君は獨立の機運熟するや愈々帝都土木建築界に獨立の旗幟を翻すに至る。

爾來奮鬪大いに努め、至誠以つて事業に從事したりしかば社會の信望漸次加はり、特に君の人格の凡ならざるに感じて早稲田大學教授工學士岡田信一郎氏を始め其他の建築關係諸先生よりの應援を受けて事業益々盛大に、業況月に年に擧り君が優秀なる技術と相俟つて早くも同業界に嘱望せらるゝに至る。

然して君が請負ひて完璧を期せし事業は枚擧に遑あらざるも就中青山會館、九段坂病院、南胃腸病院、新潟縣小千谷小學校、上野東照宮護國院、大日本國民中學會等の著名なる大建築物を始めとして增島六一郎博士邸、村上一族の邸、村井五郎氏邸、飯野氏邸等都下有數なる諸名家の邸宅を一手に引き請けて何れも完成を期して多大なる賞讃を博し、今や帝都業界に白眉を以つて目さるゝに至れり。

君や年齒未だ春秋に富めり、復興途上にある我が帝都は君の力に俟つべきもの又多からん、宜しく自重自愛以つて將來の大成を期して可なりである。夫人さくこは新潟縣の人大弓庄松君の三女にして內助の譽れ高し、現に東京市麻布區飯倉町四丁目十二番地に住し電話青山三四五二番五四九八番なり。

小林久七君

長野實業銀行頭取
長野商業會議所會頭

君は長野縣の人小林久七君の長男にして明治十八年六月を以つて生れ後家督を相續し前名長治を改めて襲名す。明治四十二年早稲田大學商科を優秀の成績を以つて卒業し、直ちに實業界に身を投じ現に長野縣下實業界の覇者として知られ前記の要職にある他西條銀行、信濃日々新聞、北信鐵道、長野電燈、大倉製糸工場各株式會社取締役たり。

夫人を節子と呼び內助の譽れ高く其の間に長男正久君、二男久明君、長女英子等あり。現に長野縣新町に住す。

永瀧久吉君

東京土地建物株式會社常務取締役
滿洲興業株式會社常務取締役

從四位勳三等永瀧久吉君は新潟縣の人永瀧源治君の長男にして慶應二年十二月を以つて生れ夙に鄕校を卒ふるや笈を負ふて東上し明治二十二年東京英吉利法律學校及び專修學校法律經濟科を卒業し、翌二十三年辯護士試驗及文官高等試驗に應じ首席を以つて合格す。

後官界に入り司法官試補に任せられ東京地方裁判所に勤務せしが翌廿四年外務省試補に轉じ、爾來領事館補として釜山仁川等に歷勤し、一等領事、二等總領事となりて沙市シドニー、漢口、上海、ホノルル、布哇等に駐在せしが大正三年官を辭して安田保善社に入り其の理事となり、大正九年正隆銀行の取締役に就任せしが現時は前揭諸會社の重役たる外臺灣製麻、奉天製麻各株式會社の取締役として令名高し。

夫人とよ子は東京府士族內田豐次郎君の長女たり。現に東京府豐多摩郡戸塚村諏訪町一九四番地に住し電話牛込六五五番なり。

木檜三四郎君

衆議院議員

君は群馬縣の人片貝淸逸君の三男にして明治元年八月を以つて生れ、先代三四郎君の養嗣子となる。夙に東京專門學校政治科を卒業し、爾來吾妻郡會議長、群馬縣會議員、同參事會員等に擧げられ、又新聞に甚だ興味を有し自ら郡馬新報を經營せり。

現時は憲政會所屬代議士として我が政界に令名あり。夫人くま子は養父三四郎君の四女にして君との間に三男一女あり因に長男榮雄君は東大法學士にして現に內國通運株式會社神田支店長の榮職に有りて少壯實業家の名あり、尙ほ二男を九郎君、三男を正一君と云ひ長女を英子と呼ぶ。現に群馬縣吾妻郡原町に住す。

小林武次郎君

株式會社金半商店取締役會長
協林合資會社取締役

我が株式界の新人小林武次郎君は東京府の人小林市太郎君の二男にして、明治二十七年九月廿三日を以つて東京市麻布區に生る。夙に慶應義塾普通部を經て同大學理財科を優秀の成績を以つて卒業するや直ちに實業界に身を投じ父君の業を助け、新進なる君の學理と實際とを傾注して奮鬪大いに努むるに至る。

恨むべし天の配劑や、不幸なる哉大正十二年の交嚴父の逝去に際會し一時悲嘆に暮れたる君は猛然起つて其の遺業を繼承し、東京株式取引所一般取引員として嚴父にまさるとも劣らざる業勢を示し、今や斯界に於ける新進氣鋭の實業家として其の前途を嘱望せられつゝあり。尙ほ運動は君の最も得意とするものなりといふ。

夫人をてつ子と呼び淑德の譽れ高く其の間に瑩君、たい子、いと子等あり、現に東京市麻布區本村町二一三番地に住し電話高輪七一三四番なり。

近藤友次郎君

日進銀行頭取

君は長野縣の人池上善三郎君の二男にして慶應元年二月を以つて生れ、明治十五年一月近藤秀關君の養嗣子となる。夙に長野縣立松本中學校を卒業するや直ちに身を實業界に投じ、明治廿九年東京貯藏銀行の京都支店長、京橋支店長等を歷任して後日進銀行に轉じて同行常務取締役たりしが現時は同行頭取たる外伊那電氣鐵道、庚子銀行、一色活版所各株式會社の重役として知らる。謠曲、菊花の栽培に堪能なりといふ。

夫人つね子は東京府の人林良助君の二女にして君との間に長男榮一君、二男俊男君等あり。現に東京府荏原郡大井町一

二三〇番地に住し電話高輪二五八〇番なり。

小坂順造君

信濃毎日新聞社長
長野電燈株式會社長

從五位勳四等小坂順造君は長野縣の人小坂善之助君の長男にして、明治十四年三月三十日を以つて生る。夙に東京高等商業學校を優秀の成績を以つて卒業し直ちに日本銀行に入り、曾つては歐米を漫遊して彼地の實業界を視察し、歸朝後同縣郡部より推されて衆議院議員に當選すること三回に及び、大正四年日獨戰役の功に依り勳四等に叙し瑞寶章を賜ふ。

現に前記會社の社長たる外東信電氣、國光生命、大洋火災各株式會社の重役にして又曩に農商務大臣秘書官、農商務省秘書課長、長野商業會議所會頭、信濃銀行常務取締役、安田銀行監査役たりしことあり書書を愛好し交詢社會員たり。

夫人はな子は東京府の人渡瀨寅次郎君の長女にして女子學習院を卒業す、現に東京府豊多摩郡澁谷町中澁谷堀之内四〇番地に住し電話青山二四五三番なり。

兒島富雄君

帝國藥莢製造株式會社長
日本土地建物株式會社常務取締役

絶大なる信仰と絶倫なる精力とを以つて我が財界に活躍しつゝある兒島富雄君は、實に故大審院長兒島惟謙君の二男にして明治十三年一月十三日を以つて東京市神田區に生る。明治三十七年早稲田大學法科を卒ふるや直ちに身を實業界に投じ、日本銀行に入り後同行を辭して東邦火災保險株式會社に入り更に大正三年同社を辭して朝鮮に超き獨力速島物産商會を創立し、大正八年株式組織に變更して朝鮮貿易株式會社と改稱し更に同年四月帝國藥莢製造株式會社を設立して其の社長に就任し、尚ほ同九年三月には日本土地建物株式會社を設立して同社常務取締役に擧げられ今や我が財界に令名高し。趣味廣く野外運動、銃獵に巧にして又頗る圍碁の達人なりといふ。

夫人を光子と呼び淑德の譽れ高く君との間に長女初子、二女謙子等あり、現に東京市麻布區櫻田町三三番地に住し電話青山二六九五番なり。

五島駿吉君

日本無線電話會社常務取締役

正五位勳四等五島駿吉君は東京府士族故五島孝繼君の四男にして明治十五年八月を以つて生る。明治四十年東京帝國大學法科大學獨法科を卒業し同年文官高等試驗に合格し逓信事務官、逓信管理局事務官、逓信局副事務官兼稅關副事務官、同書記官、逓信局長、逓信省簡易保險局長等に歷任し同省郵務局長の任にありしが大正十四年十月官を辭して日本無線電話株式會社の創立に參畫し其の設立を見るや君推されて其常務取締役となり現時に及ぶ。曩に歐米各國に出張せしことあり。

夫人スミ子は石川傳衛君の長女にして君との間に謙一君、靜代子、治枝子等あり、現に東京市小石川區原町一一七番地に住し電話小石川一五三〇番なり。

小高長三郎君

自由通信社長

君は千葉縣の產にして明治二十三年十一月十九日を以つて山武郡蓮沼村に生れ夙に學を好み鄕里の小學校を卒ふるや大志を抱き笈を負ふて上京し、大倉商業學校に入り研鑽琢磨同校を卒へ更に獨學を以つて識見を高め後身を操觚界に投じ、新聞通信事業に携り、大いに社會の表裏に活躍す、而して自由通信社に入りて精勵すること實に十八ヶ年遂に故古谷新吉君同社長就任と同時に支配人となり、專ら經營の衝に當り君が天禀の機才を縱横に發揮するに至る。

大正十三年二月古谷社長他界するや代議士小久保喜七君を推薦したるも從來業務一切を君が擔任經營しつゝある關係と偶々小久保君が政友會總務の任に就きたる爲め終に社の內外擧つて君を社長に推薦したり。蓋し君が其の任に就く又眞に經驗才腕共に具備し加ふるに人格高潔同僚の間に畏敬あれば洵に當を得たるものと言ふべし。

爾來自由通信社は斯界の重鎭にして且つ隆々の聲名を博し、其の前途大いに期待すべきものあり。君の趣味を叩けば答へて曰く「働くことなり、安逸は絕體に禁物なり」と、以つて君の人と爲りを窺ふに足る。夫人登喜子は代議士小久保喜七君夫妻の媒酌に依り娶れる極めて淑德の譽れ高き夫人たり。現に東京府下入新井町不入斗七七一番地に住す。

戒野喜太郎君

戒野喜太郎商店主
やまと工業株式社長

帝都有數の老舗として先代より綿布問屋を以つて令名高き同業界の古參者戒野喜太郎君は東京府の人戒野喜一郎君の長男にして、文久二年四月を以つて生れ明治二十一年八月先代喜一郎君の後を繼ぎて其の家嘗を相續す。

夙に實業界に身を投じ精勵以つて事業の發展擴張に努め、能く祖業を承けて之を恥かしめず業況益々發展の域に達せしめ、今や綿布問屋として同業界に活躍する傍らやまと工業株式會社々長にして且つ櫛井紡績株式會社取締役として我が財界に令名高し。

夫人よし子は東京府の人岡喜右衞門君の四女なり、現に東京市日本橋區大傳馬町一ノ三一番地に住し電話浪花二七八番五六一〇番なり。

古西爲之助君

大都電氣株式會社專務取締役

君は香川縣の人古西吉右衛門君の五男にして明治五年七月二十一日を以つて生る。明治三十年東京帝國大學工科大學電氣科を首席を以つて卒業し直ちに石川島造船所に聘せられて同所技師となり、明治三十二年帝國大學助手となりしが後神戸電燈株式會社の聘に應じて同社主任技師として入社し、更に明治三十六年芝浦製作所に轉じ居ること三ヶ年更に三井物產株式會社電氣課に轉じ、後大正六年葛原商會社長となり大正九年之を辭す。

大正十二年大都電氣株式會社の取締役として就任し現に其の要職にあり。又曾つては駿遠電氣株式會社の取締役たりしことあり。君は專門的智識を益々研鑽する傍ら又宗教哲學の研究に深き趣味を有するといふ。

夫人信子は茨城縣士族富岡政信君の長女にして東京府立第二高等女學校の卒業にして君との間に玉夫君、龍次君、和平君、大也君、邦造君、百合子、澄子等あり。現に東京府豐多摩郡千駄ヶ谷八三六番地に住し電話四谷八七三番なり。

近藤賢二君

日本カーボン株式會社長
大和鉛筆株式會社長

當家は兵庫縣津名郡生穗村に住して代々庄屋を勤めたる家柄にして、君は同縣の人近藤正憲君の長男にして明治七年一月を以つて生れ先代峰子の養子となり同二十一年其の家督を相續し前名權次を改む。明治二十七年同志社大學を卒業するや直ちに身を官界に投じ臺灣總督府に入りて飜譯の事に從ひ後官を辭して實業界に走り、サミュル商會に入り尋いでライジングサン石油株式會社に入り後横濱鐵道、横濱電氣鐵道各株式會社常務取締役横濱鍛鐵製作所取締役等の任にありしが現時は前記各會社の社長たる外東海鑛業東亞電氣、東洋電氣製造、大正運輸各株式會社の重役として令名高し。

夫人をコマ子と呼び今岡議之君の長女にして大阪府立高等女學校を卒業し其の間に進一郎君、民三郎君、みち子、すみ子、貞子、きそ子、ひろ子、和子、英子等ありて家庭圓滿なり。現に東京市芝區高輪南町五三番地に住し電話高輪九一番なり。

小山忠太郎君

小山汽船株式會社長

君は香川縣の人小山平助君の二男にして明治四年八月を以つて生る。直ちに財界に活躍現に前記會社の社長にして尙ほ大阪布谷計器株式會社取締役たり。夫人チヤ子は北海道の人內田鐵藏君の長女にして其の間に長女忠子、二女とく子の二子あり、因に令姉米子は香川縣の人牧野辰治君に、同リン子は同縣の人中村虎之助君に夫々嫁す。現に大阪府豐能郡池田町に住す。

小池利久八君

東洋製綿株式會社專務取締役

君は長野縣の人明治十七年四月一日を以つて下伊那郡上久堅村に生る。夙に鄕校を卒ふるや笈を負ふて上京し東京法學院に入りて勉學精勵大いに努め、螢雪の功空しからず同校を卒業するや直ちに實業界に身を投じ、其の蘊蓄を傾倒して獨力以つて製綿業を開業して其の發展に盡瘁する處ありしが後更に石材、碎石採掘業を兼ね益々君が才腕技倆を揮ひ業績愈々擧れり。

然して君の勢力は亦別途に活躍し即ち土地興業株式會社取締役として縱横の機略を振展し、大いに人望を得、更に從來の獨立經營に係る製綿業を株式會社となし、君自ら專務取締役の任に就き專ら經營の重任に與り努力奮鬪の結果は今日の如き東洋製綿株式會社の名を盛んならしむるに至る。

君や資性磊落恬淡寡慾又後輩の爲めに厚く、學生を集めて修業せしむることを唯一の樂となし常に商業學校、電氣學校中學校等に通學せる生徒を養成するといふ君の如きは當代稀有の人格者にして眞に立志傳中の一人者と謂ふべし。現に東京市牛込區新小川町二ノ八番地に住し電話牛込一八七五番なり。

小室利吉君

福島紡織株式會社取締役

君は京都府の人福井三郎兵衞君の令弟にして明治七年六月を以つて生る。曩に三井物產株式會社名古屋支店長、堺紡績株式會社專務取締役等たりしが現時は前記會社の重役たり。亦曾つて歐米、印度埃及等に航し棉花事業を視察す。夫人よね子は京都府の人小室利七君の長女にして其の間に四男三女ありて長男利一君、次男寛君、三男利夫君、四男四郎君、長女嘉子、二女壽子、三女益子等と呼び團欒の家庭たり。現に大阪市南區天王寺松ヶ鼻町に住し電話南五五〇八番なり。

小林榮吉君

小林組頭取
東京煉瓦石工組合頭取

斯界の第一人者として且つ帝都復興事業に貢献して其の令名高き小林榮吉君は茨城縣の人小林長吉君の二男にして、明治四年一月二十八日を以つて同縣猿島郡紺屋町に孤々の聲を擧ぐ。夙に實業界に名を成さんとの大志を抱き、鄕校を卒ふるや年齒僅かに十五才にして上京し身を土木建築界に投じ、實地に就きて研鑽を積み愈々君が優秀なる技術と絕倫なる奮鬪的精神とを以つて、僅かに二十四才の青年實業家として獨立事業を經營し幾多の波瀾曲折を經て遂に今日の大を成すに至れり。

今や內外の信望異常なるものにして其

の請負ひし大小幾多の建築物は何れも皆好評を博し、最近完成したるものに東京菓子株式會社、尾張屋銀行本店及び各支店、市川北市製絲株式會社東京支店等の諸會社銀行を始めとして中央電話局、横須賀工廠、要川河川改修工事等諸官廳の請負其他古賀鄕友會、北村洋食店及び都下諸名家の煉瓦工事等枚擧に遑あらざるべく、何れも君が責任ある請負を以つて完璧を期して斯界に令名高し。

夫人うた子は東京府の人山口市兵衛君の長女にして君との間に一男一女ありて一郎君、ふで子と稱す、因に長女ふで子は東京府の人西山留吉君に嫁す、現に東京市下谷區上野櫻木町二番地に住し電話下谷四七五一番たり。

小島七郎君

辯護士　特許辯理士
衆議院議員

今や我政界及法曹界に其の令名を謳はれつゝある小島七郎君は山口縣の人小島清介君の令弟にして明治十六年二月を以つて生る。夙に鄕校を出づるや大志を抱いて東上し大正元年東京帝國大學法科大學政治科を卒業し、後東京通信社に入りて其の理事となり更に大正九年決然として哈爾賓に渡り西伯利亞新聞を起して同社々長に就任す。

大正十年牛込區より推されて東京市會議員となり爾來當選すること二回、大正十三年の總選擧に際し栃木縣第四區より推されて衆議院議員に當選し憲政會に屬し現に衆議院議員、東京市會議員、牛込區會議長等の要職にあり、尙ほ辯護士を開業し且つ東京オフセット印刷株式會社の重役たり。曩に哈爾賓競馬場、哈爾賓取引所、デリス製劑會社等の重役たりしことあり。

夫人をきく子と呼び淑德の譽れ高く、現に東京市牛込區若松町七六番地に住し電話牛込三六〇番なり。

小日向定次郎君

廣島高等師範學校教授

正五位勳四等小日向定次郎君は東京府の人小日向傳次郎君の令弟にして明治六年十月を以つて生る。明治三十四年東京帝國大學文科大學英文科を卒業し、爾來教育界にありて廣島高等師範學校、奈良女子高等師範學校各教授に歷任し現に廣島高等師範學校教授たり。又曾つて英文學研究の爲め英米に留學す。夫人やす子は鈴木敏太郎君の長女にして其の間に四男一女あり。廣島市南竹屋町に現住す。

江波戸善次郎君

江波戸商店主

帝都復興事業に貢献して令名ある我が江波戸善次郎君は千葉縣の人江波戸與市君の二男にして、明治十一年十一月九日を以つて同縣海上郡旭町に生る。當家は同地方有數なる舊家として知られ嚴父與市君迄は代々呉服商を以つて令名ありしが、君に至り男性的事業を好み新機一轉

身を土木業界に投じたるも、君の性格として水清くして魚棲まずの譬の如く餘りに良好なる成績を見ず、明治二十五年奮然起つて上京し芝區白金三光町に運搬事業を開設し、爾來幾多の波瀾曲折は免れざりしも天資英明にして意志强固なる君は克く万難を排して目的に突進せしかば業況漸時良好の歩調を辿り、斯界の信望月に年に加はるに至る。

然して明治四十三年運搬業の外更に砂利問屋を現在の場所に開業し、熱誠よく事業の開拓に努めしかば君が信用愈々擧り同時に事業益々隆盛に向ひ今や帝都同業界の重鎭として目さるゝに至り、目下宮内省其他の諸官廳を始め東京瓦斯、東京電燈各株式會社及び一般土木建築請負業者を得意として年商實に三十余萬圓を計上し其の前途多望なるものあり。

君資性温厚篤實にして一度事業に從事するや誠實勤勉を以つて一貫す、宜なるかな其の今日ある盖し偶然にはあらざるべし、趣味として魚釣あり閑あれば海に河に宇宙の大氣に接し以つて皓然の氣を養ふを常となす、夫人をうめの子と稱し內助の聞え高し、現に東京市麻布區森元町二丁目十九番地に住し電話青山六二六五番なり。

江口理三郎君

尾張電氣軌道株式會社長

君は愛知縣の人江口甚藏君の長男にして安政四年三月を以つて生る。現に名古屋市會議員にして呉服半襟卸商を營み、又尾張電氣軌道株式會社長、株式會社名古屋米穀取引所理事、名古屋電氣鐵道、名古屋瓦斯、中央鑛業各株式會社監査役として知らる。

夫人みせ子は同縣の人村瀨甚兵衛君の長女にして其の間に二男六女ありて賢一君、亨君、のぶ子、せつ子、芳子等と呼ぶ、因に四女ゑい子は大阪府の人岩田周治郎君に嫁す、現に名古屋市中區南呉服町一ノ三番地に住し電話本局二五九二番なるが如し。

小西新右衞門君

兵庫縣農工銀行頭取
阪神電氣鐵道會社監査役
阪神土地信託株式會社監査役

君は兵庫縣の人先代新右衞門君の長男にして明治八年十一月を以つて生れ、前名利右衞門を改めて襲名す。當家は有名なる酒類醸造家にして其の發賣に掛る銘酒「白雪」は實に同家々傳の精醸なり。君は明治三十六年東京帝國大學法科大學を卒業し曾つて大藏省理財局に奉職せしことありしが後官を辭して家業を補け、爾來益々業務を擴張し「白雪」の名聲をして我が造酒界の覇者たらしむ。

然して先代より大株主として關係深き眞宗信徒生命保險會社を「共保生命」と改稱して自ら同社重要の椅子に就任して保險界に躍動し同社今日の大を成さしむる君の力與つて大なるものありと謂ふべく尙ほ本辰酒造、大日本醸造株式會社の代表社員たる外株式會社稻垣鐵工所取締役たり。

夫人完子は子爵大河内正倫君の令妹にして其の間に長女靜子あり、現に兵庫縣川邊郡伊丹町に住し電話長五番なり。

遠藤嘉右衛門君

簸川銀行頭取

君は島根縣の人遠藤嘉右衛門君の二男にして明治十四年四月を以つて生れ前名要三郎を改めて襲名す。夙に東京專門學校を卒業し、大正四年補缺選擧に依り衆議院議員に當選す。現時は前記の要職にある外關西電氣化學、山陰製炭、日本硬化煉瓦、三葉自動車各株式會社取締役、若松鑛山、山陽水力電氣各株式會社監査役たり。

夫人貞子は同縣の人木佐德三郎君の四女にして其の間に三男一女ありて行一君正二君、啓三君、和子と呼ぶ。現に島根縣簸川郡今市町に住す。

小風亥眞穗君

小風銀行頭取
小風商事株式會社長
第一相互株式會社長

我が財界の重鎭小風亥眞穗君は新潟縣の人小風知依君の長男にして明治八年六月十一日を以つて生る。夙に鄕校を卒ふるや上京して明治大學の前身たる明治法律學校に入りて法律學を專攻し、同三十九年首席を以つて卒業するや實業界に雄飛せんと志し、獨力以つて金融業を開始し爾來東奔西走業績の進展に努めたりしかば僅か十有餘年にして巨萬の富を蓄積し家運繁榮の基礎を築くに至る。

大正二年七月第一相互株式會社を設立し自ら社長として經營の衝に當り、更に同九年小風商事株式會社を設立して其の社長として大いに活躍し今日に及ぶ。明治倶樂部、明大新潟縣人會長、明大評議員、新潟縣人會理事等の要職にありて今や其の令名嘖々たり。

君に一女あり知子と呼ぶ、現に東京市赤坂區傳馬町一ノ一二番地に住し電話青山三六二五番なり。

小久保喜七君

正五位勳三等　衆議院議員

我が政界の重鎭小久保喜七君は茨城縣の人小久保藤吉君の長男にして、慶應元年三月二十二日を以つて同縣猿島郡新鄕村に孤々の聲を擧ぐ。夙に中島撫山に師事して漢學を修め明治十六年の交輿論雜誌及び曙新聞に寄稿して其の文才を謳はれ、大いに自由民權を鼓吹し同十七年加波山事件に連座して獄に投せられ、在獄年餘にして許され後幾何もなくして大阪事件の嫌疑を受けて再び鐵窓の客となり在ること二年餘漸く無罪と決して自由の身となる。

後藤伯の大同團結に參加し其の後大隈伯の遭難事件起るや君亦嫌疑者として三度獄舍の人となり七ヶ月にして開放さる、明治二十五年推されて茨城縣會議員となりたるも同二十九年感ずる所ありて

哉斷然政界を退き讀書に耽る事十餘年明治四十一年鄕黨より推されて衆議院議員に當選す。先是明治三十一年臺灣に渡航して臺灣通信社を經營したることあり爾來衆議院議員に當選すること前後六回に及び現に其の任にあり政友會に屬す。

明治四十三年小川平吉君と共に政友會幹事となり爾來政務調査會長、院內總務補佐、院內總務、逓信省勅任參事官、院內顧問等に擧げられ大正三四年事件の功に依り勳三等に叙せらる。曩に自由通信社長たりしことあり。現に政友會顧問自由通信社相談役として令名あり。

夫人をきさ子と呼び埼玉縣の人古谷米吉君の四女たり。現に東京府荏原郡大森町山谷二四六二番地に住し電話高輪四七〇番なり。

小橋一太君

從三位勳一等　文部大臣

我が政界の巨星小橋一太君は熊本藩士小橋元雄君の長男にして明治三年十月を以つて熊本市に生る。夙に鄕校を卒ふるや第五高等學校を經て東京帝國大學法科大學英法科に入り、同三十一年同校を卒業するや直ちに內務省に職を奉じ縣治局に勤務し、同年文官高等試驗に合格し翌三十二年五月山口縣參事官に任じ、同三十五年二月長崎縣參事官となり更に同三十六年四月內務書記官に任ぜられ衞生局保健課長に補せられ、次いで內務省參事官となり同四十一年露都ペトログラードに於て開催せられたる萬國道路會議參列の爲め差遣せられたり。

明治四十一年十一月同會議を完結して歸朝するや內務事務官に昇進し同四十三年十二月內務省衞生局長に任ぜられ大正二年六月地方局長より土木局長に歷任し鐵道院理事を兼ね、大正七年內務次官に任ぜられ淸浦內閣成るに及んで其の內閣書記官長に任ぜられ特に親任官の待遇を受く。先是大正九年熊本縣第一區より推されて衆議院議員に當選し同十三年再選せられて現在に至る曾つて政友會政務調査會長同院內總務たりしことあり。

夫人ひで子は東京府士族菅野鑛次郎君の令妹にして跡見高等女學校の卒業なり現に東京府荏原郡上大崎五三八番地に住し電話高輪一六六〇番なり。

海老名彈正君

京都同志社大學總長

君は舊柳川藩士海老名休也君の長男にして安政三年八月を以つて生る。初め藩立傳習館に入り漢學を修め後基督敎を奉じ更に同志社に入りて神學を研修す。明治十二年群馬縣基督敎傳道に從事し同十九年上京し本鄕組合敎會を開始し、同二十年熊本英學校及熊本女學校長となり同二十三年組合派日本傳道會に長となり、京都に移り更に二十六年神戸組合キリスト敎會牧師に轉じたり。

明治三十年再び上京して本鄕敎會牧師となり傍ら雜誌新人及新女界の主幹とし

て專ら社會の改善風教矯正に力を至せり明治四十一年歐米を漫遊し次いで大正四年再び渡米し其の後戰後視察の目的を以つて歐米を漫遊し、歸朝するや同志社大學總長となりて今日に及ぶ。

夫人を美屋子と呼び熊本縣士族横井小楠君の長女にして內助の譽れ高し、現に京都市上京町に住す。

海老原介太郎君

明治生命保險株式會社取締役

君は茨城縣の人海老原誠一郎君の長男にして明治八年五月七日を以つて生る。夙に鄕校を卒ふるや青雲の志を抱いて上京し明治二十八年慶應義塾理財科を優秀の成績を以つて卒業し、聘により明治生命保險株式會社に入社し同三十五年同社より英國に留學を命ぜられ在英四ヶ年斯學の研鑽を積みて歸朝し大正九年取締役兼監査主事に擧げられ現時に至る、謠曲大弓の妙手にして讀書を愛好すといふ。

夫人ジウ子との間に長男正雄君、長女愛子、二女治子等あり、現に東京府荏原郡目黑下目黑町二〇〇番地に住し電話高輪二五二番なり。

小山榮達君

畫家

君は其の本名を政治と呼ぶ、然れども其の名の如く早くより政治家たらんとしたるには非ずして其の實は我畫壇の新人として令名あり、君は東京府士族小山政恒君の長男にして明治十三年三月十七日を以つて小石川初音町に孤々の聲を擧ぐ幼にして早くも繪畫を愛好し、年齒十一歲にして洋畫家本名錦吉郎師の門に學び後ち日本畫に轉じて狩野派鈴木榮曉師に師事せしも更に十八歲の時小堀鞆音師の門下に走り、研鑽琢磨遂に畫壇の人として一家をなすに至れり。

然して文展に入選すること前後八回、其の最も得意とするところのものは武者繪を描くことにして殊に第五回文部省美術展覽會に出品されたる「兵燹」は當時世上に賞讃を博したる程にて、其他多數の傑作を有し其の前途愈々多望なるものあり。

夫人を八重子と呼び埼玉縣の人關口八十八君の長女にして其の間に長男治男君二男英男君、長女とし子、二女藤子等あり。現に東京府北豐島郡瀧野川町田端四三四番地に住し電話小石川四五五二番なり。

神津藤平君

志賀銀行專務取締役
長野電燈株式會社取締役

君は長野縣の人神津清三郎君の二男にして明治四年十二月を以つて生る。明治二十九年慶應義塾を卒業し、曩に六十三銀行、長野商業銀行、深志倉庫、高井倉庫、長野新聞各株式會社取締役、株式會社千曲銀行相談役、神津、野澤醬油各合名會社代表社員たりしが現時は株式會社志賀銀行專務取締役、大東ビルブローカー銀行、長野電燈、日東保證信託各株式會社取締役、東信電氣株式會社監査役として知らる。

夫人そう子は同縣の人井出茂松君の長女にして、君との間に二男五女あり、現に長野縣北佐久郡志賀村に住す。

江木翼君

法學博士　正三位勳一等
貴族院議員　鐵道大臣

君は山口縣の人羽村梅太郎君の令弟にして、明治六年十二月を以つて生れ、後ち江木千之君の養嗣子となる。

明治三十年東京帝國大學法科大學英法科を卒業するや、直ちに職を官界に奉じ爾來、內務省試補、神奈川縣事務官、法制局參事官兼內閣書記官、拓殖局書記官拓殖局部長、內閣書記官長等を歷任す。

然して大正五年貴族院議員に勅選せられ、且つ憲政會領袖として政界に重きをなし、大正十三年加藤內閣成立するや三度內閣書記官長に任せられ、翌年賞勳局總裁事務取扱を命せられ、同年八月司法大臣に親任し、昭和二年四月田中內閣成立と共に辭す。

現に東京市赤坂區表町三ノ二十四番地に住し電話青山六〇〇七番たり。

遠藤五一郎君

北海道多額納稅者
北日本製材株式會社取締役

君は北海道の人遠藤清五郎君の令弟にして、安政元年三月を以つて生る。夙に北海道實業界に投じ、現に北日本製材株式會社取締役にして、且つ北海道多額納稅者たり。

夫人コト子は富山縣の人高島作兵衛君の長女にして、君との間に幸作君、五七郎君、五次郎君、五三男君、幸次君及びフジ子等あり、現に札幌市南三條東三番地に住す。

後藤五作君

土木建築請負業
合資會社後藤組社長

我が土木建築界の重鎭後藤五作君は東京府の人後藤安次郎君の五男にして、明治十八年一月二十日を以つて生る。夙に學業を卒ふるや直ちに實業界に投じ、將來土木建築界の有望なるを洞察したる君は、先づ以つて其の實際的技能を修得せんと志し、初め業界の權威大阪佐藤組に入りて恪勤精勵すること數年、愈々其の技倆熟し、經驗又積みしかば明治四十二年獨力後藤組を興し、爾來、奮鬪大いに努め至誠に加ふるに其の優秀なる技術は忽ちにして社會の信望を博し、早くも斯界に頭角を現はすに至れり。

然して、其の今日までの施工數枚擧に遑あらざるも就中霞ケ關離宮、小田原御用邸等の復舊工事を初めとして佐野病院丸ノ內購賣組合住宅百十數軒、淺草小島町倶樂部、上野砂糖株式會社、人形町末廣亭等都下著名なる建築物を引き請け、

何れも完璧を期して絶大なる賞讃を博し今や斯界に於ける君の名聲嘖々たるものあり。

君や資性闊達にして極めて義俠に富み些々たる小事に拘泥せず、正に江戸つ子肌の眞骨董にして、其の人と接する懇切其の會談又快なり、宜なる哉其の今日の大を成す故なきにあらざるべし。

夫人なつ子は東京府の人高野重道君の二女にして君との間に三男二女ありて一男君、重喜君、三郎君及び愛子、歌子等なり、現に東京市神田區西小川町一ノ八番地に住し電話九段二五三三番たり。

小泉策太郎君

勳四等　衆議院議員
朝鮮瓦斯電氣株式會社取締役

君は靜岡縣の人小泉定次郎君の長男にして、明治五年十一月を以つて生る。曩に靜岡日報、自由新聞各記者及び九州新聞、經濟新聞各社長として令名を馳せ、又四谷區會議員、東京市會議員、同商業會議所議員等に擧げらる。

現に靜岡縣郡部選出の衆議院議員にして、尙ほ朝鮮瓦斯電氣株式會社取締役たる外大連商品取引所理事長たり。

夫人やす子は靜岡縣の人齋藤久三郎君の令妹にして君との間に五男四女あり、現に東京市四谷區本村町三八番地に住し電話四谷二九八〇番たり。

兒玉秀雄君

伯爵　正三位勳一等
貴族院議員　關東廳長官

當家は先代源太郎君より家名を擧ぐ、同君は舊山口藩士にして、陸軍次官、同大臣、臺灣總督、參謀次長、同總長、滿洲軍總參謀長等を歷任し、後ち陸軍大將に陞る、而して、日清の戰に男爵を授けられ次いで子爵に陞爵す。

君は其の長男にして、明治九年七月を以つて生れ、同三十九年襲爵仰せ付けらる。明治三十三年東京帝國大學法科大學を卒業し、爾來、大藏書記官、統監府書記官、朝鮮總督府總務局長兼鐵道局參事內閣書記官長等を歷任し以つて現在に及ぶ、明治四十年嚴父の勳功により伯爵に陞叙せらる。

夫人サワ子は伯爵寺內壽一君の令妹たり。東京市牛込區藥王寺前三十番地に住宅を有す。

古賀勘四郎君

長崎縣多額納稅者

君は佐賀縣の人古賀平八君の三男にして、明治十四年一月を以つて生る。夙に當地に於ける味噌醬油釀造家として知られ、且つ縣下多額納稅者として當地財界に重きをなす。

夫人エイ子は佐賀縣の人川浪市松君の二女にして、君との間に蓮八君、克巳君、邦男君及び信子、光子等あり、現に佐世保市港町五十二番地に住し電話五十六番たり。

木場貞長君

法學博士
貴族院議員

君は舊鹿兒島藩士木場清生君の長男にして、安政六年九月を以つて生る。明治十三年東京帝國大學文科大學政治經濟科を卒業し、次いで獨國に留學す。

明治十三年以來文部省御用掛、同大臣祕書官、同參事官心得、同參事官、同書記官、同普通學務局、同參與官、同官房長、同實業學務局長事務取扱、同次官、兵庫縣書記官、法制局參事官、錦鷄間祗候等を歷任す。

其の間法科大學、高等師範學校等の講師囑託、圖書編纂審査委員長、高等教育會議々員、臨時教育會議、臨時教育委員會等の委員、文官高等懲戒豫備委員等に擧げらる。

現に維新史料編纂會委員にして行政裁判所評定官、同部長たり、明治三十九年貴族院議員に勅選せらる。

夫人小百合子は東京府の人新宮凉園君の令妹にして、君との間に六男二女あり現に東京府豐多摩郡千駄ヶ谷町大字原宿二〇九番地に住す。

小林嘉平次君

三重縣農工銀行頭取
貴族院議員

君は三重縣の人小川眞源君の二男にして、明治九年一月を以つて生れ、後ち先代嘉平治君の養嗣子となる。明治三十四年東京帝國大學文科大學哲學科を卒業す

然して眞宗勸學院教授となり、曾つて三重縣會議員、衆議院議員たりしことあり、現時は三重縣農工銀行頭取たる外朝熊登山鐵道、三重合同電氣各株式會社の重役として地方財界に重きをなす。

尙ほ縣下多額納稅者にして、大正十四年九月縣民の輿望を擔つて貴族院議員に當選し、議政府に列して國政に參與し以つて現在に及ぶ。

夫人てい子との間に一男二女あり、現に三重縣一志雲出村に住す。

小泉又次郎君

勳三等　衆議院議員
選信大臣

君は神奈川縣の人小泉由兵衛君の二男にして、慶應元年五月を以つて生る。曩に橫須賀市會議員、同議長、神奈川縣會議員、橫須賀市長等を歷任し、現に神奈川縣第二區選出の衆議院議員として我が政界に重きをなし、曩に衆議院副議長として令名を謳はれたり。

夫人ナヲ子は神奈川縣の人綾部幸吉君の二女にして君との間に一女ありてニシエ子と稱す、現に東京市芝區伊皿子町六十三番地に住し電話高輪六十八番たり。

小出收君

玉川製氷株式會社長

君は舊美作國鶴田藩士小出昇君の四男にして、慶應元年十一月を以つて生る。夙に鄕校を卒ふるや笈を負ふて東上し、明治三十二年慶應義塾を卒業す。

斯くて山陽新報、信濃毎日新聞各主筆

として健筆を揮ひ、大いに地方開發に盡瘁したりしが、たゞ〳〵中上川彦次郎君の認むるところとなり、同君の推擧に依り三井銀行に入り、尋いで三井工業部に轉じ富岡、名古屋各製絲所長を歴任し後ち東京信託會社支配人に擧げらる。

然して大正元年内國貯金銀行創立せらるゝや聘によりて入社し、爾來、久しく同行の爲めに盡力せしが後ち之を辭し、現に同行顧問たる外玉川製氷株式會社々長、日本形染株式會社取締役として斯界に令名あり、曾つて千代田生命保險株式會社の重役たりしことあり。

夫人琴子との間に歌子、朝子、澄子等あり、現に東京市本郷區西片町一〇番地に住し電話小石川一九九六番なり。

小林正直君

三井物産會社常務取締役
基隆炭礦株式會社取締役

君は京都府士族小林敬直君の長男にして、明治六年四月四日を以つて生る。明治二十六年同志社大學を卒業するや、直ちに三井物産株式會社に入社して同社長崎支店長、紐育支店長等を歴任す。

然して後ち取締役に擧げられ、更に同社常務取締役に進み以つて現在に及ぶ、尚ほ傍ら基隆炭礦、松島炭礦各株式會社重役として知らる。

夫人かつ子は京都府の人岡野源三郎君の令妹にして京都府立第一高等女學校を卒業し、其の間に傳太君、香次君、正之君及び叡子、ふじ子、千穂子、良子等あり、現に東京府豐多摩郡中澁谷三八一番地に住し電話青山九八八番なり。

小池靖一君

正五位勳四等
貴族院議員

君は舊金澤藩士小池伴四郎君の二男にして、嘉永六年一月十日を以つて生る。夙に開成所に敎鞭を執り、後ち渡歐して商工業の視察を終へて歸朝す。

然して衆議院書記官に任ぜられ、後ち故伊藤公の政友會を組織するや其の帷幕に馳せ、同會幹事として參畫し、同四十四年七月郷里より推されて衆議院議員に選出せられ、且つ大正九年貴族院議員に勅選せらる。

趣味に文書あり、能筆、能文の聞え高く又謠曲に堪能にして書畫骨董を愛好するが如し、夫人をみつ子と稱し君との間に二男あり、現に東京市牛込區市ヶ谷山伏町十四番地に住し電話牛込六二五番たり。

小林暢君

長野縣農工銀行取締役
貴族院議員

君は長野縣士族小林元辰君の長男にして、明治十二年十月を以つて生る。現に長野縣農工銀行頭取たる外六十三銀行、信濃電氣、帝國火災保險、長野貯蓄銀行各株式會社の重役たり。

尚ほ縣下多額納税者にして、大正十四年九月縣民多數の輿望を擔つて貴族院議員に當選し以つて現在に及ぶ。

夫人をほう子と稱し長野縣士族小林勇雄君の三女にして君との間に五男三女あり。

近藤達兒君

辯護士　東京市會議員
衆議院議員

君は福島縣士族近藤春太郎君の令弟にして、明治八年十月を以つて生る。明治四十二年東京帝國大學法科大學獨法科を卒業するや直ちに辯護士を開業す。

現に其の傍らカイゼル、ウント、ギルベルト株式會社取締役、日新醫學社取締役、都市計畫地方委員、東京市會議員にして曩に同副議長たりしことあり。

尚ほ衆議院議員に當選すること前後三回に及び現に中央政界の一異彩たり、夫人をきく子と稱す、現に東京市日本橋區蠣殼町二ノ一番地に住し電話浪花二〇五六番たり。

小松輝久君

侯爵　正四位勳一等
貴族院議員

君は故大勳位陸軍大將北白川宮能久親王の第四子北白川宮永久王竹田宮恒德王の叔父君に當り、伯爵上野正雄君の令兄にして、明治二十一年八月を以つて生れ後ち臣籍に降り小松姓を賜はり同時に華族に列し侯爵を授けらる。

明治十二年海軍少尉に任官し後ち海軍少佐に陞進す、現に貴族院議員たり、夫人薫子は公爵島津忠承君の令姉たり、現に東京市外下澁谷三二一番地に住し電話青山五番なり。

遠藤吉次郎君

遠藤兄弟商會主
函館船渠株式會社監査役

我が貿易界に令名ある遠藤吉次郎君は遠藤吉平君の長男にして、明治四年十一月二十三日を以つて生る。夙に函館商業學校を卒業するや渡米して私立商業學校に入り斯學の研鑽を積みて歸朝す。

然して聘に應じて米國貿易會社に入社し、横濱、神戸、東京各支店販賣係となりしも、大正元年六月辭して大阪山口嘉藏商店に入り貿易部を新設してその主任となり、後ち、大正六年遠藤兄弟商會を創立し、英國製紙會社ジョンデキンソン會社と特約して其の日本總代理店を引き受け、洋紙の直輸入販賣をなし、現に其の傍ら函館船渠株式會社監査役にして我が財界に令名あり。

夫人をきよ子と呼び、君との間に六女あり、現に東京市赤坂區榎坂町三番地に住し電話青山四七六番なり。

兒玉右二君

哈爾賓日々新聞社長
衆議院議員

君は山口縣士族兒玉光君の二男にして明治六年九月十日を以つて生る。夙に東京帝國大學法科大學に學び、後ち サミエルエンド、サミエル商會臺灣支店、同東

京支店等を歴勤す。

然して後ち操觚界に轉じ、岡山中國民報、大分中正日報・北京東報、東京日々通信、議會春秋新聞等の記者を歴任し、現に前記の職にありて令名あり。現に東京市芝區芝公園二十二號地に住し電話高輪四九二八番たり。

小鹽八郎右衛門君

神奈川縣農工銀行頭取
貴族院議員

君は神奈川縣下の名門先代寛藏君の長男にして、慶應元年十一月を以つて生る夙に漢學者小笠原東洋師に就いて學び、後ち縣會議員、縣農會副會長等に擧げられ、衆議院議員に當選すること前後二回に及び中央政界に鳴らす。

然して現時は神奈川縣農工銀行頭取たる外日本輪工株式會社取締役にして、且つ大正十四年九月縣民多數の輿望を擔つて多額議員に當選し以つて現在に及ぶ。

夫人リク子は神奈川縣の人宮田寅治君の二女にして君との間に一男四女あり、現に神奈川縣中郡相川に住す。

小林逸作君

土木建築請負業
東京市牛込區市ヶ谷富久町會長

帝都復興建築界に盡瘁して鋒々の聲名あるを我が小林逸作君となす、君は新潟縣の人小林民造君の二男にして、明治二十四年三月を以つて新潟縣古志郡西谷村に生る。夙に鄉校を卒ふるや大志を抱いて上京し、直ちに築地工手學校建築科に入りて研鑽を積むこと數年、後ち東都實業界に投ず。

然して大正六七年の交土木建築界の泰斗安藤熊吉君の經營に係る安藤組に入りて活躍すること三ケ年、後ち大阪森川組に轉じて愈々君が技倆を縱横に發揮するや令名頓に擧り、社會の信望益々厚きを加ふるに至れり。

然りと雖も、固より大望ある君は永く雇員として終始するを欲せず、大正六年敢然起つて獨立の旗幟を飜へし、小林組と稱して斯界に活躍し、熱誠事業に當りしかば業勢漸次加はり、爾來近衛師團經理部、第一師團經理部、近衛師團下士官舍、陸軍士官學校、同戸山學校、鐵道省第二改良事務所、大藏省管財局等諸官廳の著名なる建築物を初め濟生會病院、駒澤高等小學校等何れも完璧を期して甚大なる賞讃を博し、而も其の請負價格の數萬圓より數十萬圓の巨額に達したるより見るも、君が如何に斯界に信望厚きかを察知するに足るべく、今や新興大日本業界の第一線に立ちて邁進する君の前途や蓋し多望なりと謂ふべし。

君や頭腦明晰、資性闊達、豪も些々たる小事に拘泥せず、其の豪氣果斷なるところ正に凡輩の類に非ず、君が今日の大を成す又故なきにあらざるべし、尙ほ傍ら公共事業に深く心を用ひ、現に富久町々會長として盡瘁すること甚大なり、現に東京市牛込區市ヶ谷富久町一一八番地に住し電話四谷四八二六番たり。

後藤市藏君

大阪府多額納稅者

君は大阪府の人松村作兵衛君の四男にして、明治九年二月を以つて生れ、先代源造君の養嗣子となる。夙に實業界に投じ現に大阪府多額納稅者として知らる。

夫人ぬい子は兵庫縣の人飯井佐吉君の長女にして君との間に武美君及び春子、秋子等あり、現に大阪市南區西橋町六番地に住し電話南七〇八番たり。

小西榮三郎君

小西商事株式會社長
東洋文藝株式會社長

君は栃木縣の人小西氏德君の三男にして、明治十四年七月を以つて生る。明治三十八年聖公會初學校を卒業し、初め新聞事業を好み、信濃民報、信濃毎日新聞各主筆、時事新報記者として君の靈筆を縱横に揮ひしが、後ち感ずるところありて大正四年敢然として實業界に投ず。

斯くて先づ斯業視察の目的を以つて支那及び歐米各國を巡遊すること事年余にして歸朝し、現に前記會社々長たる外、日本圖書、原機械各株式會社々長にして尙ほ田川炭礦、帝國石膏各株式會社專務取締役並に日本物産、東京アニリン、日本セルロイド各株式會社取締役として我が財界一方の雄たり。

夫人トキ子との間に基一君及び道子、妙子、きよ子等あり、現に東京市京橋區南八丁堀一ノ一番地に住す。

後藤信治君

日本活動寫眞株式會社常務取締役
長門炭礦株式會社取締役

君は兵庫縣の人後藤勝造君の令孫にして、後藤鐵二郎君の甥君に當り、明治十五年五月を以つて生る。夙に學業を卒ふるや直ちに實業界に投じ、君の敏腕を振つて斯界に名聲を博す。

然して現時は日本活動寫眞株式會社常務取締役として內外の社務を鞅掌する傍ら長門炭礦、第一商店、太陽護謨各株式會社の重役として知らる。

現に東京市麹町區隼町十一番地に住し電話四谷五一五四番たり。

近藤三郎君

正五位勳五等　司法書記官
大臣官房會計課長

君は東京府士族後藤元城君の三男にして、明治十三年五月を以つて生れ、同四十一年十一月先代あさ子の養嗣子となる

明治四十年東京帝國大學法科大學獨法科を卒業するや、同年十一月文官高等試驗に合格し直ちに職を官途に奉じ、大藏屬、專賣局書記、專賣局主事、司法書記官等を歴任し、後ち司法書記官に任せられ、大臣官房會計課長の要職に就任し以つて現在に及ぶ。

夫人鉢尾子は東京府の人近藤貫一君の三女にして、君との間に晋一君、高男君、今夫君、道夫君、町夫君及びサチ子、冬子等あり、現に東京市淺草區今戸町十九番地に住し電話淺草五九三二番たり。

兒玉謙次君

横濱正金銀行頭取

君は東京府士族兒玉惟時君の二男にして、明治四年十一月七日を以つて生る。明治二十五年東京商科大學の前身たる東京高等商業學校を卒業するや直ちに實業界に投ず。

斯くて横濱正金銀行に入り累進して遂に同行取締役上海支店長に擧げられ現に同行頭取として令名あり。

夫人いと子は東京府士族富田又錄君の長女にして君との間に惟正君、惟次君、及び充子、峰子等あり、現に東京市麹町區富士見町二丁目二番地に住し電話九段一四七四番たり。

小林長兵衛君

青森銀行取締役

君は青森縣の人小林貞助君の長男にして、明治七年十月を以つて生れ、後ち先代長兵衛君の養嗣子となり、前名金藏を改稱して先代を襲名す。

夙に實業界に飛躍して其の敏腕を左右上下に振り飛ばし、現に前記銀行の重役たる外青森電燈、青森信託、青森臨海倉庫各株式會社の重役として令名あり。

尚ほ當地方に於ける有數なる多額納稅者として知られ、現に直稅一千七百余圓を納む、夫人とわ子は養父長兵衛君の長女にして君との間に二男二女あり。

現に青森市新町六三番地に住す。

小林清一郎君

加須銀行常務取締役
栃木縣多額納稅者

君は栃木縣の人山中八郎君の長男にして、明治四年十一月を以つて生れ、後ち先代小林八郎君の養嗣子となる。

夙に鑛山業に從事して斯界に令名を謳はれ、現に前記の外東海銀行、日本鐵道事業、市村紡績、日本鑄鋼、日本プレード、大北火災保險各株式會社の重役として知らる。

尚ほ栃木縣多額納稅者として威勢を張り、直稅一千四百三十余圓を納む。

夫人をナカ子と呼び東京府士族原亮一郎君の令妹たり、東京市麹町區上六番町四七番地に現住す。

小池喜兵衛君

小池合名會社長

君は宮城縣の人小池通吉君の二男にして、明治二十一年十月を以つて生る。夙に大志を抱いて神戸に至り、運送業を營みて活躍大いに努めしかば業勢漸次加はり、現に小池合名會社代表社員として斯界に知らる。

曩に播陽汽船會社重役たりしことあり夫人かつ子は兵庫縣の人小川逸治君の令妹にして君との間に二男一女あり、現に神戸市上筒井通七ノ六六番地に住し電話三宮二七八六番たり。

後藤清郎君

岩手日報主幹

君は岩手縣の人故後藤直助氏の三男にして、明治二十二年十一月二十一日を以て生る。

大正六年東京帝國大學法科大學政治科を優秀の成績を以て卒業するや翌年報知新聞社に入社し、尋いで大阪毎日新聞社東京日々新聞社等を歴任、政治部記者として君が健筆を縱横に揮ひて令名を馳す

斯くて大正十一年八月岩手日報社に入社し、現時同社主幹として知らる。

趣味廣く圍碁、將棋等は最も堪能にして社交に厚く學士會々員たり。

夫人クニ子は鹿兒島縣の人村原兼雄氏の令妹にして三輪田高等女學校の出身たり、現に岩手縣盛岡市丸内三六番地に住す。電話一〇一四番

遠藤讓輔君

共保生命保險會社東京支店長

本邦實業界に介在して今や多年の經倫を斯界に發揚して錚々の名あり、前途を囑望せらるゝを我が共保生命保險株式會社理事兼東京支店長遠藤讓輔君となす。

君は舊板倉藩士として代々同藩に重きをなせし舊家の出にして明治十二年四月三日を以て生る。

夙に鄕校を卒ふるや笈を負ふて上京、明治三十一年專修大學の前身たる專修學校理財科を卒業するや直ちに東都實業界に投じ、日本銀行調査局に入り、後ち同行名古屋支店營業係を經て大正二年久原鑛業株式會社に轉じ、爾來、同社大瀬鑛山、鎭南浦製錬所、白瀧鑛山、佐賀關製錬所各庶務係長を歴勤の後ち再び本社に舞ひ戻り、而して同年十月共保生命保險株式會社理事兼東京支店長の要職に就任以て現在に及ぶ。

趣味多機にして漢詩、俳句、和歌等を能くし、又讀書に耽り、旅行を愛好すといふ、以て其の人と爲りを知るべし。

夫人をまさ子と呼び其の間に元男君、知二君及び明子あり、因に長男元男君は東京帝國大學文學部國史科在學中の才物長女明子は跡見高女卒業後女子美術學校に學び現に同校在學中なり、現に東京市芝區白金今里町四十六番地に住す。電話高輪二一四七番

小柴卯之七君

從五位勲五等　鐵道局參事
東京鐵道局上野運輸事務所長

君は新潟縣の人小柴文次氏の令弟にして、明治十二年三月を以て生る。

明治三十八年早稻田大學法科を卒業するや直ちに文官高等試驗に登第し、同四十一年官界に投じ、帝國鐵道局書記に任ず。

爾來、鐵道局副參事、札幌鐵道局函館運輸事務所長、鐵道局參事、名古屋鐵道局名古屋運輸事務所長等を歴任し以て現在に及ぶ。

夫人すみ江子は東京府士族金井銀十郎氏の長女にして其の間に邦夫君、哲夫君政夫君等あり、現に東京市外瀧野川町田

端亘臺通官舍に住す。電話小石川四八七四番

小柴大輔君

小柴商店主
帝國興業株式會社監査役

君は東京府の人三宅豹三氏の二男にして、明治廿六年七月七日を以て生れ、後ち實業家小柴大次郎氏の養嗣子となる。

夙に穎才の聞え高く、大正七年慶應義塾理財科を優秀の成績を以て卒業するや直ちに財界に投じ、而して大正九年歐米各國を遍歴して大いに彼の地の經濟狀態を普ねく視察見學して翌年歸朝す。

今や新日本建造の新進實業家として知られ、小柴商店を經營主宰して專ら自動車室製作に從事し、畏こくも　大正天皇御即位の御馬車の謹製の榮を賜はり、今や同商店の名は本邦斯界に普ねし、君尚ほ帝國興業株式會社監査役として知らる

趣味として特に野球の名手として名を謳はれ、曾つて大學時代本邦野球界に覇を唱へ卒業後も尚ほ野球監督として母校の運動界に貢献すること甚大、曩に斯界の見學視察の爲め米國に航せしこと數度に及べり。

夫人鎭子は養父大次郎氏の長女にして英和高女卒業の才媛たり、現に東京市麻布區材木町二番地に住し、電話青山六二五二番たり。

榎本初五郎君

東京府瀧野川町長
全町名譽助役　全町會議員

君は東京府の出身にして、明治十三年十月二十五日を以て瀧野川上中里に生る嚴父は磐城の國主安藤對馬守に仕へ、祐筆を勤めたる亀山貞時氏にして、君は其の長男に生れしも故あつて瀧野川町の素封家榎本嘉右衛門氏に里子となり、後ち同家の養嗣子となり榎本姓を冒す。

夙に都文館中學校を卒業するや進んで高等學校の入學試驗に應じ、優秀の成績を以てパスせしも不幸病魔の冒すところとなり、止むなく素志を擲つて全快後鴻儒須藤某に就いて漢學を修得すること多年に及ぶ。

斯くて大正六年瀧野川町會議員に擧げられ、次いで北豐島郡會議員に推され、大正十年滿期と共に再び町會議員となり名譽助役に推され、後ち前町長越部淺五郎氏の後を承けて町長に就任、現に其の榮職にある外同町名譽助役、同町會議員として瀧野川町制に盡瘁すること甚大なり、昭和三年十二月東京府知事より勳績多年、功勞の顯著なるの故を以て木杯を贈つて表彰せらる。

趣味に圍碁、讀書、撞球あり、夫人さと子との間に平太郎君、喜代治君及びかね子あり、現に東京府下瀧野川町上中里に住す。電話王子三一二番

小島利助君

小島運輸部經營者
小島商店支配人兼運輸部主任

君は茨城縣の人小島藤七氏の三男にして明治十五年八月三日を以て生る。

夙に麹町商工中學校を卒業するや令兄の經營する酒造並に醬油釀造業小島商店に入りて活躍、其の支配人並に運輸部主任となる。

然して現時は同店支配人たる外東都自動車業界に令名高く、江戸川タクシー、澁谷ツウリング、小島貨物運輸部等を經營主宰し、且つ東京自動車業組合理事、評議員、音羽町々會議員として知らる。

夫人松枝子は東京府の人松本聖珠氏の二女にして淑德高女の出身、其の間に靜枝あり、現に東京市牛込區音羽町四ノ一六番地に住す。電話牛込五一六七番

小林幸太郎君

侯爵蜂須賀家顧問

夙に時勢を洞觀して自作農制の確立に挺身し以て一貫、遂に農民の慈父と仰がるゝに至りし吾が小林幸太郎君は、千葉縣印幡郡木下町に生誕す、時惟れ明治九年十月十二日嚴父を故小林勇藏氏となし其の長子に生れしが、幼時既に穎悟、疾くも社會制度の欠陷、就中農民階級の不合理的生活に目覺むるところあり、農民の全生活を妥當なる位置に向上せしむるの方途は一に懸つて自作農制に在りと爲し是が確立を期して廿有二才年壯潑溂の往時、鬱勃たる雄心を抱懷して東上す。

然して當時の政界に錚々たりし偉傑星亨氏の門下に投じて彼の有一館に入る、後ち星氏の薫陶啓發に浴しつゝ自由黨の綱領たる階級打破を呼號喧傳して政界に奔馳せしが、星氏兇刃に斃れたる後ち實業界に轉じ、日本橋區富澤町に於て叔父大久保久七氏の經營せる呉服太物商店に入りて店務の樞機を執掌して三十二歳當時之れを辭し、夙に私淑せる日蓮主義研鑽の爲め身延山に參籠すること二年有半に亘り、切瑳琢磨其の奥義を極めたり。

斯くて下山するや「國体擁護立正安國論」の著作を公にし、他宗猛排日蓮宗義を宣布すると共に國家機構の非違を鳴らすところありしが、君の烈々たる皇室中心主義に於て、偶々侯爵蜂須賀正韶氏の知遇を得るに至り、君の夙志たる自作農制及び人口食糧政策の点に於て侯の識覽と合致し、後ち侯爵家所有の北海道農場管掌の任に當ることゝなれり、斯くして君は廣大なる該農場に平素の持論抱負を具現して、學校に交通に衛生に着々施設を爲し、之れが完成を見るや、大正十五年十一月廿一日農場を解放して自作農政に革む、是れ實に東洋に於ける嚆矢にして亦劃期的の快擧たり、茲に於て乎君の宿志成ると共に自ら農民担仰の的となるに至る、其の淵源洵に淺からずと謂ふべきなり。

君は先是大正十年より札幌、沼田間六十七哩の私設鐵道敷設を企圖し該鐵道敷設期成同盟會を興し、後ち之れが會長の任に推さる、亦大正十三年空知郡岩見澤町他三ケ町村より成る工費八百萬圓を擁する北海道土工組合顧問に擧げられ、現に其の任にあるの他、北海道會内自作農制實行委員中より小委員に選ばれ、幾多

世益に寄與するところ尠からず、遂に大正十四年一市六ケ町村は君の銅像を作製し石狩國雨龍郡雨龍神社々頭に聳立せしめて、君の公共事業貢献に對する謝意を永遠に記念せり。

尙ほ君の閲歴中特筆すべきは、瀧川に於ける築堤の功績にして、是亦道内の嚆矢的事業たり、其の竣工成るや瀧川全町民は君に贈るに金牌を以てして謝念の表象と爲せり、君は自費を投じて同町に精米場、味噌醸造所等を設置して自給自足の方策を授けしむるなど、如上屢述の功績と共に、致らざるなき施設の貢献に對し、吾人は絶大の頌德に吝かならざる者なり。

君は昭和二年六月より四大恩鼓吹會々長となり、自ら日蓮宗の題目を記號して無料頒布し、以て病者、不具者を救濟するの幾多奇蹟的靈現に依り衆人を駭目せしめつゝあり、亦昭和三年十二月相州熱海温泉に旅館常盤館を建設開業し、君の社會政策的見地より、階級の如何を超越し至廉の料金を以て、洽く行樂の人々をして所謂清遊の目的を完全に達せしめつゝあり。

君や其の人物卓落にして豪毅堂々、克く國家的觀念の下に終始して盡瘁概ね斯の如し、前途未だ春秋ある向後を思想善導に献身せんとする錚々の意氣亦壯なる哉、日本構成の一人物として吾人は覓めて得られざる士の社會的貢献を普く江湖に紹介し得る機運に會したるを歡びとす

家族にははつ子夫人との間に政子、梅子あり。現に東京市外日暮里町北久保道一〇四〇番地に住す。電話下谷一二二一番　常盤館—相州熱海町　電話四一八番

小間千代松君

仁壽生命保險(株)理事
兼同社直營課長

君は石川縣の人小間義三郎氏の二男にして、明治二十二年一月二十五日を以て生る。

夙に鄕校を卒ふるや笈を負ふて東上、明治大學に入りしも後ち早稻田大學に轉じ、大正四年同學法科を卒業す。

斯くて仁壽生命保險株式會社に入社、爾來、同社書記、副主事、主事、東京支店外務部長、特設募集部監督等を經て昭和二年三月直營課長に任じ、現に同社理事兼ね直營課長として知らる。

夫人浪子は千葉縣の人寺田市太郎氏の令妹にして其の間に美代子あり、現に神奈川縣大磯町臺町一〇七番地に住す。

海老原直太君

海老原製作所主
品川ガレーザ經營者

君は茨城縣の人先代源藏氏の長男にして、明治二十六年一月十九日を以て生る夙に鄕校を卒ふるや鄕里に於て鍛金の請負業に從事せしも、大正三年鴻圖を抱いて上京、後ちタクシー自動車株式會社に入り、翌年梁瀨自動車株式會社に轉じ、鍛金部主任に任じ、車室板金張の創設者として知られし人なり。

然して大正十年本邦最初である海老原式飛沫除器フェンダーを發明して之が製作販賣に力を致し、今や外國品を凌駕する純日本國産にして其の販路は國内は勿論遠く支那方面にまで波及するに至れり

曩に大禮記念國産振興東京博覽會には名譽ある賞牌を贈られ尙ほ大禮奉祝博覽會よりも同樣大賞牌を贈與せらる。

現に海老原製作所主として該フェンダーの製作販賣に從事する外品川ガレーヂ經營者にして且つ品川尙義會幹事、品川借地人協會々計、品川町政研究會常任理事兼會計、茨城縣友會顧問、東京自動車商組合評議員、東京自動車々庫業組合副組長、自動車鍛金同業組合副組合長等の諸職にありて令名高し。

趣味に生花、讀書あり、尙ほ政治を談じ之を研究すること甚大、公共的觀念に富む人材たり。

現に東京府下品川町一五八九番地に住す。電話高輪四七〇番

小松重就君

日本美術寫眞印刷所(株)取締役

君は高知縣士族故小松守重氏の三男にして、明治二十年十二月六日を以て同縣に出生、大正七年分れて一家を創立せり

夙に鄕校に學び笈を負ふて東都に出で慶應義塾大學理財科に入學、大正三年之れを卒ふるや直ちに實業界に入り、岐阜電機株式會社に入社せるも、同五年高知製絲株式會社に轉じ、同社會計部主任に就任す。

次いで同八年土佐紡績株式會社に入り翌九年之を辭し、同十二年八幡製鐵所に轉じ、販賣部契約課主任たりしが、後ち九州送電株式會社の發企創設に際し同所を退き其の創立に關與して奔馳大いに努め、同社の成るや主事に推され社業の伸展に盡瘁多大なるものあり。

然して昭和三年之れを辭して同年十一月株式會社日本美術寫眞印刷所に入りて其の取締役に就任、以て現時に至れり、尙ほ傍ら株式會社三峯舍取締役を兼ぬ。

君は謠曲に趣味を有し、圍碁を嗜む、家庭には琴世夫人あり、同鄕高知縣の人山田八重穗氏の長女たり、其の間に德重君あり、現に東京市小石川區原町七十八番地に住す。電話小石川三五六九番

小林增作君

從四位勳三等　陸軍藥劑大佐
製藥業　共誠社代表者

本邦に於ける家庭藥の不備欠陷を慨し共誠社を創設して之れが經營の衝に當り着々理想實現に邁進しつゝある君は東京の人故小林好愛氏の嫡男にして、明治四年五月を以て生る。

夙に藥學に志し、當初其の學育を濟生學舍に享け、次いで東京帝國大學醫科大學藥學科に入學し、大いに斯學の研鑽に精進、明治廿八年學成りて之れを卒ゆ。

斯くて同年官途に就き、吳海軍病院藥劑部に奉職せしが、後ち海軍大學校其の他に歷勤せるあり、最後に横須賀海軍病院にありて其の藥劑部長たりしが、大正

十二年九月官職を退き、大震災後假設せられたる横濱市濟生會臨時病院に聘せられて調劑長たり、翌十三年六月該院解放の後ち、東京市外中野町雜色一六七番地に製劑工場を設け、以て共存共榮、相互に誠意を披瀝するの寓意に依り「共誠社」と號して製劑と共に之れが販賣を營み、全國購買組合聯合會の依囑に應じ專ら該組合に家庭藥の供給を爲し現に其の業務に携れり。

君は最近、多年の蘊蓄を傾注し、以て營養劑「ノイロジン」を創製して發賣するや、殊に神經衰弱症、呼吸器病等に卓効の顯著なるものありとて、忽ち江湖に迎へられ今や業況大いに殷盛を加ふるに至れり。

君は其の資性極めて溫雅にして、誠を盡すを以て處世の大道なりと篤信す、以て君の人と爲りを識るに足らん乎

家庭には鏡子夫人あり、岐阜縣士族故菊地良氏の長女にして其の間に健夫君、英二君及びよね子、和子等あり、現に東京市外淀橋町柏木三一九番地に住し、電話四谷四三二二番たり。

近藤末一君

旅館業　旭館經營者
麴町區會議員

行旅の客人に對し「親切、叮嚀」を本旨として宿泊者に多大の便宜を與へ以て旅愁を無からしむる旭館の經營者たる君は明治四年八月廿一日を以て佐賀市に於て孤々の聲を擧げ、該地に成育す、嚴父を故馬渡雄左衛門氏となし其の三子に生る然して先代近藤この刀自の養嗣子となり同四十三年家督を繼げり。

君は當初鄕校に學を修め、後ち東上して早稻田大學に入學、同二十四年同大學政治經濟科卒業、直ちに實業界に志し、東洋汽船株式會社に入社せり。

斯くて社業に精勵するありて同社事務長に昇進せるも、大正元年同社を辭して家業に携り旅館旭館を經營以て現時に至れり、此の間傍ら公共事業に盡瘁すること多大にして、區民より推され麴町區會議員に就任せるの外、麴町芝京橋三區旅館組合幹事長、東京旅館組合本部次長、全國旅館組合案内所長等の職にありて同業者の共存共榮に尠からざる功績を致せり。

君は鳥獸を戰すを以て趣味となし亦庭球を好む、家庭には敬子夫人との間に清一君、實君、惠三君、彰男君、君弘君及び貴美子、久子あり、東京市麴町區内幸町一ノ五番地に現住す。電話銀座三一七五番　三一七六番

近藤榮助君

從五位勳五等
東京府立工藝學校長

君は新潟縣の人先考庸之助氏の四男にして、明治七年三月十七日を以て生る。

明治二十九年新潟師範學校を經て同卅五年東京高等工藝學校附屬工業教員養成所を卒業するや新潟師範學校教諭を拜命爾來、新潟縣立工業學校教諭兼舍監、宮城縣立工業學校長兼教諭、宮城縣技師、第一第二回宮城漆器講習會講師、東京府技師等を歷任、大正八年十二月東京府立工藝學校長に任じ以て現在に及ぶ。

然して大正十四年遞信省事務官に任じ同年第二回畜産工藝博覽會審査員囑託、東京府家具工養成所講師に任じ、昭和三年東京商工會議所主催大禮記念國産振興東京博覽會審査官囑託、昭和三年九月御大禮に關する臨時委員を拜命せり。

夫人ます子は新潟縣の人曾我簡堂氏の息女にして其の間に武夫君及びしづ子あり、現に東京市牛込區若松町十七番地に住す。電話牛込三一八番

小長谷憲孝君

小長谷商店主

本邦銅眞鍮地金製品の販賣業界に錚々の名あるを我が小長谷商店となし同店經營主を小長谷憲孝君となす。

君は東京府の人小長谷憲一氏の長男にして、明治十三年五月三十一日を以て生誕す。夙に志を實業界に立て、三國貿易株式會社に入社し、輸出入業に從事して敏腕を振ふこと十余年に及ぶ。

斯くて大正四年獨力以て小長谷商店を創立し、爾來、銅眞鍮地金製品の販賣に力を致し、至誠奮鬪を以て終始せしかば業運頓に擧り、今や東都同業界の白眉を以て目せらる。

趣味として園藝を好み、果樹の栽培をも能くすといふ。

夫人きやう子は宮地豐松氏の四女にして其の間に保雄君及び咲子あり、現に東京市四谷區愛住町十五番地に住す。電話四谷一六二番

後藤仙太郎君

地主　澁谷町會議員

當後藤家は舊くより現地に居を卜して代々鍬鋤を把りし豪農として知られしが時勢の進運に隨ひ其の耕耘地の關係より土地の管理を營み以て現時に至れり。

當主後藤仙太郎君は明治十三年一月十三日を以て出生、嚴父佐太郎氏の嫡男にして、幼より祖業に從ひて長ぜり。

君は人と爲り素朴にして敦厚、大正二年澁谷町民より推されて同町會議員となりて以來荏苒今日に至るまで、毎回克く當選の榮を得て以て町政に參與すること既に十有七年、幾多公共事業に盡瘁して功あり、町民の信望を聚め嘖々の令名頓に擧るに至る。

此の間私的事業として曩に市内赤坂にデーエフ自動車商會を設立し、交通運輸業務に携はるところありしが、大正十一年之れを罷め、同十五年合資會社共託社の創設せらるゝや君も亦出資社員の一員に加はり現に其の職にあり。

君は前掲公私の事業に携るの傍ら、夙に我國古來よりの志士仁人の記錄の蒐集に努めつゝありしが、今や其の資料君の堂屋に滿つるに至れり、然して尙幾多先覺烈士の義擧壯意をして永久に空しうせざると共に、其の活教訓を千古に垂れし

めんとの至情よりして、君は獨力之れが會館の建設を企て着々其の實現に邁進しつゝあり、箕年ならずして君の宿志の具体化するに至るべしと、君の公共に盡す概ね斯の如し、以て其の人格の一面を窺ふに足るべし。

夫人千壽子は東京府の人大庭幸次郎氏の息女にして東京裁縫女學校の出身なり其の間に英郎君及び美枝子あり、現に東京市外澁谷町神宮通り一ノ一七番地に住す。電話青山一六一五番

榎原亀次君

勳七等功七級　陸軍海軍一等機關兵曹
日本車輛(株)東京支店ポイント部長兼技師

君は鳥取縣の人榎原龜吉氏の長男にして、明治十三年五月十三日を以て生る。

夙に海軍に籍を置き、明治四十二年には海軍一等機關兵曹に陞進、明治二十七八年日清の戰には尉山海戰に參加し、更に同三十七八年日露の役勃發するや日本海々戰に軍艦「吾妻」に乘り込んで花々しき戰功を立て功により勳七等功七級金瑪勳章を賜はる。

斯くて後ち實業界に投じ、天野工場に勤め、更に日本車輛株式會社東京支店に轉勤、現に同社技師兼ポイント部長として知らる。

夫人きち子は東京府の人長谷川爲吉氏の長女にして其の間にたか子、たま子あり、現に東京市外寺島町三〇三番地に住す。

江藤甚三郎君

株式會社弘報堂社長
第一ビルディング(株)取締役社長

當家の祖江藤外記は藤原氏に出で、大友氏に仕へて功あり、後ち九州耶馬溪に移り、爾來、十數代土地の豪族たり。

君は斯くの如き由緒ある家柄なる先代直純氏の三男にして、慶應元年六月を以て生れ大正十年家督を相續す。

夙に本邦實業界に投じ、新聞通信廣告取次業の開祖たる弘報堂を創立し、爾來着々として斯業の發展に盡瘁し、大正九年時代の趨勢に順應すべく株式組織に變更と共に同社々長に任じ、今や前記會社々長たる外東京護謨工業、東京煉瓦、九州水力電氣、杖立川水力電氣、大日本電球、日東硫肥各株式會社の重役にして我が財界一方の雄として令名あり。

君尚ほ傍ら日本工業倶樂部、青山會館生活改善同盟會各評議員並に日本貿易協會幹事、日本新聞協會理事、泰明小學校兒童保護會々長、第二十區々劃整理委員等の要職にあり。

曩に海外漫遊の途に上り、歐米各國の經濟狀況並に社會狀態を視察見學して歸朝す。

夫人テル子との間に直重君、直輔君、直三君あり、何れも慶大出身の俊才にして弘報堂、第一ビルディング各株式會社に重役を兼ね新進實業家の聞えあり、現に東京市芝區高輪車町四六番地に住す。電話高輪五六六五番

小池義一君

辯護士
東京辯護士會副會長

東都少壯辯護士として、斯界に聲名あるを、吾が小池義一君となす。

君は岡山縣の人小池長次郎氏の二男として、同縣都窪郡中庄村に孤々の聲を擧ぐ。

夙に鄕里の小中學を修むるや關西大學に學び、大正二年同學を卒業するや、更に上京して日本大學高等研究科に入り、專ら法律學を研鑽す。

然して學成るや裁判所書記試驗に合格東京大阪の裁判所に奉職す。

斯くて繁務の余暇尙ほ研學し、大正六年辯護士試驗に優秀なる成績を以て登第し、法律事務所を開設して今日に及ぶ。

君や直情經行の人、君子の風格を備へ一度職に臨まば滔々と名論卓說、以て其の人と爲りを知るべし。

曾つて日本辯護士協會理事、東京辯護士會各常議員たりしことあり、昭和四年四月東京辯護士會の役員改選に臨み副會長に當選し、現時其の任にある傍ら民法調査委員、辯護士法改正委員たり。

夫人清野子は岡山縣立實踐女學校の出身にして君との間に和子、淑惠子あり、現に東京市麴町區永田町二ノ一番地に住す。電話銀座四三六八番

幸塚善五郎君

京濱電氣鐵道(株)庶務課長
森ケ崎自動車(株)取締役

君は富山縣の人先考正助氏の長男にして、明治十三年十一月三十日を以て生る。

夙に中央大學經濟科に學び、後ち實業界に投じ、爾來、東洋物品商品保險株式會社、明商銀行、巢鴨刑務所會計係等を歷勤、大正九年京濱電氣鐵道株式會社に入社し現に同社庶務課長たり。

然して大正十二年東南自動車合資會社を創立して同社代表社員に任じ、後ち之を森ケ崎自動車株式會社に組織並に稱號を變更と共に同社取締役に任じ、現に其の外紅白亭撞球場經營者、京濱タイムス合資會社相談役たり、大弓に長ずといふ。

夫人あさ子は東京府の人川島榮藏氏の長女たり、現に東京市外大森町谷戸宿三四八三番地に住す。電話大森二八八〇番

小屋良吉君

弘電社(株)取締役支配人

君は大分縣の人小屋精吾氏の二男にして、明治十九年九月八日を以て生る。

夙に鄕校を卒ふるや笈を負ふて東上、研鑽琢磨、明治四十五年日本大學を卒業するや本邦實業界に投じ、中國電球株式會社營業部長として敏腕を振ふこと甚大大正九年株式會社弘電社に轉じ同社取締役支配人に任じ以て現在に及ぶ。

社交に厚く電氣協會、電氣倶樂部各會員たり。

夫人たい子は新潟縣の人坂井吉五郎氏の令妹たり、現に東京市外澁谷町長谷戸五〇番地に住す。電話青山六一〇八番

小谷節夫君

衆議院議員
大青島新報社長

東亞の文化と產業の開發に盡瘁して其の獨自の識見と敏腕とを以て聞え、斯界に貢献すること尠少ならざるを我が新人小谷節夫君となす。

君は岡山縣の人近藤幾一郎氏の長男にして、明治十八年一月二十八日を以て生れ、後ち絕家小谷家の養嗣子となり之を再興す。

明治四十一年東亞同文書院を優秀の成績を以て卒業するや直ちに本邦實業界に投じ、古河鑛業株式會社に入社し前後八ヶ年同社の代表として大連に駐在、其の功績甚大なりしも、期するところありて大正五年同社を圓滿辭す。

斯くて青島に赴き獨力以て貿易商を開始し、天佑公司を經營主宰して名聲を斯界に博し、たゞ〳〵大正十一年吳佩孚氏の招聘あるや出でゝ同氏の政治顧問として參劃、越えて十三年大青島新報社を興して內外の社務を鞅掌するのみならず、健筆を振つて東亞の文化及び產業の啓蒙開發に資し、現に同社々長として知らるる。

然して昭和三年政界の風雲急轉し民政黨內閣倒壞して田中內閣出現の機運爛熟するや君又多年の宿望を達成するは正に此の秋にありと、即ち岡山縣第二區より出でゝ旗幟を宙天に翻へし白馬を陣頭に進めて勇進敢戰せしかば縣民大多數の得票を以て遂に當選の榮譽を擔ひ、今や立憲政友會內に錚々の名あり。

君は著述を能くし、實力の人原さん、何人も知らねばならぬ支那の智識、中華民國と帝國日本等の名著あり。岡山市西田町十七番地に現住す。

小城德太郎君

帝國蠶糸倉庫(株)支配人

君は東京府の人小城久次郎氏の長男にして、明治五年十二月廿五日を以て生る。

明治二十四年明治學院高等科を優秀の成績を以て卒業するや更に慶應義塾に學び同二十六年之を卒業し、豐年三菱倉庫株式會社に入り、爾來、大正十五年三月まで勤續、同社參事、東京、大阪、名古屋、神戸各支店支配人として功勞ありき。

斯くて大正十五年四月帝國蠶糸倉庫株式會社支配人に轉じ以て現在に及ぶ、交詢社、丸ノ內倶樂部各會員たり。

夫人サク子は大阪府の人小野十作氏の長女にして其の間に正雄君及び尙子あり現に東京市芝區芝公園二〇ノ三號に住す電話芝一六四番

小坂靈明君

泉岳寺住職

君は紀州藩士小坂林平氏の長男にして安政七年十月十五日を以て東京市麴町區在當時の紀州屋敷（今の赤坂御所のあるところ）に於て生誕す。

然るに君が七歳の頃嚴父と共に歸鄉しこれより寺小屋に入りて漢學を修めしも十四歳の時より病弱にて常に病身なりしも、同僚が競つて上京修學するを見ては君又奮起、幾度か嚴父に迫つて上京の理由を說きしも病弱の故を以て肯ぜず、鴻圖を抱いて空しく故鄉に留まりしも、年齒十六才にして愈々意を決して上京、近親の下にありて孜々勉勵せしも不幸賴よるべき近親者に死別、再び路頭に迷ひしかば、他人の奉公に行き傍ら苦學力行せしも、固より病弱の身とて十八才の頃再び病氣に見舞はれ、兎角する內に故鄉にある嚴父の死去に會して愈々絕望、余儀なく志を空しく歸鄉す。

斯くて田園に親しみつゝ寺小屋に通つて日本外史を繙き學識大いに擧る、然して鄉里にあること約五ヶ年、固より鴻圖ある君は再び上京を決し、始め大阪に留まりしも直ちに東京に上り、種々勉學の資途を講ずべく、故大隈公の門を叩きしも容れられず、詮なく神奈川在なる實姉を賴つて暫らく滯留せしも、其の當時より已に宗敎界に志を抱き、將來世道人心を導くには是非斯界に入りて活躍するの最も便宜なるを痛感せしかば、こゝに意を決して僧侶となり、斯くて同縣小机村なる雲松院に入りて弟子となる、時に二十三才の秋なりき。

然るに君は已に相當の學識あるにも拘らず斯くの如き小院にありては到底師事するに足るべき眞師なきを煩悶し、而も君入院當初の目的は靜かに修道し且つ精神の修養と布敎の道に志せしも、其の不便言語に絕し、常に雜務に追はれしかば愈々志を立てて再び上京を決す、たゞたまたま當時の名僧にして君をよく知る東京芝養寺院の住職に見込まれて同院に入り、後ち同住職の泉岳寺住職に轉ぜしかば君も又同寺に移る、於茲哉專心修學に力を致すことゝなり、初め專門支校に入學して研鑽すること三ヶ年半、更に進んで麻布笄町の同宗たる高等中學に入り專攻すること二ヶ年、後ち同區日窪なる同宗大學に入りて同宗の全科を修得して目出度く卒業するや、命により本院たる能登總持寺及び越後永平寺等にありて敎育經及び坐禪等を講じて再び上京、斯くて養寺院の住職として聲名を馳す、たゞ〳〵先覺泉岳寺住職の病を得るや代理として泉岳寺住職となり、然して明治三十七年一月十五日先覺逝くや其の後を繼ぎ、其の要職を襲ふ。

爾來、泉岳寺住職として同宗の爲め一身を捧げ、其の間宗會議員並に特選議員に推さるゝこと二回、尙ほ昭和元年には同宗の動搖を根底より改革すべく自ら宗敎院總務となり、現に幹院に推され更に昭和三年には署長に推されしも同年八月辭して現在に及ぶ、現に芝區車町五六番地に住す。電話高輪七六一三番

小谷野傳藏君

浦和商業銀行頭取
大地主

君は栃木縣の人坂倉重平氏の三男にして、明治十六年一月一日を以て生れ同四十年小谷野元七氏の養嗣子となる。

夙に實業界に投じ浦和商業銀行取締役同行專務取締役等を歷任、大正十三年一

月同行頭取に擧げられ以て在現に及ぶ。

尙經當家は祖先傳來當地に於ける大地主として知られ、曾つては浦和町會議員同議長、消防組々頭、浦和町長、在鄕軍人會幹事等の公職を勤め、日露の役には遠く滿洲の野に轉戰して功あり勳八等を賜はり、且つ多年在鄕軍人分會の爲め盡瘁せる功にて陸軍大臣より銀杯を贈らる

現時は前記の外浦和倉庫會社取締役、浦和耕地整理組合長たり、謠曲を能くし園藝に趣味を有すといふ。

夫人もと子は養父元七氏の養女にして其の間に元七君、豐子、嘉江子等あり、現に埼玉縣浦和町三八八五番地に住す。電話浦和四五番

鄕　朔　雄　君

正五位　東京府華族
七尾セメント(株)社長

君は正二位勳一等東京府華族鄕純造氏の九男にして、明治二十五年九月廿五日を以て生れ、後ち男爵貴族院議員實業家鄕誠之助氏の養嗣子となる。

大正五年水產講習所を卒業するや直ちに實業界に投じ、明治漁業株式會社常務取締役、日清紡績株式會社々員等を歷勤以て現在に及ぶ。

趣味に旅行、讀書あり、日本工業倶樂部、樂水會々員たり。

夫人英子は子爵稻葉正純氏の二女にして女子學習院の卒業たり、現に東京市外澁谷町下澁谷一一六三番地に住す。電話青山五九四八番

小西文次郎君

日吉自動車商會主
東京自動車組合理事

君は兵庫縣尼ヶ崎市別處村の人、明治十二年一月十七日を以てて生る。

夙に大阪市立工手學校機械科を卒業するや鴻圖を抱いて上京、東京鐵道作業局汽車課に勤務中明治三十四年臺灣に派遣せらる。

後ち官途を辭して歸阪、大阪南海鐵道株式會社技手として聘せられ、たゞ〳〵明治三十七年日露の役勃發するや、鐵道作業の爲め征途に就き、後ち朝鮮に派遣せられて朝鮮鐵道局に勤務す。

斯くて大正六年職を辭して歸京、直ちに日吉自動車商會を設立し、爾來、熱誠以て斯業に精勵せしかば業運頓に擧り、今や東都同業界に令名高く、東京自動車組合の理事評議員たると同時に同組合第四部長として重きをなす。

先是彼の日韓合併成るや功勞尠少ならずとなし、併合記念章を授與せらる、圍碁、將棋に趣味を有すといふ。

夫人を順子と呼び其の間に一男正君あり、營業所を東京市京橋區瀧山町八番地に有し、電話銀座一四四番三三七九番東京府下澁谷町元廣尾二九番地に現住す。

小林武一君

三菱合資會社勤務員

君は群馬縣士族先代省吾氏の長男にして、明治元年十二月二十日を以て同縣多野郡吉井町に生る。

明治二十四年東京商科大學の前身たる東京高等商業學校を卒業するや直ちに三菱合資會社に入社し、爾來、同社總務部會計課長、監理課長等を歷任、大正十四年八月同社監察員に擧げられ以て現在に及ぶ。

趣味に讀書あり、如水會々員たり、夫人あい子は群馬縣士族辻律人氏の五女たり、現に東京市赤坂區青山北町一ノ八番地に住す。

小松留夫君

小松齒科醫院長
王子町會議員

君は靜岡縣の人先考小松茂八氏の四男にして、明治二十二年六月二日を以て生誕す。

夙に鄕里の中學校を卒業後臺灣に航し第一聯隊に入隊、衞生隊醫務室勤務拜命在隊二ヶ年にして大正二年一月上京、後ち東京顯微鏡院齒科部に入りて專攻、齒科醫檢定試驗に登第するや府下王子町に小松醫院を開業、尙ほ夫人德子も同じく東京齒科醫學校第一回の卒業生にして且つ產婆の免狀を有し、今や府下斯界の重鎭として令名あり。

現時は其の外王子町會議員、北豐島郡齒科醫師會副會長、王子青年團副團長、東京府消防協會地方委員、王子町消防組第三部長、王子町第一尋常小學校々醫、立憲民政黨王子支部幹事長、王子町學務委員等の公職にあり。

趣味に撞球、弓術等あり、現に東京府下王子町大字王子森下五六〇番地に住す電話王子二一二番

江藤玄三君

辯護士　辨理士
本鄕區千駄木町議員

君は廣島縣の人江藤好藏氏の五男にして、明治十三年三月三十一日を以て生る

明治三十八年東京帝國大學法科大學獨法科を優秀の成績を以て卒業するや官途に投じ、司法官試補、特許局事務官、東京、札幌各鑛山監督署事務官等を歷任す

斯くて大正六年官途を辭して辯護士事務所を開設せしかば、社會の信望月に年に加はり、今や東都法曹界に重きをなす

夫人を禎子と呼び島根縣の人勝部家の出にして其の間に秀三君、要三君あり、現に東京市本鄕區駒込千駄木町五二番地に住す。電話小石川一八〇二番

近藤進一郎君

經濟學士
共濟生命保險株式會社在勤

當家は兵庫縣津名郡生穗村に住し、代々庄屋を勤めし名門にして、嚴父賢二氏は本邦實業界の重鎭として錚々の名あり東洋風糸紡績、朝日スレート、日本カーボン各株式會社々長たる外、眞崎大和鉛筆、東海窯業、松尾鑛業、湘南電氣鐵道日本スレート販賣、東洋電機製造各株式會社の重役として令名あり。

君は即ち其の長男にして、明治三十四

年五月二十二日を以て生る。

大正九年同志社を卒業するや直ちに慶應義塾大學に學び、同十五年同學經濟科を優秀の成績を以て卒業後東都實業界に投じ、現に共濟生命保險株式會社にありて精勤、新進實業家として前途を囑望せらる、趣味に撞球あり、又妙なりといふ。

夫人を清子と稱し、曩に內務次官として鳴らし、現に勅選貴族院議員として議政府に重きをなす正四位勳二等川崎卓吉氏の長女にして双葉高女の出身たり、現に東京市芝區高輪南町五十三番地に住す電話高輪九一番

江口駒之助君

株式會社東京株式取引所相談役

君は山形縣東置賜郡大川村の人、嚴父を江口萬右衛門と呼び安政五年十一月十八日を以て生る。

夙に藩校興讓館に漢學を修め次で東都に出でゝ若松塾に學び、又清國公使館に入りて支那語を學ぶ。

明治十二年渡清して漢口、上海、天津及び滿洲の各地を跋渉し親しく風土、人情、文化を視察研究の結果此處に一大事業を企劃せしが止むを得ざる事情の爲め中止し、斯くて職を上海領事館に奉じ、在官三年明治十七年歸朝す。

然して長崎縣勸業課に出仕し、其の傍ら「清國通商事情」を著はし之を同縣廳より刊行せしかば君の名聲一時に擧り、明治二十二年農商務省に轉じ會社課長、商事課長等を歷任、此の間明治二十八年日清戰役後講和條約に依り五港を開港するに當り同省の命により日本商人五名を引連れて渡清し商舗地を視察して歸朝す。

明治三十一年官途を辭して東京株式取引所書記長となり、市場の改革に意を注ぎ、同三十三年選ばれて歐洲取引所視察を命ぜられ、同時に農商務省の囑託を受けて歐洲諸國を歷遊し其の實況を視察して歸朝、後ち「歐米取引所」の一書を著はせり。

斯くて明治三十六年同所の理事に進み大正七年辭すると同時に相談役に擧げられ現に城西原宿六四番の邸に風月を友として悠々、年齡七十有余未だ其の意氣や旺、邦家の爲め又賀すべきなり。

小平浪平君

日立製作所(株)專務取締役

本邦財界の巨頭久原財閥に介在して內外に重きをなし、且つ同系日立製作所の總司令として令名あるを我が小平浪平君となす。

君は栃木縣の人先代惣八氏の二男にして、明治七年四月十六日を以て生る。

君や天資穎明、早くも鄕黨の群童に秀で、斯くて鄕校を卒ふるや一高を經て東京帝國大學に進み、明治三十二年同學工科大學電氣工學科を優秀の成績を以て卒業す。

然して直ちに本邦財界に投じ、始め藤田組に入りしも、後ち轉じて日立鑛山株式會社に轉じて同社工作課長に就任し、恪勤大いに努めて君が蘊蓄を事業の上に遺憾なく發揮せしかば、漸次上役の目に止まり、大正九年遂に日立製作所專務取締役に拔擢せられ以て現在に及ぶ。

夫人也笑子は東京府の人小室信夫氏の七女にして君との間に其平君、俊平君及び百合子等あり、現に東京市本鄕區東片町一四〇番地に住し、電話小石川一七四七番たり。

小宮次郎君

從四位勳四等　工學士

東京横濱電鐵(株)取締役技師長

君は福岡縣士族佐々木加太郎氏の二男にして、明治十三年十一月二十三日を以て生れ後ち東京府士族先考親文氏の養嗣子となり大正十一年九月家督を相續す。

明治三十八年東京帝國大學工科大學電氣工學科を卒業し更に大學院に學び、明治三十九年土佐電氣鐵道株式會社技師に任じ、同四十一年伊那電氣軌道株式會社技師に轉ず。

然して明治四十二年官途に投じ、鐵道院技師に任じ、鐵道省工作局、電氣局、名古屋鐵道局電氣課長、東京鐵道局電氣課長、鐵道省電氣局電力課長兼電化課長等を歷任す。

斯くて昭和元年十二月再び實業界に轉じ、東京横濱電鐵(株)電氣顧問に聘せられ、同三年一月同社技師長に擧げられ更に同三年五月株主多數の推擧により同社取締役に任じ以て現在に及ぶ。

先是大正五年米國に留學して斯學の研究を積みて翌年九月歸朝、同十二年には臨時震災救護事務官に任ぜらる。

趣味に讀書あり、社交に厚く學士會、電氣學會、電氣協會、帝國鐵道協會、電氣倶樂部、燃料協會、工政會、程ヶ谷カントリー倶樂部各會員たり。

現に東京府下巢鴨町上駒込南染井町九六八番地に住す。電話小石川七二五番

小山忠明君

大日本製糖(株)大阪工場工務長

君は鹿兒島縣士族小山十太郎氏の三男にして、明治二十年八月廿八日を以て生誕す。

明治四十四年東京高等工業學校應用化學科を卒業するや直ちに大日本製糖株式會社に入社し、同社東京工場に勤務すること十余年大正十年六月製造係主任技師に任ぜられ、大正十五年八月同社朝鮮支店工務係主任として同地に赴き、後ち大阪支店に轉じ同製造係主任たりしが昭和二年二月擧げられて同工場工務長に推され以て現在に及ぶ。

趣味に撞球、圍碁、庭球等ありて超凡なりといふ、藏前工業會、大阪工業會各會員たり。

夫人をシナ子と稱し鹿兒島縣士族猪鹿倉清香氏の三女にして鹿兒島女子職業學校を卒業し、君との間に好一君、茂君、建三君及び和子等あり、現に大阪市東成區支淵町同社々宅に住し、電話東四四五八番たり。

木塲貞一郎君

中央電力(株)常任監査役

君は正三位勳一等法學博士錦鷄間祇候貴族院議員東京府士族木塲貞長氏の長男にして、秋田木材、北秋木材、日本ブライウード各株式會社の重役工學士木塲貞二氏の令兄にして、明治廿一年二月を以て生誕す。

夙に學習院を經て大正二年東京帝國大學法科大學經濟學部を卒業するや直ちに日本銀行に入り、次いで朝鮮銀行に轉じて總務課長に就任す、斯くて米國ニューヨーク支店副支店長として在米すること約二ヶ年、支店長に就任するや間もなく歸朝す。

大正十四年中央電力株式會社の創立に參與し常任監査役に就任して現在に至る

趣味としてスポーツを好み、在學時代はテニス、ランニング等の選手として名あり、現在ゴルフを好くすといふ。

夫人その子は神奈川縣の人若尾文太郎氏の長女にして神奈川縣立高等女學校の出身たり、君との間に貞輝君及び百合子滋子、小枝子等あり、現に東京市四谷區霞ヶ丘一二番地に住す。電話青山二八二四番

兒玉豐紀君

國際通運(株)參事兼代理店課長

君は舊鹿兒島藩士幕末維新の志士として國事に奔走して功勞ありし故兒玉利紀氏の二男にして、明治十三年二月十日を以て生る。

夙に同藩主島津公爵と共に上京、慶應大學普通部を經て明治四十年仝大學理財科を卒業す。

斯くて直ちに本邦財界に投じ、國際通運の前身たる內國通運株式會社大阪支店に入り、爾來、同社神戸支店長、鹿兒島支店長、本社營業課助役、廣島支店長、京城支店長等を歷勤し、昭和三年七月同社參事に擧げらるゝと共に本社代理店課長に就任以て現在に及ぶ。

曩に京城支店長在任中、朝鮮運輸計算株式會社々長、運輸業組合長、京城商業會議所議員、朝鮮鐵道協會理事等の公職にありしことあり。

趣味多樣にして讀書、撞球、圍碁、琵琶、野球、就中、水泳の達人と評せらる

夫人矢惠子は東京府の人伊藤三吉氏の長女にして其の間に秀豐君、重雄君、幸雄君、忠雄君、進君、光義君及び富美惠子、百合子等あり、現に東京市芝區白金三光町二五〇番地に住す。

小久保時之助君

辯護士　麻布區會議員

本邦法曹界に活躍して錚々の名あるのみならず、東京市區制に參劃して將來多端なるを我が小久保時之助君となす。

君は栃木縣の產んだる異彩にして明治十七年十二月四日を以て同縣都賀郡小野寺村に生誕す。

夙に鄕校を卒ふるや笈を東都に負ひ、研鑽琢磨の結果大正三年法政大學法科を卒業し、同六年辯護士登用試驗に見事登第直ちに辯護士事務所を開設して敏腕を振ひ、今や東都法曹界に令名ある外麻布區會議員、櫻田町會副會長として知らる

夫人みつ子は京橋朝太郎氏の令妹にして其の間に一郎君及び時子あり、現に東京市麻布區櫻田町五十五番地に住す。電話青山五九四五番

鴻田秀一君

壽生命保險(株)取締役支配人
共濟商工(株)取締役

君は香川縣士族中尾歲藏氏の長男にして、明治六年九月十四日を以て生れ後ち鴻田勇次氏の養子となる。

夙に中央大學の前身たる東京法學院及び東京物理學校を卒業するや神戸稅關事務官補となり、後ち共濟生命保險株式會社に轉ず。

然して明治三十九年萬濟生命保險株式會社の創立に參劃し同社設立せらるゝや副支配人に擧げられ大正六年常務取締役に就任、現時は前記諸職にある外日本擬革株式會社取締役にして且つ信用組合帝國興業金庫理事等を勤め財界一方の重鎭たり。

夫人キク子は香川縣士族故高坂柳軒氏の二女にして其の間に五男三女あり、現に東京市小石川區久堅町五六番地に本邸を有し、電話小石川一三六三番大阪別宅電話天王寺一三五五番

小布施新三郎君

小布施四店(資)代表社員
東京府多額納稅者

本邦株式界に活躍して錚々の名聲を博し、斯界の恩人として令名ある君は先代小布施新三郎氏の長男にして、明治六年四月二十八日を以て生誕、後ち前名福太郎を改めて先代を襲名す。

先代新三郎氏は橫濱に出生し、夙に橫濱外國商館に勤務せしも、後ち東都に上り、諸公債、一般株式の仲買業を興して斯界に活躍し今日の大をなす基礎を築き上げたる人材たり。

君は夙に慶應義塾大學を卒業するや父業を補佐すること多年、現に之を繼承して小布施商店を代表し、東京株式取引所一般實物國債短期取引員として知らる。

尙ほ東京府多額納稅者として現時直接國稅一萬六千六百七十余圓を納む。趣味に運動、旅行あり、讀書を唯一の樂しみとするが如し、東京市小石川區高田豐川町四番地に現住す。電話牛込四四八一番

小林又七郎君

日本棉花(株)橫濱支店長

我が財界の新進小林又七郎君は岡山縣の產んだ逸足にして、嚴父を故小林金次郎氏となし、君は其の長男にして明治二十一年五月二十三日を以て生る。

明治四十一年神戸高等商業學校を優秀の成績を以て卒業するや直ちに實業界に投じ、日本綿花株式會社に入社し、爾來同社テキサス支店長、紐育支店長等を歷任し大正十四年橫濱支店長に擧げられ以て現在に及ぶ。

趣味多樣なる中にも撞球、ゴルフ、園藝等に長じ、社交に厚く復興倶樂部、凌霜會各會員たり。

夫人品子は大阪府の人祇園清次郎氏の二女にして清水谷高女の出身、其の間に敏一君、次郎君、又雄君等あり、現に横濱市青木町東輕井澤一八五三番地に住す電話本局三二四四番

小山五郎君

株式會社「經營經濟顧問」代表取締役

極めて近代的にして本邦唯一の業務を目的とする株式會社「經營經濟顧問」は時代の進運に伴ふ必然的の出現にして、同社は昭和四年二月帝都の中央に其の旗幟々翻せるが同社の科目を按ずれば「起業の相談並に其の斡旋、企業經營の指導監督並に其の管理、企業內容の調査、優良事業の推薦、選擇並に其の鑑定、企業の整理及び其の援助」等にして我國に於ける經濟界の所謂劃期的出現たり。

同社の代表取締役たる吾が小山五郎君は三重縣の人にして明治九年四月十六日を以て生誕す。

夙に日本法律學校を卒へ一時教育界に在りしが、後ち操觚界の人となり經濟記者として縱横の健筆を試めり。

然して大正十一年之を退き關東水力株式會社に入社し同社庶務課長たり、次いで御大禮紀念東京博覽會審査主事に擧げられしが、株式會社「經營經濟顧問」の創立に參畫し昭和四年二月同社成立と共に推されて代表取締役となり、爾來、拮据して其の經營に任じ以て今日に至れり

因に同社重役は取締役中瀨勝太郎氏、同篠原文治氏、同松井敏生氏、監査役藤井潤二氏、同倉橋藤治郎氏にして何れも財界に蘊蓄ある名士を網羅せり。

近藤履吉君

勳八等　谷道商店(株)取締役支配人

君は東京府の出身にして、明治十年十一月十五日を以て千葉縣東葛飾郡行德町に生誕す。

夙に學業を卒ふるや實業界に投じ、其の間明治三十七八年日露の役勃發するや征途に就き遠く滿洲の野に轉戰功あり、勳八等に叙せられ、瑞寶章を下賜せらる

明治二十年以來引き續き谷道商店に忠勤、明治四十一年同商店の組織變更せられて合資會社となるや同會計主任に擧げられ、更に大正八年十二月株式會社に組織變更と共に推されて取締役支配人に就任以て現在に及ぶ。

現に東京市芝區白金志田町五七番地に住す。電話高輪三一〇四番

小林房次郎君

從四位勳四等　農學博士
獨逸加里シンジケート日本農業部々長

君は廣島縣の產んだる人材にして、元治元年二月の出生、明治二十一年東京帝國大學農科大學農藝化學科を卒業す。

爾來、官途にありて農商務省農事試驗所技師たりしが後ち學術研究の目的を以て獨逸に留學し、大正二年獨逸加里シンジケート日本農業部本部設置せらるゝや同本部長に擧げられ、大正六年農學博士の學位を授けらる、曩に昭和三年商用を帶びて獨逸に航し、現時は同本部長として知らる。

現に東京市外巢鴨町南染井九一〇番地に住す。電話小石川二六〇六番

鄕古潔君

三菱造船(株)取締役營業部長

明治四十一年三菱會社に入社、爾來、精勵一貫して同社々業に盡瘁すること荏苒實に廿有余年、昭和三年同社取締役に推され現時本社に在りて營業部長を兼ね以て社務の樞機に與る吾が鄕古潔君は、明治十五年十一月を以て岩手縣に生誕す嚴父を鄕古玉三郎氏、慈母をユウ子とし其の長嗣子に當る。

夙に鄕校に學び中學校、高等學校の課程を經て東京帝國大學法科大學に入りて學窓に黽勉、明治四十一年同大學英法科を卒業す。

斯くて直ちに三菱に入社し、同社鎔田炭坑、門司、若松の各支店に勤務し、次いで三菱商事會社庶務課長に就任せるあり て後ち漢口、若松各支店長に歷任す。

然して大正六年十月三菱造船株式會社の設立せらるゝや同社に轉じ、神戸造船所副長となり總務部長を兼任、昭和三年同社取締役に擧げらるると共に同年本社に復して現に上掲の職務に携りて敦厚なる其の人格、加ふるに穎才克く嘖々の令聞あるに至る。

君は曾つて商工業視察の爲め歐米各國を歷遊、亦曩に漢口日本商業會議所會頭兵庫縣工業懇談會理事長等に推されしことあり。

夫人直枝子は故工學博士松田武一郎氏の女にして其の間に三男三女あり、現に東京市牛込區南町二番地に住す。電話牛込三九九二番

近藤明道君

金光教難波教會長

君は明治二十年一月十三日を以て生誕後ち故近藤藤守氏の養嗣子となり其の家督を相續す。

夙に金光中學校に學び後ち明治四十三年神道教師となり大正六年五月金光教難波教會長に就任以て今日に至れり。

按ずるに宗教界に於て其の教旨を擴むるの手段として稍もすれば信仰を强ひ若しくは徒らに寄進勸化を爲し其の規を越えて弊習を醸成し助長するの傾向あるは吾人の夙に憂慮するところなり。

君は金光教本來の面目と如上の弊風に鑑みて之を似而非的なる行動を排斥し毅然として教旨を操守し只管其の聖道に忠ならんと欲しつゝあり。

趣味として野球を好む、夫人を一子と謂ひ其の間に四男六女ありて嗣子守道君は現時國學院大學に在學す、現に大阪市南區灘波新地六ノ一八番地に住す。電話戎二〇二七番

後藤清郎君

岩手日報主筆

君は岩手縣の人故後藤直助氏の三男にして、明治二十二年十一月二十一日を以て生る。

大正六年東京帝國大學法科大學政治科を優秀の成績を以て卒業するや翌年報知新聞社に入り尋いで大阪毎日新聞社及び東京日々新聞社を歴勤、政治部記者として鑾筆を振ひ後ち岩手日報社の聘に應じて同社に入り、現に同主筆として地方啓蒙開發の任にありて令名あり。

趣味に圍碁並に將棋あり、其の道の通人といふ、學士會々員たり。

夫人クニ子は鹿兒島縣の人村原兼雄氏の令妹にして三輪田高女の出身、其の間に力君、直君あり、現に盛岡市内九三六番地に住す。電話一〇一四番

小松茂君

正五位勳四等　理學博士
京都帝國大學教授

本邦の科學界に卓越せる功績を齎し殊に「日本產植物の生化學的研究」に依りて學士院賞を授けられ又「五價窒素の研究」を以て櫻井賞を得たる學界の權威吾が小松茂君は高知縣の輩出せる俊材にして、明治十六年八月を以て同縣に生る。

嚴父を故小松金三氏となし其の二男に當る、幼にして學を好み極めて儁秀、夙に小中學校を卒へ高等學校を出ずるや京都帝國大學に入學し理工科を專攻して明治四十年之を卒業、直ちに同大學助教授に任せらる、

爾來、孜々として研鑽を怠らず、大正四年「五價窒素化合体の立体化學研究」なる論文に依りて理學博士の學位を得、翌五年米佛及び瑞西各國に留學を命ぜられ歸朝後同大學教授となり、理學部に勤務して今日に至れり。

君の研究範圍は廣汎にして陸海軍々事上に於ては毒瓦斯、燃料等又臺灣總督の依囑に依り樟腦油の研究ありて學界に寄與するところ寔に多し。

君人と爲り極めて溫厚にして篤實、余暇あれば散策を以て唯一の娯しみと爲す

夫人久子は同鄕の人須藤治美氏の女にして土佐高等女學校の出身たり、其の間に昭君及び里子、道子、園子、節子等あり、現に京都市上京區小山中溝町一八ノ三に住す。

小松傳一郎君

辯護士　辨理士

君は長野縣の人先代金八氏の長男にして、明治十九年十一月十八日を以て生る

夙に長野縣下各小學校並に中學校等に教鞭を執り、縣下教育界に盡瘁すること十有五年、後ち明治大學高等受驗科に學び、大正十一年辯護士登用試驗に登第、直ちに法曹界の泰斗原嘉道博士の事務所に入りて實地の研究を積むこと年余大正十二年十月獨力辯護士事務所を開設して

一般法律事務に從事せしかば其の才腕は忽ちにして社會の信望を博し、今や東都法曹界に令名あり。

夫人みつ子は長野縣の人倉田捷三郎氏の三女にして其の間に讓一君、二郎君及び綾子あり、現に東京市芝區愛宕町三ノ一番地に事務所を有し、電話芝二五七四番　市外南千住町三七七番地に住す。電話淺草四九六七番

小神野道風君

書畫骨董商

君は茨城縣の輩出せる人物にして元治元年二月を以て同縣新治郡土浦町に生る故小神野彌兵衛氏の二男に當れり。

夙に學を好み明治十五年完城學校を出で後ち更に和漢の學を修め同二十三年の交笈を負ふて東上、直ちに明治大學の前身明治法律學校に入學して研鑽するところあり、之を卒業するや歸省し審理社を開設以て無料法律相談に携はれり。

然して同社解散後往年の文壇に嘖々の令名あり、成島柳北氏の知遇を得て朝野新聞社に入社し、同社主筆たりしが幾許もなく之を辭して中華銀行横濱支店詰となれり。

斯くて更に轉じて李鴻章の家庭教師となり傍ら詩文漢學の研究をなせるが、同三十四年歸朝し中華銀行横濱支店にありしも朝野新聞社の再興を謀り再び同社主筆たり、而して同四十二年東京毎日電報社に轉じ同社々長に就任、大正二年之を罷め書畫骨董商を創め、爾來、斯業に携り以て今日に至れり。

此の間書畫骨董保險協會主及び興信圖本部主幹となり、現に其の任に在るの傍ら一大新聞社創設の計畫を樹て其の實現に邁進しつゝあり。

夫人との間に晃君、照行君、寅橘君及び月代子等あり、現に東京市日本橋區北島町一ノ一四番地に住す。電話茅場町四一四番

小池忠一君

銀行員

新興日本の財界に直面して、新進の學理と潑溂たる敏腕とを以て前途多望なるを吾が小池忠一君となす。

君は故小池張造氏の長男にして、明治三十一年三月を以て東京市外戸塚町に生る、嚴父張造氏は外務省政務局長、海外國駐在公使等を歴任し、後ち官を辭し久原鑛業會社に入りしも、大正十年逝去す

君其の後を襲ひ家督を相續す。

夙に開成中學を經て大正十一年慶應義塾大學理財科を卒業するや同年直ちに三菱銀行に入り、現時本店營業部勤務たり

趣味に俳句あり、詩聖芭蕉を崇拜すること切、宜なる哉其の溫情なる風貌や、蓋し日頃の修養に起因せんか。

夫人いそ子は山脇高等女學校の出身にして其の間に泰君、三春君あり、東京市外馬込町平張一二六九靜風莊に現住す。

り推されて歐米各國を巡遊するところあり、寶生流謠曲に趣味を有す。

夫人との間に正芳君、正章君、正恭君、正宣君及び房枝子、貞枝子等あり、現に横濱市程ヶ谷區神戸町七〇〇番地に住す電話長者町二三九五番

小島周次郎君

小島商店(名)代表社員
朝鮮農林(株)取締役

當家は先代周氏より家名頓に顯る、先代夙に蠶絲貿易商を營み且つ日本電線、中央製絲、帝國蠶糸倉庫各株式會社重役として横濱財界に重きをなせしのみならず横濱商業會議所議員に擧げられ、尙ほ神奈川縣多額納稅者たりしが昭和二年一月病を得て他界す。

君は其の長男にして、明治三十五年十月二十四日を以て横濱市に出生、大正十二年東京商科大學を卒業し、先代沒後を享けて遺業を繼承し、現に前記の要職にありて横濱財界の新進として知らる。趣味に庭球、洋樂あり、社交に厚く如水會、蠶糸倶樂部各會員たり。

現住所を横濱市根岸町三三五五番地（電話本局一五八五）に有し、其の店舗を同市仲通り四ノ七五番地（電話本局二〇三六番五〇八九番）に有す。

小林福太郎君

土木建築請負業
小林組々長

今や横濱屈指の土木建築請負業者として聲名斯界に鍔々たるを我が小林組々長小林福太郎君となす。

君は神奈川縣の出身にして、明治十六年二月一日を以て横濱市野毛町に生誕す先代仁三郎氏は夙に土木建築界に活躍して斯界に重きをなせし人材にして、君亦早くより嚴父を援けて斯業に精勵し、大正十一年先代の後を繼ぎて小林組々長に就任、着々として斯界に勢力を波及し、今や先代に劣らざる斯界の異彩として信望厚く、東京鐵道局、横濱棧橋倉庫、横濱市役所、逓信省、神奈川縣廳、復興局熱海樂天地株式會社等を主なる御得意先となし、其の今日まで請負ひて完璧を期せし大小建築物枚擧に遑あらざるべく、今や横濱斯業界の重鎭として令名高く、土木業組合副組長、土木建築組合副組長並に高砂町青年會々長たり。

夫人をため子と呼び內助の聞え高く、其の間に新太郎君、正保君、富三郎君等あり、現に横濱市中區高砂町二ノ二五番地に住す。電話長者町三八七七番

江森增太郎君

高砂土地(株)專務取締役
東京郊外土地(株)專務取締役

曾つては埼玉縣金融機關の重鎭埼玉忍商業銀行にありて鍔々の名を馳せ、今や東都實業界に新進の聞えあるを我が江森增太郎君となす。

君は埼玉縣の人先考良助氏の長男にして、明治二十二年三月五日を以て生る。

夙に鄕校を卒ふるや前記埼玉忍商業銀行に入りて活躍すること多年、大正五年の交東都に上り實業界に活躍、同十三年十一月高砂土地並に東京郊外土地各株式會社の創立と共に同社專務取締役に就任今や新興日本財界の新進として令名あり謠曲に長じ、俳句を能くするが如し。

夫人トミ子は藤村光三郎氏の長女たり現に東京市下谷區初音町四ノ三四番地に住す。電話下谷一七二一番

江草重忠君

國定教科書共同販賣所(株)監査役
有斐閣書房主

君は三重縣の人水谷忠左衞門氏の令弟にして、明治十年二月を以て生れ、後ち先代斧太郎氏の養嗣子となる。

明治三十七年東京帝國大學農科林學科を卒業するや出版界に投じ、有斐閣を經營し、現に其の傍ら日本書籍(株)取締役圖定教科書共同販賣所、日本紙業各株式會社の監査役たり。

現に東京市牛込區藥王寺町七一番地に住す。電話牛込三一五二番

小林一三君

阪神急行電鐵(株)社長

君は山梨縣の人小林甚八氏の長男にして、明治六年一月を以て生る、夙に實業界に投じ、現に前記の外東京電燈株式會社副社長にして、且つ山陽中央水電、今津發電、東京横濱電鐵、目黑蒲田電鐵、第一生命保險各株式會社の重役として我が財界に令名あり。

現に大阪豐能池田町に住す。

兒玉一造君

東洋棉花(株)社長

君は滋賀縣士族先代貞治郎氏の長男にして、明治十四年三月を以て生る。

夙に實業界に投じ、現に前記の外三井物產、豐田紡績、菊井紡績、豐田式織機各株式會社の重役として知らる。

現に大阪市天王寺區北河堀町に住す。

青木知四郎君

岐阜製氷株式會社長
濃飛農工銀行監査役
衆議院議員

君は岐阜縣の人青木熊太郎君の四男にして彼の有名なる慶應義塾教授法學博士青木徹二君の令弟に當り、明治十三年九月を以つて生る。明治四十一年慶應義塾を卒業するや直ちに財界に身を投じ、現に前記の要職にある外竹鼻銀行、竹鼻鐵道、南洋殖產興業、日本絹布各株式會社の重役として我が財界に令名高し。

然して縣下有數の實業家として其の兩翼を振展するのみならず、郡會議員、縣會議員を勤めて君が縣政に盡瘁すること甚大、且つ大正十三年の總選擧に際し多數縣民の輿望を擔つて逐鹿場裏に快戰するや見事當選の榮譽を擔ひ、今や中央政界の一異彩たるを失はず、必ずや君の天與の才腕を發揮して國家の選良たるの名を恥かしめざる何物かの印象と功績とを描くこと又疑ひなかるべし。

夫人をナヲ子と呼び君との間に正一君武夫君、健三君及び百合子、靜子等あり現に岐阜縣羽島郡中島村に住す。

有賀光豐君

朝鮮殖產銀行頭取
朝鮮山林會長

君は長野縣の人有賀光彥君の長男にして明治六年五月十三日を以つて生る。明治二十七年中央大學の前身たる東京法學院を卒業し同三十年文官高等試驗に登第するや身を官界に投じ爾來稅關監視、稅務署長、統監府財政監査官、稅關長、朝鮮總督府書記官、內務部長、度支部理財部長、參事官等を歷任し大正七年十月朝鮮殖產銀行理事となり後同行頭取に擧げられて現在に及ぶ。

君は尙ほ傍ら產業調査委員會委員、朝鮮蠶糸會々頭、朝鮮穀物貿易商聯合會長の要職にあり、夫人をきみ子と稱し長野縣の人平林善右衞門君の長女たり、現に京城松峴洞四九番地に住し電話光化門八〇〇番なり。

安達謙藏君

正四位勳二等　內務大臣
衆議院議員

君は熊本藩士安達二平君の長男にして元治元年十月二十三日を以つて生る。幼にして穎悟夙に漢學を修め且つ熊本濟々黌に入りて高等の學を究め、後上京して法政諸科を修め、後政界に出入し且つ朝鮮時報、漢城新報等を創刊して畫策大いに努めたり。

偶々王妃暗殺事件に連座して公使三浦梧樓君と共に廣島に引致され、後熊本に歸り故佐々克堂君の帷幕に參じ國權黨を創立し、明治三十五年總選擧に際し衆議院議員に當選せしかば中央倶樂部を組織し、後同倶樂部が立憲同志會に合併せらるゝや其の幹部となり、大正四年同會の憲政會と改稱せらるゝや總務となる。

明治三十五年以來衆議院議員に當選すること九回曩に外務參政官に任ぜられ大

正十四年五月犬養毅君の跡を襲ふて遞信大臣に親任せらる、曾つて九州移民株式會社理事長、池田釜山株式會社々長たりし事あり。

夫人ユキ子は熊本縣士族大里八郎君の三女たり。現に東京市麹町區四番町五番地に住し電話四谷六〇〇〇番なり。

有馬純文君

子爵　從三位勳四等
退役陸軍騎兵少尉

當家は有馬肥後守氏隆の子肥前守貴純の後裔なり、三世の後信晴德川氏に仕へ日向延岡にありて五萬三千石を領す、後越前國糸魚川に移り更に越前丸岡に封ぜられ後十代にして道純君に至り、明治十七年子爵を授けらる。

君は即ち道純君の長男にして明治元年一月三日を以つて生る。明治三十年東京帝國大學農科大學農藝學科を卒業し、同三十一年陸軍騎兵少尉に任ぜられ同三十三年東宮侍從次いで東久邇宮家々令、大禮使典儀官等に歷任し、長く帝室林野局技師を勤めしが大正十四年辭して野に下り讀書、園藝、書畫、篆刻等の趣味に精勵たり。

夫人花子は子爵有馬孟胤君の叔母君にして華族女學校を卒業す、現に東京市四谷區右京町三六番地に住し電話四谷三三四〇番なり。

綾井忠彦君

芝浦製作所監査役

東京英語學會の監事にして會計學、英語の達人として令名高き綾井忠彦君は大分縣士族伊藤清藏君の二男にして明治四年一月十九日を以つて生れ、同二十八年香川縣の人綾井吉郎君に見込まれて其の三女淳子の婿養子となり舊名俠藏を改めて忠彦と稱す。

明治廿三年東京郵便電信學校を卒業するや房州線の通信技手に擧げられしが後米國に渡航し同地に滯留すること五ヶ年其間商事會社に入りて商業實務の研鑽を積み、明治廿八年歸朝して村井兄弟商會に入りて恪勤するに至る。

然して同商會が米國煙草會社と合同して株式會社に組織變更せらるゝや出でて村井銀行に轉じ、其の營業部長となり漸次累進して同行常務取締役に推され多年其の職にありしが現時は芝浦製作所監査役、東京英語會監事等の要職にあり、魚釣、讀書等に趣味を有すといふ、東京府北豐島郡高田町一六〇〇番地に現住し電話牛込一四〇六番なり。

安久津庄七君

日東酒造株式會社取締役
宮城縣多額納稅者

君は宮城縣の人安久津庄太郎君の長男にして明治三年九月を以つて生る。夙に實業界に活躍し現に日東酒造株式會社取締役にして、且つ宮城縣多額納稅者として名あり。

夫人いの子は宮城縣人大古庄三郎君の長女たり、宮城縣名取郡玉浦に現住す。

秋本喜七君

日本採炭株式會社長
東京府農工銀行取締役

勳四等秋本喜七君は東京府の人渡邊萬助君の二男にして、文久元年八月を以つて生れ明治二年十月先代倉藏君の養嗣子となる。夙に實業界に身を投じ運送業の將來有望なるに着眼したる君は直ちに斯業を開設し、刻苦精勵、遂に異常の成功を克ち得て社會の信望を博するに至り、現に日本採炭株式會社々長たる外東京府農工銀行、南武鐵道、南洋製糖、玉川水道各株式會社の重役として我が財界に令名高し。

曩に東京府郡部より推されて衆議院議員に當選すること前後二回、大正三四年事件の功に依り勳四等に叙せられ、尙ほ郡會議員、同參事會員、府會議員、同參事會員、帝國農會創立委員長、武相甲信運輸組合長等に擧げられ君が我が政界及び公共事業に貢獻すること蓋し甚大なりと謂ふべし。

夫人コト子は養父倉藏君の二女にして內助の譽れ高し、東京市四谷區舟町六九番地に現住し電話四谷二四六〇番なり。

麻生一郎君

日本銀行理事

君は大阪府の人西川新助君の二男にして明治四年三月九日を以つて生れ後麻生武平君の養子となる。夙に東京帝國大學法科大學を卒業するや直ちに實業界に走り、日本銀行に入りて同行京都出張所長名古屋支店長等を歷勤し、明治四十三年本社に轉じて國庫局長に進み後更に大阪支店長より再び本社に戻り營業局長に就任し現に同行理事として令名あり。

夫人ふく子は養父武平君の二女にして君との間に武治君、靜江子、鈴江子、菊枝子、芳枝子、榮子、梢子等あり、現に東京市麻布區東鳥居坂一〇番地に住し電話青山六二二六番なり。

朝倉文夫君

正七位　彫刻家

君は豐後の人渡邊要藏君の三男にして明治十六年三月を以つて生れ出でて朝倉家に入り其の姓を冒す。

夙に大志を抱き明治三十五年東上して東京美術學校彫刻科に入り同四十年優秀の成績を以つて卒業す。是より先仁禮子爵銅像建設の擧あり之が塑像を求むるに際し君在學中之に應じ第一等の選に入りて早くも令名を馳す。

明治四十四年南洋ボルネオに遊び土人の群に投じて其の風俗人情を研究して大いに得る所あり、同四十一年文部省美術展覽會開設に際し「闇」を出品して第二等賞を得、爾來二等賞を受くること二回三等賞を受くること三回に及び、現に東京美術學校教授にして帝展審査員、帝國美術院會員たる外東臺彫塑會員、太平洋畫會員として知らる。

夫人をやす子と呼び貞淑の譽れ高し、現に東京市下谷區谷中天王寺町二〇番地

に住し電話下谷六五四九番なり。

有馬淺雄君

東京府會議員
瀧野川町名譽助役
瀧野川町會議員

曾つては一吏員として、今や帝都下瀧野川町名譽助役、東京府會議員、瀧野川町會議員等の公職にありて、其の明快なる頭腦と絶倫なる精力とを傾注して公務に盡瘁する我が有馬淺雄君は長野縣上伊那郡の名家宮内氏の五男にして、明治十七年二月十五日を以つて生る。

夙に鄕校に學び明治三十七八年日露兩國の開戰勃發するや從軍して滿洲の野に轉戰して功あり、戰終息して凱旋し、明治四十一年大志を抱いて上京し東京府下瀧野川町長保坂平三郎氏の認むるところとなり同氏の下に吏員として勤務し、爾來專心同町發展に盡瘁せしかば漸次昇進して大正五年十一月野村町長時代に推されて有給助役に就任し、同年三月在職十五年勤續し功績顯著なるの廉を以つて町より金三千圓府知事より金一封を添へて表彰狀を贈與せられ、尙ほ澁澤子爵の金時計、越部前町長の羽二重一匹、榎本町長の袴地等記念品の山を築き其の盛大なる式場には澁澤子爵を始め本郡長、板橋稅務署長、王子警察署長、郡會議長、町會議員、代議士、名譽職員其他知名の士數百名に及べりと云ふ。

然して大正九年十一月には名譽助役となりて町政に參與し、君が在職當時より今日に至る迄の功績は枚擧に遑あらざるも軍人分會副會長、教育會副會長、西ケ原青年會長、郡教育會幹事、聯合青年團幹事等幾多公共事業に盡瘁し、現に前記の諸職にありて其の貢獻すること蓋し甚大なりといふべし。

夫人をテル子と稱し內助の聞え高く君との間に保夫君、道雄君、房子、靜子、敏子等あり、現に瀧野川町西ケ原九〇七番地に住す。

寺田喜平治君

有信銀行常務取締役
山梨貯蓄銀行取締役

君は山梨縣の人寺田喜平治君の長男にして明治三年三月を以つて生る。夙に實業界に身を投じ現に有信銀行常務取締役たる外山梨貯蓄銀行取締役として當地方金融界に一勢力をなし、且つ山梨縣多額納稅者として直稅二千三百十余圓を納め同地方有數の資產家を以つて目せらる。

夫人やす子は山梨縣の人原傳八君の長女にして君との間にとし子、繁子、淳子等あり、現に山梨縣甲府市和田平町三五番地に住す。

田昌君

從四位勳三等　大藏次官

君は現戶主田艇吉君の長男田健次郎君の甥君に當り、園田寬君の令兄及び宮內事務官法學士大木彝雄君の義兄君にして明治十一年六月を以つて生る。明治三十七年東京帝國大學法科大學を卒業するや直ちに大藏省に入り煙草專賣局事務官に任せられ爾來大藏省書記官、大藏省參事官、海外駐劄財務官、米國駐在大藏省主計局長等を歷任し現在に至る。

夫人梅代子は和歌山縣士族故陸軍主計監坂田巖三君の二女たり、現に東京市牛込區市ケ谷加賀町二ノ一三番地に住し電話牛込一八八〇番なり。

寺田啓二君

赤穗鐵道株式會社專務取締役

君は兵庫縣の人吉田吉三郎君の二男にして明治十六年三月を以つて生る。夙に實業界に志し現に赤穗鐵道株式會社專務取締役たる外日濟製粉株式會社岡山工場長にして且つ當地方煙草元賣捌人及び赤穗鹽業組合副組長として知らる。

夫人まさの子は兵庫縣の人山崎藤次郎君の二女にして君との間に吉郎君、鐵三君、乙彥君及びみち子等あり、現に兵庫縣赤穗鹽屋に住す。

青木信光君

子爵　正三位勳三等
貴族院議員

當家は多治比古王の子左大臣四郎冠者武峰の裔なり、三代直兼に至り青木武藏守と稱し五世を經て刑部卿重直に至り土岐家に仕へ豊臣秀吉の家臣となり、其子民部少輔一重德川家に仕ふ、夫より十四代一成を經て攝津麻田の藩士として重義君に至り、明治十七年華族に列し子爵を授けらる君其の後を承く、君實は中山信徵君の四男にして明治二年九月二十日を以つて生れ、同九年先代重義君の養嗣子となり明治十七年十二月襲爵仰せ付けらる。

夙に學習院に學び更に現中央大學の前身たる東京法學院に入り同二十三年同校を卒業す。明治三十年貴族院議員に互選せられ爾來繼續して現に其の任にある外國有財產調査委員、文政審議會委員の要職にあり、嘗つて日本紙器製造、內國通運、矢作水力電氣、滿蒙纖維各株式會社の重役たる外日本銀行監事たりしことあり、音樂旅行團非等に趣味を有すと言ふ。

夫人楠枝子は男爵川口武和君の令妹にして興風高等女學校の卒業なり、現に東京市牛込區市ケ谷河田町一九番地に住し電話牛込五番なり。

安部幸之助君

相模紡績株式會社長
株式會社安部幸兵衛商店社長

君は神奈川縣の人安部幸兵衛君の長男にして明治二年一月を以つて生る。現に前記の要職にある外滿洲製粉、嘉義電燈大阪化學肥料、亞鉛電解工業、日本芳醸奧村電機商會、朝鮮紡績、石渡電機、濱名水產、臺灣拓殖製茶、東京銅鐵工業、大村灣眞珠、北洋水產、高砂麥酒、日本機械製造、東京アルカリ工業、臺灣製糖東京絹毛紡織、南洋殖產、ヤマトブロック建材各株式會社監査役たり。

夫人りう子は同縣の人椎野正兵衛君の四女にして其の間に六男六女あり、現に

横濱市南仲通三ノ五〇番地に住す。

蟻川五郎作君

從四位勳三等功三級
陸軍少將　衆議院議員

君は長野縣の出身にして慶應二年を以つて高井郡夜間瀬村に生る。幼にして穎悟、資性闊達加ふるに才幹衆に秀で其の將來を囑望せらる。夙に軍人たらんとの大志を抱き學業順を追ふて進み、後陸軍大學校に學び優秀の成績を以つて同校を卒業し長くも名譽ある恩賜の軍刀を拜受せり。

然して君の明晰なる頭腦と異數の俊腕とは常に部内少壯の逸物として錚々の名を博し、從つて其の昇進たるや常に僚輩を拔き同僚羨望の的となり累進して陸軍少將に陞り、此の間松本第五十聯隊長、高田第十五旅團長等を歷任し後待命仰せ付けらる。

君曾つて蟻川飛行隊長として令名を馳せ現に帝國飛行協會理事にして、且つ大正十三年の總選擧に際し、國防問題を提げて馬を陣頭に進め幾多强敵を打ち破つて敵壘に侵入し、遂に名譽ある當選の榮冠を獲得し今や中央政界得意の政論を吐くに至れり。

君や資性恬澹卒直、眞に軍人の典型たりと謂ふべく、政治家としての君は常に政界の廓清、國防問題等を以つて活躍し今や正に日比谷政壇の一異彩たるを失はざるべし、現に東京市牛込區余丁町八四番地に住し電話四谷四六二二番なり。

荒木悌二郎君

正五位勳五等　畜家

當家は世々畜師を以つて舊土州侯に仕ふ先代寛畝藩主容堂侯に愛せらる。又洋畫を學び帝室技藝員に擧げられ英照皇大后の御肖像を謹寫す。君は肥前大村藩士朝長兵癈君の二男にして、明治五年九月を以つて生れ同二十七年寛畝の養子となり、大正四年六月家督を相續すると共に畜名悌次郎を悌二郎に改む。夙に養父寛畝に師事して日本畫を專修し十畝と號し斯界の泰斗として知らる。

曩に華族女學校、女子高等師範學校等に教鞭を執り、又米國セントルイス博覽會に出品して賞を受け其の作品は能く寛畝の風貌を傳へ、其の纖美巧緻なる事花鳥畫の秀畝畫伯と相並び、日本畫壇の巨星として斯界に令名を謳はる。

夫人いと子との間に長男光太郎君、二男寛君あり、現に東京市本郷區彌生町三番地に住し電話小石川二七二八番なり。

阿部克太郎君

攝陽商船株式會社代表

君は岡山縣の人阿部隆君の長男にして安政五年十月を以つて生る。夙に實業界に身を投じ先に大阪商船株式會社大阪支店長、株式會社關門商船組監査役たりしが、現時は前記會社の重役たる外林汽船株式會社監査役たり。

夫人萬喜子との間に竹夫君及び房子、鶴子等あり、現に大阪府豐能郡笹面村に住し電話三一番なり。

淺野鈇二君

凸版印刷株式會社常務取締役

君は東京府の人淺野利衛門君の四男にして、明治十一年五月五日を以つて生る夙に學業を卒ふるや君が天與の才量は早くも技術方面に遺憾なく發揮せられ、即ち最初彫刻に志し後印刷界に活躍せんとの大志を抱き爾來斯業に關する學理と實際とに就き研鑽すること多年、斯界に關する造詣を深くするに至る。

然して明治三十五年兄弟相謀り尙山堂を開設して印刷界に活躍し、奮鬪大いに努めしかば業勢漸次加はり、大正六年八月これを株式組織に變更して東京紙器株式會社設立せらるゝや君推されて同社常務取締役に就任し、更に大正十五年凸版印刷株式會社と合併して同社小石川紙器工場となし、引き續き同社常務取締役として能く内外の社務を映掌して同社發展に盡瘁すること甚大、今や井上社長と共に我が出版界にありて錚々の名ある、蓋し君が多年の奮鬪と德望との致すところと謂ふべきなり。

夫人しま子は東京府の人都築吉五郎君の令妹にして、君との間に秀司君、尙友君、哲世君及び君子、政子、愛子、久子等あり、現に東京市小石川區茗荷谷四七番地に住し電話小石川四三九五番なり。

荒木貞夫君

正五位勳三等功四級　陸軍少將
參謀本部第一部長

君は東京府士族荒木貞之助君の長男にして明治十年五月二十六日を以つて生る明治三十一年陸軍士官學校を卒業し陸軍歩兵少尉に任ぜられ、後陸軍大學校を卒業し累進して大正十二年三月陸軍少將に陞任す。

然して日露戰役には近衞師團歩兵第一聯隊附として出征し勳功あり戰後參謀本部員、露國大使館付武官、陸軍大學校教官、陸軍省副官、元帥副官等を歷補し歐洲大戰勃發するや西比利亞出征軍に從ひ戰後歩兵第二十三聯隊長、參謀本部課長歩兵第十旅團長、憲兵司令官等を歷補し大正十四年五月參謀本部第一部長に補せらるゝと同時に作戰資料整備會議々員を命ぜられ現在に至る。

夫人錦子は神奈川縣の人栗原忠三君の令妹にして、東京女子高等師範附屬高等女學校を卒業し其の間に貞發君、護夫君及び薫子等あり。現に東京府豐多摩郡代々幡町幡ヶ谷六三番地に住し電話四谷二三七〇番なり。

赤星鐵馬君

千代田火災保險會社監査役

君は鹿兒島縣士族赤星彌之助君の長男にして明治十五年一月を以つて生る。曩に泰昌銀行頭取たりしが現時は千代田火災保險、千歲火災海上保險各株式會社の重役たり。

夫人文子は靜岡縣の人清野勇君の四女にして君との間に猪一君、彌次君、清造

君及び秋子、繁子等あり、現に東京市麻布區霞町二二番地に住し電話青山六一八二番たり。

麻生義一郎君

千代田生命保險會社常任監査役

君は茨城縣の人麻生貫一郎君の長男にして慶應二年六月を以つて生る。夙に鄕校を卒ふるや上京して慶應義塾に學び、明治二十二年同塾を卒業して直ちに時事新報社に入りて記者を勤め、君が健筆を揮ひしも後感するところありて實業界に轉じ爾來日本徴兵保險、秩父電線製造所各株式會社の重役として敏腕を振ひ、明治三十七年千代田生命保險相互株式會社の創立に參劃しその設立を見るや推されて同社常任監査役に就任し現在に及ぶ。

夫人さと子は埼玉縣士族佐藤國吉君の令姉にして君との間に恒太郎君、益次君達雄君及びてる子等あり、現に東京市麻布區狸穴町二七番地に住し電話青山六七一五番たり。

明石德一郎君

時事新報社取締役兼編輯長

君は秋田縣の人明石德松君の二男にして明治十五年四月を以つて生る。夙に鄕校を卒ふるや笈を負ふて上京し、研鑽大いに努め明治三十九年慶應義塾大學を卒業するや直ちに時事新報社に入社し、政治記者として君が靈筆を縱横に揮ひて社會に稗益すること甚大、累進して現に同社取締役兼編輯長とし令名高し。

夫人とく子は秋田縣の人坂本永吉君の長女にして君との間に彰君、倫子等あり現に東京市麹町區三年町一番地に住す。

安東藤太郎君

辯護士　特許弁理士

君は大分縣の人安東助五郎君の長男にして明治二年七月を以つて生る。明治二十六年和佛法律學校を卒業し、同二十七年判檢事及辯護士登用試驗に合格し直ちに辯護士を開業し傍ら大場護謨、東洋製茶、月山鑛業、東京足袋各株式會社取締役、南洋護謨株式會社監査役たり。

夫人津幾子は同縣の人河野彌太郎君の養妹にして其の間に美都子あり、現に大分縣大分市大分町に住す。

秋山正八君

正五位勳四等
鐵道省工作局長

君は廣島縣の人秋山雅之介君の令弟にして明治十年十一月を以つて生る。夙に鄕校を卒ふるや笈を負ふて東上し、研鑽琢磨、明治三十五年東東帝國大學工科大學機械科を優秀の成績を以つて卒業するや、聘に應じて日本鐵道株式會社に入りて同社技師たりしが、後同社が國有に歸するに及んで職を官界に轉ぜり。

爾來鐵道省作業局技師、帝國鐵道廳技師、鐵道院技師、鐵道局技師、東京鐵道局大宮工場長、工作局車輛課長等を歷任し以つて現在に及べり。

夫人のぶ子は愛知縣の人岩田一君の令妹にして、君との間に正雄君及びまさ子たか子、みつ子、喜久子等あり、現に東京市牛込區辨天町一五六番地に住し電話牛込四九五番なり。

有吉忠一君

正三位勳二等
横濱市長

君は京都府士族有吉三七君の長男にして明治六年五月を以つて生る。明治二十九年東京帝國大學法科大學英法科を卒業するや、直ちに身を官界に投じ內務屬となり其の間に文官高等試驗に應じて首尾よく登第せり。

明治三十年島根縣參事官に任ぜられ爾來兵庫縣參事官、內務省參事官等を歷任し同四十年歐洲各國に差遣せられ歸朝するや千葉縣知事となり、同四十三年統監府總務長官に擧げられ尋いで朝鮮總督府設置と共に總務部長官となり、同四十四年宮崎縣知事に轉じ更に神奈川、兵庫各縣知事、朝鮮總督府政務總監等を歷任し大正十四年五月横濱市長に推擧せられ且つ横濱商業會議所特別議員たり、歷史に趣味を有すといふ。

夫人久榮子は京都府士族貞廣太郎君の長女にして其の間に義彌君、成彥君及び宣子、光子、德子等あり、現に東京府豐多摩郡代々幡町代々木一〇五〇番地に住し電話四谷一三〇番なり。

青柳一太郎君

大陽酸素株式會社取締役
帝國ラミー紡織會社取締役

君は山形縣士族青柳四郎君の長男にして明治九年九月を以つて生る。夙に成立學舍に學び明治三十七年東京帝國大學法科大學を卒業し、彼の日露の役に海軍主計官として出征し大いに軍功あり。

爾來帝國生命保險株式會社庶務課長、同函館支店長、眞宗生命保險株式會社支配人、共立生命保險株式會社取締役兼支配人等を歷勤し、現に從七位勳六等にして前記會社の重役たる外日本車輛製造、稻垣鐵工所各株式會社監査役にして且つ合名會社伊藤忠商店參事の諸職にあり。

夫人せい子は山形縣士族戶狩權之助君の長女にして其の間に二男二女あり、現に京都市上京區室町中長者町角に住し電話上二九五七番なり。

明石照男君

第一銀行支配人
澁澤同族株式會社取締役

君は岡山縣の人明石靜一郎君の長男にして明治十四年三月を以つて生る。明治三十九年東京帝國大學法科大學政治科を卒業するや直ちに實業界に身を投じ、爾來三菱合資會社、第一銀行大阪支店副支配人、同行京都支店兼伏見支店支配人、本店副支配人等を歷任す。

然して現時は同行本店支配人にして且つ傍ら澁澤同族、澁澤倉庫各株式會社取締役として知らる、銀行倶樂部、學士會各會員たり。

夫人愛子は子爵澁澤榮一君の長女にして東京女子高等師範學校附屬高等女學校

を卒業せる才媛にして、君との間に景明君、春雄君、正三君、義雄君、君夫君及び百子等あり、現に東京市小石川區茗荷谷町六六番地に住し電話小石川五六七〇番なり。

荒川文六君

工學博士
九州帝國大學教授

君は福井縣士族荒川省吾君の長男にして明治十一年十一月を以つて生る。明治三十三年東京帝國大學工科大學を卒業す曩に同大學の助教授たりしが現時は從四位勳三等高等官一等にして九州帝國大學教授たり。

夫人をちよ子と呼び東京府の人井深梶之助君の長女にして其の間に康夫君、信生君及び靜江子、英子、美智子、惠美子輝子、滿壽江子等あり、現に福岡市地行西町に住す。

雨宮量七郎君

正五位勳二等　醫學博士
海軍軍醫中將
海軍省醫務局長

君は埼玉縣の人雨宮春潭君の三男にして明治七年二月二十六日を以つて生る。明治三十三年東京帝國大學醫科大學を卒業するや直ちに身を軍籍に投じ、海軍中軍醫に任ぜられ爾來累進して大正十四年海軍々醫中將に陞進し、先是大正二年醫學博士の學位を授與せらる。

然して此の間海軍々醫學校教官兼同校教頭、海軍大學校教官、艦政本部技術會議員、佐世保鎮守府軍醫長兼佐世保海軍病院長、吳鎮守府軍醫長兼吳海軍病院長海軍々醫學校長等を歷任し、大正十四年十二月海軍省醫務局長に任ぜられ現在に及べり。

夫人キク子は東京府士族前田清則君の四女にして東京女學館を卒業し、君との間に一郎君、二郎君、三郎君、春彥君及び須磨子、綾子等あり、現に東京市芝區三田四國町十五番地に住し電話高輪四九四〇番なり。

手塚猛昌君

東洋印刷株式會社長
株式會社旅行案內社長

君は山口縣士族岡部讃英君の二男にして、嘉永五年十一月を以つて生れ後先代正篤君の養嗣子となる。夙に鄕校を卒ふるや靑雲の志を抱き笈を負ふて東上し、研鑽を積むこと多年、明治二十二年優秀の成績を以つて慶應義塾を卒業するや直ちに實業界に身を投ぜり。

然して君が天賦の才腕は其の間に處して能く難關を突破し、行くとして可ならざるはなく、年を閱するに從ひ愈々其の事業的才幹は圓熟し、今や東洋印刷、旅行案內各株式會社々長として內外の社務を鞅掌するのみならず、帝國劇場、廣島炭加製造各株式會社の重役として我が財界に令名高し。

夫人カメ子は山口縣士族白神晴光君の三女にして內助の聞え高し、現に東京市麻布區霞町二番地に住し電話靑山四六二五番たり。

靑木亨君

渡邊保全株式會社取締役支配人
東京莊園株式會社取締役

君は長野縣の人靑木藤吉君の三男にして明治十五年三月一日を以つて生る。夙に實業界に志し明治商店に入りて精勵すること十余年、大正二年渡邊保全合名會社地所部員となり同九年同社が株式組織に變更して渡邊保全株式會社となるや、君累進して同社管理課長に擧げられ後推されて同社取締役兼支配人の要職に就任し現在に至る。

然して傍ら東京莊園、三星商會各株式會社の重役にして今や新興大日本の財界に活躍して前途多事多端たり、趣味として義太夫あり、折ふしに吟ずる君が微妙なる聲には草叢に育つ虫そのものも暫し鳴きを止むる程なりとか。

夫人きぬ子は岐阜縣の人古川佐七君の五女にして君との間に正治君、弘君、茂君及び秀子等あり、現に東京市本鄕區根津須賀町一〇番地に住し電話小石川四九四〇番なり。

手代木隆吉君

衆議院議員
日本工業株式會社監査役

曾つては小學校長として我が教育界に聲名を馳せ、今又衆議院議員として令名ある手代木隆吉君は明治十七年一月卅日を以つて生る。夙に北海道師範學校を卒業するや身を教育界に投じ、室蘭高等小學校に奉職して首席訓導より同校長に進み其の令名嘖々たりき。

然るに尙ほ靑雲の大望燃えて烈火の如く遂に校長の榮職を捨てゝ大正四年中央大學に入り、同七年優秀の成績を以つて卒業し同九年司法官登用試驗に合格するや、直ちに司法官試補となり東京地方裁判所に勤務せしが、固より大志ある君は幾何もなく辭して辯護士を開業し、大正十年衆議院議員總選擧に際し鄕里より立候補し政界の長老村田、木下の兩將と鹿を野に追ふて大いに奮戰し、遂に當選の榮冠を獲得し以つて今日に及べり。

夫人をむめ子と呼び內助の聞え高し、現に東京市本鄕區千駄木町四九番地に住し電話小石川六四五一番なり。

麻田駒之助君

中央公論社長

君は京都府の人麻田榮之進君の長男にして明治二年十月十四日を以つて生る。現時中央公論社々長にして且つ築地本願寺信徒總代、明治會館監事たり、音樂、美術の鑑賞讀書等に趣味深しといふ。

夫人テル子は京都府士族菅谷寬三君の令姉にして京都府立高等女學校を卒業し君との間に宏君及びひな子、光子等あり現に東京市本鄕區駒込西片町一〇番地に住し電話小石川三四二〇番なり。

青木辰喜君

南龍堂醫院長

君は熊本縣の出身にして肥後菊池氏の一族、出田六郎兵衛の末裔たり。夙に學に厚く將來醫師たらんとの大望を抱き、明治三十二年熊本醫學校を卒業するや直ちに內務省醫師檢定試驗に應じて優秀の成績を以つて登第し、更に東京帝國大學順天堂病院、顯微鏡院等に入りて斯學の研鑽を積み、後獨力開業して東都刀圭界に活躍し以つて今日に及べり。

然して大正三四年の交偶々禿頭病治療に關する一大發見をなし、爾來久しき年月を幾多の患者に實驗研究の結果、愈々在來の塗布藥、電氣光線治療法、皮下注射或は種々なる服藥等何れも皆單なる消極的療法にして、君の發見になる外科的手術療法が從來のそれに超然として絶對的治療法なるを立證するに至れり。

抑々斯病に關する研究は他に比して其の學術的研究の根底なく、從來本病に就いては傳染說と否傳染說との二派に別れて論說區々として常に學界の懸案として存するに際し、君の此の一大發見は實に斯病に對する世界的發見にして、且つ斯病に患める人々の爲め將た亦遲々として進まざりし本病研究の前途に一新紀元を樹立せしめ今や本邦に於ける禿頭病專門醫の泰斗として令名嘖々たり、現に東京市麴町區飯田町四ノ七番地に住し電話九段一六三番なり。

阿部秀太郎君

日魯漁業株式會社常任監査役

君は愛媛縣の人阿部光之助君の長男にして、明治十年三月三十一日を以つて生る。明治三十八年東京帝國大學法科大學獨法科を卒業するや、直ちに株式會社大阪鐵工所に入り翌年平壤農工銀行支配人となり、更に同四十三年朝鮮銀行に轉じ釜山平壤各支店長、本店營業部長、大連支店長等を經て大正八年東京支店長に榮轉せり。

然して大正十四年同行を辭し、日魯漁業株式會社に入りて其の常任監査役に就任し以つて現在に至る、讀書、乘馬、謠曲、圍碁等趣味頗る廣きを見ても其の爲人を知るべし。

夫人ナヲ子は愛媛縣の人中谷才治君の令妹にして神戸女學院の卒業なり、現に東京市小石川區小日向臺町三ノ七五番地に住し電話牛込五五〇四番なり。

愛甲勇吉君

正六位勳六等
東京地下鐵道株式會社技師

君は鹿兒島縣の人山本盛秀君の二男にして明治十年二月を以つて生れ、後株式會社十五銀行常務取締役として且つ鹿兒島縣下各事業會社重役として令名ある鹿兒島縣士族愛甲兼達君の養嗣子となる。

夙に鐵道省に職を奉じ東京鐵道局新橋保線事務所長、東京第二改良事務所技師等を歷任し大正十三年官を辭して野に下り現に東京地下鐵道株式會社技師として斯界に令名あり。

夫人てい子は橫山正長君の長女にして君との間に一男ありて盛君と呼ぶ、現に東京市小石川區原町七九番地に住し電話小石川四二一九番なり。

寺西定次郎君

南滿建材工業所長

新興大日本の財界に活躍して、着々其の地歩を獲得しつゝある新進實業家寺西定次郎君は大阪府の人武田久七君の二男にして、明治二十七年九月二十七日を以つて大阪市東區備後町に生れ後ち寺西龜太郎君の養嗣子となる。

夙に穎悟俊才の稱あり、大正四年大阪市立高等商業學校を優秀の成績を以つて卒業するや、更に大阪貿易語學校馬來語科に學び、大いに語學に精通し後ち實業界に身を投じ、養父を援けて製材業に從事せしも大正五年天滿織物株式會社に入りて恪勤すること二年有半、更に大正八年三月南滿鑛業株式會社に轉じ、同社發展に盡瘁すること甚大、大正十五年辭して獨力南滿建材工業所を開設して建築材料の製造販賣を營み、今や復興途上にある帝都同業界に活躍して君が才幹を縱橫に振展するに至る。

君や固より凡輩の徒と同日の論にあらず、其の博學と其の敏腕とは正に新日本の財界に一異彩を放ち、而も其の非凡の商畧たる行くとして可ならざるなく、春秋豊かなる君の前途や蓋し多事にして多端なりと謂ふべし。

趣味又多樣にして讀書、小鳥、圍碁、乘馬、狩獵等其の至らざるなく、就中乘馬の如きは全く神妙にして、名人時に落馬の失敗なきにしもあらざれども概して平穩無事、狩獵また妙々、季節到來すれば則ち山間を拔涉して、大自然の雰圍氣に接して其の志氣を養ふ、又以つて其の人と爲りを知るべし。

夫人八榮子は養父龜太郎君の二女にして大阪府立夕陽ヶ岡高等女學校を卒業し內助の聞え高し、現に東京府荏原郡碑衾村衾二二三七番地に住す。

安東龍五君

小田原急行鐵道會社取締役兼總務課長
株式會社鬼怒川水電控濟會監査役

君は大分縣の人安東十郎君の三男にして、明治五年四月三日を以つて同縣大分郡東植田村に生る。夙に鄕校を卒ふるや笈を負ふて東上し、研鑽能く努め、明治三十年日本大學の前身たる日本法律學校を優秀の成績を以つて卒業し、同三十二年市街鐵道株式會社に入りて其の株式課長たりしが、偶々同社外二社と合併して東京鐵道株式會社設立せらるゝや即ち入りて同社各課長の要職を歷勤せり。

然して後ち東京市主事に任ぜられ東京市電氣局電燈部主計課長として君が敏腕を振ふこと數年、大正六年鬼怒川水力電氣株式會社に轉じ、爾來同社事務部長、調度課長、庶務課長等を歷任し、更に大正十二年小田原急行鐵道株式會社の創立に參劃し、其の設立を見るや推されて同社取締役兼總務課長に就任し、現に其の任にありて同社の發展に盡瘁すること甚

大、傍ら株式會社鬼怒川水電掖濟會監査役として知らる。

君や天資穎明、極めて果斷に富み其の淡快なる志氣や又敬すべく、會談自らにして快感を覺えしめ、而して其の趣味を叩けば曰く……寫眞藝術なり、塵埃深き人間街より離れて壯嚴絶佳なる大自然をとれ我が有となし、以つて超人間的神境に浴る……と又以つて其の人と爲りを知るべきなり、社交に厚く電氣協會々員にして且つ日本大學評議員たり。

夫人オサメ子は大分縣の人佐藤純一君の長女にして君との間に三男一女ありて春一君、敬三君、健司君及び多壽子と稱す、現に東京市四谷區簞笥町七七番地に住し電話四谷二四二一番たり。

寺田寅彦君

理學博士
東京帝國大學教授

君は高知縣の人寺田利正君の長男にして明治十一年十一月を以つて生る。明治三十六年東京帝國大學理科大學を卒業するや直ちに教育界に身を投じ同理科大學講師、同助教授等を歷任し、現に正五位勳四等にして、東京帝國大學教授たり、曾つて宇宙物理學研究の爲め獨英に留學せしことあり。

夫人紳子は東京府の人酒井清兵衞君の二女にして君との間に長男東一君、二男正二君及び長女貞子、二女彌生子、三女雪子等あり、現に東京市本郷區駒込曙町一三ろノ五號に住し電話小石川三〇九七番なり。

阿部壽準君

從四位勳三等　農林次官
普通試驗委員長
文官普通懲戒委員長

君は山口縣士族阿部光忠君の二男にして明治十二年十月を以つて生る。明治三十八年東京帝國大學法科大學政治科を優秀の成績を以つて卒業するや、直ちに文官高等試驗に應じて首尾よく登第し、職を官界に奉じて千葉、神奈川、兵庫各縣事務官、法制局參事官、同書記官、內務監察官兼內務省參事官、鳥取縣知事、國勢院第二部長、內閣統計局長、特許局事務官、特許局總務部長兼意匠商標部長等を歷任し大正十四年四月農林次官に任ぜられ以つて現在に至る。

然して尙ほ前記の諸職にある外特別都市計劃委員會、國有財產調査會、中央統計委員會、簡易生命保險積立金運用委員會、預金部資金運用委員會、米穀委員會等各委員たり、趣味として撞球、釣魚等あり。

夫人をたみ子と呼び兵庫縣の人川端又五郎君の三女にして京都府立第一高等女學校の卒業たり、現に東京府北豊島郡西巢鴨町池袋丸山一五六三番地に住し電話小石川四〇二三番なり。

青山祿郎君

日本國產株式會社長

君は三重縣士族鈴山巖君の長男にして明治八年七月六日を以つて愛知縣岡崎市に生れ同廿五年先代嘉四郎君の養嗣子となる。明治二十六年東京郵便電信學校を卒業し、遞信省電氣試驗所電氣技術官に任せられ十餘年の間官界に遊泳せり。

然して後官界を辭して實業界に投じ電業界方面の各會社に關係しヒーリング商會支配人、安房電燈、帝國電球、共立電機電線、弘電社支那興業、帝國精油、南部電化工業各株式會社の重役たりしが現に前掲會社の社長たる外安中電機製作所帝國電燈、藤倉電線、快進社、エルヂーヒーリングコンパニー等各株式會社の重役として知らる。

夫人サヨ子は德島縣士族熊村豐吉君の長女にして戶板裁縫女學校の卒業たり、現に東京市芝區高輪南町四五番地に住し電話高輪一〇五三番なり。

秋場達人君

秋場徽章商會主

今や全國各學校の徽章及び各種競技用メタルを始めとして、各銀行會社商店の七寶マーク等を製作して常に優秀なる製品を以つて、天下に名聲嘖々たる東京九段下の秋場徽章商會は秋場達人君の個人經營に系り、本邦同業界の白眉を以つて目さるゝ店舗たるを失はざるべし。

君は千葉縣夷隅郡大原町なる一寒村の產にして、夙に青雲の志を抱き年齡僅かに十八才にして笈を負ふて上京し、直ちに帝國徽章商會に實地の研鑽を積むこと四ヶ年、大正九年奮然起つて獨立を宣し現在の場所をトして營業を開始し「抑々徽章は單に一製作品としての意義を有するのみならず、廣く人間生活上名譽、祝祭等總て抽象的シンボルを表徵するものにして、從つて之が製作は徒らに利益主義を以つて終始すべきにあらず」との標語の下に今や多數の從業員を督勵し君が多年の蘊蓄を傾倒して益々其の改善發達に孜々として努むるに至る。

君や年齡未だ春秋に富み加ふるに天資英明、且つ技術の優秀なるとは相俟つて着々として斯界に頭角を現はし、開業日尙ほ淺きにも拘はらず我が「アキバ製」の名は本邦徽章界の一大權威として社會の信用厚く、尙ほ大正十五年二月十一日の建國祭に際し、君は建國の大精神を表現し併せて此の紀念日を永く後世に傳へんとて、自ら圖案と技工に丹精を籠めて製作せし大メタルを畏くも天覽に供して御嘉賞を賜はりたるが如きは獨り君の榮譽なるのみならず、本邦同業界の光榮と謂ふべきなり。

今や同商會は一般徽章及びメタルを始めとしてシエルト、バナント賞牌等をも製作し其の技術の精巧價格の低廉とを以つて斯界に冠たる、これ全く君が標語とする尊き獻身的精神の表徵とも謂ふべく其の前途益々多望なるものあり。

淺野泰治郎君

淺野セメント株式會社專務取締役
日本ヒューム コンクリート 株式會社長

當家は正五位勳四等淺野總一郎君より其家名を擧ぐ、同君は夙に東京に出で後横濱に至り劉苦精勵初め竹皮及薪炭の販賣に從事せしが、支那人某より瓦斯コールターの使用法を聽き東京及横濱瓦斯局に交渉して其の拂下を許可せられ、其販賣に從事すること數年にして巨額の利益を收めたるに端をなす。

尙ほ瓦斯局に山積せる石炭燒殼の空しく放置せらるゝを見て之をセメント燃料に使用せんと試み、工部省所轄深川セメント製造所に就きて試驗したるに、意外にも好成績を得たるを以つて明治八年前記深川セメント製造所を拂下げ、其の經營に當り種々の障害に遭遇したるも遂に成功して漸次日本實業界にその地位を認めらるゝに至り、更に明治十九年日本橋小網町に回漕店を創立して東洋汽船會社の前身を造れり。爾來幾多の事業に着手し行くとして可ならざるものなく、實に我が國立志傳中の一人として其名全國に喧傳さるゝに至れり。

君は其の長男にして明治十七年七月を以つて生る。夙に早稻田大學を卒業するや直ちに洋灰業研究の爲め歐米各國を視察漫遊すること前後數回に及び、現に前掲の外伏木板紙、東洋草莚、關東運輸、關東燃料、東北淺野製材、日之出汽船、各株式會社長、淺野同族、淺野物産、淺野石材工業、關東水力電氣、淺野小倉製鋼、中央製鐵、日本銑鐵、日支炭礦汽船、秩父セメント、五日市鐵道、南部鐵道、臺灣地所建物、原安商會、日本加工製紙、青梅鐵道、庄川水力電氣、淺野造船、鶴見木工、神奈川コークス、日本鑄造等其他幾多會社の重役にして我が財界一方の重鎭として令名高し。

夫人を千代子と呼び故伯爵板垣退助君の四女にして學習院女學部の卒業たり。現に東京市芝區田町五ノ一六番地に住し電話高輪八八番なり。

赤間嘉之吉君

岩手炭礦株式會社專務取締役

君は福岡縣の人赤間儀七君の長男にして明治元年二月を以つて生る。夙に和佛法律學校を卒業し、曩に專賣局事務官に任じ又東亞煙草株式會社の主事、伊藤商店總支配人、共濟貯金、東筑軌道各株式會社取締役たりしことあり。

大正六年衆議院議員に當選し代議士たりしが現時は前記會社の重役たる外九州興業株式會社代表者、不二炭製造、東洋電氣雷管、宮森金山、九州電氣工業各株式會社取締役にして且つ大正鑛業、東洋製版、福松炭礦各株式會社監査役たり。

夫人ヤスノ子は同縣の人青柳孫一郎君の二女にして內助の聞へ高く令妹ツネ子は福岡縣の人荒木典次郎君に、同トモヘ子は同縣の人黑瀨眞一郎君に嫁す、現に福岡縣嘉穗郡大谷村に住す。

朝吹常吉君

帝國生命保險株式會社長

我が實業界の明星朝吹常吉君は大分縣の人朝吹英二君の長男にして明治十年六月を以つて生る。明治二十九年慶應義塾を出づるや英國に航し倫敦大學に入りて經濟學を專攻し、明治三十一年業を卒へて歸朝し直ちに日本銀行計算課に入り、明治三十九年同行を辭して三井物産株式會社に入り紐育支店詰となる。

然して明治四十一年同社を辭して株式會社千代田組を創立し、外國製機械其他の取次販賣を始め當時其の社長たる外三越呉服店常務取締役、臺灣製糖、共同火災保險各株式會社の取締役たりしが、現時は帝國生命保險株式會社々長たる外千代田組相談役其他幾多會社の重役として知らる、趣味として庭球を好くす。

夫人磯子は陸軍中將長岡外史君の長女にして、學習院女學部を卒業し其の間に英一君、正二君、三吉君、四郎君及び登子等あり、現に東京市芝區下高輪町五七番地に住し電話高輪一一四四番なり。

有馬賴寧君

伯爵　從四位

君は伯爵有馬賴萬君の長男にして明治十七年十二月を以つて生れ、昭和二年三月嚴父逝去に依り襲爵仰せ付けらる。明治四十三年東京帝國大學農科大學農科を卒業するや、直ちに東京帝國大學農學部附屬農業教員養成所講師、同校農學部助教授、農商務省囑託等に任ぜられ、大正十三年福岡縣市部より推されて衆議院議員たりし外同愛會々長として水平運動の先驅をなし、又農事研究會を興し小作問題に貢獻すること甚大、今や我が華胄界に令名嘖々たり。

夫人貞子は北白川宮永久王の叔母君たり、現に東京市赤坂區青山南町六ノ一〇五番地に住し電話青山一〇三三番なり。

天片敬吉君

日本興業銀行理事

正五位勳四等法學士天宅敬吉君は兵庫縣の人天宅敬邦君の長男にして、明治十五年六月六日を以つて生る。夙に鄕校を卒ふるや笈を負ふて東上し、明治四十年東京帝國大學法科大學政治科を卒業して直ちに身を官界に投じ、大藏省に入り大阪稅關官吏、同省理財局書記官、國債課長、造幣局長等を歷任し、後ち官界を辭して日本興業銀行に入り現に其の理事として知らる。

夫人くに子は東京府の人伊崎眞熙君の二女にして華族女學校の卒業なり、現に東京府豐多摩郡落合町下落合五五二番地に住し電話牛込四七九六番なり。

新井龜太郎君

正五位勳三等功四級　陸軍少將
陸軍戸山學校長

君は群馬縣の人新井澤次郎君の四男にして、明治八年十二月八日を以つて同縣

山田郡境野村に生る。夙に東京數理學館及び東京英學院等に學び、後陸軍大學に入りて同校を卒業す。

明治二十七年十二月士官候補生として高崎歩兵第十聯隊へ入隊し、爾來臺灣守備臺中大隊本部附、第二師團參謀、第九師團參謀、第十一師團參謀、第十二師團留守參謀長、ハルビン兵站司令官、臺北歩兵聯隊長、第六師團參謀長、北滿派遣隊司令官、豐橋歩兵旅團長、第四師團司令部附等を歴任して現在に及ぶ。

其の特筆すべきは明治三十七八年日露戰役に際し、第三軍中隊長として旅順攻圍戰、馬公臺會戰、奉天會戰等に參加して偉勳を立て、引き續き一戸旅團高級副官として滿洲の野に轉戰し、功により金鵄勳章功四級を賜はりしことこれなり。

夫人乙女子は石川縣の人兒井誠君の令妹にして石川縣立高等女學校を卒業し、其の間に武夫君、敏雄君、良夫君、隆夫君及び靜子、眞佐子等あり、現に東京市外西大久保町二八三番地に住す。

有嶋健助君

株式會社明治商店社長
明治製糖株式會社專務取締役

當家は平親王葛原親王の後裔にして十二世行貞の子孫たり。行貞宇治川の戰に破れて土佐に落ち其孫を通行と稱し、香美郡有嶋の里に住せしかば此時代より始めて有嶋を姓となし、是より二十四代行政君に至り島津家に仕へ爾來代々典醫として令名ありき。

君は先代謙市郎君の二男にして明治元年八月を以つて生る。夙に造士館に學び明治二十六年大藏省に奉職し、日清の戰役後臺灣總督府の設置せらるゝや、同廳に入り累進して稅關事務官となりしが、後ち官界を辭して炭礦業を營み、更に明治四十一年明治製糖株式會社に入りて同社主事補に就任し、次いで取締役に擧げられ現に同社專務取締役の要職にある外明治商店社長、東京菓子、スマトラ興業各株式會社の重役として我が財界の重鎮として知らる。

夫人速子は鹿兒島縣の人春日主嚴君の三女にして實踐高等女學校の卒業なり、現に東京市四谷區東信濃町二七番地に住し電話四谷四一二五番たり。

秋田清君

從七位勳四等
衆議院議員

君は德島縣の人秋田英二君の三男にして秋田寛裕君の令弟に當り、明治十四年八月二十九日を以つて生る。夙に鄕校を卒ふるや笈を負ふて東上し明治三十四年中央大學及び日本大學を同時に卒業し後判檢事登用試驗に合格して判事となりしが、辭して辯護士を開業し今日に及べり。

然して德島縣郡部より推されて衆議院議員に當選すること前後四回現に其の任に在りて政友會總務委員にして曾つて二六新報社長たりしことあり。

趣味として將棋あり、素人の域を脱すといふ、現に東京市麹町區内幸町一ノ五番地に住し電話銀座二五〇六番なり。

秋山襄君

辯護士　辨理士

帝都法曹界に其の令名高き我が秋山襄君は香川縣の人秋山儀平君の長男にして明治十五年十一月廿六日を以つて香川縣三豐郡財田村に生る。明治四十一年東京帝國大學獨法科を卒業するや、直ちに辯護士を開業し現に東京海上ビルデングに堂々たる事務所を有し、斯界の信望厚く曾つて東京地方裁判所破産管財人、小松電氣株式會社監査役たりしことあり。

夫人を任子と呼び愛媛縣の人松木幹一郎君の令妹にして東京高等女學校の卒業なり、現に東京市本鄕區西片町一〇ロノ一〇番地に住し電話小石川二七三八番なり。

荒木寅三郎君

從三位勳二等　醫學博士
京都帝國大學總長

當家は群馬縣碓氷郡板鼻町に住し醫を業とし父保彌君に至る。君は其の長男にして慶應二年十月を以つて生れ、明治二十二年帝國大學醫科大學別科を卒業し、更に獨逸に航しストラスブルグ大學に入りて生理學を專攻し同二十八年歸朝するや第三高等學校教授に任じ同三十年醫學博士の學位を授けらる。

明治三十二年京都帝國大學醫科大學教授に任じ後同醫科大學々長に補せられ、次いで同大學總長に進み今日に至る。

夫人きん子は京都府の人井上仁吉君の令妹たり、現に京都市上京區萬里小路近衛上ルに住し電話上一四〇〇番なり。

赤羽克己君

北海道炭礦汽船會社常務取締役

君は舊會津藩御勘定頭赤羽治平君の三男にして、明治二年二月を以つて生れ同二十年四月同藩士赤羽友春君の養嗣子となる。夙に鄕校を卒ふるや靑雲の志を抱いて上京し、明治二十七年東京商科大學の前身たる東京高等商業學校を卒業して直ちに實業界に投じ堀越商會紐育支店長に就任せしも後ち三井物産株式會社に轉じ、累進して同社業務課長として君が才腕を縱横に振ふに至る。

然して大正十一年十二月南滿洲鐵道株式會社理事を拜命し、現に北海道炭礦汽船株式會社常務取締役として我が財界に令名高し。

夫人ミヨ子は養父友春君の長女にして君との間に鹹一君、敬二君、良三君、裕志君及び貞子、操子、孝子、悌子、和子親子等あり、現に東京市外中野町一五二二番地に住し電話四谷二六六番たり。

曄道文藝君

高砂鐵工株式會社取締役會長
愛國生命保險會社專務取締役
三井生命保險會社專務取締役

從六位法學博士曄道文藝君は石川縣の人曄道大圓君の長男にして、明治十七年十二月を以つて生る。明治四十二年京都帝國大學法科大學を卒業し後京都帝國大學法科大學教授として學界に令名を馳せ

大正六年法學博士の學位を授與せらる。

現時は我が財界に活躍して非凡の才幹を發揮し現に高砂鐵工株式會社取締役會長たる外愛國生命、三井生命保險株式會社專務取締役にして且つ山陽無煙炭礦株式會社代表取締役及び高砂企業、太洋火災保險、第二高砂工業、高砂護謨工業、高砂煖房工事、興東貿易各株式會社重役として令名高く、傍ら明治大學理事たり

夫人みな子は栃木縣の人根岸茂君の四女にして君との間に一郎君、二郎君、外三郎君及び文子、民子、貞子、治子等あり、現に東京市外上大崎二四五番地に住し電話高輪八三七番たり。

安藤廣太郎君

從四位勳三等　農學博士

西ケ原農事試驗場長

君は兵庫縣の人安藤久次郎君の長男にして明治四年八月を以つて生る。明治二十八年帝國大學農科大學を卒業し、曩に農商務省臨時產業調査局技師たりしが現時は農事試驗場技師にして西ケ原農事試驗場長兼九州帝國大學教授に任じ、從四位勳三等高等官二等農學博士にして我が國農學界のオーソリチーとして令名高し

夫人ハナ子は同縣の人本庄久兵衛君の二女にして其の間に長男秀夫君、長女壽子、次女清子等あり、現に東京府北豐島郡瀧之川町西ケ原農事試驗所官舍に住し電話小石川四〇三九番なり。

穴水要七君

北海道電燈株式會社長

富士製紙株式會社專務取締役

我が財界の巨星穴水要七君は山梨縣の人小野八左衛門君の二男にして、明治八年一月十九日を以つて山梨縣北巨摩郡に生る。幼にして甲府市の豪商穴水家の商舘に見習となり、精勵大いに勤めしかば先代穴水嘉三郎君の認むる所となり明治三十一年七月同家の養子となる。

明治三十四年横濱に出でて米穀肥料食鹽商を營み同三十九年四品取引所、五品取引所、兩仲買店を開業したるも不幸や遂に失敗に期し、後上京して富士製紙株式會社に入り漸次累進して同社販賣部長となり、大正五年取締役に推され今や同社專務取締役として內外の社務を執掌するに至る。

尙ほ北海道電燈株式會社々長たる外穴水合名會社代表社員、共同パルプ株式會社取締役にして曩に鄕黨より選ばれて衆議院議員たりしことあり、夫人とみ子は養父嘉三郎君の二女たり、現に東京市麻布區永坂町六〇番地に住し電話青山五八一八番なり。

赤間周吉君

中井銀行取締役兼營業部長

我が財界に漸次令名を謳はれつゝある赤間周吉君は東京府の人寶生金五郎君の二男にして明治十年十二月十九日を以つて生れ、明治廿二年十二月絕家赤間家を再興せり。

夙に身を實業界に投じ明治廿三年以來中井銀行にありて專心同行發展に盡瘁せしかば漸次累進して大正九年營業部長となり同十一年取締役に就任し今日に至る圍碁、相撲等に趣味を有すといふ、現に東京市牛込區拂方町二五番地に住し電話牛込二六五六番なり。

夫人貞子は山形縣士族駒林廣運君の長女にして東京女學館の卒業なり、現に東京市牛込區南榎町五七番地に住し電話牛込四四八五番なり。

寺島成信君

經濟學博士

君は山形縣士族寺島成則君の三男にして明治二年七月三日を以つて生る。明治卅年慶應義塾を卒業し曩に海軍軍令部に入り後日本郵船株式會社に轉じ、同社副參事、同參事に進み業務調査部を主宰する傍ら帝國經濟會議員及び東京帝國大學經濟學部慶應義塾大學經濟學部早稻田大學等の講師を歷任し、本邦最初の經濟學博士として知らる。

曩に日獨戰爭の功に依り勳六等を授けられ現に日本郵船株式會社顧問として東京帝國大學講師たり、盆栽に妙を得て素人の域を脫すといふ。

寺島權藏君

衆議院議員

横山商會支配人

我が政界の新人寺島權藏君は富山縣の人寺島安次郎君の令弟にして明治二十一年一月を以つて生る。夙に鄕校を卒ふるや笈を負ふて東上し大正三年早稻田大學政治科を優秀の成績を以つて卒業す。

然して操觚界に入りて扶桑通信社、東洋文藝會社を創立し更に乙卯出版社を經營せしが後ち獨立通信社記者となり更に大正八年內外染料製造所を興し其經營に當り、傍ら横山鑛業所囑託となり曩に東京每日新聞政治部長たりしことあり。

現に横山商會支配人にして尙ほ富山縣郡部より推されて衆議院議員に當選し、憲政會に屬し前途益々多望なるものあり

夫人ユキ子は東京府の人川瀨小十郎君の長女たり、現に東京市麻布區笄町一五六番地に住し電話青山三二〇七番なり。

穴水熊雄君

北海道電燈會社常務取締役

君は山梨縣の人與水徹君の令弟にして明治十三年六月を以つて生る。現に北海道電燈會社常務取締役たる外富士水電、關東電氣各株式會社取締役たり。

現に東京市四谷區南伊賀町三六番地に住し電話四谷二三八四番なり。

天野七三郎君

日本車輛製造株式會社副社長

君は京都府士族花井宗連君の二男にして明治七年三月を以つて生れ、同三十五年三月天野仙輔君の養嗣子となる。夙に京都同志社を經て東京帝國大學に學び、明治三十四年同工科大學機械科を卒業するや直ちに實業界に身を投ず。

其の後天野工場を設立して專ら車輛製

造に從事し現に日本車輛製造株式會社副社長の要職にありて内外の社務を鞅掌する傍ら常磐貯蓄銀行取締役たり、現に東京市本郷區眞砂町一五番地に住し電話小石川二〇二〇番たり。

寺田市正君

衆議院議員

君は鹿兒島縣士族寺田宗七君の長男にして明治九年四月廿五日を以つて鹿兒島縣に生る。夙に青雲の志を抱いて東上し刻苦勉勵、明治卅三年明治大學法科を優秀の成績を以つて卒業し、同卅八年時事新報記者に聘せられ後ち自由通信社主幹を經て同社々長となり言論界に活躍し、又一方銀行會社に關係して其の重役の地位にありしが、現時は鹿兒島縣郡部より推されて衆議院議員に當選し政友本黨に屬し我が政界の一異彩たり。

夫人サダ子は鹿兒島縣士族永田清明君の長女にして、鶴嶺高等女學校を卒業し君との間に長女三千子あり、現に東京市牛込區矢來町三番地に住し電話牛込二五八一番なり。

寺田榮君

正三位勳二等
貴族院議員

君は福岡縣の人寺田案山子君の長男にして安政六年十一月を以つて生る。明治十五年明治法律學校を卒業するや直ちに第一回判檢事登用試驗に登第せり。

爾來東京横濱各地方裁判所判事、京橋區裁判所監督判事、高崎區裁判所判事等に歷任後衆議院書記官に任ぜられ議事課長、祕書課長、警務課長等を經て大正六年五月衆議院書記官長に陞進し、同十二年八月依願免官となると同時に貴族院議員に勅選せられ又大正十四年六月營繕管財顧問仰せ付けらる。

趣味に厚く音樂、圍碁、旅行、讀書、撞球等多樣なりといふ、現に東京府豊多摩郡戸塚町源兵衛一九一番地に住し電話牛込五八七三番なり。

青山惣吉君

宮城縣多額納稅者
北海道商業株式會社取締役

君は宮城縣の人細谷與惣治君の令弟にして明治十六年一月を以つて生れ先代てい子の養嗣子となる。夙に實業界に活躍し現に前記の外常磐織布株式會社取締役にして、且つ仙臺商業會議所議員たり。

夫人もと子は宮城縣の人米谷雄助君の令妹にして君との間に宗一君、定一君及び愛子等あり、現に仙臺市南染師町五三番地に住し電話長三八番なり。

阿部八代太郎君

東京高等師範學校教授

從五位勳六等阿部八代太郎君は岡山縣の人阿部柏太郎君の長男にして、明治十六年十二月を以つて生る。明治十三年京都帝國大學理工科大學數學科を卒業し更に數學研究の爲め英佛に留學し、歸朝後進んで大學院に入り研鑽を積み、後ち第三高等學校、京都法政大學各講師に聘せられ、現時は東京高等師範學校教授たり

夫人俊子との間に長男正英君、二男宕夫君、三男英三君及び長女治子等あり、現に東京府北豐島郡西巣鴨町宮中二二〇一番地に住す。

出淵勝次君

從四位勳二等
外務次官

君は岩手縣の人出淵勝應君の二男にして明治十一年七月を以つて生る。明治三十五年東京高等商業學校專攻部を卒業し同年外交官及領事官試驗に合格して直ちに領事官補に任ぜられ、爾來京城理事廳理事官、獨逸大使館三等書記官、二等書記官等に歷任し、明治四十四年外務書記官に任ぜられ政務局第一課長に補せられ大正三年八月公使館一等書記官に陞任し支那北京駐在同七年三月大使館一等書記官に任ぜられ米國駐在を命ぜらる。

大正七年十一月大使館參事官となり同九年一月獨逸駐在を命ぜられ、大正十年八月瑞西に開催の國際聯盟會議第二回會議に於ける帝國代表隨員、同年十月ワシントン會議に參列の全權委員隨員を命ぜられ、同十二年五月外務省亞細亞局長兼對支文化事務局長に任ぜられ同十三年外務次官に擧げられ現在に至る。

夫人を濱子と呼び故法學博士菊池武夫君の三女たり、現に東京市麻布區飯倉片町三一番地に住し電話青山四〇〇番なり

足立莊君

日本化學產業株式會社專務取締役
日本徵兵保險株式會社社長

君は鳥取縣の人足立正君の令弟にして明治三年四月を以つて生る。夙に鄕校を卒ふるや笈を負ふて東上し切磋琢磨、明治二十五年慶應義塾文科を卒業し曩に時事新報政治部長、編輯長等を歷任せり。

然して後實業界に身を投じ、現に日本化學產業株式會社々長たる外日本徵兵保險株式會社專務取締役にして且つ內國貯金銀行、日本商工、日本絹糸、廣益社、大洋漁業羅詰各株式會社重役として我が財界に今名あり。

夫人いち子は東京府の人柳下重和君の長女にして君との間に三郎君、きみ子、たみ子、たき子、八重子、すえ子等あり現に東京市芝區白金三光町二五五番地に住す。

田健治郎君

男爵　正三位勳一等
貴族院議員

君は兵庫縣の人田文平君の二男にして安政二年二月八日を以つて生る。明治九年判事補となり爾來高知、神奈川、埼玉各縣警察部長、遞信次官たること三回、遞信省總務長官等に歷任し、同三十九年貴族院議員に勅選せられ同四十年勳功に依り特に華族に列し男爵を授けらる。

大正五年遞信大臣となり後臺灣總督農商務大臣兼司法大臣、帝都復興審議會委員等に親任せらる。先是明治二十九年萬國電信會議委員として洪國に差遣せられ

尋いで歐米を巡遊す、又曩に關西鐵道株式會社々長にして衆議院議員に當選すること二回に及べり。

夫人をやす子と呼び鹿兒島縣士族重野安居君の長女たり、現に東京府荏原郡玉川上野毛町二三四番地に住し電話玉川二番なり。

寺田省歸君

北海起業株式會社長

君は茨城縣の人寺田伊兵衛君の二男にして安政四年四月を以つて生る。夙に千葉縣師範學校を卒業し、曩に京都府高等女學校教諭たりしが現時は小樽商業會議所副會頭にして且つ樺島殖産株式會社、北海起業株式會社各代表社員、小樽運送株式會社專務取締役、小樽製油、小樽漁港、北海林産、帝國製油、帝國電燈、小樽貨物火災保險、東洋ヒューズ、開化炭礦、岩内水力電氣各株式會社取締役として地方財界に令名高し。

夫人左葉子は東京府の人牧格次郎君の長女にして君との間に長男省一君、二男省二君、三男省三君及び長女さわ子等あり、現に小樽市富岡町に住し電話長二〇五番なり。

赤松範一君

男爵　貴族院議員

當家は先代從二位勳一等赤松則良君より顯はる、則良君明治三年兵部省に出仕し爾來海軍兵學校大教授、兵部少丞、海軍少將兼海軍大丞、横須賀鎮守府司令長官兼海軍將官會議々員等に歷補し、明治二十年海軍中將に陞進し特旨を以つて華族に列し男爵を授けらる。

君は則良君の長男にして明治三年一月を以つて生れ大正六年襲爵す。夙に同人社に學び、曩に浦賀船渠株式會社取締役たりしが現時從四位男爵にして大野銀行取締役、東京リベット株式會社長、東京製綱株式會社常務取締役たる外日本銑鐵東洋拓殖工業、硅藻土工業、東京針金工業、日本特産鐵、阪川牛乳商店各株式會社取締役たり。

尙ほ帝國特殊煉瓦、大阪船渠各株式會社監査役及び私立麻布中學校の理事たり夫人をすみ子と呼び東京府の人遠山注長君の長女にして其の間に六男一女あり、現に東京市外千駄ヶ谷町五二七番地に住す。

天野保二郎君

雄別炭礦鐵道株式會社監査役

君は廣島縣の人天野新一郎君の令弟にして明治六年三月を以つて生る。夙に鄕里の中學校を卒ふるや明治二十三年大阪に出で株式仲買人故加賀市太郎君の店員となり、同二十四年同東京支店に轉勤し爾來同一族なる加賀豐三郎株式商店支配人として恪勤すること實に二十一ヶ年、加賀家の爲めに盡瘁すること甚大。

明治四十三年十二月獨立自營以つて東京株式取引所仲買人を開業し、多年の蓄蓄を傾注して大いに活躍する所ありしが大正十年十二月知友と共に北海道に炭礦鐵道を創立するに際し仲買業を廢して專ら新事業に盡力するに至る。

然して大正十三年三月を以つて右事業を三菱會社と共同經營に移し社名を雄別炭礦鐵道會社と改稱し、君大いに事業の隆昌を計り、現に同社監査役たり、夫人龍子との間に宗一君、敏三郎君及び峯子芳江子等あり、現に東京市赤坂區青山南町二ノ五二番地に住し電話青山一四九一番なり。

青木鐵太郎君

高砂商工銀行頭取

正五位青木鐵太郎君は京都府の人小林儀助君の長男にして慶應三年一月を以つて生れ先代順一君の養嗣子となる。明治二十二年東京帝國大學法科大學を卒業するや職を官界に採り大藏省に勤めしも後官界を辭して實業界に走り、日本銀行、横濱正金銀行等の内外各地支店長等を歷動し、後日本興業銀行理事を拜命し同行營業部長を兼ねたりしが再び官界に入りて外務省商務官たりしが現時は高砂商工銀行頭取たる外高砂企業、東京貯蓄銀行各株式會社の重役たり。

夫人すゑ子は奈良縣の人土倉鶴松君の令妹たり、現に東京市外上大崎二八八番地に住し電話高輪一二八七番なり。

秋田直吉君

勳八等　實業家

東京商業會議所議員

君は東京府の人秋田定吉君の三男にして明治十二年一月二日を以つて生る。夙に實業界に身を投じ金物商竹内喜三郎商店に入りて實務を見習ひ、刻苦精勵、明治四十年獨立して銅鐵商を營み今日に至る。

今や本邦金物業界の重鎭にして銅鐵物問屋、金物問屋、鉛錫工業、眞鍮地銅問屋各組合の幹事長、頭取、日本橋區會議員等に推薦せられ其の關係する事業多方面に亘り秋田鉛管製造所主、スターメタル商會代表社員たる外東京電氣製造、伊藤飛行機研究所、城東亞鉛鍍金各株式會社の重役として知らる。

彼の日露戰役には陸軍二等主計として出征し戰役後勳八等に叙せられ、一時賜金三百圓を賜はる。趣味として書畫、骨董あり、夫人コノ子は神奈川縣の人小泉民藏君の長女たり、現に東京市日本橋區小傳馬上町一六番地に住し電話浪花六二一五番六二一六番たり。

安藤榮藏君

安藤商店取締役

君は滋賀縣の人久木安太郎君の令弟にして明治九年十一月を以つて生れ後先代榮藏君の養嗣子となる。夙に實業界に投じ現に株式會社安藤商店取締役にして且つ京都商業會議所議員たり。

夫人をヨネ子と稱し君との間に一男ありて秀雄君と呼ぶ現に京都市上京區東洞院佛光寺に住し電話下一九八五番たり。

阿由葉勝作君

衆議院議員

君は栃木縣の人阿由葉勝作君の長男にして明治十年十月十三日を以つて生る。夙に慶應義塾大學を卒業するや直ちに實業界に入り爾來四十一銀行、宇都宮米券倉庫、東海銀行、八十一銀行、東野鐵道足利瓦斯、鹽那軌道各株式會社の重役、野州新聞社長たりしことありて栃木縣下實業界に令名高く、尚ほ栃木縣多額納稅者として現時直接國稅二千八百三十余圓を納め、曾つて栃木縣會議長に選ばるゝ事三回衆議院議員に推さるゝ事三回現に其任にある外狩獵調査委員の要職にあり狩獵に趣味を有すといふ。

夫人サダ子は栃木縣の人木村半兵衛君の長女にして其の間に勝男君、辰男君、三郎君、進君、健司君、清君及び錦子、カク子、雪子等あり、現に東京市牛込區北町一七番地に住し電話牛込三一一番なり。

相川文五郎君

神奈川縣多額納稅者

君は神奈川縣の人先代文五郎君の二男にして明治八年十一月を以つて生る。曾つて神奈川縣農工銀行監査役たりしことあり、現に神奈川縣久良岐郡六浦莊に住す。

青木才次郎君

土木建築請負業
貴族院議員

君は茨城縣の人青木才次郎君の長男にして明治十三年十二月を以つて生れ前名龍間を改めて襲名す。夙に實業界に身を投じ土木建築請負業を營み、現に第二茨城土木工業株式會社取締役にして且つ茨城縣多額納稅者として直稅六千數百圓を納め曩に多數縣民の推すところとなり貴族院議員に當選す。

夫人さい子は茨城縣の人齊藤隣造君の四女にして君との間に勇君、正雄君及び梅子、靜江子等あり、現に東京市神田區通神保町六番地に住し電話神田二七六四番なり。

秋保安治君

教育博物館長

從五位勳五等秋保安治君は舊仙臺藩士秋保住房君の四男にして明治五年四月廿一日を以つて生る。明治二十九年東京高等工業學校建築科を卒業し同三十年仙臺市立工業學校の創立に際し聘せられて同校教諭となり、明治三十二年同校々長に擧げられ後轉じて岩手縣立工業學校長となり更に明治四十年東京府立職工學校長に轉任す。大正七年東京高等工業學校教授に任せられ更に文部省に入りて督學官となり現に教育博物館長の要職にあり、讀書に趣味を有すといふ。

夫人多計治子は宮城縣士族黑澤常道君の二女にして其の間に長男實君、二男昇君、三男正三君、及び長女一枝子、二女秀子、三女富子、四女愛子等あり、現に東京市小石川區原町六一番地に住す。

天江勘兵衛君

宮城縣多額納稅者
仙臺味噌醬油會社取締役

君は宮城縣の人庄司榮之丞君の令弟にして明治六年十二月を以つて生れ先代せん子の入夫となる。夙に地方財界に活躍して君が敏腕を振ひ、祖業に精勵して酒造業を營み、且つ仙臺味噌醬油株式會社取締役として知らる。

尚ほ宮城縣多額納稅者にして現に直接國稅二千九十余圓を納め當地方財界に重きをなす、現に仙臺市八幡町一二四番地に住し電話四六三番たり。

阿部房次郎君

東洋紡織株式會社副社長
近江銀行取締役

君は滋賀縣士族辻寛鎭君の令兄にして明治元年一月を以つて生る。明治二十五年慶應義塾を卒業するや直ちに實業界に投じ現に前記の外樺太工業、江商各株式會社の重役たり。

夫人ゑき子は愛知縣の人宮川彦一郎君の令妹にして大阪相愛高等女學校の出身たり、現に兵庫縣武庫郡住吉村に住す。

寺島誠一郎君

伯爵　貴族院議員
日本製鋼所監査役

當家は藤原鎌足の裔宗俊の後なり、宗俊より二十數世を經て宗則君に至る、宗則君夙に蘭學を修め後英國に留學し歸朝後は神奈川縣知事兼外國官判事、外務大臣等を歷任し勳功に依り華族に列し伯爵を授けらる。君は其の長男にして明治三年九月を以つて生る。夙に學習院に學び後更に米國に留學し理財學士の學位を受け、又佛國に留學して法學士の學位を受く、次いで巴里政治學院外交科を卒業し英、伊、伯、獨、墺、土、希、埃、露等の諸國を歷遊す。

明治三十七年以來外務省取調事務囑託外務大臣秘書官等に任じ、臨時博覽會評議員、外交官及領事官臨事試驗、生產調査會等の委員に擧げらる。又貞愛親王殿下御渡米に付隨員仰せ付けらる、現に軍需評議會評議員たり、正三位勳四等に叙せられ貴族院議員に當選すること三回に及べり。

又實業界に關係深く現に八千代生命保險株式會社取締役にして株式會社日本製鋼所監査役たり、夫人きよ子は京都府の人三井源右衛門君の令妹にして君との間に一男二女あり、現に東京市麴町區平河町六ノ七番地に住す。

寺田忠三郎君

有信銀行取締役
峽西銀行監査役

君は山梨縣の人寺田喜平治君の令弟にして、當地方財界の重鎭として知られ、現に前記の諸職にあり且つ山梨縣多額納稅者として直稅一千三百二十余圓を納むといふ。

夫人をみつ子と稱し山梨縣の人横澤清左衛門君の長女たり、現に甲府市和田平

町に住す。

東武君

勳四等　衆議院議員
北海タイムス社長

君は奈良縣の人東義次君の長男にして明治二年四月二十七日を以つて同縣吉野郡十津川村に孤々の聲を擧ぐ、明治二十三年中央大學の前身たる東京法學院を卒業す。明治二十五年鄕里十津村の大洪水により其の住所を失ひたる村民三千餘人を率ひて北海道石狩國樺戸郡に移住し新十津川村を起す。明治三十一年吉植庄一郎君、淺羽清君等と相謀りて北海時事を創刊し同三十四年北川新報、北海毎日を合併して北海タイムス社を創立し自ら理事に就任し其の經營の衝に當り後組織を合資會社に變更するや社長に就任す。

明治三十四年八月第一期の北海道會議員に當選し爾來當選すること數回、同四十一年札幌郡部より推されて衆議院議員に當選し引續き當選すること五回、大正元年政友會北海道支部長に推され現に同會の總務の任にあり、大正三四年事件の功に依り勳四等に叙せらる、大正九年西比利亞派遣軍衆議院議員慰問團長として渡西す、第四十七議會には衆議院豫算委員長の重任に就けり。

現に衆議院議員たる外北海タイムス、會津索道各株式會社長にして且つ北海道林產株式會社の取締役にして尙ほ帝國農會評議員、北海道農會代表員、空知郡農會長、北海道燕麥會長の任にありて令名を東西に響きわたる。

夫人ミヤ子との間に一男一女あり、現に北海道、札幌市北五條西町一〇ノ二番地に住す。

寺井四郎兵衛君

北海道多額納稅者

君は北海道の人先代四郎兵衛君の長男たり、夙に北海道財界に活躍し、現に北海道多額納稅者として直稅六千數百圓を納む。

夫人をモト子と稱し君との間に一女ありてとし子と稱す、現に函館市末廣町九二番地に住し電話三二〇番たり。

青木徹二君

法學博士　辯護士
慶應義塾大學教授

君は岐阜縣の人青木熊太郎君の二男にして明治七年九月九日を以つて生る。明治三十年慶應義塾法科を卒業するや直ちに判檢事登用試驗に應じて首尾よく登第し、後名判事として官界に知られしが辭して外國に航し、獨佛英各國に留まりて斯學の研鑽を積み大いに造詣を深くして歸朝し、明治四十三年法學博士の學位を授與せらる。

現に母校慶應義塾大學教授として得意の商法學を講じ、君が蘊蓄を傾注して幾多學徒の薫陶に專念たる傍ら、東京丸之內海上ビルに辯護士事務所を開設して一般法律事務に携はり、今や我が學界の權威者たるは勿論本邦法曹界の重鎭として

令名嘖々たり。

夫人シン子は山口縣の人關谷禎造君の長女にして君との間に莊太郎君、ソノ子シゲ子、カヅ子等あり、現に東京市芝區今里町九六番地に住し電話高輪一六七〇番たり。

相生由太郎君

正六位　大連商業會議所會頭
東亞土木企業株式會社長

君は福島縣の人相生久次君の長男にして慶應三年四月廿八日を以つて福岡市に生る。明治廿九年東京高等商業學校を卒業するや直ちに日本郵船株式會社に入り更に三井物產會社に轉じ、同四十年南滿洲鐵道株式會社大連阜頭事務所長となり同四十二年辭任し大連に於て福昌公司を創立し、倉庫保險代理業輸出入商阜頭人夫供給土木建築請負等の多方面に涉る業務を經營し、傍ら滿洲水產、大連工業、大連油脂工業、滿洲興業、南滿鑛業、滿蒙興業、奉天製麻、大正海運各株式會社の重役たり。

尙ほ大正五年七月以來大連商業會議所會頭の名譽職にありて南滿洲財界の巨星として令名あり、大正十三年二月特旨を以つて正六位に叙せらる、夫人をトリ子と呼び福岡縣の人吉松市平君の二女たり現に大連、霧島、一一六番地に住し電話大連四〇九五番なり。

阿部正直君

伯爵　從四位

當家は伊豫守阿部正勝君の後裔にして正勝德川家康に仕へ重次その後を繼ぎ慶安四年德川家光に殉じ其弟正邦その後を承け福山に移り十萬石を領す。後十數世を經て正桓君に至る正桓君は侯爵淺野長勳君の令弟にして明治元年阿部家の養子となり福山藩知事に任ぜられ同十七年伯爵を授けらる。

君は其の長男にして明治二十四年一月九日を以つて生れ大正三年家督を相續し爵爵仰付らる。大正十一年東京帝國大學理學部を卒業し理化學研究所囑託たりしことあり、東京府多額納稅者にして現時其の直接國稅二萬三千百六十余圓を納め寫眞に趣味を有すといふ。

夫人直子は子爵阿部正功君の四女にして學習院女學部の卒業なり、現に東京市本鄕區駒込西片町一〇番地に住し電話小石川一六六一番なり。

吉田富右衛門君

兵庫縣多額納稅者

君は大阪府の人寺田甚與茂君の令弟たり、夙に酒造業を營み、現に兵庫縣多額納稅者として知らる、現に兵庫縣武庫郡魚崎に住す。

寺內秀吉君

實業家

君は京都府の人寺內市左衛門君の三男にして慶應三年五月を以つて生る。夙に實業界に身を投じ、現に京都府多額納稅者にして直稅二千百三十余圓を納むとい

ふ。

夫人アイ子は京都府の人松井善兵衛君の三女にして君との間に一男ありて季之助君と稱す、現に京都市下京區四條町東入ルに住し電話中九九一番たり。

雨宮信一郎君

横濱小型自動車株式會社長

君は長野縣の人雨宮敎次郎君の長男にして明治十六年三月二十三日を以つて横濱市に生る。夙に日本中學を卒業するや直ちに實業界に入り明治三十七年熱海相豆神社鐵道株式會社に入り同四十年江の島電氣株式會社に轉じ社長秘書役となり同四十三年辭して雨宮商店に入り明治三十五年仙人製鐵所を創立し取締役に擧げられ、大正十年雨宮保全社理事に擧げられ大正十一年横濱小型自動車株式會社を創立して同社の社長に就任し、大正十二年四國水電株式會社取締役に擧げられ現に横濱に於ける知名の實業家を以つて目され、趣味として銃獵あり其技百發百中なりといふ。

夫人を多滿子と呼び淑德の譽れ高し、現に東京市外豐多摩郡西大久保町四九二番地に住し電話四谷一三一番なり。

縣左吉君

電氣化學工業株式會社常務取締役

君は福岡縣士族縣連君の三男にして明治四年二月を以つて生る。夙に實業界に身を投じ、現に前記の外和賀水力電氣、青海水力電氣各株式會社監査役として知らる。

夫人ハナ子は福岡縣士族宮内保君の長女にして君との間に一男二女ありて國介君及び光代子、正子と稱す、現に東京府下世田ヶ谷七七七番地に住し電話青山二一四四番たり。

青木平次郎君

石綿スレート株式會社長

君は京都府士族青木茂君の長男にして明治三年十一月を以つて生る。夙に我が財界に身を投じ、現に石綿スレート株式會社々長として知らる。

現に東京市芝區白金三光町二〇三番地に住し電話高輪七一四八番たり。

赤池濃君

從四位勳三等
貴族院議員

君は長野縣の人赤池七衞門君の長男にして明治十二年一月を以つて生る。明治卅五年東京帝國大學法科大學獨法科を卒業し直ちに文官高等試驗に合格するや官界に入り累進して福島縣參事官、同事務官、兵庫、滋賀、愛知各縣事務官、内務書記官、内務監察官兼内務省參事官、靜岡縣知事、朝鮮總督府内務局長兼土木局長、同警務局長、拓殖局長官等に歷任し警視總監たる事二回に及ぶ大正十三年六月十一日官を辭し現時は貴族院議員として我が政界に名をなす、趣味として圍碁を愛好す。

夫人五百枝子は京都府士族河原德立君の二女にして君との間に長男健君及び長女和子、二女貞子、三女裕子、四女溫子等あり、現に東京府豐多摩郡千駄ヶ谷原宿二一〇番地に住し電話青山五八番なり

麻井武雄君

安田銀行小舟町支店長

君は鳥取縣士族麻井政重君の長男にして明治三年八月十九日を以つて生る。夙に身を實業界に投じ、明治二十一年八十二銀行に入り後第三銀行に轉じ境米子松江函館大阪等の各支店長を歷任し、大正十二年八月同行の安田銀行に合併せらるゝや、入りて安田銀行副支配人營業部長庶務部長代理等を歷任し以つて現在に至る。

夫人千代子は鳥取縣士族西垣長藏君の長女にして其の間に長男武彥君、二男二郎君、三男三郎君、四男四郎君、五男五郎君及び長女富士枝子、二女喜久枝子等あり、現に東京市小石川區原町一二番地に住し電話小石川三〇五二番なり。

安樂榮治君

星製藥株式會社專務取締役

君は鹿兒島縣の人安樂榮之進君の令弟にして明治四年十二月を以つて生る。現に前記會社專務取締役たる外日本カフェイン製造株式會社取締役たり。

夫人惠比子との間に二女ありて梅子、榮子と稱す、現に東京市麻布區龍土町六三番地に住し電話青山四三一一番なり。

鮎川義介君

共立企業株式會社長
木津川製作所株式會社長

東都實業界の新人鮎川義介君は山口縣士族鮎川彌八君の長男にして明治十三年十一月を以つて生る。夙に鄕校を卒ふるや笈を負ふて東上し、研鑽琢磨、明治三十六年東京帝國大學工科大學機械科を優秀の成績を以つて卒業するや直ちに身を實業界に投じ聘に應じて芝浦製作所に入りしが、後ち米國に航し鑄造法の實地に就き研鑽を積みて歸朝す。

其の後戸畑鑄物株式會社を創立して其の取締役社長となり、範を歐米の方式に採り大いに本邦鑄物製造業に新機軸を出せり、マルエーブル鑄物は實に君に依りて始めて日本に紹介せられたるものなり現に前記諸會社の社長たる外東洋製鐵、中央火災傷害保險各株式會社の重役にして今や我が財界に令名高し。

夫人美代子は京都府の人飯田藤二郎君の長女たり、現に東京市牛込區市ヶ谷左内町三六番地に住し電話牛込二八七六番なり。

安藤正純君

東京毎夕新聞社副社長
衆議院議員

君は東京府の人安藤了戒君の二男にして明治九年九月を以つて生る。夙に東洋大學を卒業し更に早稻田大學及び東京外國語學校に學び、曾つて明敎新誌、政敎新聞等の主筆たりし外東京大阪朝日新聞等にありて君が健筆を縱横に揮ひて令名

ありしが大正九年以來衆議院議員として中央政界に活躍し傍らも京毎夕新聞社長として令名高し。

夫人ウタ子は愛知縣の人大場泰雄君の令姉にして君との間に啓君、蕃君及び穂見子、和子等あり、現に東京市淺草區松葉町三九番地に住し電話淺草一八一〇番たり。

渥美育郎君

大阪商船株式會社東京支店長

君は兵庫縣士族渥美邃君の長男にして明治十四年二月七日を以つて神戸市に生る。夙に鄕校を卒ふるや青雲の志を抱いて東上し、明治三十五年東京商科大學の前身たる東京高等商業學校を卒業し直ちに身を實業界に投じ大阪商船會社に入り神戸、門司、上海、印度各支店を經て大正八年横濱支店長に陞り同十一年東京支店長に任ぜられ今日に及べり。

尙ほ大正十三年亞爾然丁共和國名譽領事となり更に海外興業、横濱共立倉庫、飯田町ホッパービン各株式會社の重役として令名高し、其の趣味や又廣し曰く旅行、文學、美術、庭球、端艇等なり。

夫人けい子は京都府の人坂根巽藏君の二女にして京都府立高等女學校の卒業なり、現に東京市外荏原郡入新井町新井宿二六六〇番地に住し電話大森二二〇番なり。

姉崎正治君

從四位勳三等
文學博士

君は京都府の人姉崎正盛君の長男にして明治六年七月を以つて生る。明治二十九年東京帝國大學文科大學哲學科を卒業し尋いで大學院に入る、同三十二年宗教學研究の爲め獨逸國に留學しキール、ベルリン、ライプチヒ各大學に學び歸朝後東京帝國大學助教授となり同三十五年文學博士の學位を授けられ東京帝國大學文科大學教授に任ぜらる、同四十年歐米各國に差遣せられ大正二年米國に遊び續いて佛蘭西に出張せり、現時は東京帝國大學教授たり、嘲風と號し宗教學に關する著書數十卷あり。

夫人をマス子と呼び福岡縣の人井上侃齊君の三女たり、其間に三男二女ありて正見君、種世君、金吾君及び三世子、とき子と呼ぶ、現に東京市小石川區白山御殿町一一七番地に住し電話小石川二〇二六番なり。

安藤忠助君

福島縣多額納稅者
電化カーボン株式會社常務取締役

君は福島縣の人安藤忠吉君の長男にして明治八年四月を以つて生る。現に電化カーボン株式會社常務取締役たる外只見川水力電氣、郡山電氣、郡山製紙、川前電氣、郡山土地建物各株式會社取締役にして且つ新町軌道株式會社監査役たり。

夫人ヒサ子は福島縣の人寺島修太郎君の長女にして君との間に四男三女あり、現に福島縣郡山中町三二番地に住す。

縣忍君

從四位勳三等
樺太廳長官

君は靜岡縣の人縣紹武君の二男にして明治十四年六月を以つて生る。明治四十一年東京帝國大學法科大學獨法科を卒業するや、直ちに職を官途に奉ず。

斯くて、同年十二月栃木縣屬を振り出しに爾來、明治四十三年十月北海道廳事務官に、大正三年六月には長野縣警察部長に、同五年十月兵庫縣警察部長に、同七年九月には福井縣內務部長更に大正十年五月警視廳警務部長等を歷任す。

然して大正十一年十月拔擢せられて山形縣知事に擧げられ、同十三年六月鹿兒島縣知事に轉じ、更に同十五年千葉縣知事に任じ、斯くて昭和二年四月田中政友會內閣成立するや同年五月群馬縣知事に轉じ以つて現在に及ぶ。

君や學博大に識高見、而も其の行政的經倫を豐かに藏し、手腕たるや敏民官中最も優れ、從つて大正十一年以來歷代內閣に仕へて信任厚く、且つ地方民の信望至る所に絕大なり、蓋し、其の前途や多望なりと謂ふべし。

夫人を光子と稱し、靜岡縣の人齋藤秀太郎君の令妹にして君との間に二男二女あり、現に同廳長官舍に住す。

寺島敏三君

男爵　陸軍騎兵大尉
貴族院議員

當家は先代秋介君より顯はる、秋介君は舊山口藩士にして維新の際國事に奔走して功あり、明治三年少參事に任じてより陸軍中佐兼內務書記官、山口縣令心得長野縣令、元老院議官等に歷任し同二十九年男爵を授けらる。

君は男爵百地藤三郎君の令弟にして先代秋介君の死跡を相續す。明治十二年十二月を以つて生れ、同三十年陸軍士官學校を卒業し騎兵實施學校に學び、同三十六年陸軍騎兵少尉に任せられ遂に現官に累進す。其の間騎兵第十四聯隊附、近衛騎兵隊附、野戰近衛師團管理部附、野戰近衛騎兵聯隊小隊長、近衛騎兵中隊長等に補せられ、日露の役に從軍して正五位勳四等功五級に叙せらる。

夫人敏子は男爵益田孝施君の令姉にして君との間に二男一女ありて直太郎君、忠三郎君及び和子等なり、東京府豐多摩郡中野町字大塚一六七五番地に現住す。

安藤則光君

資產家
東京府多額納稅者

當家は先代則命君より其の家名を揚ぐ則命君は舊鹿兒島藩士にして、維新後大警視、司法大書記官、元老院議官等を歷任し、後ち貴族院議員に勅選せられ、錦鷄間祇候仰せ付けらる。

君は其の長男にして、明治二十一年七月を以つて生る。大正三年中央大學專門部經濟科を卒業す、資產家として東都に知られ、且つ東京府多額納稅者たり。現に東京市赤坂區丹後町一番地に住す。

相川義太郎君

帝國海上火災保險株式會社取締役

君は東京府士族相川政一君の長男にして、明治四年六月六日を以つて生る。夙に帝國海上火災保險株式會社に入りて忠勤大いに勵み、大正十三年推されて同社取締役に就任し以つて現在に及ぶ。

趣味に謠曲あり、時に臨んで君が吟する其の音や奇にして又妙なりといふ。夫人を幸子と呼び鳥取縣の人石川源七君の三女たり、現に東京市小石川區白山御殿山一一〇番地に住し電話小石川二八九六番たり。

粟津清亮君

法學博士
日本動産火災保險會社長

君は京都府の人淺田忠八君の長男にして、明治四年四月を以つて生れ、後ち先代清爲君の養嗣子となる。

明治二十七年東京帝國大學法科大學を卒業するや、更に大學院に入りて保險學を專攻し、明治四十年法學博士の學位を授與せらる。

現に前記日本動産火災保險株式會社々長たる外南洋物産株式會社々長にして、曩に農林省囑託、有隣生命保險會社取締役支配人、東邦火災保險會社取締役、日本傷害火災海上保險會社々長、日本アクチュアリー會長、保險學會主事等を歴勤し、且つ歐米各國に航すること前後二回に及ぶといふ。

夫人を小松子と呼び、君との間に二男二女あり、現に東京府豐多摩郡中野町上ノ原九四二番地に住し電話中野七四〇番たり。

麻生太吉君

嘉穂銀行頭取
嘉穂貯蓄銀行頭取

君は福岡縣の人麻生賀郎君の長男にして、夙に實業界に身を投じ、現に前記の外嘉穂電燈、九州產業鐵道、麻生商店各株式會社々長にして、且つ若松築港、九州水力電氣、東洋製鐵、幸袋工作所各株式會社の重役たり。

尙ほ福岡縣多額納稅者として令名高く現に直稅二万五千六十余圓を納め、正六位勳三等たり、福岡縣嘉穂飯塚に現住す

淺井倍之助君

淺井保財株式會社長

君は東京府の人桑原七兵衛君の三男にして、明治十八年七月を以つて生れ、後ち先代淺井家の養嗣子となる。

夙に東都財界に投じ、現に前記淺井保財株式會社々長たる外、東京亞鉛鍍金、淺井商店、モーターボート商會各株式會社の重役として知らる。

夫人をくに子と稱し君との間に一男あり、現に東京市芝區車町十二番地に住し電話高輪一四〇六番たり。

秋元政司君

臺灣日々新報社(株)東京支局長

君は東京府士族故秋元政美氏の長男にして、明治八年九月二十三日を以て生れ同三十六年家督を相續す。

明治二十八年攻玉社中學校を卒業するや直ちに東都實業界に投じ、後ち獨力にて秋元商店を開設して洋紙販賣業を營みて斯界に活躍すること十余年に及ぶ。

斯くて明治四十三年斯業を廢して臺灣に航し、臺灣日々新報社に入社して敏腕を縱横に振ひしかば漸次同社内に重きをなし、同四十五年同社東京支局長に榮轉し以て現在に及ぶ。

趣味多樣なる中にも書畫、骨董を愛好するが如し。

夫人をヨネ子と呼び京都府の人黑川熊治郎氏の二女にして、京都府立高等女學校の出身たり、現に東京市麻布區三河臺町十四番地に住す。

秋田源七君

神奈川縣多額納稅者
横濱綿布貿易同業組合組合長

君は栃木縣の人秋田源太郎氏の令弟にして、慶應三年一月十一日を以て生る。

夙に學業を卒ふるや横濱財界に投じて活躍大いに努め、明治三十年綿布商を創立經營、爾來、着々として斯界に商勢を張り、今や本邦斯界に令名あり。

尙ほ神奈川縣多額納稅者として知られ且つ前記要職にある外横濱輸出絹物同業組合評議員、營業收益稅調査委員、家内工業調査委員、明治紡績株式會社取締役等として重きをなす。

夫人りつ子は栃木縣の人堀江浦太郎氏の長女にして其の間に清太郎君、仁也君及び慶子あり、現に横濱市境町二ノ三六番地に住す。電話本局七五〇番

鮎澤巖君

國際勞働局外交部都市勞働課長代理
瑞西國ジュネーブに於ける國際勞働局

にありて、卓才克く世界的に令名ある君は茨城縣の擧出せる俊秀にして同縣久慈郡太田町に於て出生、嚴父を故鮎澤宗平氏、慈母をたけ子刀自となし其の二男に當る。

夙に鄕校に學んで後ち笈を帝都に負ひ芝中學校に入り之れを卒ふるや直ちに平和奬學金を受くる選拔試驗に登第し布哇に航しホノルヽに於けるミルススクールに在學すること二ケ年の後ち華州ホイットマン、ガレーヂに入り、再び名譽奬學金を得る選拔試驗に第一位を以て合格、該校に學ぶこと二ケ年、次いでハーヴアード大學に轉じ孜々學窓に黽勉研鑽二ケ年にして、紐育なるソシアル、スタールに入學、同校社會事業研究部に於て益々蘊蓄を深めり。

然して後ち其の姉妹校たるコロンビヤ大學を經てドクトル、カブ、フイロソフイーの學位を得たり、此の間血涙の苦鬪を以て綴られ、皿洗ひ、掃除夫等の勞働に從事して勉學維れ努む、又ソシアル、

スクールに在學當時は紐育に於ける貧民窟として著名なるローア イースト サイドに居住し社會事業の實際問題に觸るゝところあり。

大正八年米國に於て第一回國際勞働大會の開催さるゝや、君は特殊國委員法學博士岡實氏の隨員として之れに列席せり翌九年コロンビヤ大學卒業に際し、論文「國際勞働立法」(英文)を提出せるに、該法を說ける世界唯一の論文なりしを以て間もなくコ大學より出版上梓せられ普く識者の推重するところとなれり。

然して往年瑞西國に勞働局の設立せらるゝや君は同局に入りて其の事務に携り西暦一九二四年國際勞働局の設置と共に入りて同局外交部部市勞働課に勤務、現時其の課長代理の重任にあり。君は昭和三年十二月同局長アルベール トーマ氏に隨伴して渡日せしことあり。

新井源水君

東京石川島造船所(株)總務課長

君は埼玉縣北足立郡石戸村大字高尾に原籍を有し、明治十六年九月十四日を以て生る。

大正三年東京帝國大學法科大學獨法科を卒業するや直ちに東都財界に投じ、爾來、東亞煙草、大島製鋼所各株式會社を歷勤、後ち東京石川島造船所に轉じ、現に同社總務課長兼工場會計たり。

夫人を種子と稱し君との間に啓郎君、武郎君、三郎君、四郎君及び和子等あり現に東京府北豐島郡巢鴨町上駒込染井四八七番地に住す。電話小石川一三六三番

阿南惟一君

法學士　辯護士

東京辯護士會常議員

東都法曹界に活躍して聲名ある君は大分縣の人先考尙氏の長男にして、明治十五年十二月二十日を以て生る。

夙に學習院初等科より第五高等學校に進み、明治四十一年東京帝國大學法科大學獨法科を優秀の成績を以て卒業す。

斯くて翌四十二年身を官途に投じ、外務省に職を奉じ、爾來、伊太利、墺太利瑞西、天津各大使館を歷勤し、大正五年官途を辭して實業界に投じ、三菱倉庫株式會社東京支店庶務課長に聘せられ、更に大正十一年東都法曹界に投じて一般法律事務に從事せしかば、社會の信望月に年に加はり、今や東都斯界に重きをなし尙ほ辻本商店其の他幾多銀行會社に法律顧問を勤め且つ土地工業株式會社取締役として知らる。

性質溫厚篤實、應接に舊知の感を抱かしむ、趣味に撞球あり、又讀書に耽るを常とす、日本倶樂部、學士會各會員たり

現に東京市麻布區森元町一ノ二七番地に住す。電話青山七四九〇番

阿部政次郎君

三菱造船株式會社取締役

本邦造船工業界に貢獻淺からざる君は愛媛縣の輩出せる逸材にして、明治十年一月を以て同縣今治市に生る。故阿部亀之助氏の三男に當り、夙に鄕黨に學び稍々長するに及んで上洛、靈誠舍に於て中學の課程を踏み、次いで第四高等中學校を卒へるや、東京帝國大學工科大學舶用機關科に入學す。

斯くて明治三十四年同大學を卒業し直ちに遞信省に入りて同省海事局に勤務せしが、同三十九年七月に至り官職を辭し同年八月長崎三菱造船所に入れり。

是れ君が今日樞要の地位にある所以にして、爾來、同所にありて其の蘊蓄を傾注し以て精勵、逐次昇進して大正十四年七月同所長に擧げらる、然して昭和二年八月三菱造船株式會社取締役に推され同所長たりしが、同三年二月本社に轉じて現に上掲の重任を帶べり。

君は此の間明治四十四年二月より大正元年十一月まで英國に、又昭和三年六月より同四年四月まで何れも社用を帶びて歐米各國に航せしことあり。

君は人物極めて篤實、溫厚なる典型的紳士にして常に「人の爲めに計つて忠なる」を處世の方針とすと謂ふ、蓋し君の言の肯綮に中れるは、一ト度其の風懷に接したる者の等しく感するところなり。

趣味に梅若流の謠曲あり、又散策を好む、夫人馨子は津田英學塾出身にして其の間に三男七女あり、令嗣泰一郎君は福井農林學校教授たり、現に東京市小石川區原町十三番地に住し、電話小石川二三二四番たり。

赤石定藏君

臺灣日々新報社取締役顧問

君は靑森縣の輩出せる一人物、慶應三年九月を以て弘前市に生る、故東海昌雄氏は君の嚴父にして後ち慈母の家籍に入り先代赤石榮君氏の養嗣子となりて其の家系を承く。

君は夙に鄕校東奥義塾に學を修め、次いで鬱勃たる覇志を抱いて東都に出で東京專門學校英語本科に入りて同二十年同校を卒へり。

斯くて直ちに外務省に入り同省通商局に勤務せしが、偶々當時の通商局長たりし故原敬氏と意合はずして同廿六年奮然席を蹴つて官職を退き、日本新聞社に入社して操觚界の人と成り堂々の靈筆を揮ひしも同二十一年日本銀行に轉じ、書記を拜命、翌三十二年銀行要調査の爲め同行より派されて歐米各國を巡歷せり。

然して歸來間もなく同行を辭し、再び日本新聞社に復し尋いで同四十三年同社を退きて渡臺し、臺灣日々新報社に轉じ後ち同社取締役副社長に推され越えて大正元年社長に就任、現時同社取締役顧問の任にあるの外、統治上の最高諮問機關たる臺灣總督府評議會々員に選ばれ公共事業に貢獻するところ尠からず。

夫人きみ子は同鄕の人永井愛次太郎氏の令妹にして其の間に養女しげ子あり、現に東京市牛込區矢來町六七番地に住す電話牛込三五一番